根来寺遺跡、山口古墳群

― 一般国道 24 号京奈和自動車道建設に伴う発掘調査報告書 ―

2017 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

根来寺遺跡、山口古墳群

― 一般国道 24 号京奈和自動車道建設に伴う発掘調査報告書 ―

2017 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

１．１次１-２区調査地と桃坂谷全景（北から）

２．１次１-２区全景（北上空から）

１．１-２区出土遺物

２．山口古墳群　礫石経塚検出状況

序

和歌山県の北部、岩出市に所在する根来寺は、平安時代の末期、興教大師覚鑁によって開創された新義真言宗の総本山です。隆盛を誇った室町時代の終わりには、全国屈指の規模を有する寺院でしたが、天正 13 年（1585）、羽柴秀吉による紀州攻めにより、大部分が消失してしまいました。

現在、坊院跡の大部分は田畑となっており、往時の姿をしのぶ風景はありませんが、今回の調査においても数多くの遺構と多量の遺物が出土するなど、あらためて我が国屈指の中世寺院遺跡であることが如実に示されました。

一方、山口古墳群は、和歌山市の北部、大阪府との境をなす和泉山脈の南裾部分の丘陵高所に所在する古墳群です。今回の調査では、古墳については確認ができなかったものの、一字一石経を納めた埋納遺構を見つけることができ、近世の庶民の祈りの形態のひとつをあきらかにすることができました。

当センターでは、平成 23 年度から一般国道 24 号京奈和自動車道建設伴い両遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、ここにその成果をまとめ、発掘調査報告書として刊行いたします。本書が県民のみならず、より多くの方々が歴史を知るための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご指導、ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

理 事 長　　櫻 井 敏 雄

例　言

1．本書は和歌山県岩出市に所在する根来寺遺跡及び和歌山市に所在する山口古墳群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査・出土遺物等整理業務は、国土交通省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査組織は下記のとおりである。

事 務 局 長	田中　洋次（平成 23 年度）　渋谷　高秀（平成 24 年度）
	勝浦　久和（平成 25 年度）　嶋田　文紀（平成 26 年度）
	米田　良博（平成 27 年度）　南　正人（平成 28 年度）
事 務 局 次 長	山本　高照（平成 23 年度）
埋蔵文化財課長	村田　弘（平成 23・24 年度）　井石　好裕（平成 25 年度）
	土井　孝之（平成 27・28 年度）
発掘調査担当	村田　弘・長門　満男（平成 23 年度）　井石　好裕（平成 24 年度）
	寺西　朗平（平成 25 年度）　村田　弘（平成 25 年度・山口古墳群）
出土遺物等整理担当	村田　弘（平成 27・28 年度）　佐伯　和也・山野　晃司（平成 27 年度）

4．出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査・出土遺物等整理作業で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡　例

1．実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を基準とし、数値はm単位で表示している。また図示した北は座標北を示す。

2．発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T. P.）を基準とした。

3．土色・出土遺物の色調は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省水準技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2011 年度版を基準とした。

4．報告書掲載遺物については、通し番号を付け、遺物番号と写真番号は一致する。
本書掲載の遺構平面図・断面図・出土状況図は、基本的に縮尺 1/80、1/60、1/40 とし、遺物の縮尺は土器・石器・金属製品は、基本的に縮尺 1/4、1/2 とし、遺構・遺物共に各図にスケールを表示した。

本 文 目 次

第１章 調査の経緯と経過 …… 1
第２章 根来寺遺跡 …… 3
第１節 位置と地理的環境 …… 3
第２節 歴史的環境 …… 4
第３節 発掘調査の方法 …… 7
第４節 １次調査 …… 8
Ａ １区の調査 …… 8
ａ １区の遺構 …… 8
ｂ １区の遺物 …… 13
ｃ １区のまとめ …… 13
Ｂ ２区の調査 …… 15
ａ ２区の遺構 …… 18
ｂ ２区の遺物 …… 39
ｃ ２区のまとめ …… 68
第５節 ２次調査 …… 69
Ａ ３区の調査 …… 69
Ｂ 調査区４・５ …… 81
Ｃ ２次調査の出土遺物 …… 82
Ｄ ２次調査のまとめ …… 82
第６節 ３次調査 …… 83
ａ 遺構 …… 85
ｂ ３次調査の出土遺物 …… 89
ｃ ３次調査のまとめ …… 91
第７節 根来寺（１～３次調査）まとめ … 92
第３章 山口古墳群 …… 97
第１節 位置と地理的環境 …… 97
第２節 歴史的環境 …… 97
第３節 発掘調査の方法 …… 98
第４節 調査成果 …… 99
ａ 遺構 …… 99
ｂ 遺物 …… 102
ｃ まとめ …… 105
遺物観察表 …… 106

挿 図 目 次

図１ 京奈和自動車道概要図（国土交通省HPより） … 1
図２ 調査地及び遺跡の範囲と周辺の遺跡 …… 3
図３ 調査地の位置と地区割図 …… 7
図４ １次１区 区割図 …… 8
図５ １次１区 遺構全体図 …… 9
図６ 11 暗渠 平面図・断面図 …… 10
図７ 18 土坑 平面図・断面図 …… 10
図８ 28 石垣 平面図・断面図 …… 11
図９ 33 暗渠 平面図・断面図 …… 11
図10 34・35・36・37 暗渠 平面図・断面図 …… 12
図11 １次１区 出土遺物実測図 …… 13
図12 １次２区 遺構全体図及び区割図 …… 16・17
図13 201 溝 平面図・断面図 …… 18
図14 202 地下式倉庫 平面図・断面図 …… 19
図15 203 暗渠 平面図・断面図 …… 20
図16 237 地鎮遺構 平面図・断面図 …… 21
図17 248 石組遺構 平面図・断面図 …… 21
図18 253 石垣 平面図・立面図・断面図 …… 22
図19 262 井戸 平面図・立面図 …… 22
図20 266 井戸 平面図・断面図 …… 23
図21 291 井戸 平面図・断面図 …… 24
図22 315・369・317 暗渠 平面図・立面図・断面図 …… 26・27
図23 321・322 石垣、324 石組遺構 平面図・立面図・断面図 …… 29

図24 323・331 石垣　平面図・立面図・断面図 …… 30・31
図25 328・329・336 石組溝 平面図・立面図・断面図 …… 32・33
図26 330 溝　平面図 …… 34
図27 334 石組遺構　平面図・断面図 …… 35
図28 338・339 溝　平面図・断面図 …… 36
図29 356 井戸　平面図・断面図 …… 37
図30 370・371 埋甕　平面図・断面図 …… 38
図31 １次２区　表土・包含層出土遺物実測図 … 39
図32 １次２区　遺構出土遺物実測図（１） …… 41
図33 １次２区　遺構出土遺物実測図（２） …… 42
図34 １次２区　遺構出土遺物実測図（３） …… 44
図35 １次２区　遺構出土遺物実測図（４） …… 46
図36 １次２区　遺構出土遺物実測図（５） …… 47
図37 １次２区　遺構出土遺物実測図（６） …… 48
図38 １次２区　遺構出土遺物実測図（７） …… 50
図39 １次２区　遺構出土遺物実測図（８） …… 52
図40 １次２区　遺構出土遺物実測図（９） …… 54
図41 １次２区　遺構出土遺物実測図(10) …… 55
図42 １次２区　遺構出土遺物実測図(11) …… 56
図43 １次２区　遺構出土遺物実測図(12) …… 58
図44 １次２区　遺構出土遺物実測図(13) …… 60
図45 １次２区　遺構出土遺物実測図(14) …… 61
図46 １次２区　遺構出土遺物実測図(15) …… 62
図47 １次２区　遺構出土遺物実測図(16) …… 63
図48 １次２区　遺構出土遺物実測図(17) …… 65
図49 １次２区　遺構出土遺物実測図(18) …… 67
図50 ２次　基本層序模式図 …… 69
図51 ２次３～５区　遺構全体図 …… 70・71
図52 石垣１　平面図・立面図・断面図 …… 72
図53 石垣３　平面図・立面図 …… 73
図54 石垣２　平面図・立面図・断面図 …… 74・75
図55 石垣４　平面図・立面図 …… 76
図56 石垣５　平面図 …… 76
図57 １溝　平面図・断面図 …… 78・79
図58 ２溝　平面図・断面図 …… 80
図59 ３溝　平面図・断面図 …… 81
図60 ２次　出土遺物実測図 …… 82
図61 ３次　調査区の設定と地区割り図 …… 83
図62 ３次　調査範囲と周辺の地形 …… 84
図63 中央セクション断面図 …… 85
図64 ３次　遺構全体図 …… 86
図65 １石垣　平面図・立面図 …… 87
図66 ２排水路　平面図・立面図・断面図 …… 88
図67 ３石垣　平面図・断面図及び石垣トレンチ断面図 …… 89
図68 ３次　出土遺物実測図 …… 90
図69 １次１区　棚田範囲 …… 92
図70 １次２区　344 道路　平面図 …… 94
図71 調査位置と周辺の地形 …… 97
図72 地区割図 …… 98
図73 基本層序 …… 98
図74 調査区平面図と地形 …… 100
図75 礫石経埋納遺構　平面図・立面図 …… 101
図76 筆跡の異なる経石例 …… 102
図77 出土経石実測図（１） …… 103
図78 出土経石実測図（２） …… 104

表 目 次

表１ 発掘調査・出土遺物等整理業務工程 …… ２
表２ 紀年銘石造物一覧表 …… 95
表３ 年代別分布表 …… 95

写 真 目 次

写真 1　根来寺坊院跡中心部(東上空から 1995 年) …… 4
写真 2　基本層序 …… 8
写真 3　1988 年の調査風景 …… 15
写真 4　3次　調査地遠景 …… 83
写真 5　山口古墳群調査地遠景 …… 97

図 版 目 次

巻頭図版 1　1．1次1-2区調査地と桃坂谷全景(北から)
2．1次1-2区全景(北上空から)
巻頭図版 2　1．1次1-2区出土遺物
2．山口古墳群　一字一石経検出状況
写真図版 1　1．1次1区調査前風景(北から)
2．1次1区調査地遠景(南西から)
3．1次1区全景(上空から)
写真図版 2　1．1次1-1区全景(北から)
2．1次1-1区全景(南から)
3．1次1-1区 11 溝(南から)
写真図版 3　1．1次1-1区 11 溝暗渠構造(北から)
2．1次1-1区 11 溝蓋石除去後(北から)
3．1次1-2区全景(北西から)
写真図版 4　1．1次1-2区 34～37 暗渠・28 石垣(東から)
2．1次1-2区 19 土坑断面土層(北西から)
3．1次1-2区 20 溝断面土層(南東から)
写真図版 5　1次1-1区・1-2区合成写真(上空から)
写真図版 6　1．1次2区調査地遠景(北上空から)
2．1次2-1区南半部全景(上空から)
3．1次2-1区南半部全景(北上空から)
写真図版 7　1．1次2-1区全景(南から)
2．1次2-1区 323 石垣(北東から)
3．1次2-1区 328・329 石組溝(南西から)
写真図版 8　1次2-1区 328・329 石組溝(北西から)
写真図版 9　1．1次2-1区 329 石組溝(南東から)
2．1次2-1区 329 石組溝細部(北東から)
写真図版10　1次2-1区 328・329 石組溝完掘状況(北西から)
写真図版11　1．1次2-1区 329 石組溝南側状況(北西から)
2．1次2-1区 329 石組溝北側状況(西から)
3．1次2-1区 330 溝土管細部(西から)
写真図版12　1．1次2-1区 323 石垣(北東から)
2．1次2-1区 323 石垣石積細部(東から)
3．1次2-1区 331 石垣・336 石組溝(南から)
写真図版13　1．1次2-1区 331 石垣石積状況(南東から)
2．1次2-1区 331 石垣石積細部(南東から)
写真図版14　1次2-1区 334 石組遺構(北西から)
写真図版15　1．1次2-1区 342 大型土坑断面土層(北から)
2．1次2-1区 336 石組溝南東側石積細部(北西から)
3．1次2-1区 370・371 埋甕(南西から)
写真図版16　1．1次2-1区 338・339 溝(南東から)
2．1次2-1区 343・378 石組遺構(南西から)
3．1次2-1区 356 井戸(北東から)

写真図版17　1．1次2-1区252石組遺構(南東から)
2．1次2-1区258石敷遺構(北西から)
3．1次2-1区262井戸(南東から)
写真図版18　1．1次2-1区262井戸断割状況(北西から)
2．1次2-1区266井戸(北東から)
3．1次2-1区266井戸断割状況(南東から)
写真図版19　1．1次2-1区291井戸(南東から)
2．1次2-1区291井戸断割状況(北西から)
3．1次2-1区253石組遺構(北東から)
写真図版20　1．1次2-2区南半部全景(北上空から)
2．1次2-2区北半部全景(東上空から)
3．1次2-2区北半部全景(南西から)
写真図版21　1．1次2-2区南半部全景(北東から)
2．1次2-2区314石垣(南東から)
3．1次2-2区315・317・369暗渠接合部(南西から)
写真図版22　1．1次2-2区203暗渠(北西から)
2．1次2-2区203暗渠蓋石除去後(北西から)
写真図版23　1．1次2-2区317暗渠(北東から)
2．1次2-2区317暗渠蓋石除去後(北東から)
写真図版24　1．1次2-2区202地下式倉庫(北東から)
2．1次2-2区202地下式倉庫階段部(南東から)
3．1次2-2区237地鎮遺構土器出土状況(北西から)
写真図版25　1次2-1区・2-2区合成写真(上空から)
写真図版26　1．2次調査地遠景(北西上空から)
2．2次3区調査前風景(南西から)
3．2次3区草刈後の状況(北から)
写真図版27　1．2次3区全景(上空から)
2．2次3区平坦部全景(北から)
3．2次3区1溝～3(北から)
写真図版28　1．2次3区1溝(北から)
2．2次3区1溝蓋石除去後(北から)
3．2次3区2溝(南東から)
写真図版29　1．2次3区2溝蓋石除去後(南東から)
2．2次3区3溝(南東から)
3．2次3区3溝蓋石除去後(南東から)
写真図版30　1．2次3区全景(上空から)
2．2次3区南半部全景(北から)
3．2次3区全景(南東から)
写真図版31　1．2次3区3石垣(北東から)
2．2次3区1石垣(南東から)
3．2次3区1石垣石積状況(南東から)
写真図版32　1．2次3区南半部遺構検出状況(北から)
2．2次3区2石垣中央部付近(南東から)
3．2次3区2石垣中央部付近(南東から)
写真図版33　1．2次3区2石垣北側付近(南東から)
2．2次3区3石垣(南東から)
3．2次3区4石垣(北から)
写真図版34　1．2次4-1・4-2区全景(上空から)
2．2次4-1区中央部掘削完了状況(南から)
3．2次4-1区南側掘削完了状況(北から)
写真図版35　1．2次5区全景(上空から)
2．2次5区中央部掘削完了後(北西から)
3．2次5区南半部掘削完了後(南東から)
写真図版36　1．3次1石垣東面(東から)
2．3次1石垣コーナー部(南東から)
3．遺物(瓦)出土状況
写真図版37　1．3次2水路検出状況(北西から)
2．3次2水路断面(北から)
3．3次3石垣・2水路(北西から)
写真図版38　1．3次2水路蓋石除去後(北西から)
2．3次1石垣東側(南東から)
写真図版39　1．山口古墳群北側調査前状況(南から)
2．山口古墳群頂部付近セクション断面(南西から)
3．山口古墳群東側斜面掘削後(南東から)
写真図版40　1．山口古墳群礫石経塚検出状況(南西から)
2．山口古墳群礫石経半裁状況(上から)
3．山口古墳群礫石経塚半裁断面(南から)
写真図版41～60　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

本報告書に収められた根来寺遺跡の３次に及ぶ発掘調査並びに山口古墳群の発掘調査は、いずれも一般国道 24 号京奈和自動車道（以下「京奈和自動車道」とする）の建設に伴う発掘調査である。

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ延長約 120㎞の高規格幹線道路（一般国道の自動車専用道路）である。大きくは、第二名神高速道路や山陽自動車道、神戸淡路鳴門自動車道などとともに、関西の外側を結んだ環状道路として、各都市の連携を強化し、産業振興や防災面での広域的なネットワークを形成することを目的に一周約 300㎞の大環状道路の一部として企画されたものである。また、和歌山県にとっては、一般国道 24 号のバイパス道路として交通渋滞の緩和、交通事故の減少などに寄与することが期待される道路と言える。

工事は、いくつかの区間に細分されており、本県では橋本道路・紀北東道路・紀北西道路の３工区になっている。このうち紀北東道路の建設に当たっては、かつらぎ町内の西飯降Ⅱ遺跡や中飯降遺跡の発掘調査が実施され、これらの成果を収めた調査報告書がすでに刊行されている。

本報告書所収の根来寺遺跡、山口古墳群は、紀北西道路工区の建設に伴う発掘調査である。以下、それぞれの調査の経緯、経過について詳細を記しておく。

根来寺遺跡の第１次調査については、建設予定地の一部が根来寺遺跡内に該当するため、国土交通省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所（以下「国土交通省」とする）と和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」とする）で協議が行われ、平成 22 年８月から９月にかけて県教育委員会で試掘確認調査が実施された。調査は３地区を対象に行われたが、このうち２地区で遺構・遺物が認められた。

試掘確認調査の結果、本発掘調査が必要と判断された範囲について、国土交通省から公益財団法人和歌山県文化財センター（以下「当センター」とする）が発掘調査の委託を受け、平成 23 年４月 27 日付けで委託契約を締結し、平成 23 年４月 28 日から平成 24 年３月 23 日までの期間で発掘調査業務を実施した。このうち現地での発掘調査期間は、平成 23 年６月２日から平成 24 年３月３日であった。

根来寺遺跡の２次調査については、国土交通省と県教育委員会が、前述したような協議を行い、関係法令に基づく諸手続きを経て、県教育委員会が確認調査を実施した。確認調査は、該当地区に８箇所のトレンチを設定し、平成 24 年１月 19 日から同年２月 20 日にかけて実施した。

図１　京奈和自動車道概要図（国土交通省 HP より）

その結果、洞尾川左岸の平坦部と丘陵の中腹部の古道と想定される箇所については、埋蔵文化財が展開する可能性が高いものと考えられ、記録保存目的の本発掘調査が必要と判断されるに至った。これを受け、国土交通省は、本発掘調査を当センターに委託した。本発掘調査は平成 24 年 10 月 1 日に着手し、平成 25 年 2 月 26 日に現地での調査を完了した。

根来寺遺跡の 3 次調査は、トンネルの坑口にあたる箇所で、これについても同様の協議、試掘確認調査を経て 212㎡を対象として平成 25 年 6 月 18 日から同年 7 月 19 日まで現地での調査を行った。

山口古墳群については、過去に発掘調査事例がなく、情報量が少ないため県教育委員会では事前に該当地区の分布調査をおこなうこととなった。この分布調査の結果、該当区域内の丘陵尾根筋には山口 10 号墳が所在し、そのほかにもその形状から判断して墳長 15mの前方後円墳あるいは 2 基以上の古墳となる可能性のある箇所や直径 10mほどの円墳となる可能性のある場所が見つかった。このため関係法令に基づく諸手続きを経て、県教育委員会が確認調査を実施することとなった。確認調査は、平成 24 年 8 月 2 日～8 月 13 日にかけて合計 7 日間、34㎡の範囲で行なわれた。確認調査では、山口 10 号墳についてはこれまで言われていたような古墳ではないことが判明し、そのほかの古墳と考えられる墳丘状の高まりについても、古墳ではなく自然地形であることが判明した。しかしながら山口 10 号墳と考えられていた頂部付近で経石が数多く採取されたことから経塚であることが判明し、該当区域内には複数の経塚の存在が想定された。このため記録保存目的の本発掘調査が必要と判断されるに至り、平成 25 年 11 月 13 日から同年 12 月 18 日にまで現地での発掘調査を実施した。

以上の調査を終えた後、平成 27 年度から 2 年次にわたってこれらの出土遺物等整理業務を実施した。初年度は、土器の洗浄作業、注記作業、接合作業といった基礎的な作業を進めるとともに、それらの作業を経た土器類の実測、トレース作業を行った。またこれらと並行して、現地で記録した遺構図面等のトレース作業、写真の整理等を行った。

整理業務の 2 年次目にあたる、平成 28 年度は、前年度に実施した遺物トレース図の組版作成のほか遺物写真撮影を実施し、これらについても図版の作成を行った。こうした作業とともに本文の執筆作業を行い、本報告書の刊行に至っている。

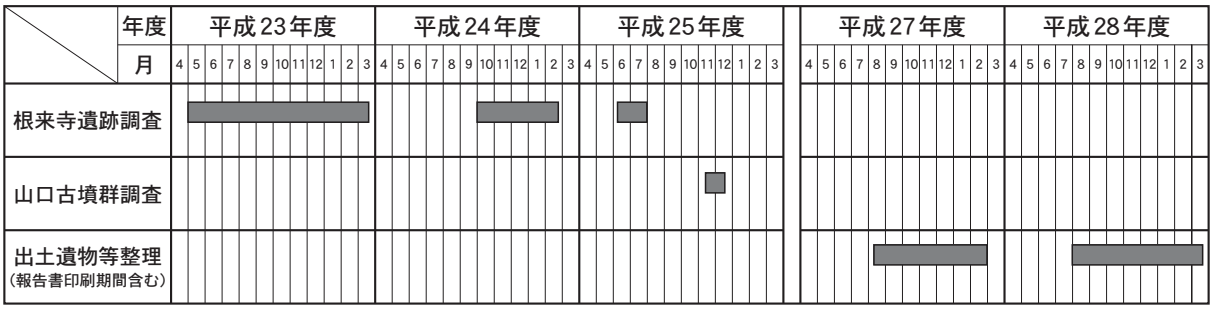


表 1　発掘調査・出土遺物等整理業務工程

第２章　根来寺遺跡

第１節　位置と地理的環境

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、紀伊国と泉州の境、現在の行政区画で言えば和歌山県の北部、岩出市に所在する。

岩出市の北側には、大阪府との境を成す和泉山脈が東西に横たわっており、根来寺はその一峰である一乗山の南麓と南側の前山と称される独立山塊状の山に狭まれた狭小な平地部と谷筋に位置する。このような両側を山に囲まれた地形は、天然の要塞としての条件を備えたものであると言えようし、事実、このことを裏づけるようにこれまでの発掘調査においても前山西端の山頂部、和歌山平野を一望する地点には櫓台と考えられる遺構や前山の稜線上には岩盤を整形した土塁の跡が検出されている。このことは、中世、根来寺が僧兵と呼ばれる武装集団を擁していたことと無縁ではない。つまり、中世の根来寺は単に宗教活動を行う寺院としてだけでなく、武装集団を擁した城砦的な側面をも合わせ持った寺院であったことを物語るものと言えよう。

いまひとつ地理的要因で根来寺にとって重要な点は、交通の要衝に立地しているという点である。現在、根来の西側を大阪方面へと通じる県道岩出・泉佐野線が通っているが、この道は往時の根来街道に相当するものであり、古くから泉州へ抜ける道筋に当っていた。

このことは、後述するように根来寺が泉南地域への勢力の伸長をはかる上で非常な利点となったであろうし、室町時代後期には商業地として栄える堺とを結ぶ道として重要な役割を担ったものと思われる。

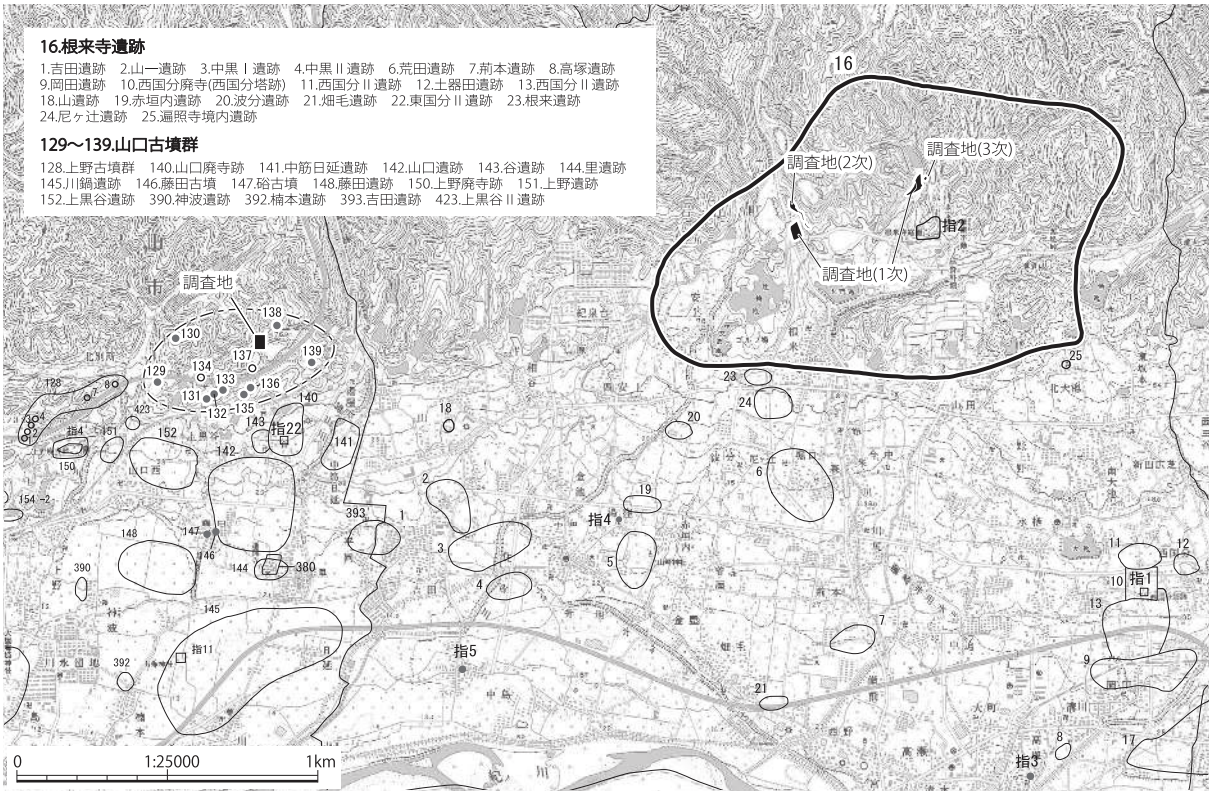


図２　調査地及び遺跡の範囲と周辺の遺跡

また、前山の南側、和泉山脈の山裾から紀の川北岸の河岸段丘や小扇状地は古くから開発がすすんだ地域であるが、この地域を古くは南海道が東西に走り、近世になると淡島街道や大和街道といった主要道が通じていた。さらには、これらの道の南側を流れる紀の川の水運をも考え併せれば、根来寺はまさに交通至便の地にあったものといえよう。

気候的には、比較的温暖の地であり、山険しく冬は厳寒の地である高野山に比べればはるかに居住に適した地である。ただ、当遺跡周辺は瀬戸内気候区に属し、年間降水量は 1400 ミリ程度と県内でも最も雨の少ない地域である。このことは、中世以降、根来寺の周辺でいくつもの溜池が造営されたり、用水をめぐる論争が頻繁に起り、そのつど根来寺が積極的な働きをなしたことと無縁ではないものと思われる。

現在、根来寺の遺跡の範囲として考えられているのは寺域の東側に展開する町屋部分を含めれば、東西 3.5km、南北 2.0km にも及ぶ広範囲なものである。もとより関山当初からこのような広い範囲にわたって院や坊が並んでいたわけではなく、全盛期を迎えた 15 世紀後半から天正の兵火によって焼亡するまでの寺域がほぼこの範囲に相当するものと考えられている。

なお、周辺の遺跡としては、南方 500mほどに縄文時代後期・晩期の土坑や弥生時代中期の竪穴建物が見つかっている荒田遺跡のほか南東約 2 km のところには紀伊国分寺跡が所在している。

第 2 節　根来寺の歴史

新義真言宗の総本山として知られる根来寺の歴史は、宗祖・覚鑁の高野山での活動にまでさかのぼる。覚鑁は平安時代の後期、嘉保二年（1095）、肥前の国知津之荘（現在の佐賀県鹿島市）に生まれたとされる。十三歳で上洛し、仁和寺などで教学を修め十六歳のときに出家する。

このような覚鑁に転機が訪れるのは、永久二年（1114）、覚鑁二十歳の時である。この年、覚鑁は住み慣れた京洛を離れ、高野山へ上る。

この高野山において覚鑁が行ったもっとも大きな事業は、久しく途絶えていた研修・練学の場であった「伝法会」の復興であり、その教学の場として伝法堂を擁する寺院、すなわち伝法院の開創であった。

写真 1　根来寺坊院跡中心部（東上空から 1995 年）

当初この堂宇は一間四方の小規模な建物であったが、参加者が次第に多くなったため、新たに三間四方の堂宇を建て、さらに鐘楼・経蔵も並べ建てるという大規模な結構をおこなう。いわゆる高野山における大伝法院の完成である。この事業の遂行に当たっては、鳥羽上皇の並々ならぬ手厚い庇護があったとされる。

こうした高野山上での華々しい活躍は伝法会の隆盛とともに覚鑁の名声を高め、鳥羽上皇の庇護はますます盛んなものとなり、長承元年（1132）には大伝法院領としてあらたに院宣を賜り、石手・山崎・岡田・山東・弘田庄を、また御願寺である密厳院領として相賀庄の寄進を受けることになる。

こうした覚鑁の活躍はしだいに高野山にあった旧来の勢力―金剛峯寺方から反感を買うこととなり、保延六年（1140）、両者が一触即発の事態に陥り、覚鑁はこれを避けるため離山を決意し、根来の地に赴く。覚鑁が離山するに当たって、根来の地を選んだ理由は、根来が大伝法院領である弘田庄にあることと、この地にすでにあった豊福寺が大伝法院の末寺であったことによるものであると言われている。

この覚鑁の離山、根来止住が根来寺としてのスタート地点と言うことができるであろう。ただし根来にはすでに述べたように豊福寺と呼ばれていた寺がこれ以前から存在したとされており、まったくの無人の世界、未開発の地ではなかったと思われる。ただ、これまでの発掘調査で見る限り根来山内ではこの時期の遺物はほとんど見つかっておらず、名実ともに覚鑁をもって根来がスタートしたと考えてよい状況である。

このような経緯のもとで、根来の地に円明寺・神宮寺を建て、活動を開始した覚鑁ではあったが、在住することわずか三年で病に倒れ、康治二年（1143）12 月にその生涯を根来・円明寺で終えることとなる。

覚鑁の死後、行動を共にしてきた弟子たちのその後の動向については、よく分かっていないが、円明寺を核として根来山内において引き続き活動していたものと思われる。一方、高野山においても覚鑁の離山、そして死後も大伝法院は存続しており、活動は続けられていた。しかし依然として本寺方との争いは尽きず、対立の構図を残したままであった。こうした緊張状態は、学問あるいは教義上の対立というよりも両者の感情的な対立であったようで、伝法院方の服装が華美に過ぎるといったようなことから双方の武力対立が起こる（裳切騒動・1168）。また、同じく伝法院方が作ろうとしていた湯屋が大きすぎるといったことで再度武力衝突（大湯屋騒動・1286）に至るといったような有様であった。

とくにこの大湯屋騒動は大伝法院方の壊滅的な敗北に終わり、この事件を契機として伝法院方の衆徒は大挙高野山を離山し根来へと走る。本寺方の圧力もあり帰山できない状況に追い込まれる。ここに至って、伝法院方は、高野山での活動をあきらめ、正応元年（1288）、大伝法院方の諸機能および寺祉のことごとくを根来へと移籍する。

この改革を成したのは、当時大伝法院の学頭であった俊音房頼瑜であった。これにより覚鑁以来、150 年余に及ぶ高野山における大伝法院の幕は閉じられ、教団としての再スタートが根来

で切られることとなる。

根来では、頼瑜のあとも後継者に恵まれ、円明寺を核とした学問研鑽の熱は盛んとなり、しだいに教団としての隆盛期を迎えることとなる。この時期、三尊像などの造仏事業も盛んとなり、これらを安置するためにも必要であり、悲願でもあった大伝法院の建立、併せて伽藍整備などもなされている。大伝法院の建立時期については、判然としないが、遅くとも 14 世紀の末には完成を見ていたものとされる。さらに 100 年後の 15 世紀末には、現在も残っている大塔の立柱を執り行なっている。当然、この時期には山内には数多くの宗徒が住むようになり、子院の数も増えたものと思われる。

このような栄華を極めていた根来寺も天正一三年（1585）、羽柴秀吉により壊滅的な打撃を受ける。直接的な動機は、先の小牧・長久手の戦いで根来が徳川方についたことが原因であろうが、信長亡き後、天下一統を狙う秀吉にとって武装勢力である根来寺は紀州を平定するうえで雑賀衆とともに排除しておかねばならない存在であったと言えよう。

根来側は岸和田・泉南でこれを迎え撃ったが、出城はあえなく落城し、この報が伝わるや、根来山内の宗徒はいち早く四散したと言われており、秀吉軍は難なく根来に入り、その夜、山内各所から火の手が上がり、二昼夜にわたった火災で、大塔・大師堂・大門などいくつかの建物を遺し、全山ことごとく灰燼に帰した。いわゆる“天正の兵火”と呼ばれるものである。

このように突如として繁栄を断たれただけに根来寺の復興はままならないもので、兵火後 15 年を経た慶長五年（1600）になってようやく徳川家康から復興許可がでる。これを契機として根来寺には帰山僧があいつぎ、しだいに山内は活況を呈しはじめる。しかし帰山した僧たちも自分たちの住坊を再建し維持するのが精一杯であり、本格的な再建、あるいはかつてのように伝法院を核とした学問の研鑽、隆盛にはほど遠い状況であったと言えよう。

こうした中で、新義の法灯を掲げた京都の智積院・奈良の長谷寺の力添えや元和五年（1619）以降は紀州徳川家の手厚い保護を受けることにもなり、坊院の数は寛永一〇年（1633）に 78、元禄二年（1689）に 80、さらに下った宝永年間には 86 と言った具合に漸次増加していった。また、悲願でもあった大伝法院の再建（1826）や大門の再建（1845）も成し遂げられた。

根来寺は徳川幕府瓦解以後、その保護者を失い、明治・大正と衰退を余儀なくされる。とくに昭和二〇年の大戦後は従来から関係の深かった智積院（智山派）・長谷寺（豊山派）の支配から離脱し、単立寺院としての歩みを余儀なくされ、寺域を維持するのさえ苦しい状況下に置かれていた。こうした中で、宗祖覚鑁の御廟所でもあり新義真言宗の祖山でもある根来寺の復興を願う声が地元のみならず新義の法灯を掲げる諸寺院からも起こり、昭和四七年には宗派の総本山と定められ真言宗新義派の中枢となって新たな歩みをはじめた。

その後山内の整備も順次進められ、平成 19 年には中世の寺院跡としての重要性が認められ山内の主要部が国の史跡に指定された。

第３節　発掘調査の方法

発掘調査は原則的に当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』(2006) に準拠して行った。調査区名は凡例でも明示したように１次調査で１・２区、２次調査で３～５区、３次調査で６区と呼称している。

実測図作成や遺物取り上げの際に用いた調査区の地区割りは、いずれの調査も平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）の座標軸を使用し、数値はｋｍ単位で表示している。地区割りの基点はＸ＝-189km、Ｙ＝-62km である。この基点から 100m四方の区画を１単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の大文字でＡ～Ｊと、南方向へアラビア数字で１～10 と表記した。さらに４m四方の区画を１単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でａ～ｙと、南方向へアラビア数字で１～25 と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、４m四方の小区画で行い、中区画－小区画を組み合わせて表記し用いた。方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）からのプラス値を使用した。

調査における記録として、写真撮影と記録図面を作成した。写真撮影については４×５判及び６×７判モノクロフィルム・35mm のカラーリバーサル・モノクロフィルムを使用した他、適宜デジタルカメラによる撮影を行った。そのほか１・２次調査については、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量で調査地付近の全景を撮影したほか各調査区の俯瞰写真撮影を実施した。

記録図面については、手実測によるＳ=１/10・１/20 の個別遺構実測図（土層断面図・遺構断面図）を作成した。

調査の掘削手順としては、原則、表土及び近世以降の耕作土については、機械による掘削を行った後、人力により掘り下げを行ったが、２次調査の４・５区及び３次調査については、地形的に機械の搬入が不可能であったため、表土から人力による掘削を行っている。

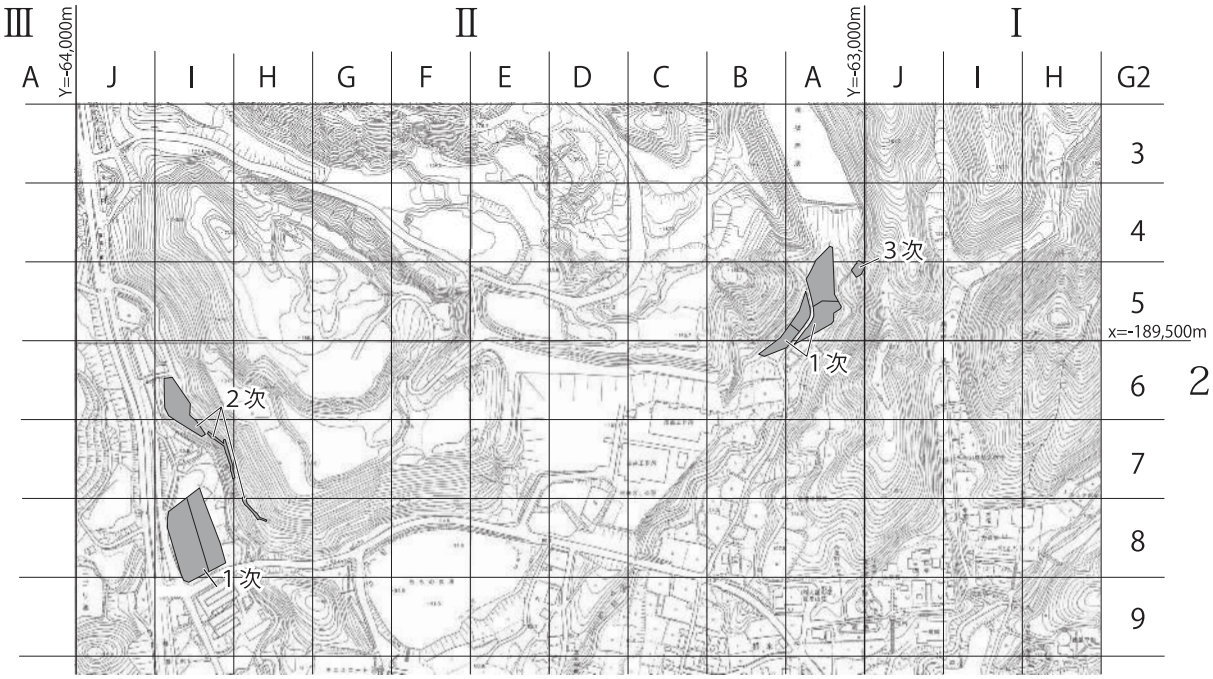


図３　調査地の位置と地区割図

第４節　１次調査

１次調査は、大きく分けて二つの調査区に分かれている。１区と呼称している調査区は、県道泉佐野岩出線と広域農道の交差点北東側の地区で、対象面積は 4,704㎡。２区は根来山内の奥深い谷筋に当たる地区で、市道桃坂線にまたがる調査区である。この市道を挟んで東側を２-１区、西側を２-２区と枝番を付して調査にあたった。対象面積は 3,381㎡である。

A．１区の調査

調査地の現況は、水田及び工場敷地である。アスファルト舗装がなされていた工場敷地内は、すべて水田耕作が行われていた地に大規模な盛土を行い造成がなされていた。この造成は、数回に分けて行われたためか、コンクリートブロック積みの擁壁が数か所で確認されている。これらの造成土を機械掘削により排土したのち、旧耕作土以下を人力により掘り下げた。基本層序は、数次にわたる盛土の下に灰褐色の旧耕作土その下に明黄色の床土があり、その下は地山であった。遺構が検出されたのは、この地山面である。検出した遺構には、水田跡、溝、暗渠、土坑などがある。

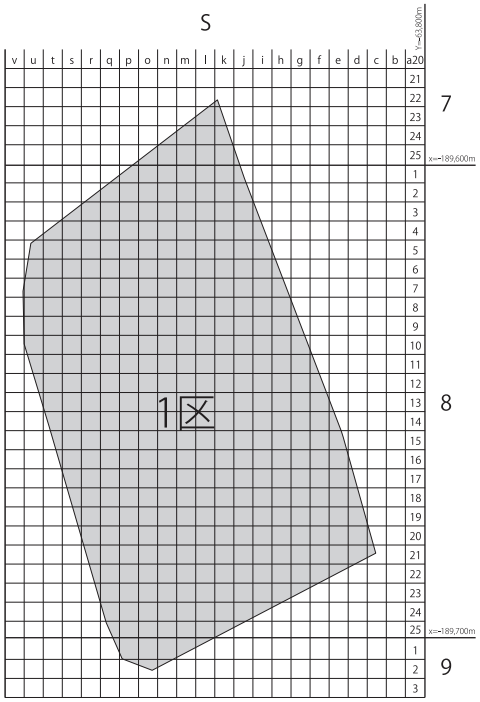


図４　１次１区　区割図

a．１区の遺構

水田区画　調査地は、東側の丘陵と西側の丘陵に挟まれた狭隘な谷状地形であり、また全体に北側が高く南へと傾斜している。こうした地形であることから、平坦面が少なく検出された水田の区画はすべて小さい。また高低差もあることから棚田となっている。

最も北側で検出された棚田 12 と最も南側で検出された棚田６の地山面での比高差は約 5.3mを測る。詳細にみると、棚田１～６・12 と棚田７～10・13・14 では区画方法に違いがあり、前者が北東～南南西～南東方向の弧状であるのに対して、後者は直線的で長方形の区画となる。出土遺物が少量であるため断定はできないが、前者は中世に、後者は近世以降の開発になるもと考えられる。

写真２　基本層序

24～27 溝　いずれも素掘りの溝で、棚田１～３の区画と同様に弧状に掘削されている。約１mの間隔で並列して掘削され、断面はU

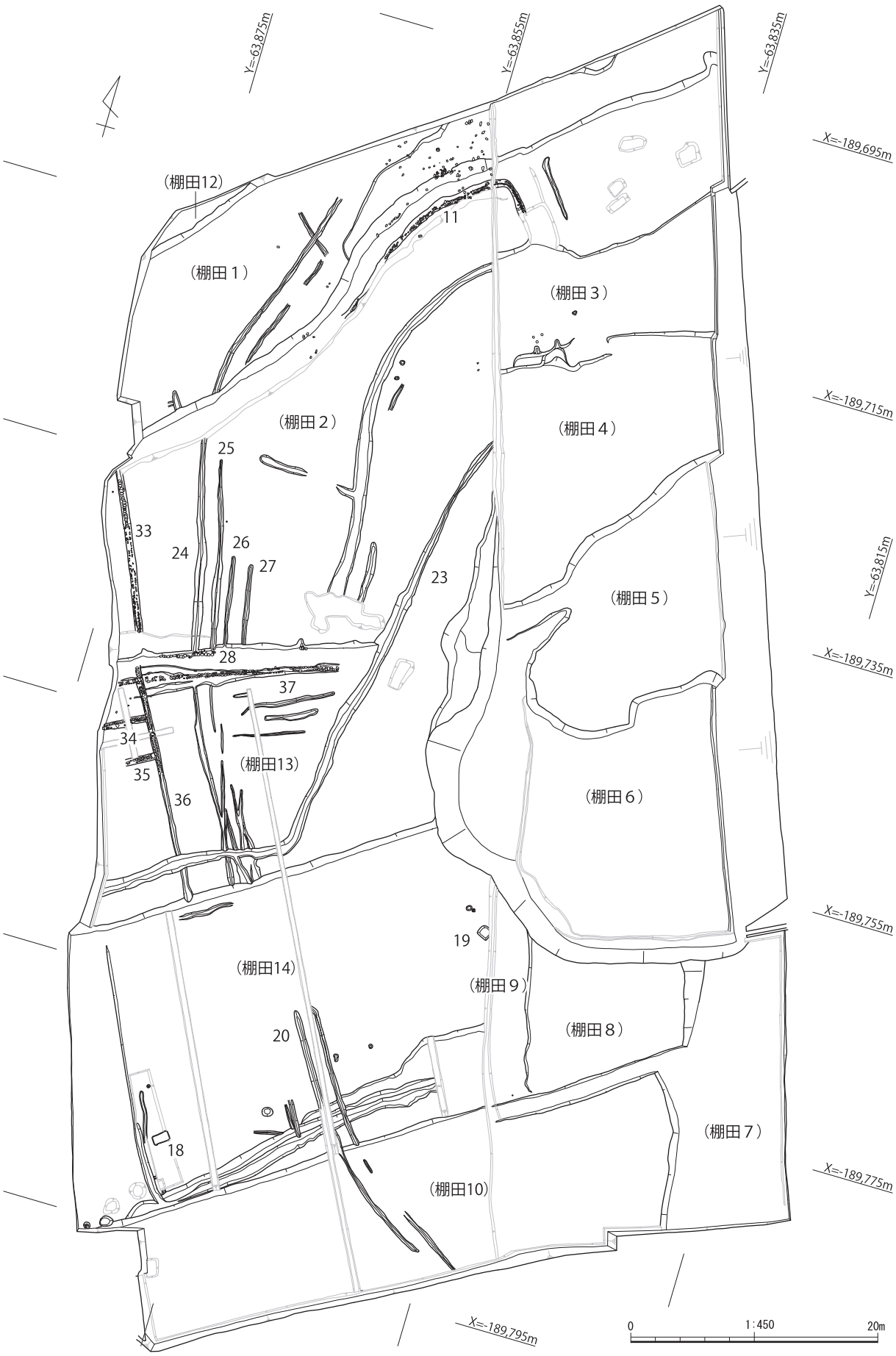


図５　１次１区　遺構全体図

字形を呈する。各溝の幅と深さは、24 が幅 70㎝・深さ 60㎝、25 が幅 70㎝・深さ 50㎝、26 が幅 30㎝・深さ 20㎝、27 が幅 30㎝・深さ 20㎝を測るもので、西側の溝ほど深く掘削されている。

11 溝　棚田２内で検出した暗渠で、L 字状に折れ曲がる。西半分は棚田１及び棚田２の区画に沿う。棚田１と棚田２の境界にコンクリート製の擁壁が築かれており、この工事によって破壊されたためか東半分に比べ遺存状況は悪い。掘方の幅は、30～40㎝、内幅は 10 前後、深さは 10㎝ほどである。石材はすべて 10～15㎝前後の砂岩が用いられている。

18 土坑　調査区南西部で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は 1.3m×0.8mである。深さは最大 20㎝ほどで、底面は凹凸が著しい。壁面は被熱し赤変しているが、固化するには至っていない。埋土は、炭化物が主体である。遺物がまったく出土していないことから時期については不明である。また、その用途についても、検出当初は土壙墓の可能性を考えたが、骨片や木棺の部材等もまったく出土していない。

28 石垣　棚田２と棚田 13 の境で検出した東西方向の石垣である。確認された延長は、５mほどである。大部分が基底部のみの遺存であったが、一部２段目まで遺存していた。基底部の石はそれほど大きいものではなく、30㎝前後のものである。屋敷地を構成する石垣に比べると全体に石列の並びも整然したものではなく、雑な感じはぬぐえない。裏込めについても一部に残っ

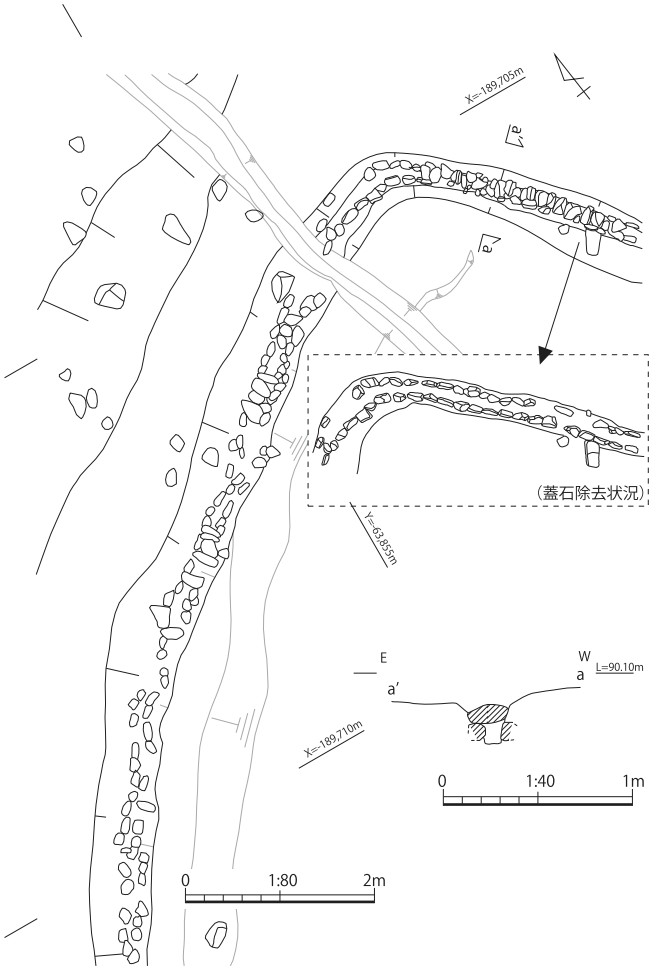


図６　11 暗渠　平面図・断面図

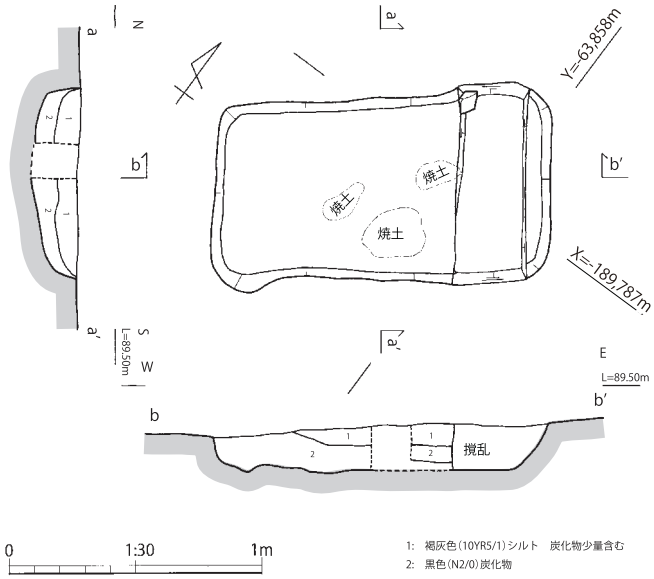


図７　18 土坑　平面図・断面図

ており、５～10㎝前後の石が用いられている。今回の調査においては、この石垣のみであったが、本来的には各棚田の段差部分にはこうした石積みがなされていたものと考えられる。

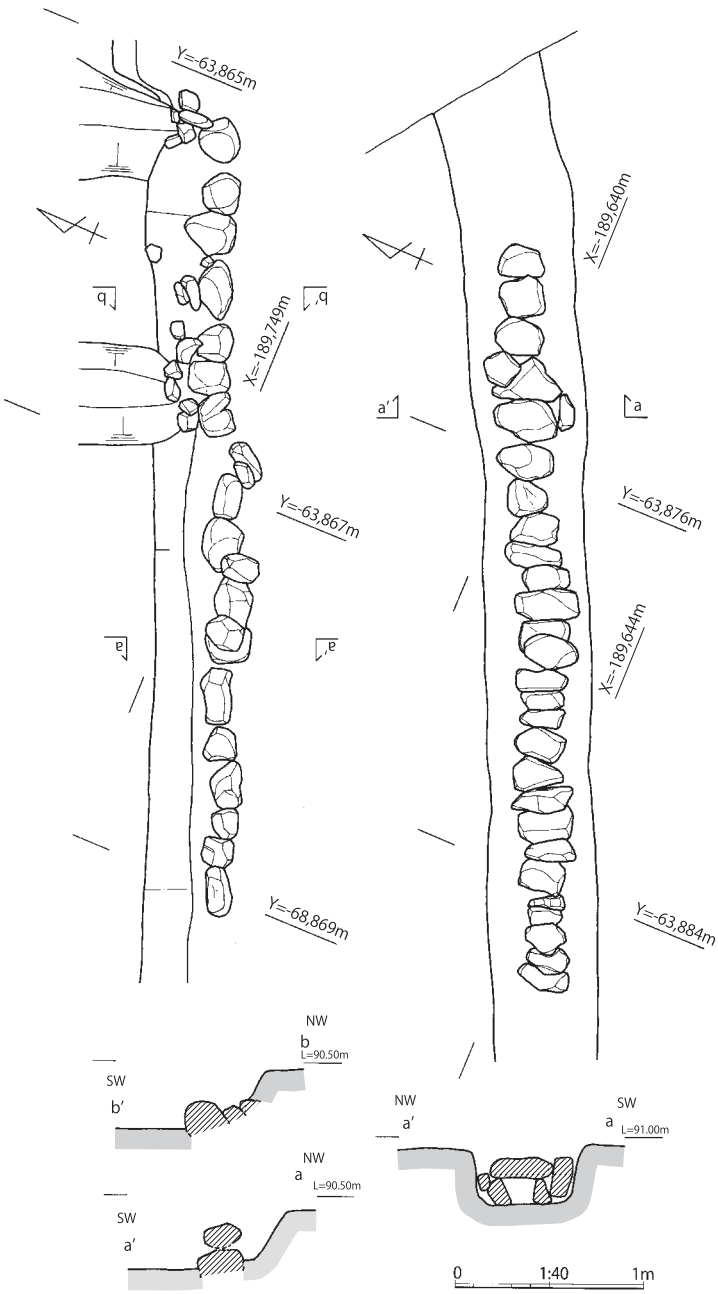


図８　28 石垣　平面図・断面図　　図９　33 暗渠　平面図・断面図

33 暗渠　調査区中央西側で検出された暗渠排水溝である。棚田 13 と棚田 14 の区画方位と同一方向に掘削されている。南側部分については蓋石が外されている状況であったが、延長 14ｍほどを検出した。

掘方幅は 60㎝を測り、溝本体の幅は 20～25㎝ほど、深さは 15㎝ほどである。側石は高さ 15㎝ほどのものを一段用いており、高さが足らない箇所については２段積みにしている。用いられている石は、いずれも近辺で採れる砂石である。

34 暗渠　後述する暗渠 36 に直交してつながる暗渠排水溝である。本来的には蓋石を伴っていたものと考えられるが、検出されたのは側石のみで、その側石についても一部欠損している状況であった。掘方幅は 40㎝を測り、溝本体の幅は 10～15㎝ほど、深さは 10㎝ほどである。側石には 15㎝前後の小振りの砂石が用いられている。

35 暗渠　この暗渠排水溝も前述の 34 と方向を同じくするもので、暗渠排水溝 34 との間隔は 1.8ｍを測る。西側部が後世の削平により欠損しており、検出した延長はわずかに２ｍほどである。一部蓋石が残存していたが、大部分は側石のみであった。掘方幅は 40㎝を測り、溝本体の幅は 10～15㎝ほど、深さは 10㎝ほどである。側石には 15㎝前後の小振りの砂石が用いられている。この溝についても暗渠排水溝 36 に取り付いている。

36 暗渠　棚田 13 の区画と方向を同じくする暗渠排水溝である。南北方向の溝で、ほぼ水田一区画分、延長約 22mが検出された。掘方幅は 40cmを測り、溝本体の幅は 10～20cmほど、深さは 15cmほどである。側石には 15cm前後の小振りの砂石が用いられている。北側と中央部の一部に蓋石は残っているが、その他の部分はみられない状況であった。

37 暗渠　棚田 13 の北側で検出された暗渠排水溝で、方向は棚田 13 の区画に沿っている。この溝についても区画の東西幅ほぼいっぱい、19mほどの長さにわたって検出した。規模は、他の溝とほぼ同じで、掘方幅は 40cmを測り、溝本体の幅は 10～20cmほど、深さは 15cmほどである。側石には 15cm前後の小振りの砂石が用いられていた。

蓋石については、東側の一部に残っているのみでほとんど外された状況であった。また、側石についても一部抜かれていたり、原位置を保たず動いているものなども多い状況であった。

図10　34・35・36・37 暗渠　平面図・断面図

b．１区の遺物

この１区については、既述したように坊跡などの建物やこれに付随する施設といった遺構はまったく検出されておらず、生産域（水田跡）であったことが判明している。

このため出土遺物はきわめて少なく、包含層である耕作土からわずかに土師皿などが数点出土しているのみである。以下、これらの遺物について詳述しておく。

棚田１　２d 層出土の遺物としては（１・２）の土師皿がある。このうち (1) は小皿で復元口径 7.9㎝、器高 2.0㎝を測るもので、小皿にしてはやや深めの皿である。体部上半部から口縁部にかけて、強いヨコナデが施されており、そのせいか体部上半から口縁端部にかけてやや外反気味に開いている。外面は浅黄橙色を呈し、内面はにぶい黄橙色を呈している。(2) は復元口径 9.5㎝、器高は 1.0㎝と低く、扁平な皿である。底部はやや厚く、口縁部を摘み上げるように立ち上げている。前者については、室町時代後期 16 世紀前半代の年代を考えているが、後者については、これよりやや古く鎌倉時代末から室町時代初めまで遡る土師皿である可能性が高い。

（３～５）は棚田２のａ層からの出土である。このうち (3) の土師皿は、(1) とほぼ同サイズの小皿であるが、口縁部はやや内湾気味に丸く立ち上がっている。(4) も同じく土師皿で、口径 7.5㎝、器高は 1.7㎝の小皿である。全体に浅黄橙色を呈している。口縁部には、弱いヨコナデが施されており、かすかに外反する。(5) は東播系の須恵器のこね鉢である。全体に灰ないし灰白色を呈し、口縁端部にはヨコナデが施されている。

(6) は、棚田４の２層から出土しているほぼ完形のサヌカイト製の石鏃である。最大幅で 3.2㎝、厚さ 0.45㎝、重さは 2.0ｇを測る。(7) は、棚田 10 の２層から出土している土師質の小皿で、口径 8.0㎝とやや大きい目であるが、それに比して器高は 1.3㎝と低く、扁平な皿である。外面はにぶい橙色ないし褐色を呈し、内面は浅黄橙色を呈している。この小皿についてもやや古く、鎌倉時代末から室町時代初めに帰属するものである可能性が高い。(8) は遺構 12 から出土している丸瓦である。完形品で長さ 40.2㎝、高さ 7.5㎝を測る。内面はオリーブ黒色、外面は灰白色を呈しており、胎土には１㎜大の石英が含まれる。

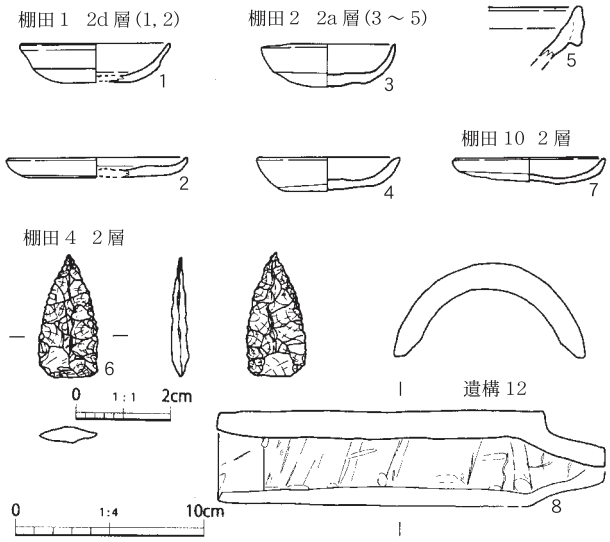


図 11　１次１区　出土遺物実測図

c．１区のまとめ

１区の調査位置を確認しておくと、大塔などの伽藍が建ち並ぶ根来山内の中心地から西方約１㎞に当たる。秀吉による焼き討ち直前、最盛期の根来寺についてはかなりの坊舎の存在が知られており、面的拡がりを持っていたとされる。これまでの調査から、その西側の範囲については中心部から 700ｍほど離れた菩提川のすぐ西側までであったと考えられている。また、根来寺の

西方を防御する出城であったとされる西山城は、根来寺の中心域から西方 1.3㎞ほどに所在している。つまり、当該調査地は、従来から考えられてきた根来寺の寺域の西端と出城のちょうど中間点に位置していることがわかる。

こうした位置にあることから、調査前からどちらにも属さない場所の可能性が高いことが想定されていた。調査の結果については、既述したように坊院などの存在を証する遺構は皆無で、水田跡のみであった。このことから、中世根来寺の寺域の範囲は、当該地まで及んでいなかったことが今回の調査によってあらためて判明したわけで、このことの意味は大きいと言えよう。

一方、今回検出した水田跡が根来寺に帰属するものか否かについては、調査の結果から及ぶ範囲ではないが、ここでは検出された水田の形状やそれに検出された暗渠排水溝などからいささかの考察を加えておく。

水田（棚田）の各形状をみると、調査区北側で検出された水田は旧地形を踏襲するように弧状をなし、かつ不整形を呈しているのに対して、南側で検出された水田（棚田７～10・14）は、方形に近い区画となっている様が窺える。また水田の付随施設と考えられる暗渠排水溝について着目すると北側部分水田の方が密に施されている傾向がうかがえる。

紀の川流域の水田については、水田（床土）の下にこうした排水溝を施すことは一般的で、かならずしも特異なことではない。また、こうした暗渠排水溝の構造も今回検出したもののように側石の上に蓋石を架橋させ中空にする構造のものから、素掘りの溝に単にこぶし大の石を投げ入れるように充填させ、その隙間に水を流す構造のものや、石のかわりに棕櫚・竹などを用いたものなどが知られている。一般的には中空にするタイプのものが古く、中世にまで遡る傾向が認められる。また、この側石・蓋石の組合わせによる暗渠排水溝については、水田に限らず中世の根来寺では坊院の敷地内においても多数確認されている遺構である。

出土遺物については、遺構の性格もありまったく出土しておらず、既述したようにわずかに包含層から数点が確認されている程度であるが、これらの遺物は中世に帰属するものである。

以上の３点、水田区画の形状と付随する暗渠排水溝の構造、さらには包含層出土遺物の時期を加味して考えれば、これらの棚田のうち北側部分のものについては、中世まで遡る時期のものとの判断が妥当と思われる。また、南側部の棚田については、近世以降に開かれたか、その時期に中世の水田を区画整理するような形で改変された可能性が考えられる。

いずれにしても小さな谷間に開かれた小規模水田群であり、中世根来を支える基盤的生産域というには程遠いものと言えよう。むしろこの棚田群の存在は、この地域にまで全盛期といえどもその寺域が展開していなかったことを証するものと言うことができるであろう。

Ｂ．２区の調査

当該調査地は、蓮華谷と称されている根来山内ではもっとも広く、かつ奥深い谷に位置している。蓮華谷については、昭和 59 年度から同 62 年度まで４年次にわたって、この谷筋の東側に沿って縦断する農道の拡幅工事に伴い発掘調査が実施されている。（根来地区普通農道整備事業に伴う発掘調査）また、山内を横断する大規模農道の新設工事にともなってもこの谷筋での大規模な発掘調査がなされているほか、昭和 55 年度から 15 年にわたって実施された史跡指定範囲や保存整備の方法などを検討する資料作成のための発掘調査においても数か所がその対象地になっているなど調査事例が多い地区である。

これらの調査から、この地区おいては、山内の中心地近いこともあって 13 世紀から 14 世紀にかけて坊院が建ちはじめ、全盛期の 15 世紀中頃以降～天正の兵火（1585）にかかる時期まで、谷を埋め尽くすほどに数多くの坊院が建ち並んでいた様が窺えること、かつ、高低差はあるものの広い面積を有している谷であることから有力な坊が屋敷地を構えていたことが判明している。そのうちのひとつである根来寺僧兵の一将とされる泉識坊の跡地は、大規模な整地を行い４ｍにおよぶ高石垣を有する屋敷地であった。また、この谷筋においては山内のほかの場所に比べて貯蔵施設と言われる地下式の倉庫が数多く検出されているのも特徴である。

今回の調査区は、この蓮華谷の北端部、山懐に近い場所で、先に述べた農道の拡幅工事に伴う調査では昭和 62 年度に実施された部分の両側にあたっている。（下写真参照）

この折の調査では、往時の道とその両側に並び建っていた坊院の土塀など屋敷地の道に接する一部分が検出されている。道は幅２ｍを測るもので、東側に幅 0.5ｍほどの周囲の水を集めて排水する幹線の側溝を伴っていた。この道は、古くは北側の山を越え泉南方面に通ずる道で、天正の兵火時にはこの道を通って秀吉軍が山内に攻め入ったとされる道でもある。

今回の２次調査区は、この農道をはさんだ両側部分にあたっている。調査工程の関係で、道の東側を２-１区、西側を２-２区としている。

この２区では、前述した道の延長部分が検出されたほか道の両側に展開していた坊院の跡地が検出され、建物跡、溝、地下式倉庫などが見つかっている。

これらの遺構に伴う遺物も多く出土している。遺物全体をみると大部分が 15 世紀中頃以降のもので、とりわけ天正の兵火時に係る時期のものが大半を占める状況であった。逆に近世の復興期の遺物はきわめて少ない。

以下、２区で検出された遺構について詳述する。

写真３　1988 年の調査風景

図 12　１次２区　遺構全体図及び区割図

a．２区の遺構

201 溝　2-2区の南端近くで検出された石積みの溝である。延長10mほどを検出した。幅40cm、深さ40cmほどを測る。側石に用いられている石は砂岩で50cm近い大きなものもいくつか認められるが、基本的には20～30cm大の石が用いられている。また、石積みは、一部欠損している箇所も認められたが、基本的には２段であったものと思われる。

埋土は２層に分離でき、上・下層とも黒褐色系の土であるが、下層の方がやや濃く炭が混じっていた。溝内からの遺物の出土は確認されていないが、掘方から16世紀代の土師器皿のほか天目茶碗、青磁の碗などが出土している。このことからこの炭については、兵火時のものである可能性を考えている。また、蓋石がまったく認められなかったことからこの溝については開渠であったものと判断した。

この溝の方向は、道と直交していることから、坊院の敷地に並行して敷設されたものと考えており、具体的な建物跡は確認できなかったが、この溝に沿う形ですぐ近くに建物が存在していたものと判断される。

なお、前述した農道部の調査成果から、この溝によって排水される水は、南東方向の道側に流れ、ここの敷地の道側の土塀の下を潜って、さらに路面の下を暗渠で通し道の東側に設けられた側溝部に導かれる構造になっていたものと考えられる。

202 地下式倉庫　2-2区の南東端で検出された地下式倉庫の階段及び通路部である。階段は、北西方向から南東方向に降っており、４段の踏面を検出した。検出規模は、幅0.9m～1.1m、深さ1.2m、長さ1.3m、階段の勾配は約42度を測る。踏面の奥行きは14～26cm、蹴上げの高さは10～30cmとやや不揃いである。通路部分は階段を降下したところから南東方向にやや下りながら伸びており、調査区外に延長する。検出規模は底面幅1.1m～1.4m、深さ1.2m～1.4m、延長3.7mを測る。

底面にはさらに南東に下がる深さ6cmほどの低い段差が認められる。

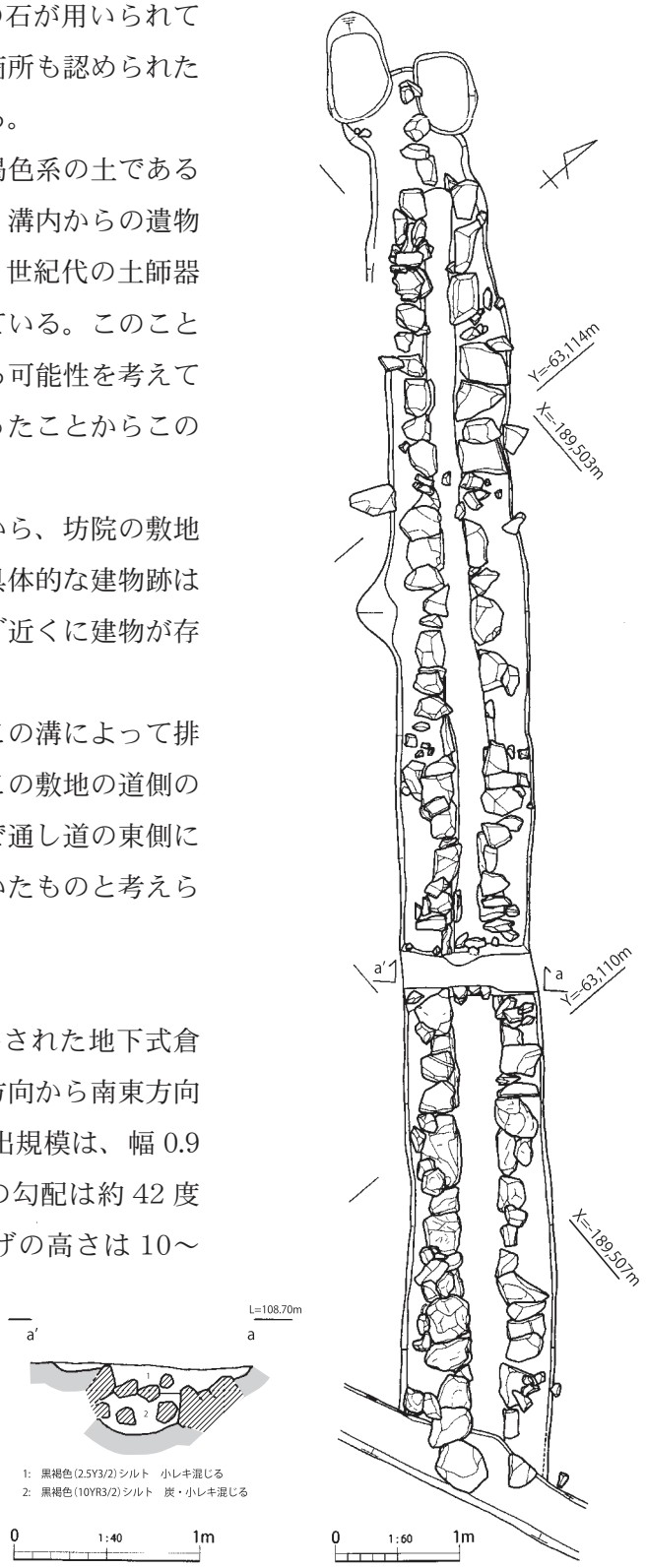


図13　201溝　平面図・断面図

遺構全体の検出規模は幅 1.0m～2.3m、検出長 5.0mを測るものである。遺構は風化が進行した岩盤質の固い地盤を掘削して築造されている。階段部についてもこの岩盤を削り出し成形して造られていた。

遺構の壁面や底面には長時間にわたり高熱に曝されて焼土化し硬化している部分が多く認められ、焼土の厚さは最大６㎝を測る。こうした事例は、これまで検出されている同種の遺構に認められるところで、火災によるものではなく当初の築造段階で施されたものと考えており、その目的は壁面の硬化による擁護と防湿にあったものと思われる。

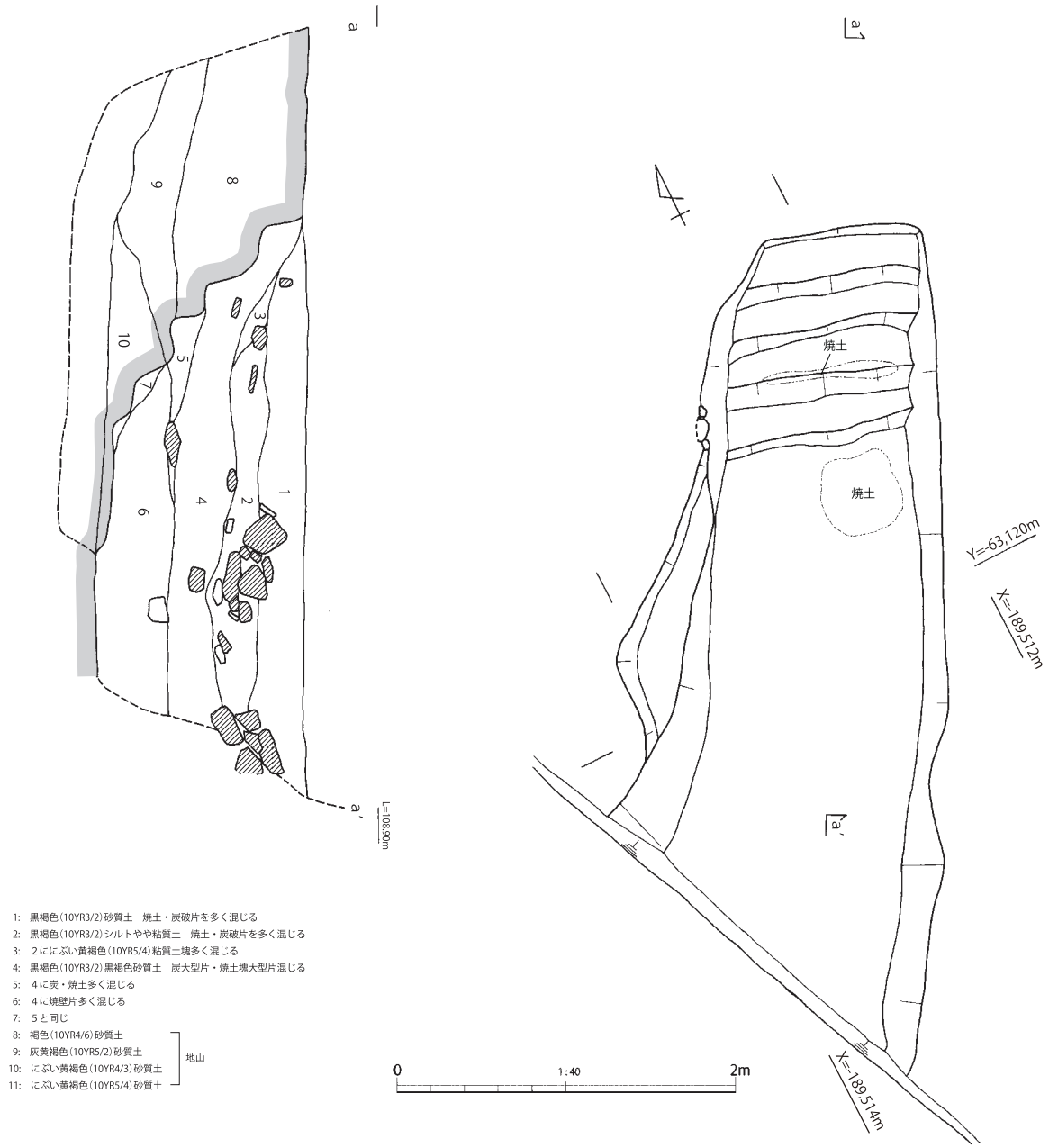


図 14　202 地下式倉庫　平面図・断面図

本体部の規模については、調査区の外側延びていってしまっているため不明と言わざるを得ないが、これまで山内で検出されている例から推して一辺５m以上の方形ないし長方形のプランになるものと思われる。この施設の用途は、貯蔵を目的としたものと考えられており、通例、本体部の床面には複数の備前の大甕が埋設されている。この施設の上には建物が建っていたと考えられており、建物の床を天井としているわけで半地下式の構造だったものと判断している。

根来山内においては、15 世紀後半段階から造られはじめ天正の兵火時（1585）まで機能する施設であることが分かっている。この遺構についても埋土をみると多量の焼土や炭混じりの土で埋められており、兵火直前まで使われ、その後の整地の際に埋め戻され破棄されたものであろう。

203 暗　渠　2-2 区の南端付近で検出された暗渠排水溝である。北西から南東方向に延びており、北西端は削平されたとみられるが、南東端は調査区外に延長する。検出規模は延長 7.3m、掘方幅 50～60㎝、内幅 10～20㎝、深さは 15㎝前後である。用いられている石材は和泉砂岩の角礫で、側石が 10～20㎝大、蓋石は 20～40㎝第の大きさであった。側石の積は一段で、比較的小さな石が用いられており、全体にその積方もやや雑な感じが否めない。

この暗渠については、掘方内から近世の伊万里焼の椀が出土しており、従来のものをこの時期に修復再利用をしたか、復興後に新たに造られた遺構と判断される。

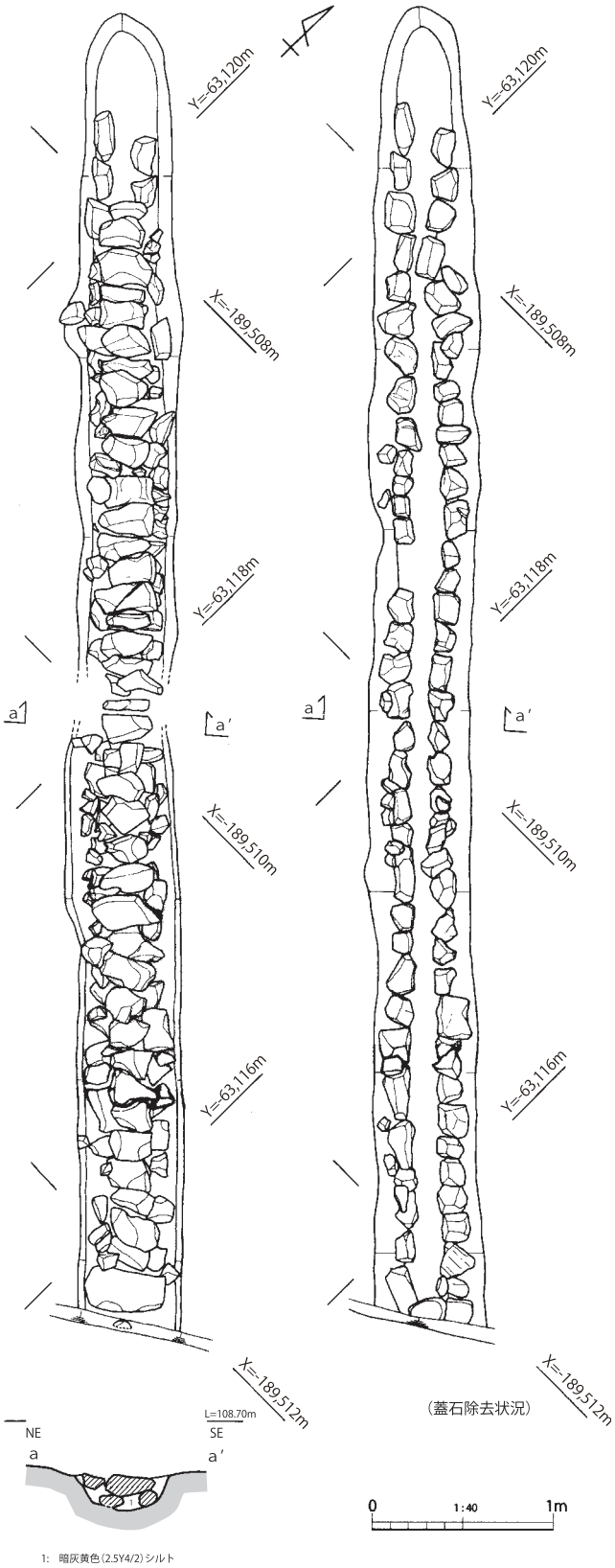


図 15　203 暗渠　平面図・断面図

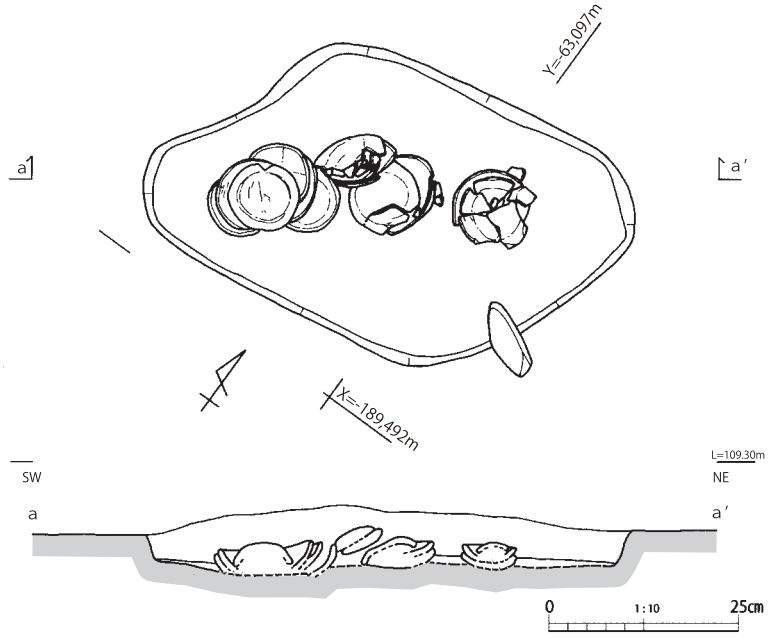


図 16　237 地鎮遺構　平面図・断面図

237 地鎮遺構　2-2 区の中央部で検出されたもので、合わせ口状に重ねた状態の土師器皿を４組集めて土坑内に埋納した遺構である。土坑は、長軸 50㎝、短軸 40㎝、深さ 10㎝の規模で、平面形は菱形にちかい形状を呈する。

土師器皿の各組は伏せ状態の皿１枚とこれを受ける状態の皿２～５枚で構成されており、４組合わせて 15 枚を数えた。その内訳は、北東端の１組のみ受け状態の皿が５枚で、他の３組は２枚であった。このような検出状況が具体的にどのような意味内容を示すのか現状では明らかにし得ないが、根来寺遺跡では同様の埋納遺構が３例ほど検出されており、合わせ口の皿の中に銭貨を納める事例も知られている。用いられた土師器皿は 16 世紀代のものである。

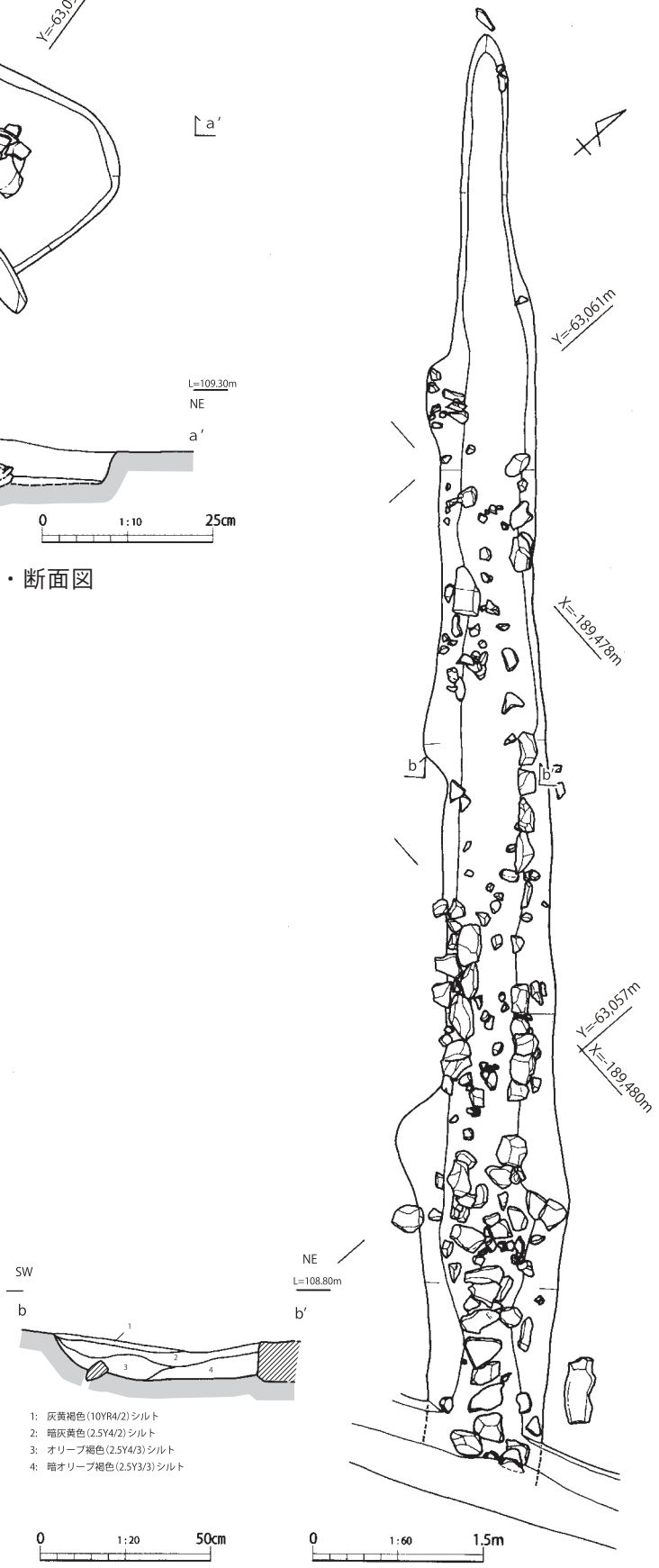


図 17　248 石組遺構　平面図・断面図

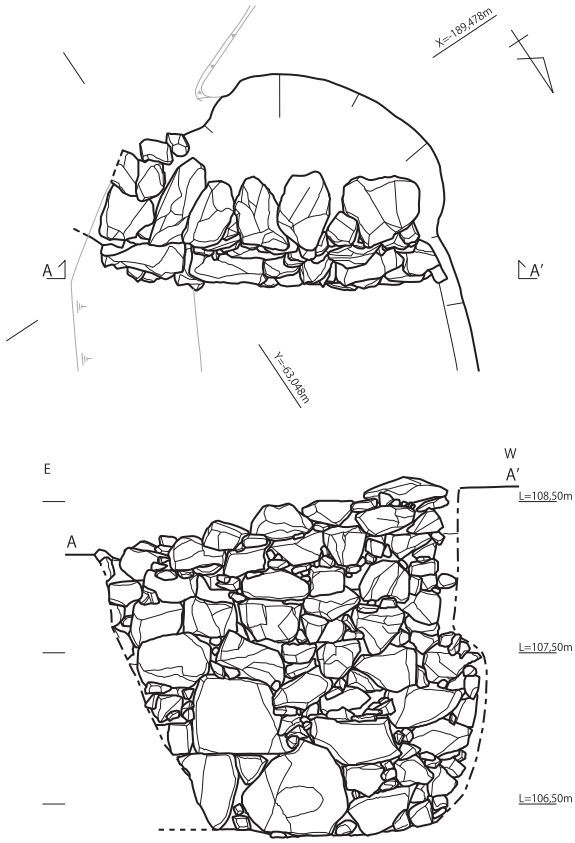


図 18　253 石垣　平面図・立面図・断面図

248 石組遺構　2 - 2 区の中央付近で検出された石組の溝である。溝は北西から南東方向に延びており、北西部は削平されたとみられ途切れている。南東部も底部付近以下が遺存した状態であり、石組も部分的に検出したに留まる。

調査区外に延長する南東端部では、底面に平坦面を上向きに敷き並べた底石とみられる石列を検出した。検出規模は延長 10.5m、掘方幅 0.7～1.0m、内幅 0.2～0.3m、深さ 0.1～0.4mである。石組の石材は 20～30㎝大の和泉砂岩角礫である。底石の石列は延長 1.4m、横置きの並べ方で 8 石を検出した。南東方向に 10㎝ほど下降していた。

溝底部付近から 16 世紀後半段階の土師器皿の完形品が数点出土しており、天正の兵火に係る時期の遺構と判断される。

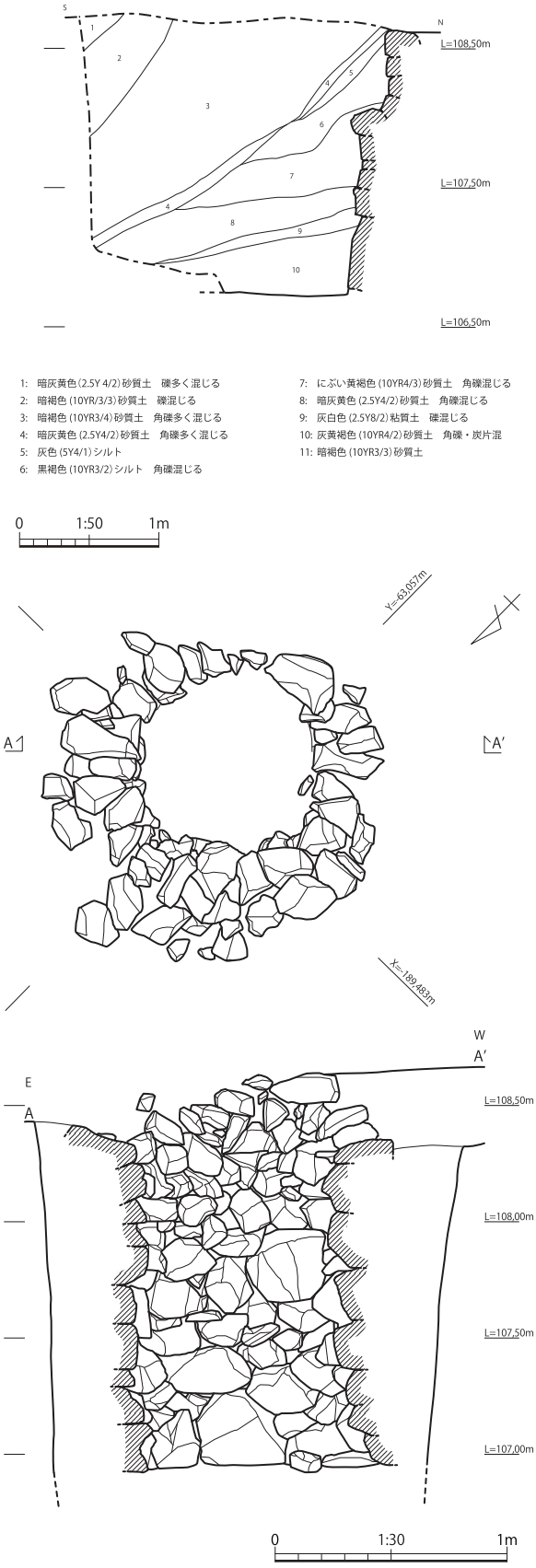


図 19　262 井戸　平面図・立面図

253 石垣　2-1区南東側壁際で検出した石垣を伴う掘込み状の遺構である。北西壁は単なる素掘りの状態であり、南西壁に北東に面を成して北西から南東方向に延びる石垣を築いている。石垣は北西端が素掘りの北西壁との隅部を起点として積まれており、南東端は調査区外に延びている。石垣の検出規模は延長2.6m、高さ2.4mを測り、石垣の上端の高さでみると南東部の方が北西部に比べ40cmほど高くなっている。

この石垣の石積は上下二段に分かれており、上段部は下段の石垣面より20cmほど後ろに控えた位置で積み上げられ、おもに20～40cm大の石材を用いた3～5段分、高さ0.6～1.1mが残存していた。これに比べ下段は30～70cm大の比較的大きな

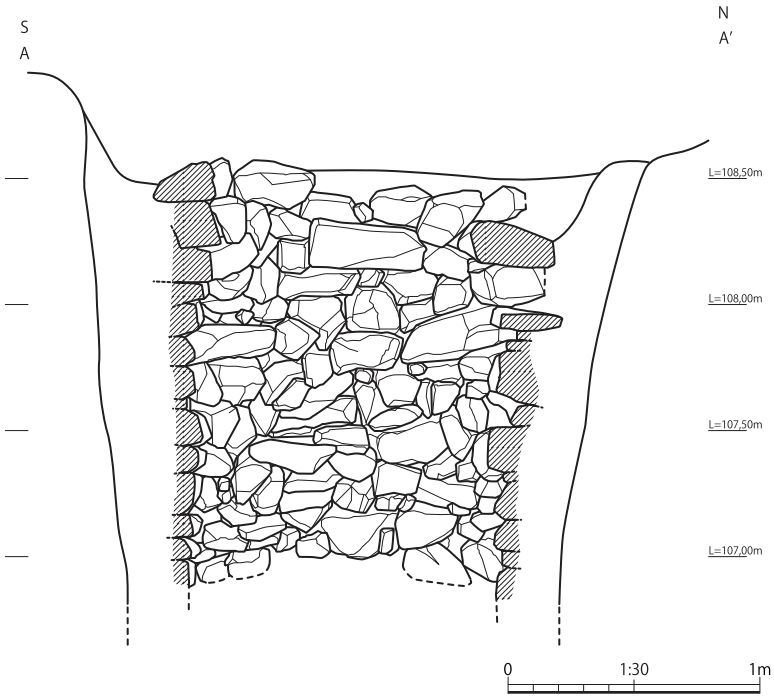


図20　266井戸　平面図・立面図

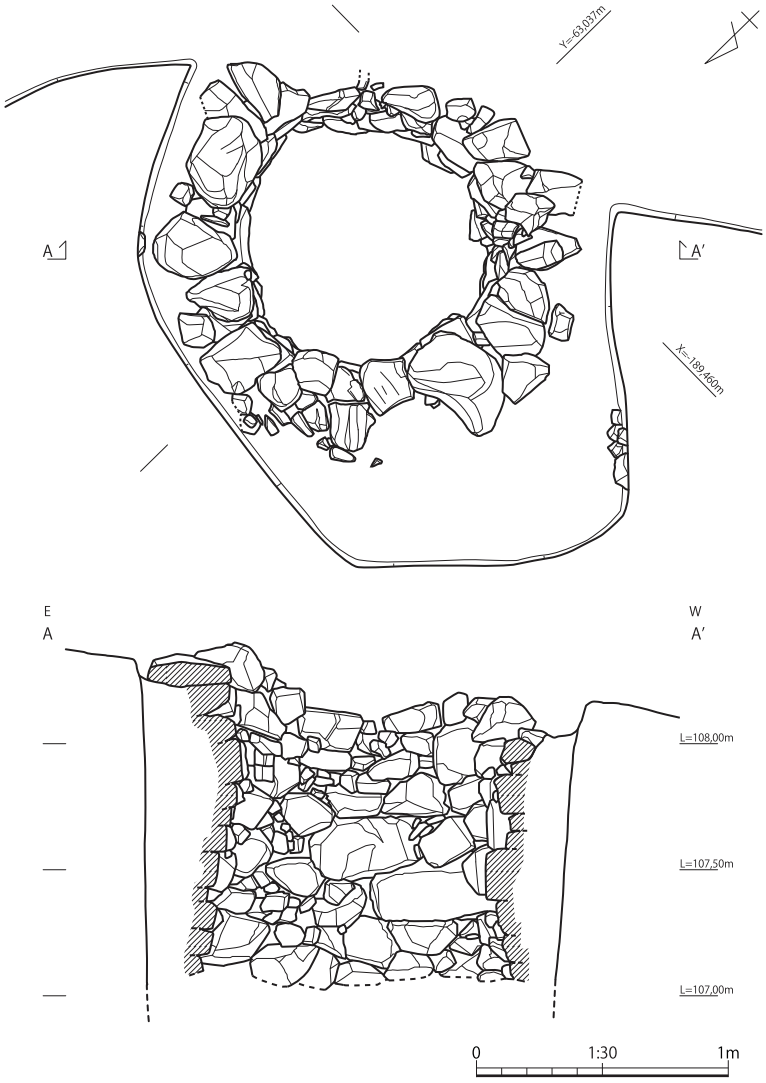


図 21　291 井戸　平面図・立面図

石を用いており、3～5 段の高さ 1.3m前後を検出した。

石垣の裏込めは検出面で最大幅 70㎝ほどを確認しており、10～20㎝大の石が密に詰め込まれた状態であった。石垣に用いられている石も含めてすべて和泉砂岩の角礫である。

この遺構の用途については不明と言わざるを得ないが、異なる敷地、一段下がった敷地の区画の一部であった可能性も考えられる。ただ、当該遺構のすぐ南東側には蓮華谷川の右岸が迫っており、それほどの敷地がとれるとも思われず、その場合溜桝状の遺構となる可能性も考えられよう。

埋土は石垣側から押し出したように斜めに堆積しており、焼土及び炭の混入は認められない。出土している遺物から室町時代後期に帰属する遺構と判断している。

262 井戸　2-1 区南東壁際で検出した石組井戸である。前述した区画溝と考えられる 248 溝の南西側に位置し、敷地区画内では北東隅部に相当する箇所である。東方には蓮華谷川が近接している。検出した規模は掘方径 1.6～1.8m、石組の内径 0.8mを測る。深さは 1.7mまで調査を行っている。石材はいずれも和泉砂岩の角礫が用いられており、大きさは 20～40㎝大であった。検出面から 70㎝ほどは比較的小振りな石を用いて積まれており、その下 1 mについてはやや大振りの石が用いられている傾向が認められた。出土遺物は少なく、16 世紀代の土師器皿などが出土している。

266 井戸　2-1 区北西壁際で検出した石組井戸である。先述の蓮華谷川に近接した 262 井戸とは対照的な位置関係になり、既往の農道拡幅工事に伴って検出した古道に隣接した場所で、敷地区画内では北西隅部に相当する。検出規模は、掘方径 1.7～2.2m、石組内径 1.0～1.2mを測る。この井戸についても深さは 1.7mまで掘り下げている。石材は主に 20～40㎝大の和泉砂岩角礫

である。石組は上部の内径が下部よりもやや狭く組み上げられており、石材の大きさも下部ほど大きい目のものが用いられている傾向が認められた。出土遺物としては備前の甕や土師器皿があり、いずれも 16 世紀代の製品である。

291 井戸　2-1 区のほぼ中央南東壁際で検出した石組井戸である。262 と同様に蓮華谷川に近接した位置であり、敷地区画内では北東隅部に位置している。検出規模は掘方径 1.6～1.8m、石組内径 1.0～1.2mを測る。深さについては、安全面を考慮したため 1.4mまで確認したにとどまる。石材は主に 20～50㎝大の和泉砂岩である。確認した深さが浅いため断定できかねるが、石組は 266 井戸と同じように上部の内径が下部よりやや狭いようすが看取できた。遺物は、16 世紀代の土師器皿が出土している。これまでの調査の成果として、一般的に根来山内に造られる井戸は、中世段階のものは底部径に比べて上部径が小さくなり、復興期の近世段階では、石組はほぼ垂直に立ち上がる傾向が認められる。その意味においてもこれらの井戸の時期については、中世に帰属するものであることが窺える。

314 石垣　2-2 区の北側近くで検出した石垣である。石垣は南西に面して北西から南東にかけて築かれており、北東側の上段の敷地と南西側の下段の敷地とを画する境界の石垣である。遺存状況は全体に悪く破損した部分が多いが、状態の良好な南東端では 5 ～ 6 段の石積みを検出した。石垣の両端は調査区外に延長する。検出規模は延長 13.7m、高さ 0.6～1.0mを測る。石垣上端面の標高は南東部で 111.2m、北西部で 111.5mを測る。石材は 10～50㎝大であるが、20～30㎝大のものが主体である。遺存状態が良好な南東端の頂部では 0.5mほど隔てた反対側に北東に面を成した石列を検出した。この状態は土塀基礎可能性が考えられるもので、石垣の上には土塀が築かれていたことが想定される。掘方の埋土から近世に帰属する伊万里焼の椀・蓋などが出土しており、この石垣については、近世のものと判断される。

315 暗渠　前述の 314 石垣の段下で検出された暗渠である。北西から南東方向に延びており、北西端は調査区西壁付近で途切れているが、南東端は調査区外に延長する。検出規模は側石の延長 13.7m、掘方幅 0.7～1.2m、内幅 0.2～0.3m、深さ 0.2～0.4mを測る。蓋石の遺存状況は部分的に破損している箇所が多く、検出延長 7.7mに留まる。石材は和泉砂岩の角礫で、側石 20～30㎝大、蓋石 20～50㎝大である。蓋石は長軸を側石の上に横置きにした状態で架橋している。この 315 暗渠の南東部では南方向に延びる 369 暗渠と接続した状態で検出した。この接続部では、315 暗渠の側石の並び方が 369 暗渠に連続するように揃っていることや、接続部以東では 315 暗渠の内幅が不自然に広がっていることなどから、当初構築された暗渠は 315 暗渠と 369 暗渠が繋がって南方向に屈曲していたとみられ、315 暗渠の接続部以東は、369 暗渠を閉塞して造り替えられた可能性が高い。遺物は少量の 16 世紀代の土師皿片や備前焼などが出土しており、室町後期に帰属する時期の遺構と考えられる。

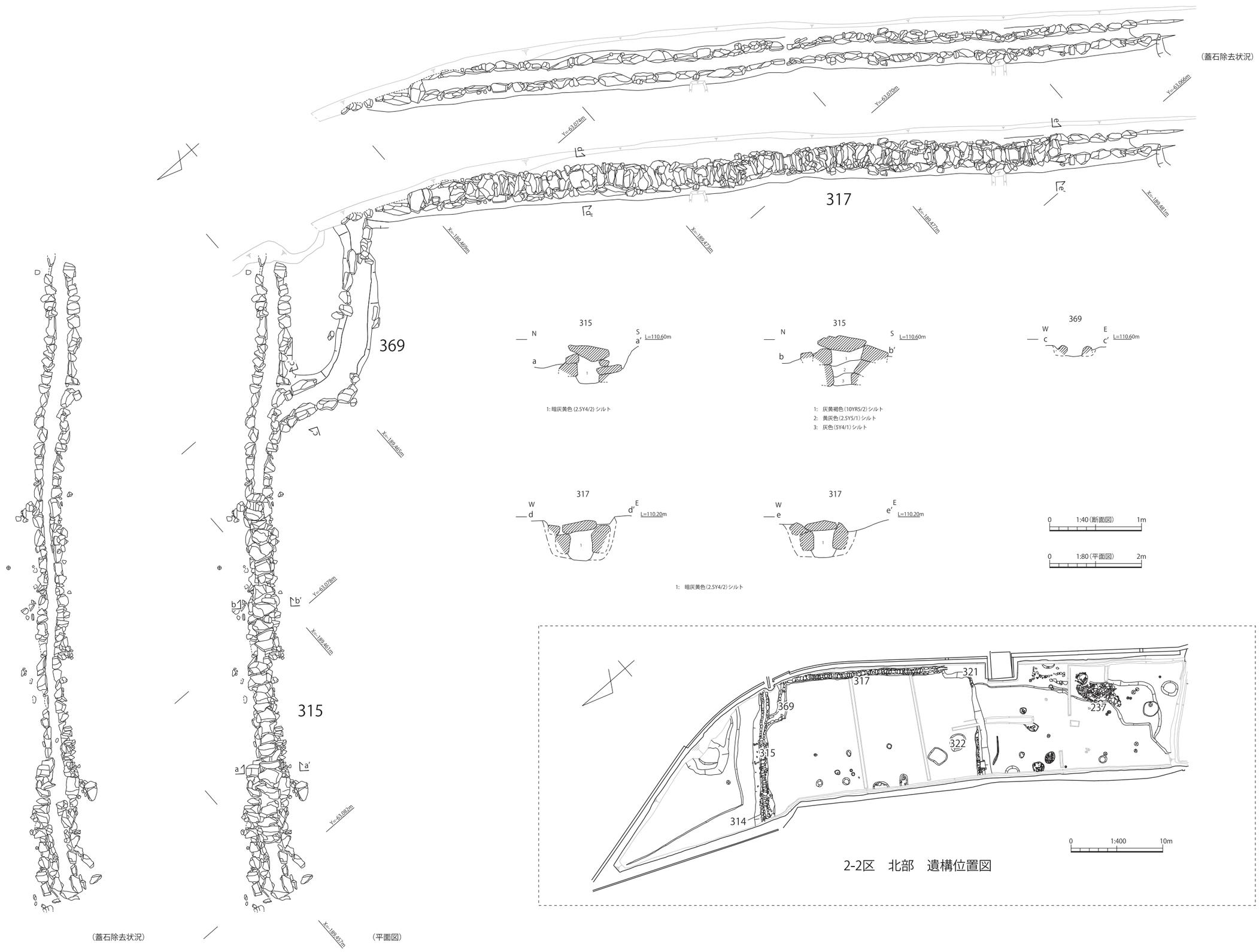


図 22　315・369・317 暗渠　平面図・立面図・断面図

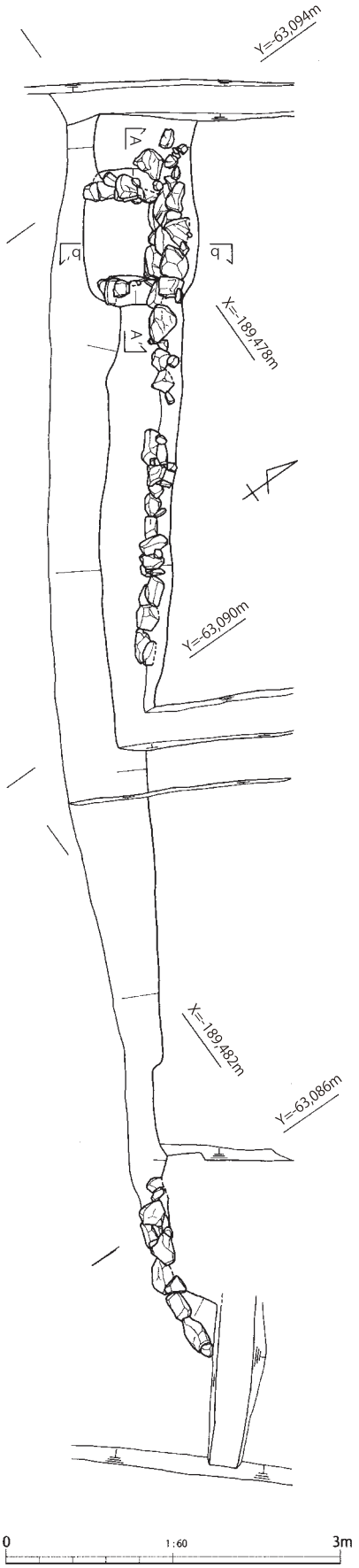
317 暗渠　2-2区の南東端部、調査区壁面沿いで検出された暗渠で敷地の南東辺、古道側を画する排水溝である。北東から南西方向に延びており、北東端は調査区外に延長するが、前述の315或いは369暗渠とT字形に連結する可能性がある。南西端は攪乱を受けており、連結先は明らかでない。検出規模は側石の延長が17.2m、蓋石の延長は14.3m、掘方幅0.7～0.9m、内幅0.2～0.3m、深さ0.4～0.5mを測る。蓋石の遺存状態は、南端の2m分ほどが欠損する。石材は側石が20～70㎝大、蓋石が20～55㎝大の和泉砂岩の角礫である。側石は細長い石材を縦置きに多用しており、蓋石は石材の長軸を側石の間に横置きにして並べている。この遺構からの出土遺物はなく、時期を明確にするには至っていないが、前述の315暗渠と連結する可能性が高いことなどを考慮すれば、この排水溝についても室町後期に帰属するものと判断されよう。

321 石垣・322 石垣　2-2区の中央部付近で検出された石垣で、北側（上段）と南側（下段）の敷地を区画する石垣と考えられるものである。石垣は南西に面を成して北西から南東方向に築かれている。321石垣と322石垣の間が欠損しているが、同一の石垣の基底部と考えられる1～2段の石積みを検出しており、両者は同一の石垣になるものと判断している。321石垣の南東延長は北に向けて緩く屈曲する状態を検出している。検出規模は321石垣が延長1.7m、322石垣が延長4.9m、これに欠損部分4.6mを加えれば延長11.2mとなる。高さは0.3mほどしか遺存していない。石材は20～30㎝大の和泉砂岩角礫である。出土遺物がなく、詳細な時期を断定できないが、これに付随する遺構などから室町後期に帰属する石垣である可能性が高い。

323 石垣　2-1区の北端近くで検出された南北方向の石垣である。検出規模は延長15.2m、高さ0.2～0.7mである。石材は主に10～50㎝大の和泉砂岩であるが、角礫に限らず円礫も多様している。南側では石積が6段遺存していたが、北側では後世の破壊のため基礎石列1段のみであった。裏込めから出土遺物は少量であるが、16世紀代の土師器皿のほか同時期と考えられる備前焼の壺片などが出土している。ただ、この石垣については、円礫を多用していることやその積方も雑な感じが否めず、基底部より上の部分については、近世になっての造り替えがなされている可能性がある。

324 石組遺構　前述の石垣（322）に取り付く遺構である。石垣の面を一辺にして、この面に直交するかたちでその両側に石積みがなされている。石垣と反対側は欠損しており不明であるが、本来はこちらの面にも石積みがなされていたと考えている。そうした場合、用途としては溜桝などの施設の可能性が考えられよう。石垣側の辺でみると幅は一辺約70㎝、高さは40～50㎝ほどである。埋土は暗灰黄色の砂質土で、この中から16世紀代の土師器皿が数点出土している。

328 石組溝　2-1区の中央北側よりの箇所で検出した石組の溝である。溝は北西から南東方向に延びており、北西側の延長は近世以降の耕作に伴い攪乱を受けている。南東側は後述する



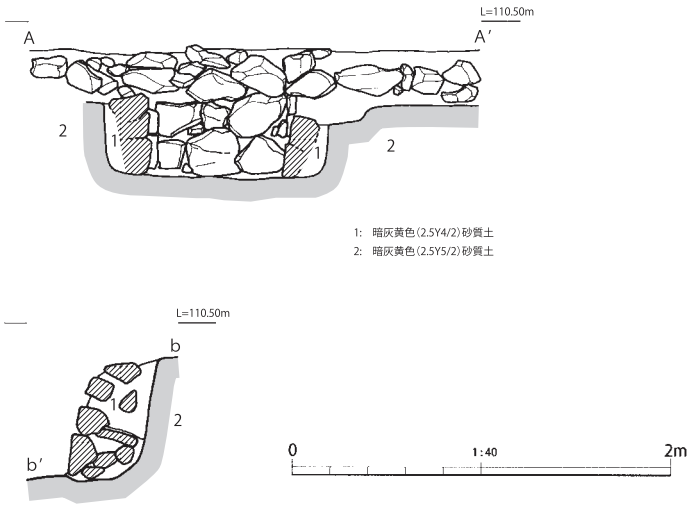
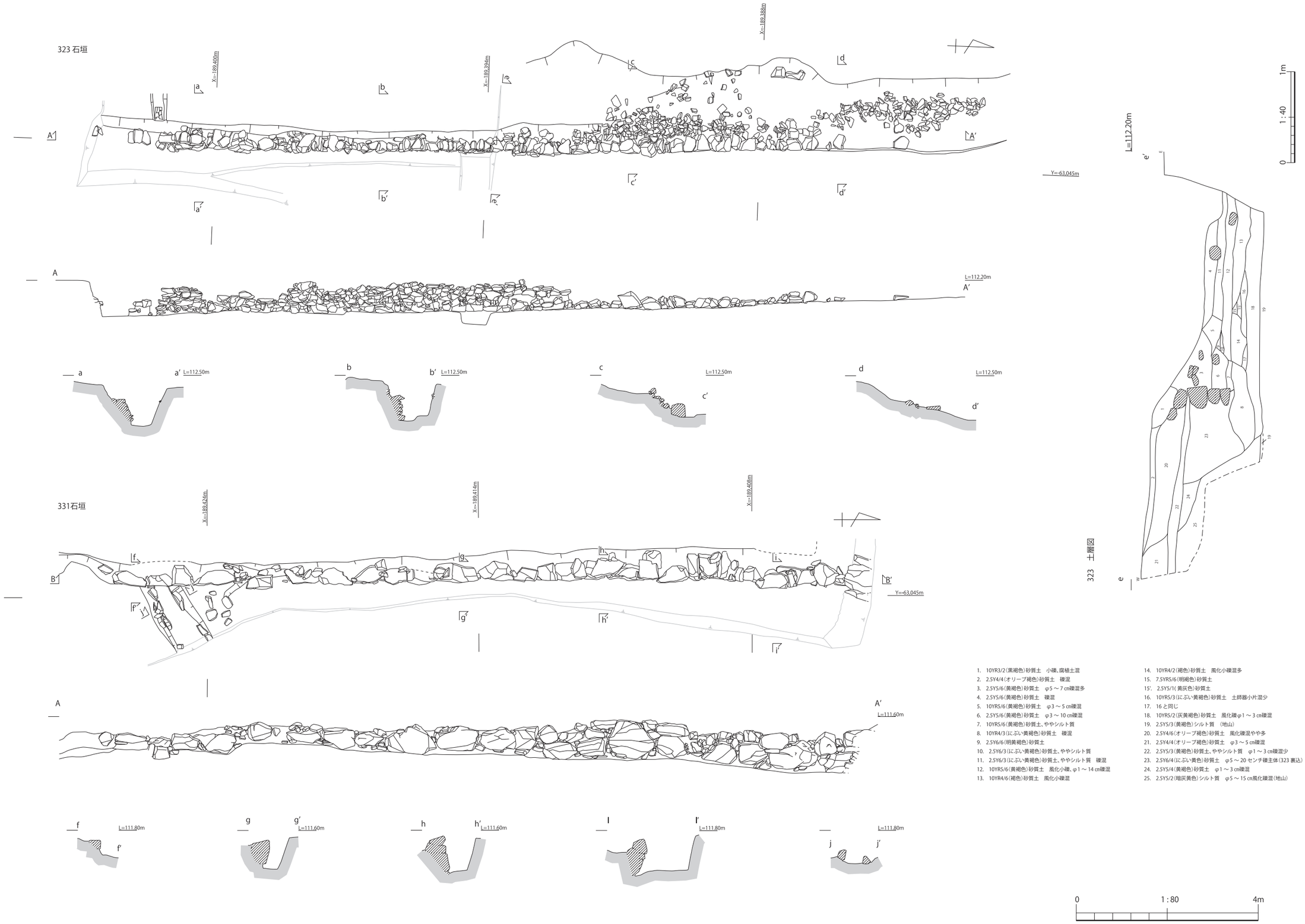


図 23　321・322 石垣、324 石組遺構　平面図・立面図・断面図

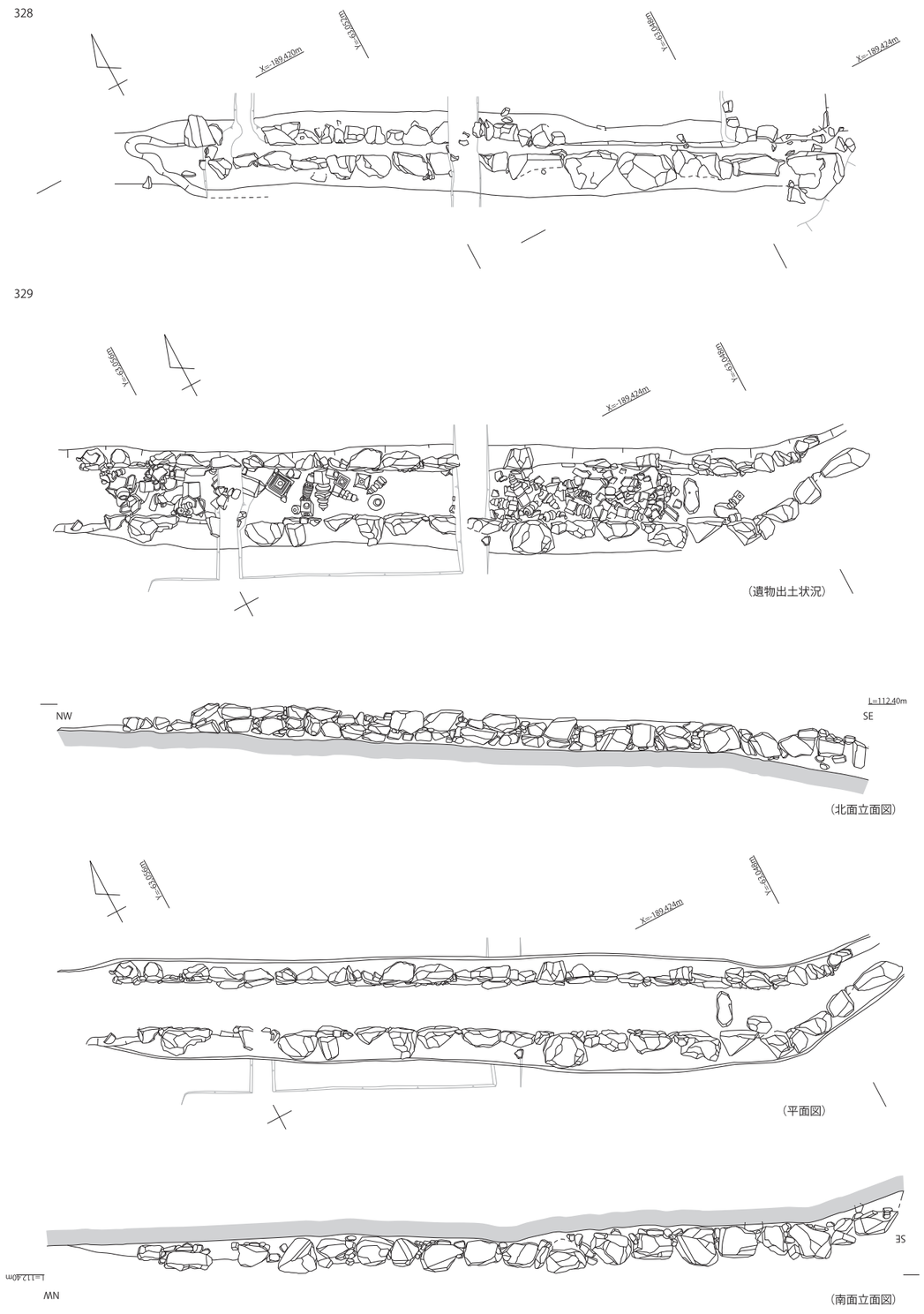
336 溝の上方まで延長しているが、石組の明確な接続状況は明らかでない。検出規模は、延長 9.8m、掘方幅 1.0～1.2m、内幅 0.1～0.2m、深さ 0.3～0.4mを測る。底面の標高は北西端で 112.10m、南東端では 111.70mと南東側が 0.4mほど低い。用いられている石材は和泉砂岩の角礫で 20～90㎝大が認められる。北西部は 20～50㎝大の石が用いられており、溝の規模相応に築かれているが、南東部の南側では 70～90㎝大の大振りの石を意図的に用いている状態が看取され、排水機能以外の何らかの構造上の違いを示している可能性がある。出土遺物は少ないが、中世後半段階と思われる備前焼の壺が出土している。

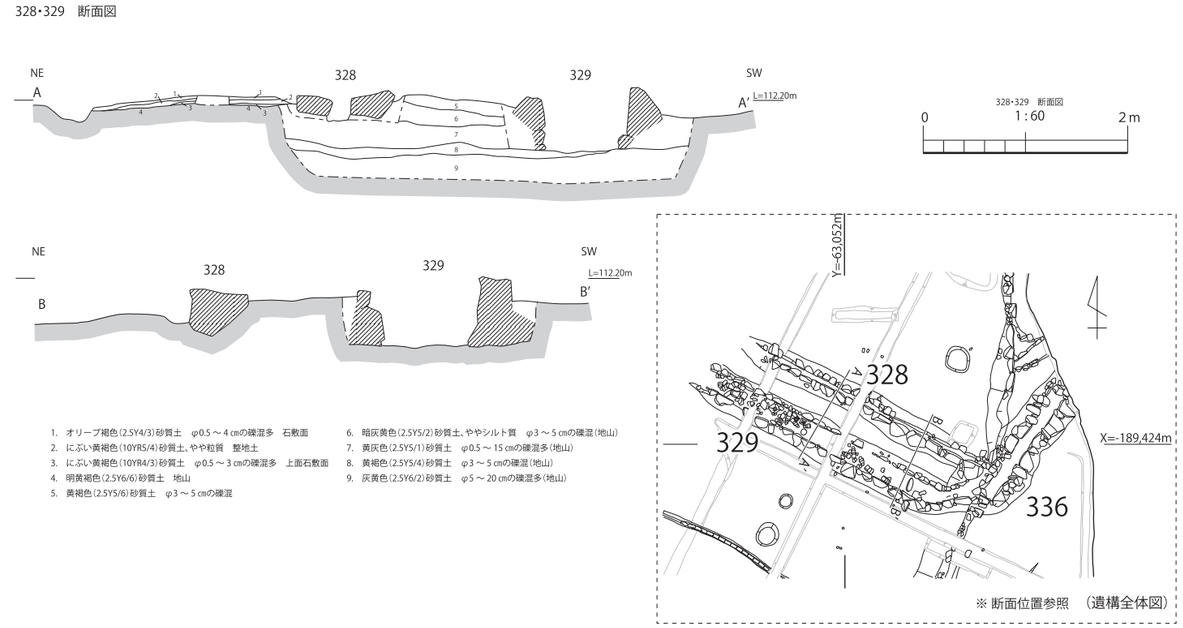
329 石組溝　前述の 328 溝から 1mほど隔てて平行する状態で検出した石組の溝である。北西側の延長は 328 溝と同様に攪乱を受けている。溝は南東端では東方向に屈曲して向きを変え、しかも溝幅が狭くなって下降しながら北東方向に延びる 336 溝に接続する。検出規模は全体で延長 12.1mであり、北西端から屈曲部までが延長 10.1m、掘方幅 1.6～1.8m、内幅 0.7～0.8m、深さは 0.5～0.6mを測る。底面の標高は北西端で 112.00



1. 10YR3/2（黒褐色）砂質土　小礫、腐植土混
2. 2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質土　礫混
3. 2.5Y5/6（黄褐色）砂質土　φ5 ～ 7 cm礫混多
4. 2.5Y5/6（黄褐色）砂質土　礫混
5. 10YR5/6（黄褐色）砂質土　φ3 ～ 5 cm礫混
6. 2.5Y5/6（黄褐色）砂質土　φ3 ～ 10 cm礫混
7. 10YR5/6（黄褐色）砂質土、ややシルト質
8. 10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質土　礫混
9. 2.5Y6/6（明黄褐色）砂質土
10. 2.5Y6/3（にぶい黄褐色）砂質土、ややシルト質
11. 2.5Y6/3（にぶい黄褐色）砂質土、ややシルト質　礫混
12. 10YR5/6（黄褐色）砂質土　風化小礫、φ1 ～ 14 cm礫混
13. 10YR4/6（褐色）砂質土　風化小礫混
14. 10YR4/2（褐色）砂質土　風化小礫混多
15. 7.5YR5/6（明褐色）砂質土
15'. 2.5Y5/1（黄灰色）砂質土
16. 10YR5/3（にぶい黄褐色）砂質土　土師器小片混少
17. 16と同じ
18. 10YR5/2（灰黄褐色）砂質土　風化礫φ1 ～ 3 cm礫混
19. 2.5Y5/3（黄褐色）シルト質　（地山）
20. 2.5Y4/6（オリーブ褐色）砂質土　風化礫混やや多
21. 2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質土　φ3 ～ 5 cm礫混
22. 2.5Y5/3（黄褐色）砂質土、ややシルト質　φ1 ～ 3 cm礫混少
23. 2.5Y6/4（にぶい黄色）砂質土　φ5 ～ 20 センチ礫主体（323 裏込）
24. 2.5Y5/4（黄褐色）砂質土　φ1 ～ 3 cm礫混
25. 2.5Y5/2（暗灰黄色）シルト質　φ5 ～ 15 cm風化礫混（地山）

図 24　323・331 石垣　平面図・立面図・断面図





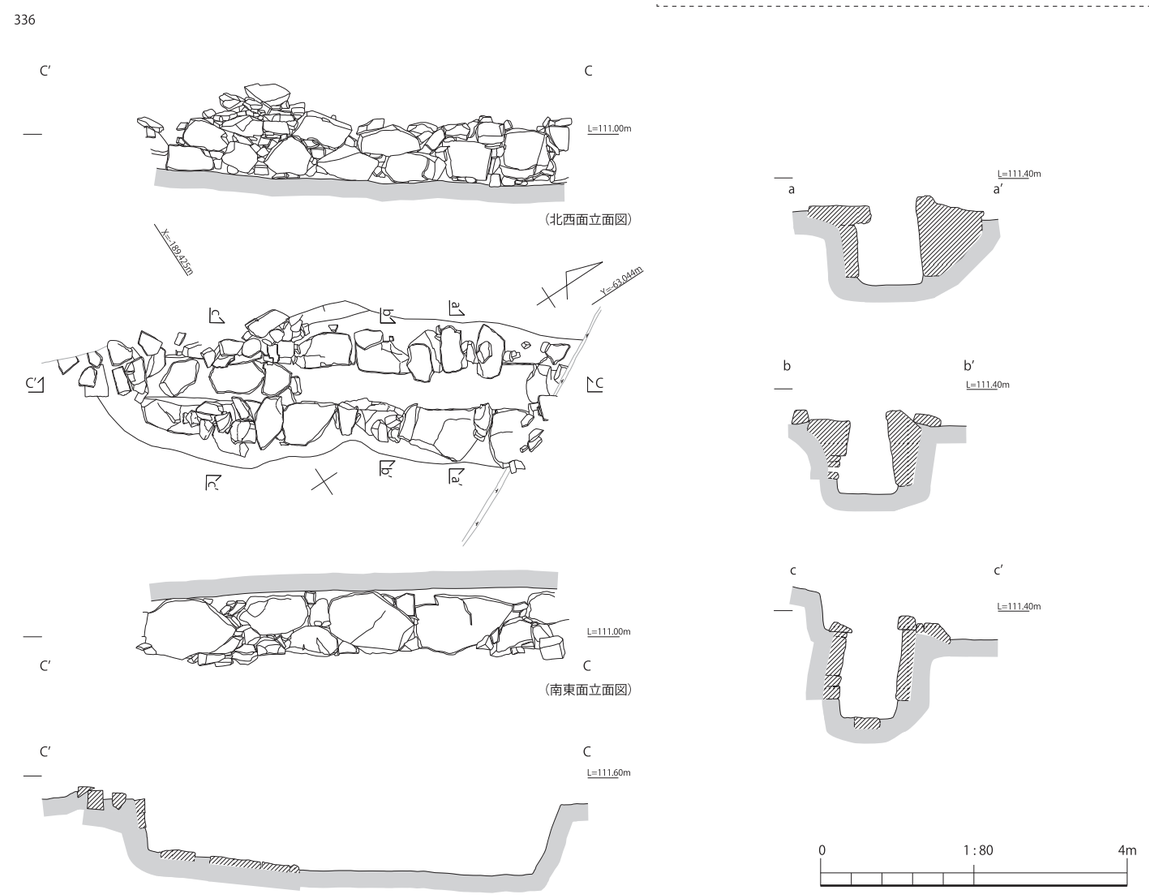


図 25　328・329・336 石組溝　平面図・立面図・断面図

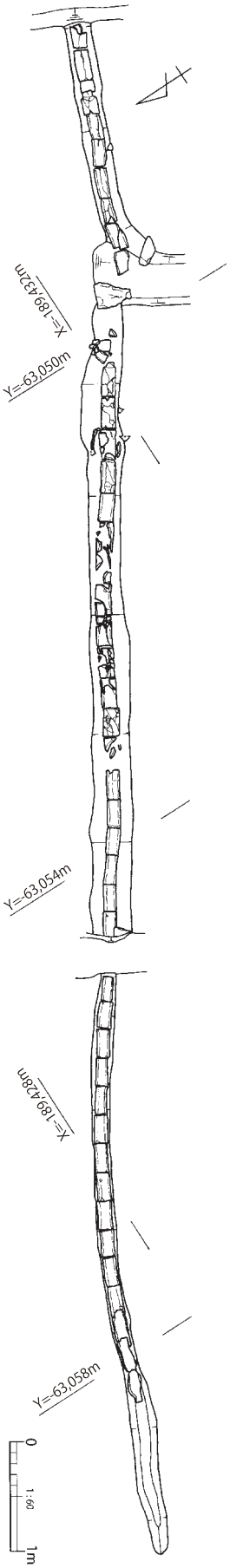


図 26 330 溝　平面図

m、南東端は 111.70mとなり南東側が 0.3mほど低い。

屈曲部から東側部分は延長 2.0m、掘方幅 0.9～1.3m、内幅 0.3～0.6m、南東端の底面は標高 111.30mを測る。石材は 30～70㎝大の和泉砂岩角礫で、小振りの石を使用した範囲では、２～３段に積み上げている。

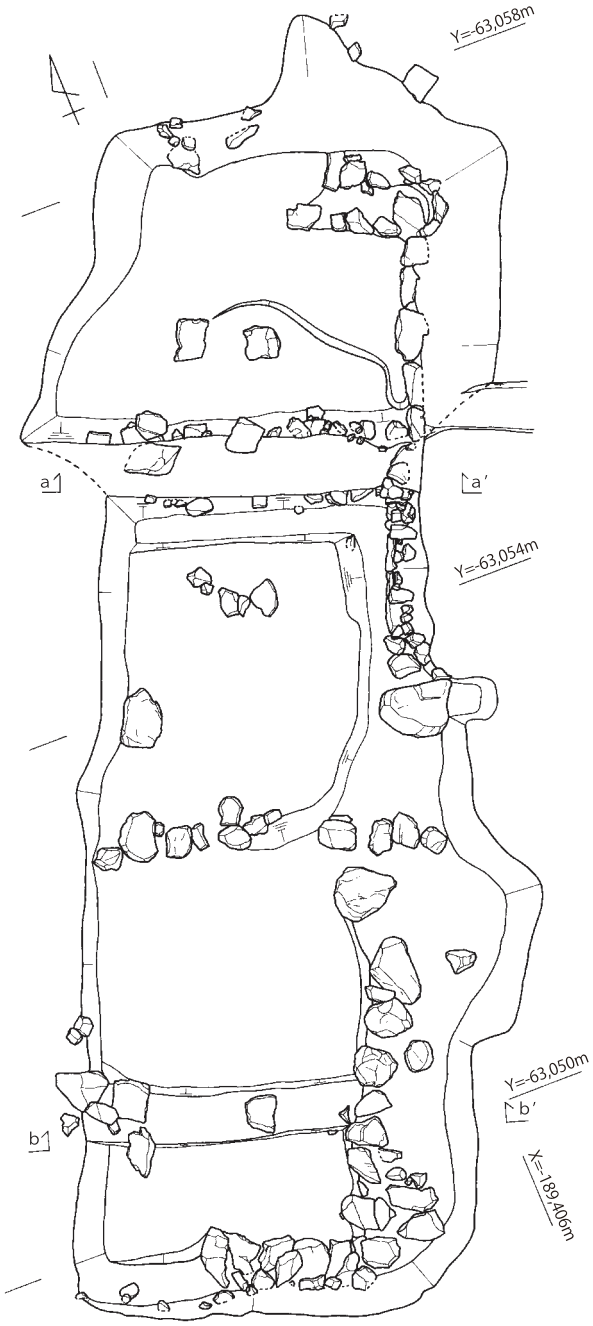
埋土には五輪塔・宝篋印塔・板碑などの石造物や、鬼瓦・軒先瓦及び丸平瓦の瓦類が大量に含まれており、土器類は少量であった。後述するが、紀年銘を記した石造遺物が数点出土している。出土遺物から天正の兵火直前まで機能していた遺構と判断される。

330 暗渠　2-1 区のほぼ中央部で検出した暗渠排水溝である。前述した 329 溝と方向を同じくし、５mほど隔てた南西側に位置している。北西から南東方向に延びており、北西側の延長は近世以降の耕作に伴い攪乱を受けている。検出規模で延長 14.2m、掘方幅は 0.4～0.5mを測る。この暗渠については、石組のものではなく、土管を繋いでいる。用いられている土管は、瓦製のもので長さ 29.3㎝、内径は８㎝前後である。この土管は、丸瓦の製作時の円筒形をそのまま利用したものである。こうした暗渠排水に瓦製の土管を用いる例は、根来山内ではきわめて少ないがこれまでの調査においても数例確認されている。使用されている土管（瓦）の年代観から 16 世紀代に敷設されたものと判断される。

331 石垣　前述の 323 石垣の用水路を挟んで南側で検出した石垣である。検出規模は、延長 16.6m、高さ 0.4～0.9mである。石材は 40～120㎝大と比較的大きな石が用いられており、基底の石列１段から３段分の石積みを検出した。

この 331 石垣と前述の 323 石垣は方向を同じくするもので、相並ぶそれぞれの坊院の敷地の東側を画する石垣と言える。また、後述する古道との関係で言えば、この石垣に沿って東側に古道が通っていたものと判断され、当然これらの石垣で画された坊院の入口はこちら側にあったものと思われるが、その入り口については確認ができなかった。

334 石組遺構　2-1 区の北側で検出された石組の遺構である。平面プランは長方形を呈し、掘方規模で長辺 9.8～10.0m、短辺 3.2～3.6



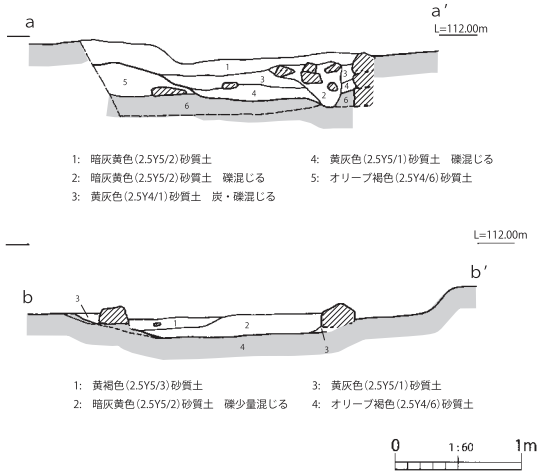


図 27 334 石組遺構　平面図・断面図

mを測る。石積みの内側でみると、長辺側で約８m、短辺側は西側の石積が確認できなかったため推定の数値であるが２mほどになるものと考えられる。深さは 0.2～0.6mであった。方向は、この周辺の石組溝 328・329 や暗渠排水溝 330 などと同じく軸を 35 度ほど東に振っている。

全体に石積みの残りは悪く、とくに北西側の辺についてはまったく遺存していない状況であった。石積みが残っているところでも大部分は基底部の１段のみの遺存状況であり、もっとも残りの良い箇所で確認できた石積みは３段である。床面には 30～40㎝大の礎石と思われるような扁平な石が置かれているのを確認している。このような規模、形状などの状況から、この遺構については、地下式の倉庫であった可能性を考えている。礎石と思われる石については、床の束石となるものと思われる。通例、地下式倉庫の場合には床面に備前の大甕などが埋設されていることが多いが、本例については埋甕の埋設は確認されていない。また通路部や階段についても確認はされていない。

昇降施設としては、木製の梯子が用いられていた可能性が考えられよう。いずれにしても地下式倉庫の場合、地面からの掘り下げの深さは最低でも１m近くに及ぶものと思われるが、本例では深さが 30㎝にも満たない箇所も認められることや石積みも大部分が壊されている状況から後世にかなりの削平を受けたものと思われる。なお、埋土についてみれば、天正の兵火を思わせるような多量の焼土や炭層は確認できなかったが、石積みに接する箇所で炭層を確認している。

336 石組溝　328 溝及び 329 溝の東方で検出した溝である。検出規模は 5.6mであり、掘方幅 1.6～2.1m、深さ 0.8～0.9mを測る。用いられている石材は 30～140㎝大で、１段から２段の石を積んでいる。南東壁側の石材は１m以上の巨石を多用している。用いられている石材の大きさや規模からしてこの付近の幹線流路であったことは間違い。その場合、前述の 328 溝及び 329 溝からの排水を受けるものだが、検出した状況ではその取り付き状況が明確にできなかった。

また、この溝については古道と想定される場所を横断しているわけで、その場合開渠であったとは考えがたく、かなりしっかりとした蓋石を伴った暗渠であった可能性が高いと判断している。なお、この水路の最終処理としては東側の谷を流れている蓮華谷川へと流していたものであろう。

338 石組溝　2-1 区ほぼ中央、西側寄りで検出した石組の溝である。このうち 338 溝は、掘方部分も含めれば延長 16.3mを測る。北西から南東へと流れる溝で北西端は調査区外へと延びている。南東側の石組は抜かれており掘方のみの検出に留まる。

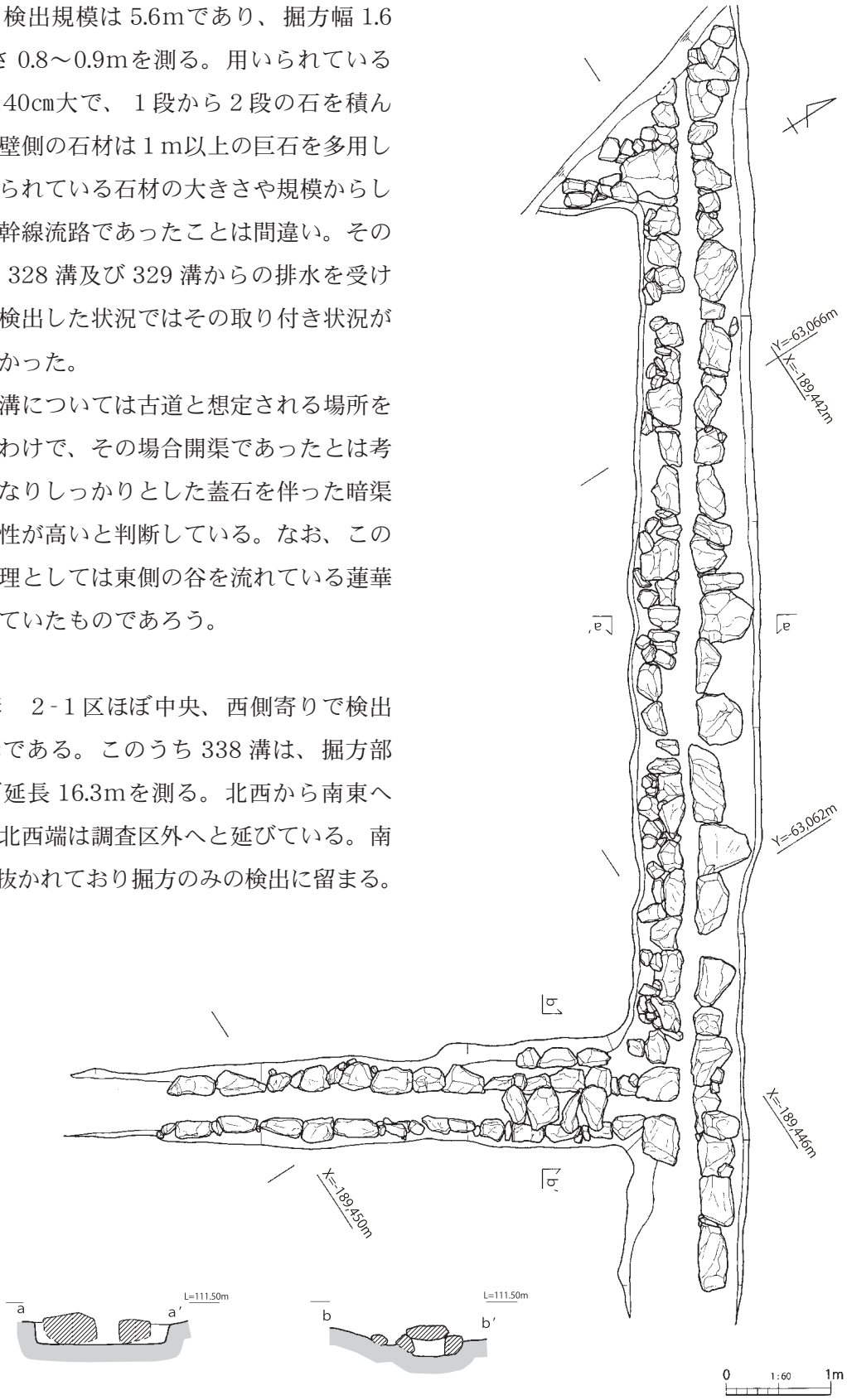


図 28 338・339 溝　平面図・断面図

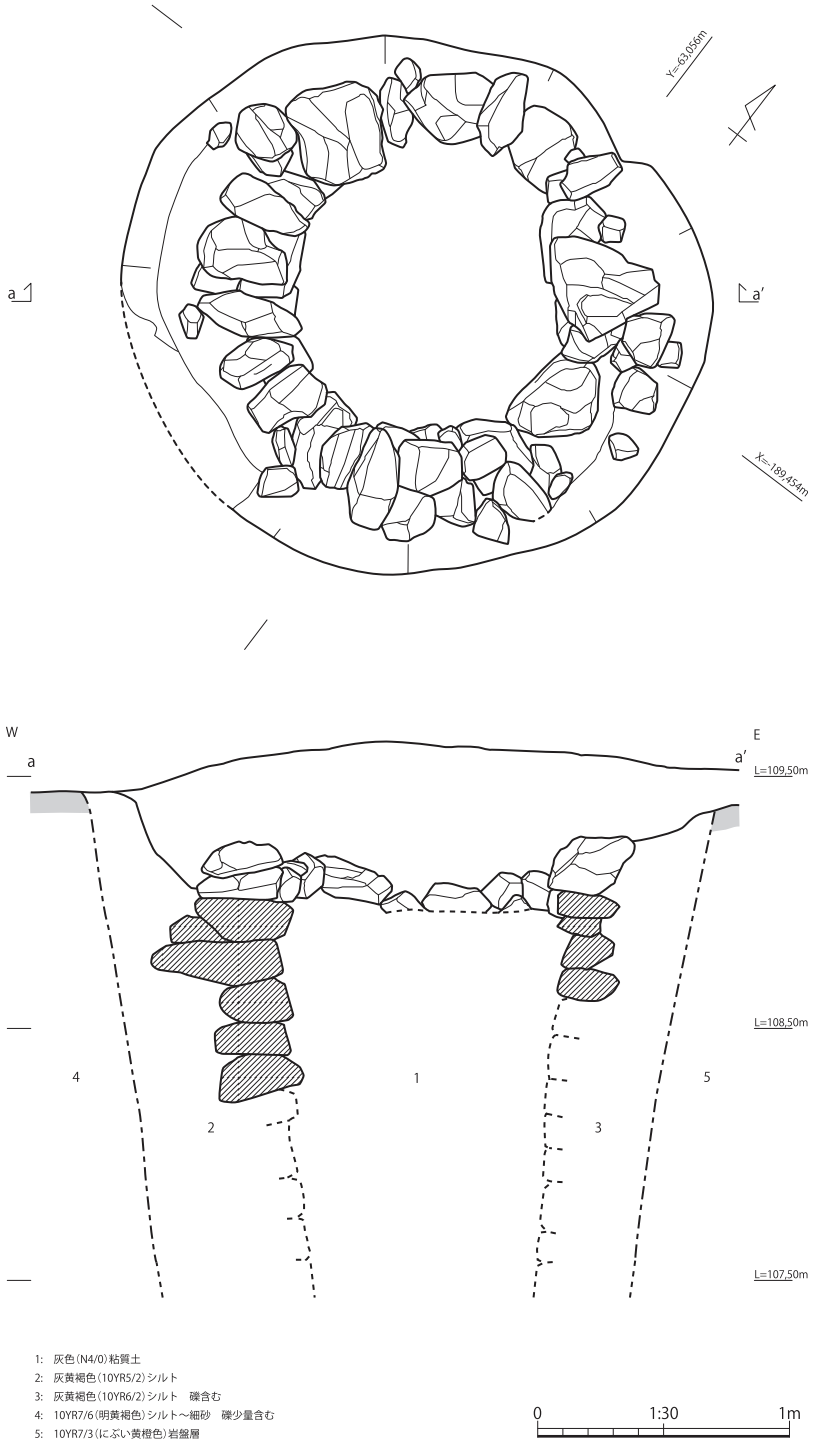


図 29 356 井戸　平面図・断面図

検出した石組の延長は約 12m、掘方幅は 1.2～1.4m、側石の内幅、深さとも 0.2m前後を測る。用いられている石材は和泉砂岩の角礫で 20～70㎝ほどの大きさである。側石の大きさに比べて幅・深さともやや小さいと言えよう。蓋石は検出されていないが、後述するこの溝に取り付く 339 溝では一部ながら蓋石が遺存していることから、この溝についても蓋石を伴う暗渠排水溝であったものと判断される。

339 石組溝　前述の 338 溝に直交する形でつながる石組の溝である。検出規模で延長 4.5m、側石の内幅は 0.20～0.25m、深さは 0.2m前後を測るものである。側石は最大のものでも 50㎝未満で全体にやや小ぶりの石を用いている。一部で蓋石が架橋された状態で検出されている。

339 古道　2 - 1 区中央付近で延長約 40m、幅 2 m前後のほぼ平坦な範囲を検出した。山川（北西）には石垣の基底部と思われる石列があり、谷川（南東）の一段下がった位置に溝が並行して掘削されているのを検出している。こうしたことから路面であることを顕著に示す硬化面は検出していないが、先述した農道の拡幅工事に伴う調査で検出した古道のまさに延長上にあることを加味すれば、この部分が古道であったものと判断される。

356 井戸　2-1 区南端付近で検出した石組井戸である。蓮華谷川に近接する 291 井戸とは対照的に古道に隣接する位置であり、敷地区画内では北西隅部に相当するとみられる。検出規模は

掘方径 2.1～2.3m、石組内径 1.0～1.1mを測る。深さは 1.7mまで確認した。石材は主に 20～50㎝大の和泉砂岩である。

370・371 埋甕　2-1 区北側で検出した遺構で、備前焼の大甕の底部が遺存していた。確認したのは２基のみであったが、北東側の水路部にもう何基か存在している可能性がある。底部は検出面より 20～30㎝ほど埋設された状況であった。肩部近くまで埋設されている例が多いことからも、この付近が後世にかなり削られていることが推定できる。

その他の遺構　個別図としては図示していないが、写真図版で取り上げている遺構について以下概略しておく。

252 石組遺構　一辺４mほどの方形の土坑で、この底部に 15～40㎝大の角礫が集中して検出された。一部積まれていたとみられる部分も見受けられることから石組遺構としているが、実態については不明である。16 世紀代の備前の大甕片などが出土している。

258 石組遺構　2-1 区の南側で検出した遺構で、幅３mほどで両端とも調査区外に延びている。この底部に 15～30㎝大の石が２箇所に集中して敷かれているような状況であった。上部構造を支える根石のような性格も考えられるが、本来石組であったものが廃棄された可能性を考えている。16 世紀代の土師器皿や陶器片などが多く出土している。

342 大型土坑　2-1 区の北東側で検出された長辺４m以上、短辺３mほどの長方形を呈する大型の土坑である。検出面からの深さは 40㎝前後である。埋土には 15～40㎝大の角礫が多く含まれていた。16 世紀代の土師器皿が何点か出土としていることからこの時期の遺構と判断しているがその具体的な性格については判然としていない。

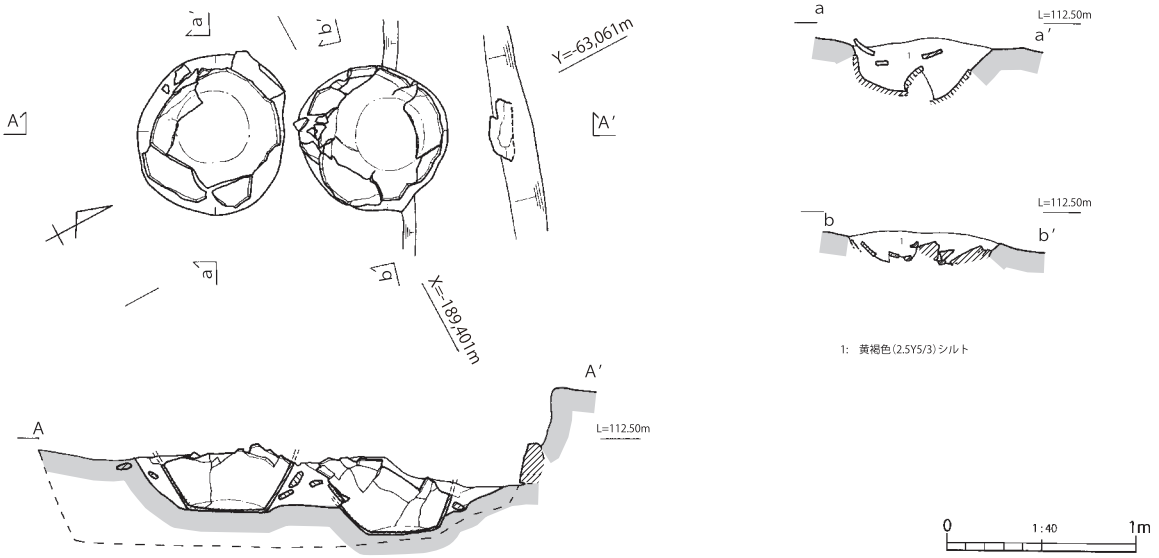


図 30 370・371 埋甕　平面図・断面図

b．２区の遺物

２区は全体に遺構密度も高く、これに連動して遺物も比較的多く出土している。時代別にみると、15 世紀後半段階から天正の兵火時（1585）にかけての遺物が大半を占め、とりわけ 16 世紀中頃から兵火直前にかけてと思われる遺物が圧倒的に多い。逆に復興後の近世の遺物は極めて少ない状況であった。以下、２区出土の遺物について詳細に記述する。

表土・包含層出土の遺物（図 31・図版 41・42）

（9）は土師器の皿で、口径 8.6㎝、器高 2.1㎝を測るもので、全体に明るい赤褐色を呈する。体部から口縁部にかけて緩やかな内湾気味に立ち上がるもので、15 世紀後半段階のものと判断している。

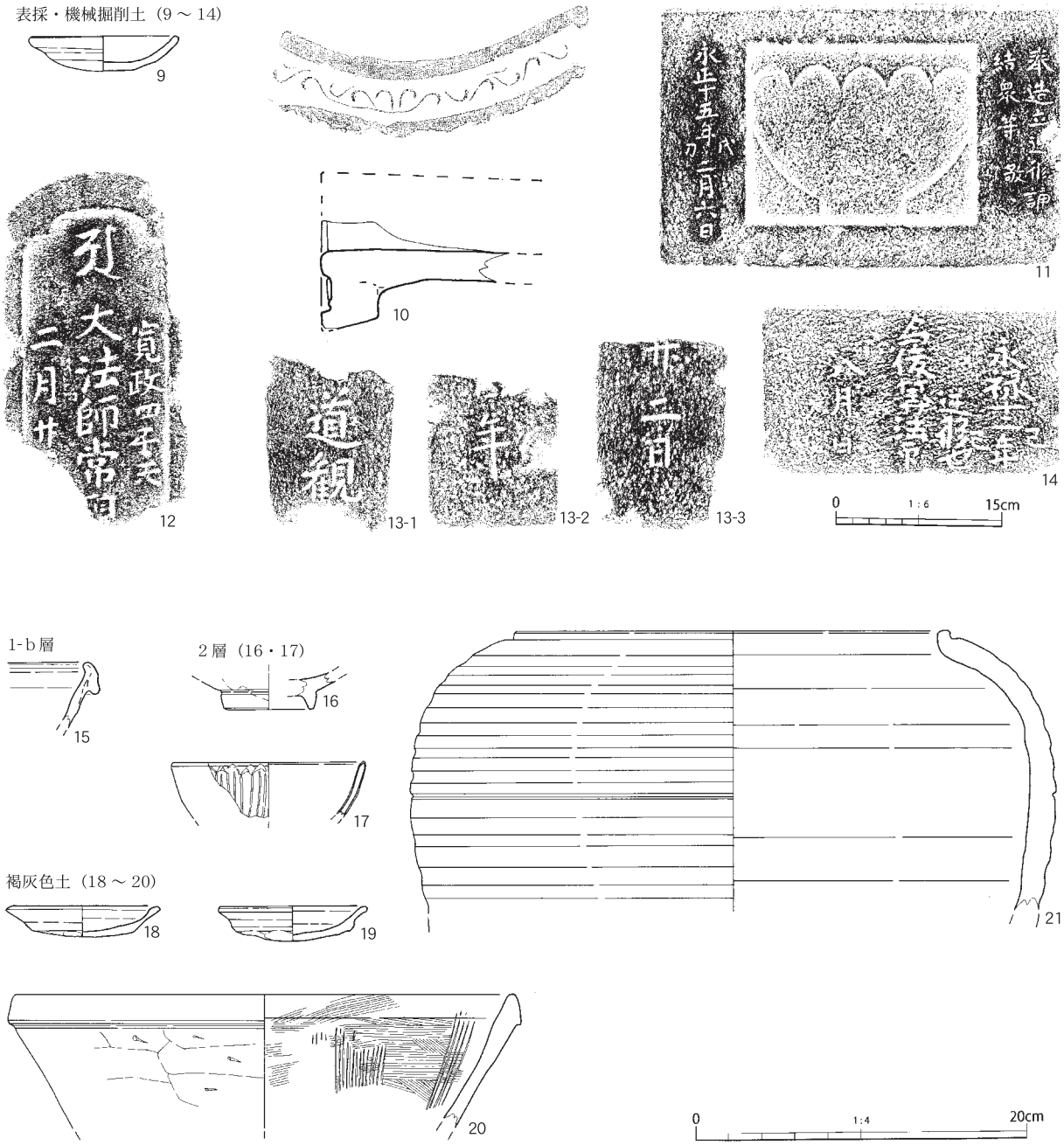


図 31　1 次 2 区　表土・包含層出土遺物実測図

軒丸瓦（10）は、文様は均整唐草で、彫は繊細でしっかりしている。顎部は横方向に調整し、凸面との境部分には丁寧なヨコナデが施されている。（11）は「永正十五年（1518）」の紀年銘の刻された宝篋印塔の基礎部である。格狭間の文様はやや簡略がすすんでいるものの室町後期の図案の特徴を示している。和泉砂岩製である。（12）は和泉砂岩製の「寛政四年（1792）」の紀年銘がのこる墓石である。（14）は逆修の供養塔で「永禄十二年（1569）」の紀年銘がのこる。これについても和泉砂岩製である。

（15）は東播系の須恵質の鉢の口縁部で、端部がやや内側に折り曲げられている。通例 13 世紀代の瓦器碗と共伴しており、山内では古い時期に属する遺物である。（16）は中国製の白磁の碗の底部と考えている。やや焼成があまく、釉も黄色味がかっている。（17）は中国製の青磁碗であるが、体部外面に描かれた蓮弁は粗略な線描によるもので 15 世紀でも後半以降の製品と考えられよう。（18・19）はともに土師器の皿である。前者は全体ににぶい黄橙色を呈し、口縁部に施されてヨコナデは弱く、わずかに外反する程度である。これに比べ後者の皿は、全体に橙色を呈し、口縁部に強いヨコナデを施すことにより口縁端部が肥厚している。

（20）は瓦質の鉢で、体部内面は不定方向のこまかな刷毛調整をおこなったのち、５本一単位の擦り目を施している。体部外面は横方向の粗い削りが施されている。15 世紀代の製品である。（21）は備前焼の広口壺である。口径は復元径で 26.2㎝を測る。頸部は短く垂直に立ち上がり、口縁端部を丸く収めている。肩部下半に数本の凹線が巡る。肩部には胡麻上の自然釉が降りかかっている。口縁部の形状から推して 16 世紀前半代の可能性が高い製品である。

201 石組溝出土の遺物（図 32・33　図版 42～45）

（22～25）は、溝の埋土から出土している遺物である。このうち（22・23）はともに土師器の皿で前者は口径 8.4㎝、口縁部のヨコナデが強く端部が肥厚するタイプの皿であるが、後者は体部から口縁部にかけて外反気味に開く形状で口径も 16㎝ほどと大皿となるものである。前者は 16 世紀代、後者は 15 世紀後半段階のものと考えている。（24）は中国製の青磁碗。体部上半部を欠くが線描の蓮弁となるもので、釉薬は底部外面のみ削り取っている。（25）は備前焼の壺で、短い頸部は外反しつつ立ち上がり、端部は丸く収めている。全体に灰色を呈する。この溝の掘方からは、前述のヨコナデが強く端部が肥厚するタイプの土師器皿（26）のほか、瓦器椀（29）が出土している。磨滅が著しく暗文については不明であるが、高台部の形状からして 13 世紀前半代のものと考えられ、前述の東播系の鉢（15）と同時期のもので、この時期の遺物は極めて少ないが、この谷深くにもなんらかの施設が展開していた可能性を示す遺物である。同じく掘方から出土している（30）は口縁部内外面に雷文帯を巡らせ内面底部に草花文がスタンプされている中国製の青磁碗、（31）は中国製の天目茶碗である。（32）は青磁の碗であるが、無文でやや青みを帯びた発色をしており、朝鮮製の可能性が高いものと思われる。

202 地下式倉庫出土の遺物（図 32・33　図版 41～45）

この遺構からは焼土に混じって多量の遺物が出土している（33～54）。このうち（33～40）は

土師器の皿であるが、(35・37) を典型とするように強いヨコナデにより口縁端部が肥厚するタイプが多い。これに比べて (39・40) は口径も 18cmを超える大皿で器壁も厚く、体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がるものである。根来山内での出土は少ないが、おそらくこの皿についても 16 世紀代のものと考えて大過ないであろう。(41)は瓦質の皿として提示したが、全体に器壁が厚く、とりわけ底部が厚くなっている。このことから蓋であった可能性も考えられる製品である。(42) は美濃瀬戸の灰釉の皿である。底部内面に簡略された花文がスタンプされ、薄

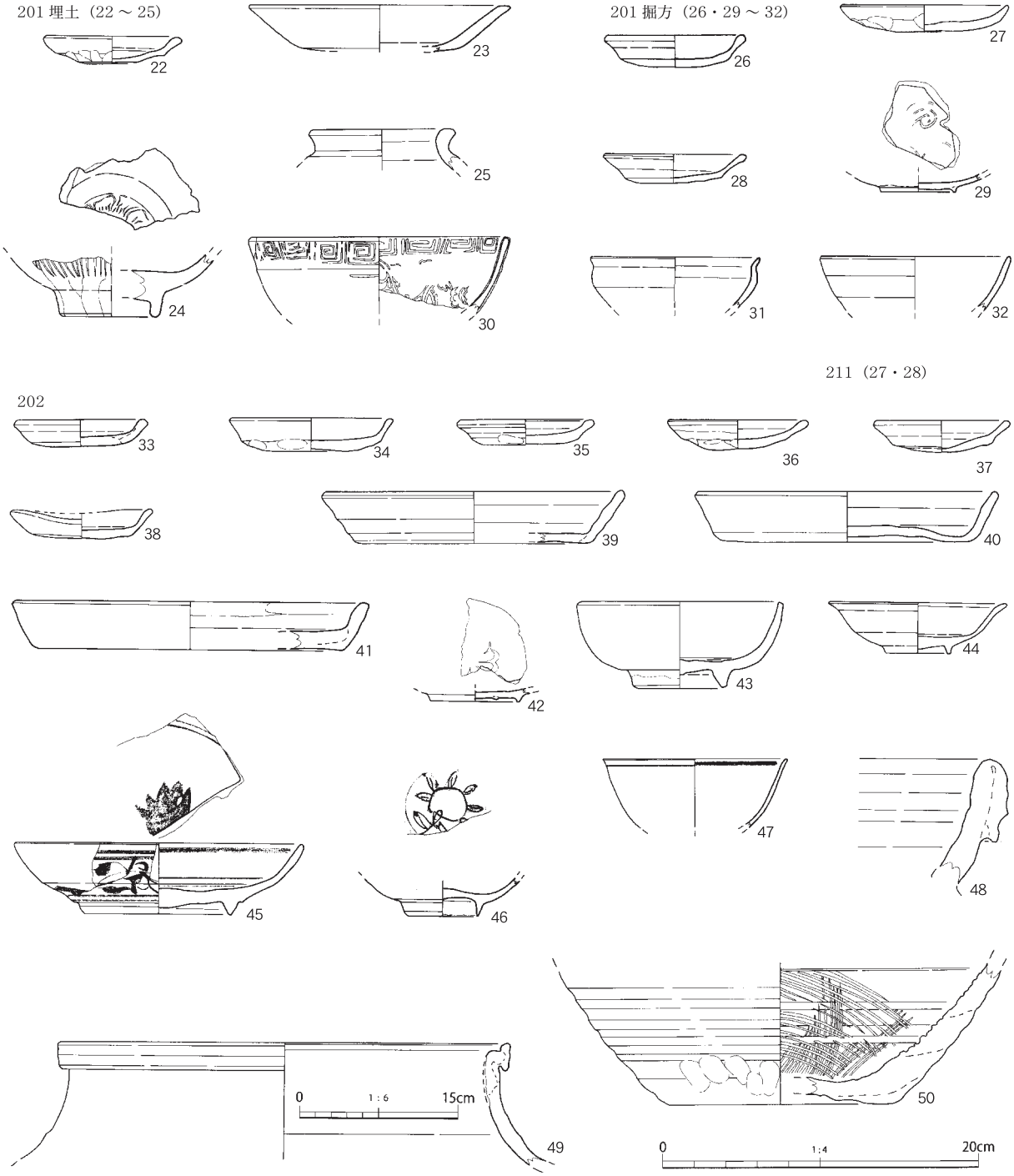


図 32　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（1）

い草緑色のガラス質の釉薬が掛る。(43) は無文の青磁の碗で、やや灰色味を帯びた釉が高台外面付近までかかる。復元口径で 12.4㎝、器高は 5.5㎝と口径に比してやや低い器形である。(44) は白磁の皿で、いわゆる端反りの皿と呼ばれている 15 世紀後半から 16 世紀いっぱいに頻出するタイプの皿である。本品はやや粗製の感があり全体に灰色味を呈している。(45～47) は中国製の染付製品である。このうち (45) の皿は、復元口径で 18.0㎝と大きく、やや肉厚の器壁で、高台部も断面三角形のしっかりとしたものになっている。高台下半部の釉は削り取られている。(46) は内面底部が盛り上がるタイプの碗で 16 世紀後半段階のものであるが、内面底部の果実文様や圏線は滲みがみられる。また、底部外面の「大明年造」の文字も粗略なものである。

(48) は備前焼の大甕であるが、口縁部外面に三条の凹線が巡るもので 16 世紀中頃から後半にかけてのものと判断される。(49) は常滑焼の甕である。全体に褐色を呈するもので、頸部内面の器壁の剥離が著しく認められる。おそらく埋設して使用されてきた中で凍結などにより剥離が進んだものと思われる。口縁部のN字状の形態から 15 世紀代の製品と判断している。(50) は擂鉢の底部であるが、全体に赤みを帯びた橙色を呈している。体部外面はヨコナデにより調整されており、底部付近では指押さえの痕跡が顕著に残っていた。おそらく備前の製品である可能性が高いものと考えているが、口縁部を欠いているため時期については明確にし難い。

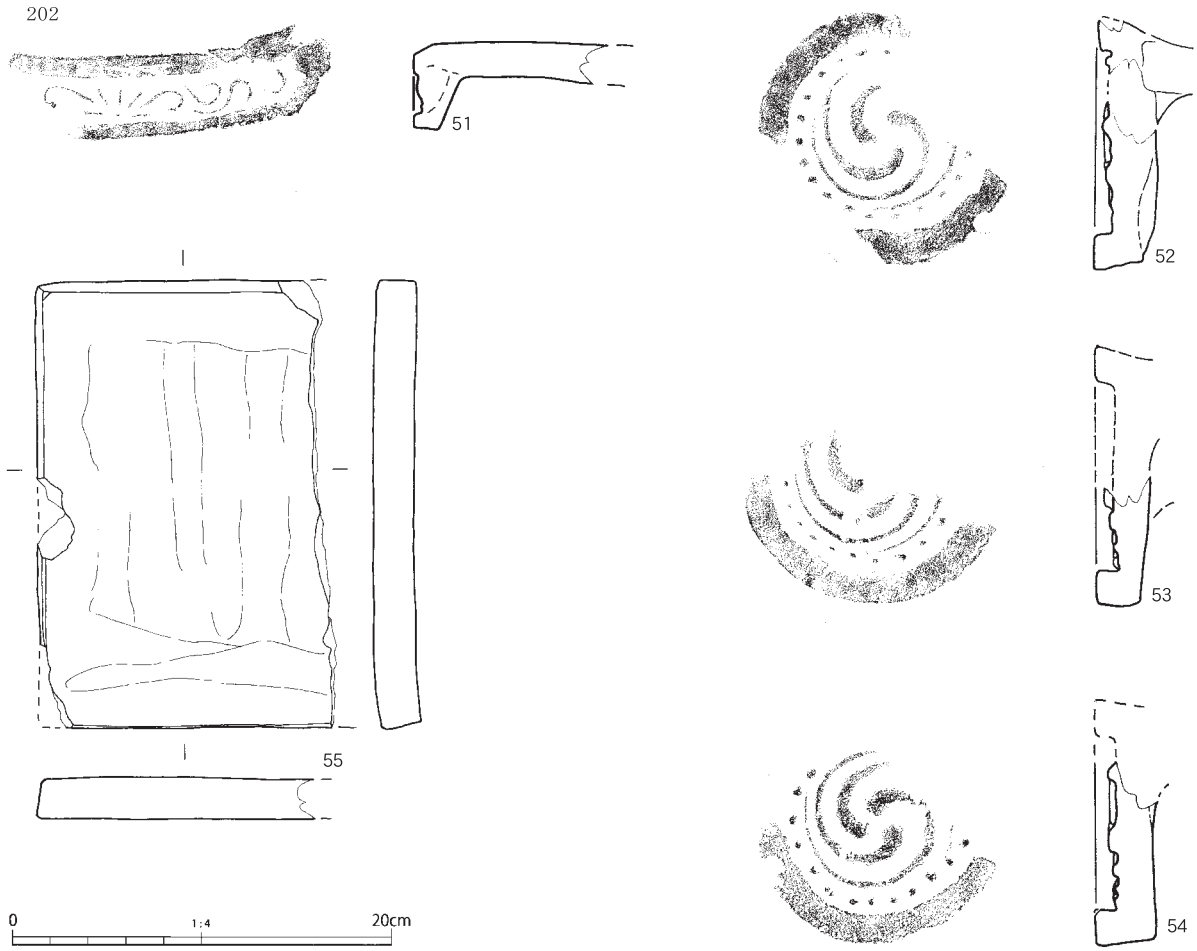


図 33　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（2）

(51) は軒平瓦で、簡略された均整唐草文様である。内区の幅は２㎝ほどと狭く、また脇区も２㎝ほどである。(52～54) はいずれも軒丸瓦当で、左巻きの三巴文である。巴の頭部はそれほど大きくなく、尾部も細く長いものである。珠文は小さく、完形品ではないため不明であるが、おそらく 23 ないし 24 個が配されているものと考えられる。瓦当径は 14.2㎝前後である。これまでの根来山内から出土している巴文の場合、通例大半が右巻きでありめずらしい例と言えよう。(55) は瓦製の磚である。半分近く欠いているものと思われ、本来は 24㎝ほどの方形のものと考えている。厚さは 2.2㎝を測る。全体に灰色を呈している。

203 暗渠出土の遺物（図 34　図版 45）

(56) は伊万里焼の染付碗である．復元口径で 11.3㎝を測る。体部外面に粗略な草花文が描かれている。呉須の発色はやや灰色味をおびる。

206 暗渠出土の遺物（図 34　図版 45）

(57) は美濃瀬戸の灰釉皿で、復元口径 10.6㎝を測る。全体に薄い草緑を呈している。底部を欠いているが、おそらく底部内面にはスタンプによる印花文が施されるもので、口縁端部は外側に開く。(58) の土師器皿は、口径 14.0㎝とやや大きいもので、口縁部は強いヨコナデにより端部が肥厚している。16 世紀中頃の皿と考えている。

207 石組溝出土の遺物（図 34　図版 45）

(59・60) はともに土師器皿である。このうち (59) の口径は 8.0㎝を測り、全体ににぶい黄橙色を呈し、口縁部は外反気味に斜め上方に立ち上がる。(60) は口径 8.5㎝とやや大きく、口縁部は丸味を帯びて斜め上方に立ち上がる。全体に橙色を呈する。

209 土坑出土の遺物（図 34　図版 45）

(61～64) までの土師器皿が出土しているが、このうち (65) は口径が 6.2㎝と小振りのもので、口径に比して器高は 1.6㎝と高く体部に指押さえの痕跡が顕著に残っている。口縁部は開き気味に情報に立ち上がり端部を垂下さすように収めている。また全体に灰白色を呈し、他の土師器皿に比べて色調が白っぽい。このタイプの皿については、15 世紀後半段階に盛行するみのと考えている。

210 石組溝出土の遺物（図 34　図版 45）

(66) は土師器の皿で復元口径 9.3㎝を測る。口縁部にはヨコナデを施しているが、それほど強くはなく、斜め上方に立ち上がったのち端部を丸く収めている。(67) は鉄砲の玉である。二匁弾よりやや小さく、重量は 11ｇである。(68) の軒丸瓦は右巻きの巴文で、巴の頭部はやや大きくなっているが尾部は細く長い。珠文は小さく密に配されている。上部が欠損しているため明確ではないが、その数はおそらく 23 ないし 25 個ほどになるものと思われる。

211 土坑出土の遺物（図 34　図版 45）

(69・70) とも土師器の皿で、このうち (69) の口径は 8.5㎝、器高は 2.0㎝を測るもので、口縁部は軽いヨコナデを施し、わずかに外反する。器壁は厚い。(70) の土師器皿は口径 9.0㎝、器高は 2.0㎝を測る。全体に明るい橙色を呈している。

217 石組遺構出土の遺物（図 34　図版 46）

（71）の土師器は小破片のため復元口径である径 18cmほどの大皿になるものと思われる。器壁は全体に厚く、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。焼成はよく固密で、黄白色ないし浅黄色色を呈している。

219 土坑出土の遺物（図 34　図版 46）

（72）の土師器皿は復元口径で 9.0cm、器高は 2.0cmを測る。体部に強いヨコナデを施し口縁端部が肥厚するタイプの皿である。全体に橙色を呈している。

223 土坑出土の遺物（図 34）

（73）の土師器皿は復元口径 12.4cmを測るやや大振りの皿で、口縁部に施されたヨコナデは強く、端部は肥厚する。体部下半から底部にかけて指頭圧痕が残る。全体に明るい橙色を呈している。

225 土坑出土の遺物（図 34　図版 46）

（74）は土師質の土器である。貼り付けの凸帯が巡り、縦方向の細かな刷毛目が認められる。また、その上から軽く指押さえを施した痕跡も認められた。器壁も 0.8cmほどと厚くかなりの大

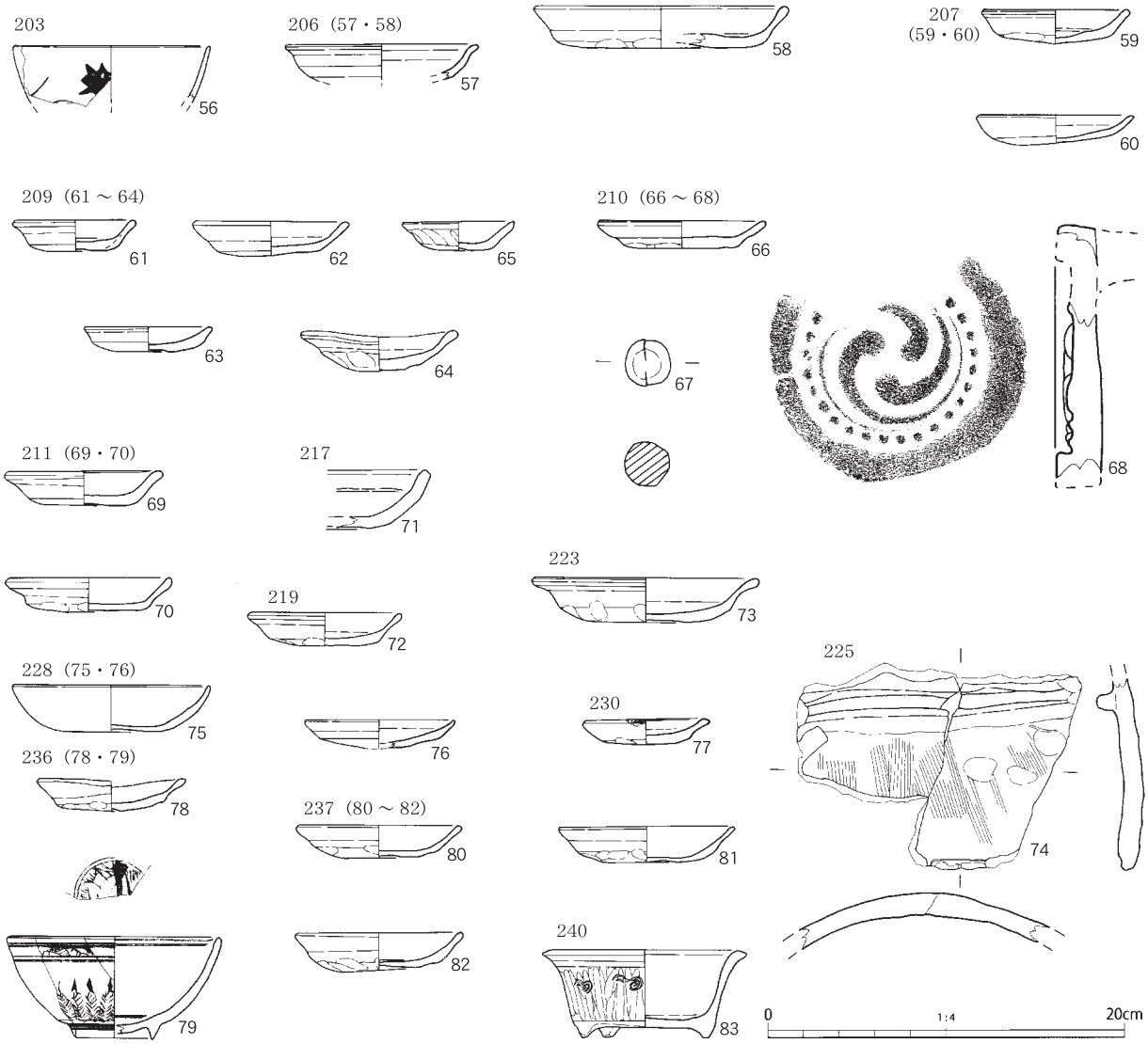


図 34　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（3）

型品となるものと思われ、おそらく鍋もしくはカマドのようなものになるものと考えているが、これまでの調査でも見かけないものであり器形はについては不明といわざるを得ない。

228 土坑出土の遺物（図 34　図版 46）

（75）の土師器皿は復元口径で 9.0cmを測る。器高は 2.6cmと比較的高く、深手の皿と言えよう。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がるもので、口縁端部はわずかに尖らせ気味に収めている。（76）は復元口径で 8.4cm、器高は 1.6cmを測る。底部からほぼそのまま斜めに立ち上がり口縁端部を細く収めている。全体に橙色を呈し、胎土には赤色斑粒を多く含む。

230 土坑出土の遺物（図 34）

（77）の土師器皿は復元口径で 6.6cm、器高は 1.4cmを測る。口縁部にヨコナデを強く施し端部が肥厚する根来山内では典型的な 16 世紀に入って盛行するタイプの皿である。

236 土坑出土の遺物（図 34　図版 46）

（78）は土師器の皿で口径 8.2cmを測る。口縁端部が強いヨコナデにより肥厚するもので、前述したように 16 世紀代の製品である。（79）は中国製の染付碗。復元口径で 11.6cm、器高は 5.7 cmを測る。口縁部下に二本の圏線を二条巡らせ体部下半に蕉葉文を描いている。呉須は全体に滲みが認められる。

236 地鎮遺構出土の遺物（図 34）

（80～82）は遺構で概述したように地鎮に伴い埋納されていた土師器皿の一群で、口径は 9 cm前後で器高は 2 cm前後を測る。口縁部にヨコナデを施しているが、端部が肥厚するほどには至っておらず、やや器高も高いことなどから 16 世紀代でも前半期に比定されるものと思われる。

236 土坑出土の遺物（図 34　図版 47）

（83）は瓦質の香炉である。口径 11.4cm、器高 4.9cmを測る。三足の付くもので、体部から口縁部にかけて緩やかに外反し端部を外側に開く。体部には縦方向の丁寧な磨きが施され、体部上半にスタンプによる渦巻文様が押されている。15 世紀代の製品である。

238 土坑出土の遺物（図 35 ）

（84～87）はいずれも土師器の皿である。このうち（85）の皿はやや歪で、最大口径 9.4cm、器高 2.4cmを測る。全体に橙色を呈し胎土には赤色斑粒を多く含んでいる。

252 土坑出土の遺物（図 35・36　図版 47・48）

（88～113）は、底部に 15～40cm大の角礫が集中して検出された一辺４ｍほどの方形の土坑から出土した一群である。このうち（88～91）は土師器の皿で（88）は口径が 9 cmを超えるものであるが他の 3 点については 8 cm前後とやや小振りである。いずれの土師器皿についても橙色を呈している。（92）は東播系の須恵質こね鉢で復元径で 25.8cmを測る。口縁端部はやや上方に摘み上げる形状を呈している。（93）は中国製の青磁碗で体部には線描による簡略化された蓮弁が描かれており、15 世紀でも後半段階の製品と思われる。（94・95）はともに白磁の皿である。体部は緩やかに外反し口縁端部は外側に開く。（96・97）は中国製の染付製品である。このうち（95）は小破片であるため詳細は不明であるが、おそらく４cmほどの小杯となるものであろう。

底部付近に二重の圏線を巡らせ体部には簡略された文様が施されている。高台部のみ釉が削り取られている。(97) は口径 20cm以上の大皿ないし盤となるもので、口縁部は外側にほぼ水平状に開く。体部外面には幅３～４㎜ほどの彫り込みを入れている。全体に薄い緑色を呈し、口縁部内外面と見込み部に粗略な文様が施されている。(98～100) はいずれも天目茶碗である。このうち(98・99)の２点については中国製で前者は復元口径で 11.6cmを測る。(100)の天目茶碗は国産である可能性が高い。高台径が２cmほどと小さく、高さも有しないことから小振りの茶碗であったものと考えている。

(101・102) はともに備前焼の擂鉢である。(101) は復元径で 32cmを測る。擦目の単位は７本で、底面に対して垂直に施された後斜め方向にも入れている。(102) も含めて口縁部外面に

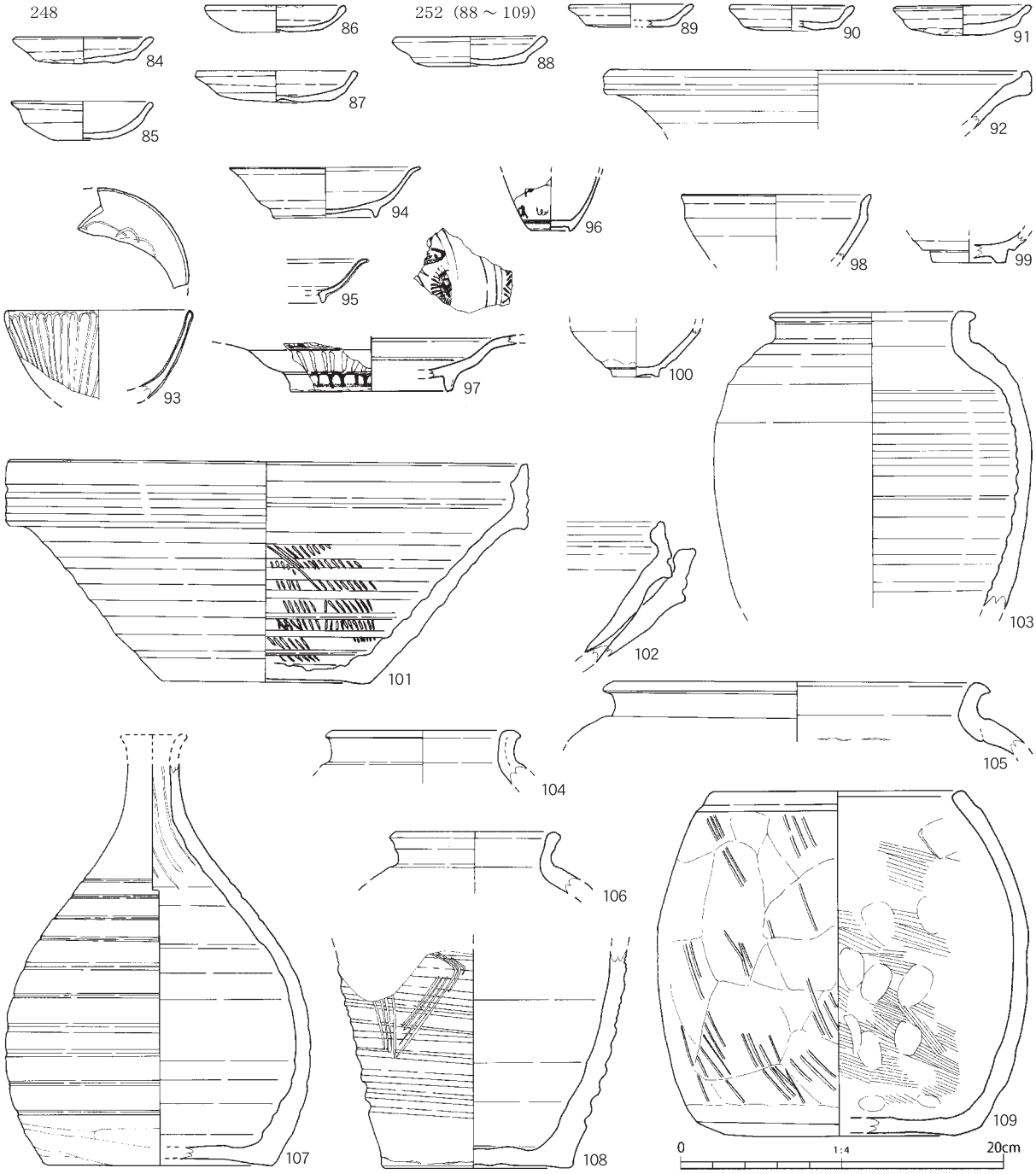


図 35　１次２区　遺構出土遺物実測図（４）

は３本の凹線が巡っており、16 世紀中ごろから後半にかけての製品に位置づけられる。(103～106) は備前焼の壺である。このうち (103) の壺は口径 12.0cmを測り、頸部は短く立ち上がったのち口縁部を水平状に外側に拡張させ端部は丸く収めている。胴部には文様は入らないようで全体に灰色を呈している。そのほかの壺についても概ね 16 世紀の中頃から後半にかけてのものと考えている。

(107) は備前焼の徳利で口縁部上半を欠いているが、おそらくもう少し立ち上がったのちわず

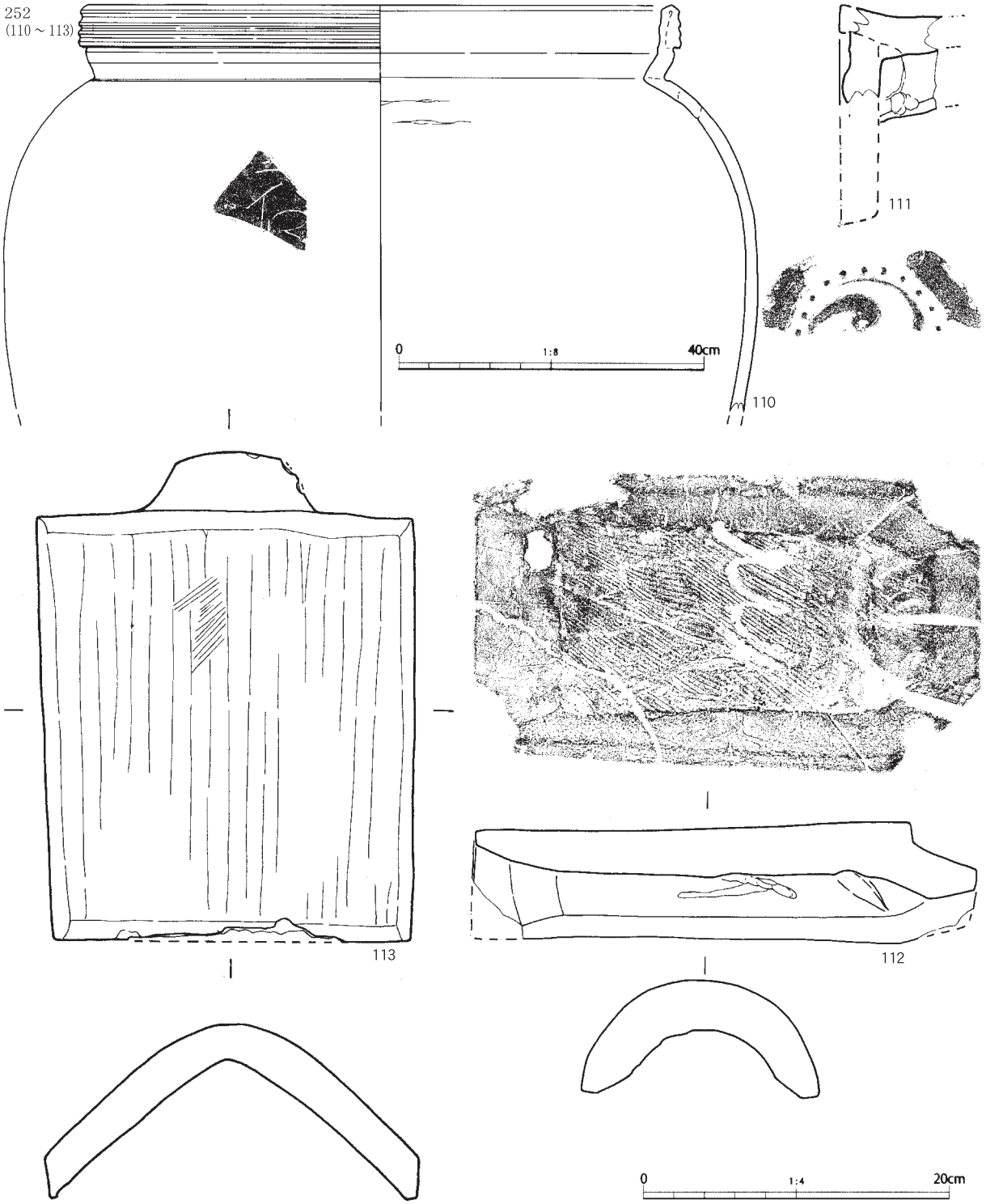


図 36　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（5）

かに外反し端部を丸く収めるタイプと思われる。全体に赤褐色を呈し一部体部上半に黄色の胡麻釉が被さっている。(108) は備前焼の壺、体部上半を欠いているが前掲の (106) と同一個体の可能性もある。体部に文様というよりはヘラ描き状の窯印のようなものが入るが、詳細については不明である。(109) は土師質の壺状の焼き物である。口径 15.8cm、器高 21.3cmを測る。胴部に最大径がくる丸まった形状を呈するもので、全体に器壁は 1 cm近くと厚い。外部には斜め縦方向の粗いタタキが内面に横方向の刷毛目調整が施されている。口縁部のみ丁寧な磨きが施され、わずかに窪んでいる。おそらく蓋を伴い火消壺などかと考えているが、根来寺での出土例はなく用途、生産地については不明である。

(110) は備前焼の大甕である。口径 76.4cmを測る。肩部に容量単位を表す「石」の字がヘラにより刻されている。口縁部の大きさから推して三石入りになるものと思われる。口縁部には 3 本

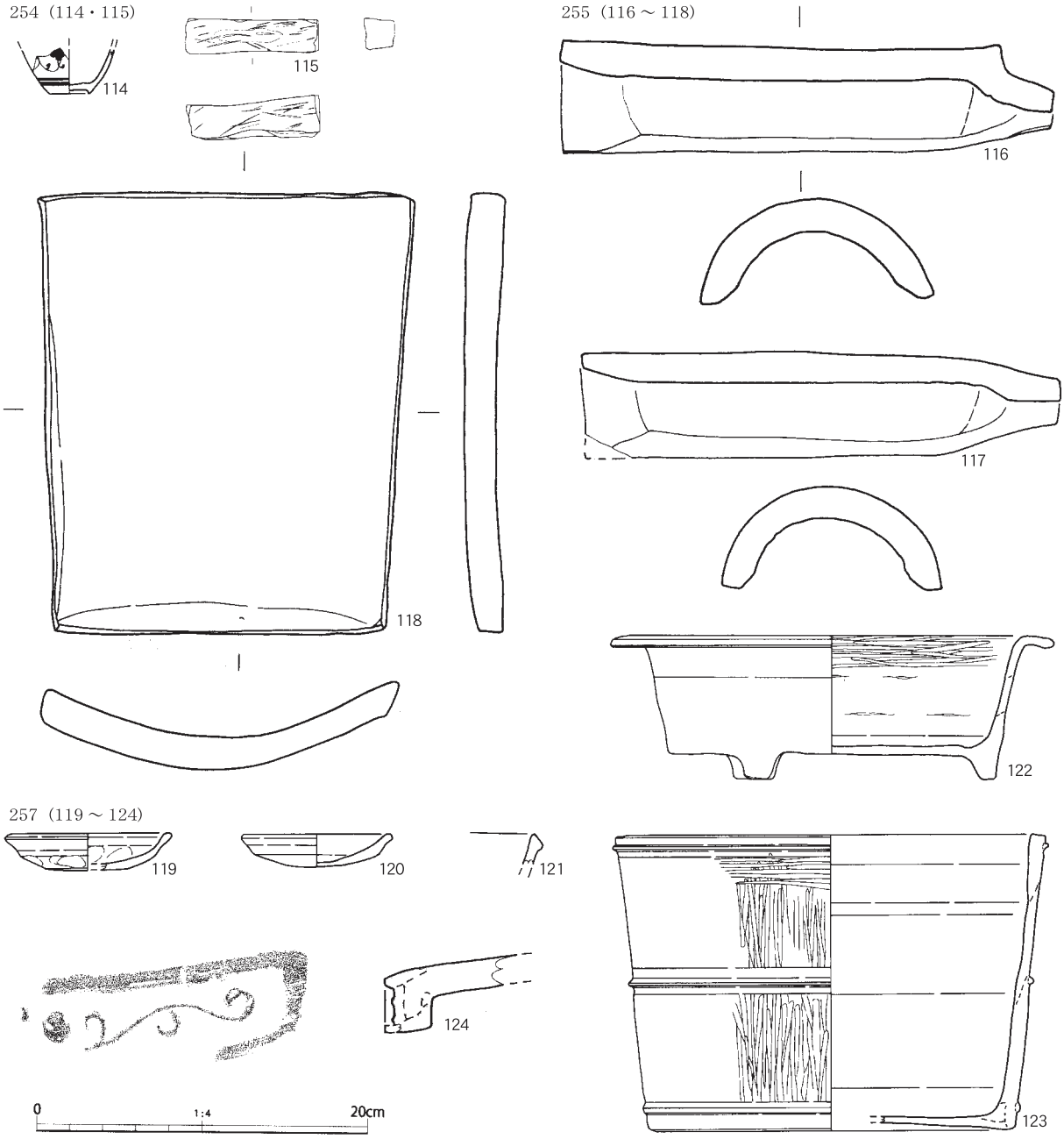


図 37　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（6）

の凹線が巡るもので 16 世紀後半段階の製品である。(111) の軒丸瓦は左巻きの巴文で外区には小さな珠文が配される。(112) の丸瓦は長さ 32.8㎝、幅 15.7㎝を測る。焼成は良好で内外面とも灰白色を呈する。(113) は衾瓦で長さ 31.6㎝、幅 24.5㎝を測る。胎土に 2〜3㎜大の黒色粒を含む。全体に灰色を呈し焼成も良好である。

254 土坑出土の遺物（図 37　図版 48）

(114) は中国製の染付の杯である。外面底部付近に二条の圏線を巡らせ体部には簡略した草花文を描いている。畳み付け部のみ釉を削り取っている。(115) は砥石である。粘板岩系のものでかなり使っていた使用痕が認められる。長さ 8 ㎝、幅 2.5㎝、重量は 68.6 g である。

255 土坑出土の遺物（図 37　図版 49）

(116・117) は丸瓦でいずれも長さ 29.6㎝を測る。幅は前者が 14.1㎝、後者が 13.4㎝を測る。ともに焼成は良好で全体に灰色を呈している。(118) は平瓦で長さ 26.5㎝、厚さ 2.3㎝を測る。

257 土坑出土の遺物（図 37　図版 49）

(119・120) はともに土師器の皿で、前者は口縁部のヨコナデが強く端部が肥厚するタイプのもの、後者はヨコナデを施すが端部は丸く収め底部の器壁が薄くなっている。ともに 16 世紀代のものである。(121) は瓦質の製品で、擂鉢ないしはこね鉢となるものであろう。口縁部は灰色、体部は灰白色を呈する。(122) も瓦質の製品で口径 26.2㎝、器高 8.6㎝を測る。おそらく火舎として使われていたものと考えている。 3 足が付き斜め上方にのびた体部から口縁は垂直気味に折れ曲がって開く。内面の口縁部下に丁寧なミガキ調整痕が認められた。全体に灰色ないし灰白色を呈するものである。(123) も瓦質の土器で火鉢として使用されていたものであろう。口径 24.2㎝、器高 17.7㎝を測る。口縁部下と体部中位、底部付近にはタガ状の凸帯が巡らされている。体部には丁寧な縦方向のミガキが施され、口縁部下には横方向にミガキが入っている。15 世紀代の製品であろう。(124) の軒丸瓦は中心飾りに簡略化した宝珠を配した均整唐草文様である。16 世紀中ごろから後半にかけてのものと考えている。

258 石組遺構出土の遺物（図 38　図版 49・50）

(125〜136) は、 2-1 区の南側で検出した幅 3mほどの長方形状のプランの底部に 15〜30㎝大の石が集中して敷かれていた遺構から出土した一群である。

(125) は中国製の青磁碗である。底部内面中心部に「福」の字を配しその周囲を粗略な文様で囲んだスタンプ文が押されている。底部断面は 1 ㎝ほどと厚い。15 世紀代と考えられている製品である。(126) も中国製の青磁碗である。体部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる。

(127) は中国製の青磁の皿ないし盤となるものである。外面底部近くに幅 3 ㎜前後の彫り込みを入れている。(128) は中国製の染付碗で内面底部がやや窪み、高台は断面三角形を呈し、畳み付け部の釉が削り取られている。(129) は国産の天目茶碗で、口径 9.0㎝を測る。胎土は黄白色を呈し焼成はやや甘い。内外面とも褐色を呈する。(130) は美濃瀬戸の製品と考えられる皿である。復元口径で 10.6㎝を測る。(131) は瀬戸の瓶である。外面はオリーブ黒色を呈するもので、肩部に 5 条単位の櫛描き文様が巡り、肩部上位にはスタンプによる花文が押印されてい

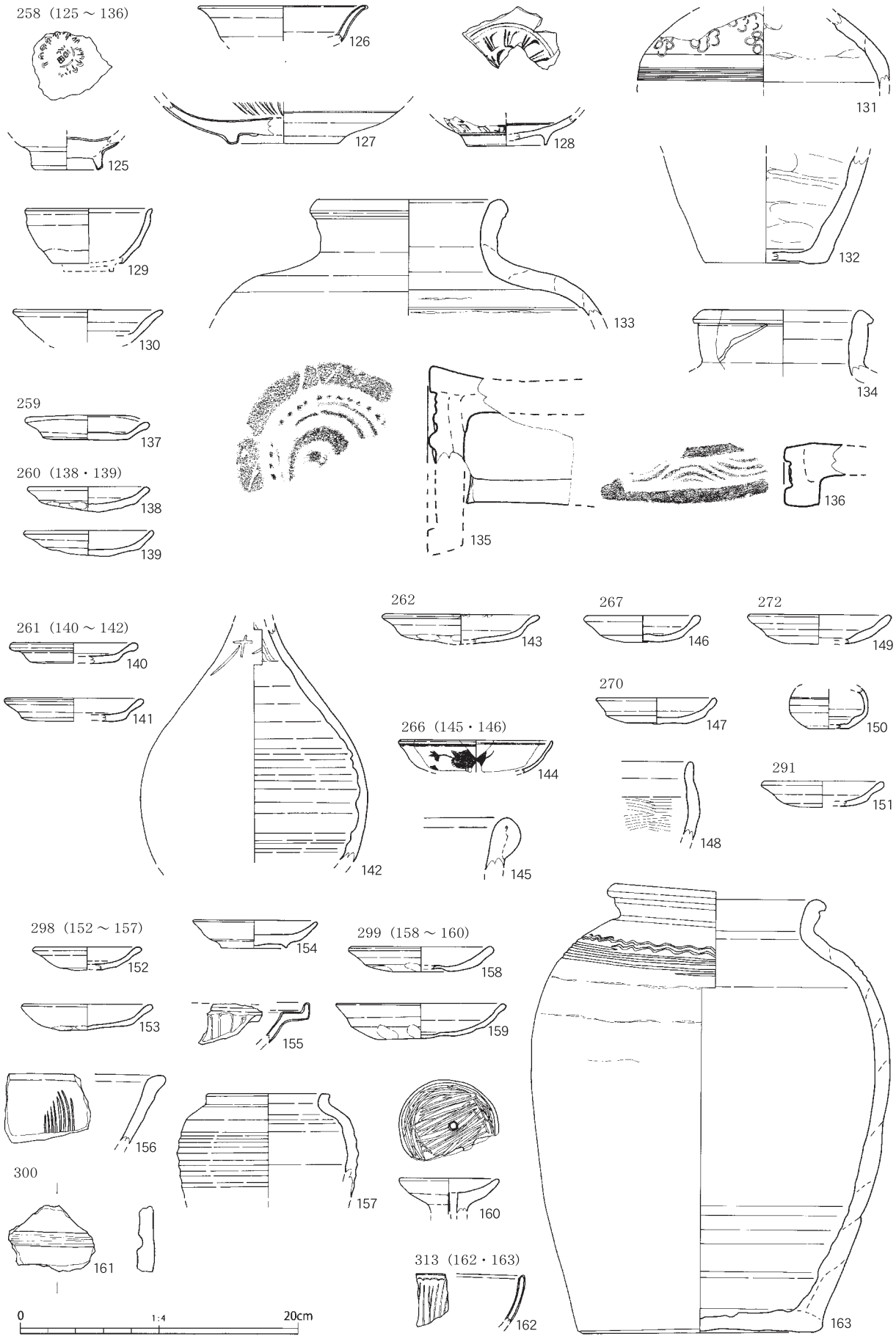


図 38　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（7）

る。(132) も瀬戸の瓶と考えられるもので、にぶい褐色の地肌に黒いオリーブ色の釉が筋状に何本も流れている。接合関係は認められなかったが、前掲の (132) と同一個体の可能性も考えられよう。

(133) は備前焼の壺で口径 13.2㎝を測る。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、端部を丸く収めている。全体に褐灰色を呈する。(134) も同じく備前焼の壺で復元口径は 11.4㎝を測るものである。頸部はほぼ垂直に立ち上がり口縁端部を外側に折り曲げる。灰赤色を呈している。前掲の (133) の壺も含めて 16 世紀中頃～後半段階の製品と考えて大過ないものと判断している。

(135) は左巻きの巴文を配した軒丸瓦である。外区の珠文は径 3 ㎜ほどと小さい。半分以上欠損しているため総数については不明だが 30 個以上にはなるものと思われる。(136) の軒平瓦瓦当は波状文を配したもので、根来山内では一定量出土するタイプである。15 世紀の後半段階から出始めるようであるが、16 世紀に入って盛行する傾向が認められる。

259 土坑出土の遺物（図 38）

(137) の土師器皿は口径 8.8㎝を測るもので、口縁部にヨコナデを施すが端部が肥厚するには至っていない。底部も厚くやや肉厚感のある皿である。全体に橙色を呈している。

260 土坑出土の遺物（図 38　図版 50）

(138・139) の土師器皿はともに底部が平らではなく、体部に向けて上方に立ち上がりながら開き、口縁部は弱いヨコナデを施して端部を丸く収めている。ともに色調は橙色を呈するものである。

261 土坑出土の遺物（図 38　図版 50）

(140・141) の土師器皿は底部が肉厚で平らである。口縁部には強いヨコナデが施されており端部が肥厚する。16 世紀代の根来山内では通有タイプの皿と言えよう。両者とも全体に橙色を呈している。(142) は備前焼の船徳利となるものである。口縁部及び底部を欠いているが、口縁部については径を細めつつ、もう少し立ち上がったのちわずかに開き気味に収めるものとなるものであろう。また、底部についてはおそらく 13㎝前後のやや大きなものになると考えている。

262 石組井戸出土の遺物（図 38）

2-1 区南東壁際で検出した内径 0.8m を測る石組井戸から出土している遺物である。(143) の土師器皿は口径 11.0㎝、器高 2.3㎝を測るもので口縁部のヨコナデが強く端部がやや肥厚する。底部に指押さえの指圧痕が顕著に見られる。

266 石組井戸出土の遺物（図 38　図版 50）

2-1 区北西壁際で検出した掘方径 1.7～2.2m の石組井戸から出土した遺物である。(144) は中国製の染付皿である。復元口径 11.0㎝を測り口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。体部外面には粗略な草花文が描かれている。(145) は口縁端部のみの出土であり、詳細については不明であるが備前焼の甕になるものと思われる。折り曲げた端部はやや扁平な宝珠形を呈しており 15 世紀の後半段階から 16 世紀でも初めの方に位置づけられる製品かと考えている。内外面ともにぶい黄褐色を呈するものである。

267 土坑出土の遺物（図 38　図版 51）

（146）の土師器皿は復元口径 8.0cm、器高 1.9cmを測るものである。口縁部に施されたヨコナデは強く端部が肥厚している。全体に橙色を呈している。

270 土坑出土の遺物（図 38　図版 51）

（147）の土師器皿は復元口径 8.4cm、器高 2.0cmを測るものである。口縁部に施されたヨコナデは強く体部との境が明瞭になっている。全体に橙色を呈している。（148）は土師質の製品であるが、小破片のため全体の形状については不明と言わざるを得ない。内面に横方向の刷毛目による調整痕が残る。外面はにぶい黄橙色を呈するもので胎土には大粒の砂粒が含まれる。

272 土坑出土の遺物（図 38　図版 51）

（149）の土師器皿はやや歪で口径は 8.5～10.0cmを測る。全体に器壁が肉厚で体部は斜め上方に開き気味に立ち上がり口縁端部を丸く収めている。色調は橙色を呈している。（150）は美濃瀬戸の製品と考えられる小壺である。口縁部を欠いているが肩部から内側に大きく内湾し、短い頸部がそのまま口縁部になる形状かと推測される。体部中位に細い二本の沈線が巡らされている。外面の釉は黒褐色を呈し底部付近と外底面のみ剥ぎ取っている。

291 石組井戸出土の遺物（図 38 ）

２-１区のほぼ中央南東壁際で検出した石組内径 1.0～1.2mを測る井戸から出土している遺物である。（151）の土師器皿は復元口径 8.6cm、器高は 1.8cmを測る。口縁部に施されたヨコナデ

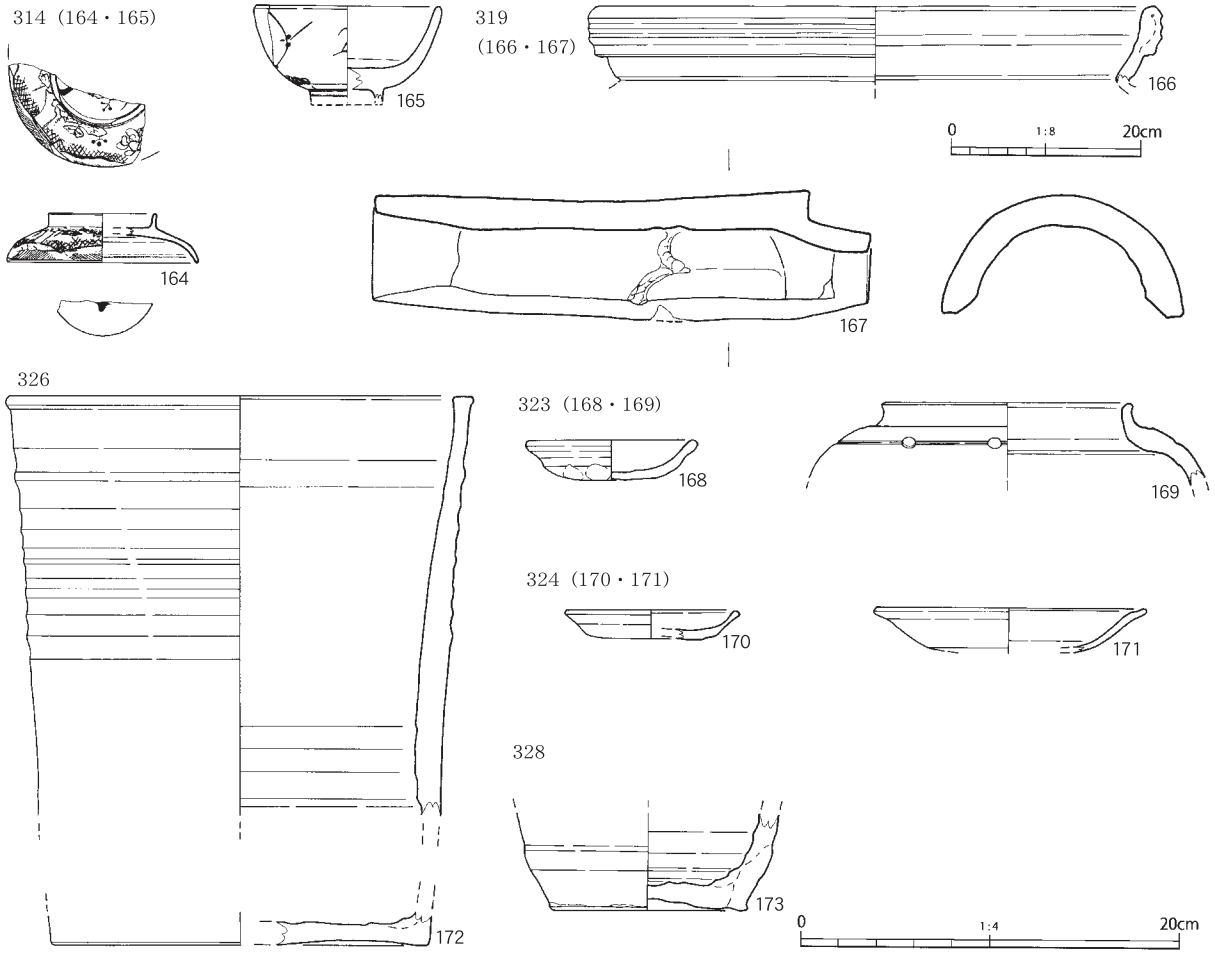


図 39　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（8）

がきつく体部との境目に段を生じている。

298 土坑出土の遺物（図 38　図版 51）

（152・153）はともに土師器皿である。前者は復元口径 7.6㎝、後者はやや大きく口径 9.5㎝を測るものである。いずれも口縁部に施されたヨコナデが強く端部が肥厚するもので、前者は橙色、後者は浅黄橙色を呈するものである。（154）は美濃瀬戸の皿と考えられるもので復元口径 8.7㎝、器高 2.0㎝を測る。体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がり端部を丸く収めている。灰白色の釉が体部下半まで掛けられている。（155）は中国製の青磁である。小破片のため詳細については不明であるが口径 25㎝前後の盤になるものと思われる。口縁部は水平に張出し端部を上方に摘み上げた形状で体部内面には丸鑿状の工具により幅３～４㎜ほどの溝状の彫が入れられている。釉は厚く施され全体に薄い草色を呈している。

（156）は瓦質の擂鉢である。口縁部をやや外側に引き出すようにして丸く収めている。おそらく口径は 25㎝以上になるものと思われるが、小破片のため不明である。内面には８本一単位の摺り目が口縁部近くから施されている。全体に灰白色を呈している。（157）は備前焼の壺である。復元口径は 8.4㎝を測るもので、頸部はやや外反気味に短く立ち上がり口縁端部は水平な面を成している。全体に灰白色を呈している。

299 土坑出土の遺物（図 38　図版 51・52）

（158・159）は土師器の皿である。このうち（158）の復元口径は 10.0㎝で体部から口縁部にかけての器壁が厚くヨコナデは弱い。（159）は口径 12.0㎝とやや大きいもので全体に器壁が薄く、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がったのち口縁端部はわずかに外反する。体部下半に指頭圧痕が残る。（160）は瓦質の燭台の中心部のパーツと思われるものである。内面には丁寧なミガキが施されており、全体に灰色を呈する。

300 土坑出土の遺物（図 38　図版 52）

（161）は陶器の破片であるが、鑿状工具の砥石として使用されていた痕跡の残るものである。根来山内においては砥石の出土例も多いが、このように陶器片を転用して用いられる例もこれまで何点か確認されている。

313 土坑出土の遺物（図 38　図版 52）

（162）は中国製の青磁碗である。体部外面には線描書きによる簡略化された蓮弁模様が施されている。（163）は備前焼の壺である。口径 14.5㎝、器高 32.5㎝を測る。肩部に粗い筋状と波状の文様が施されている。頸部はやや外反気味に立ち上がり口縁端部を外側に丸めるようにして引き出している。外面は肩部に胡麻釉が掛り一部赤みを帯びた灰色を呈している。

314 石垣出土の遺物（図 39　図版 52）

２-２区の北側近くで検出した石垣の覆土から出土した遺物である。（164）は伊万里の染付の蓋で口径 10.0㎝を測る。体部外面には風景が描かれている。（165）も同じく伊万里の製品で、くらわんか茶碗と称される染付碗である。体部には簡略化された草花文が配され、高台部上位には二条の圏線が巡る。18 世紀中ごろに比定される碗と言えよう。

329（174～182）

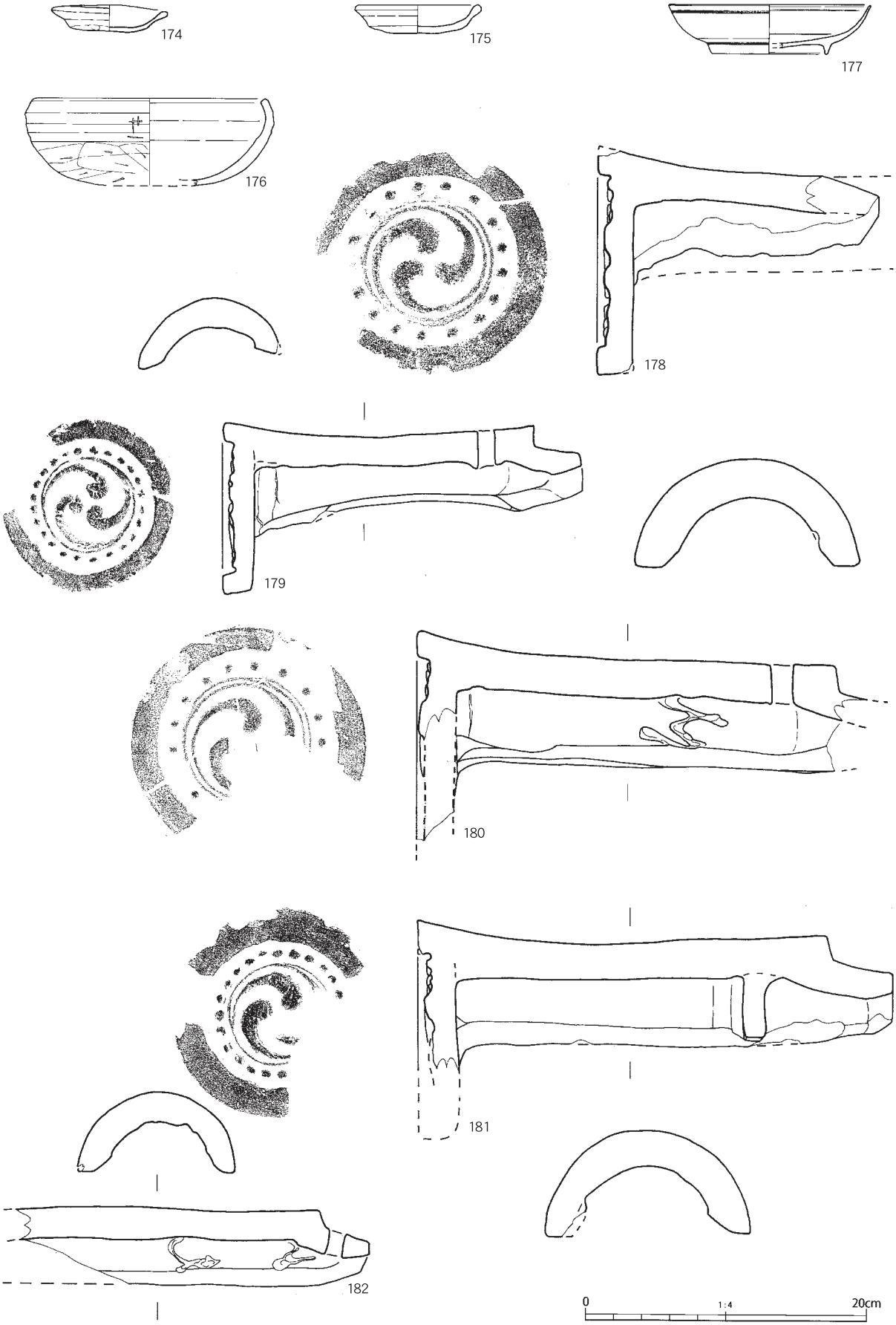


図 40　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（9）

329（183～187）

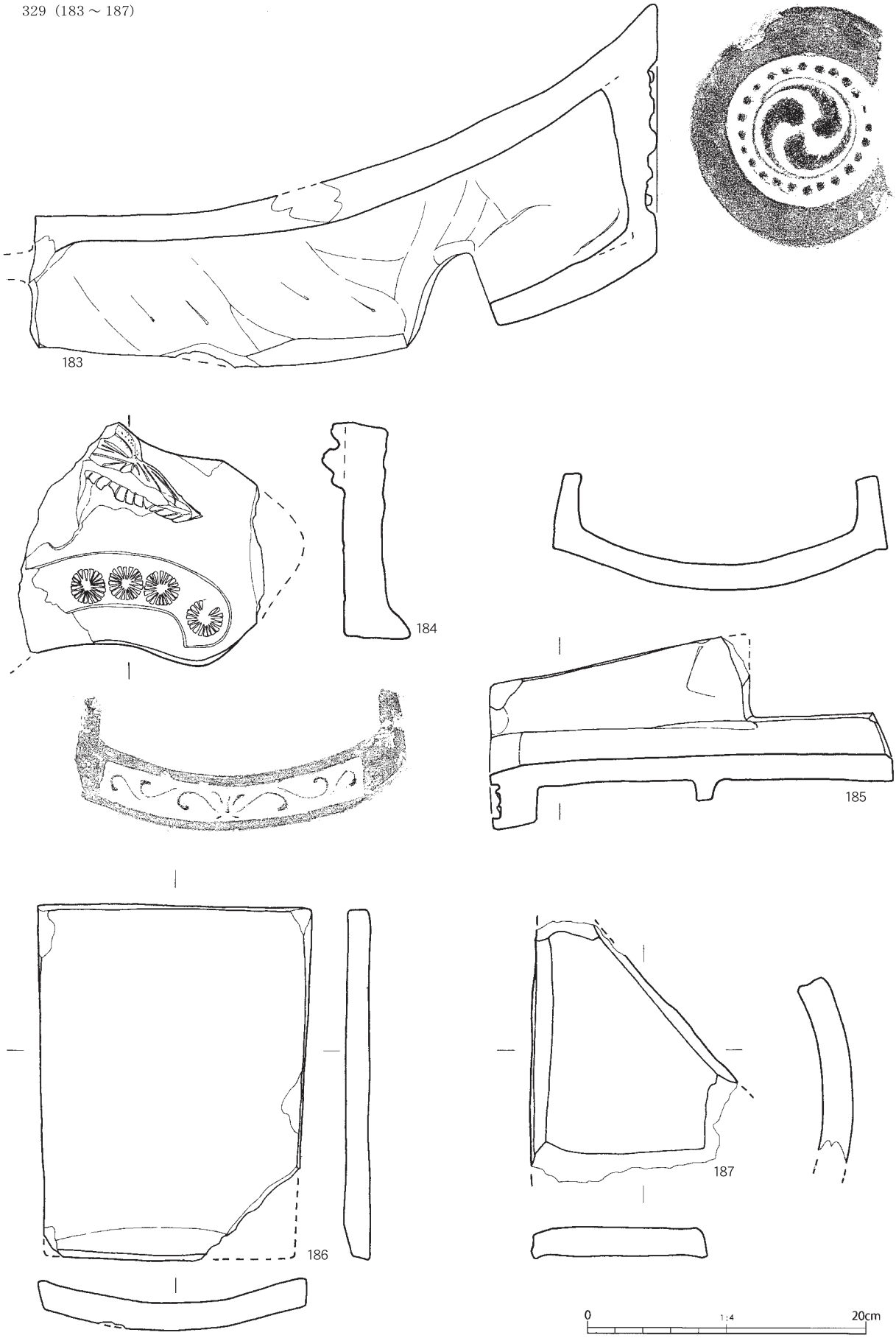


図41　1次2区　遺構出土遺物実測図（10）

319 土坑出土の遺物（図 39）

（166）は備前焼の大甕の口縁部である。復元口径で 59.2㎝を測る。「く」の字状にわずかに内傾しつつ開く口縁部は 3 本の凹線の巡るもので前掲の（110）と同じタイプであり、16 世紀後半段階の製品と考えている。（167）丸瓦で長さ 25.2㎝、幅 13.2㎝を測る。全体に灰色を呈している。

323 石垣出土の遺物（図 39　図版 52）

2-1 区の北端近くで検出された延長 15.2mの南北方向の石垣の覆土から出土した遺物である。（168）は土師器皿で口径 8.6㎝を測る。口縁部に強いヨコナデが施されており、端部が肥厚する。全体に橙色を呈している。（169）は備前の広口壺である。復元口径は 13.2㎝を測る。頸部はやや内傾気味に短く立ち上がり、口縁部端部はわずかに外反させている。外面肩部に幅の狭い沈線状の凹線が巡る。全体に赤茶色を呈し、肩部には自然釉が被っている。16 世紀中頃の製品と考えられるものである。

324 石組遺構出土の遺物（図 39）

2-1 区の北側で検出された長方形状の石組遺構から出土した遺物である。（170）の土師器皿は復元口径 9.0㎝を測り、口縁部に強いヨコナデを施すタイプの皿である。（171）の土師器皿は復元口径 14.2㎝と大きく、体部から口縁部にかけて外側に大きく開くタイプの皿である。このタイプのものは、15 世紀後半から 16 世紀中頃まで根来山内で一定量出土しているが、主流の土師器皿になるには至っていない。

326 土坑出土の遺物（図 39　図版 52）

（172）は復元口径 24.6㎝、器高 33.8㎝を測る胴長の焼き締め陶器で

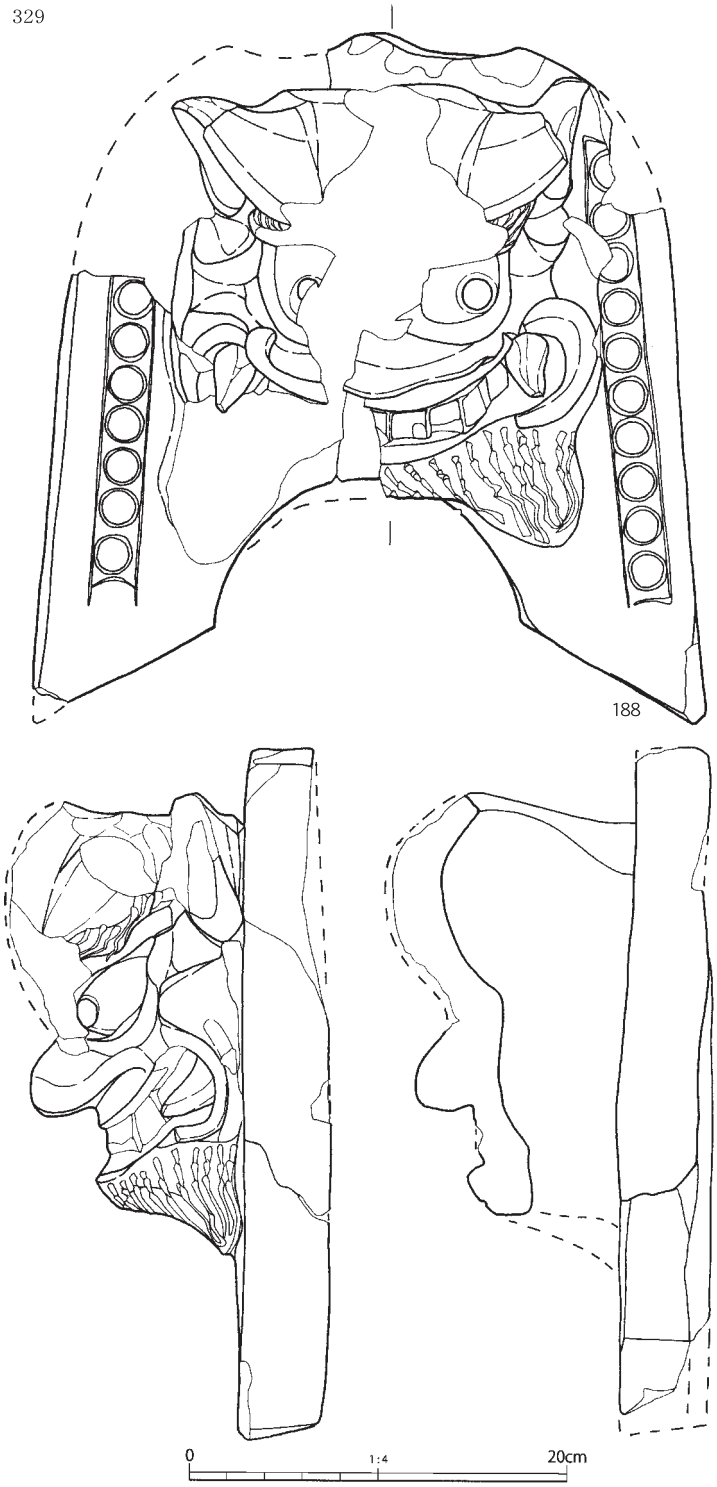


図 42　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（11）

ある。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は水平な面をもつ。内面は橙色、外面はにぶい赤褐色を呈している。16 世紀代の製品と考えているが産地も含めて用途などは不明である。

328 石組溝出土の遺物（図 39　図版 53）

２-１区の中央北側よりの箇所で検出した延長 9.8m、深さ 35cm前後の石組溝から出土した遺物である。(173) は備前焼の壺底部で底径 10cmほどを測る。外面は灰色を呈するが内面は暗灰黄色となっている。おそらく 30cm前後の器高を有する短な口縁を壺なるものと思われる。

329 石組溝出土の遺物（図 40～45　図版 53～56）

(174～213) の遺物群は、２-１区の中央北側よりの箇所で検出した延長 12.1mの石組溝から出土したものである。この溝については、規模も大きく幹線の機能を担っていた溝と思われるものであったが、後世にかなり削平を受けた模様で、またその折に溝内に多量の遺物が廃棄されたと考えられ状況であった。埋土には五輪塔・宝篋印塔・板碑などの石造物や、鬼瓦・軒先瓦及び丸平瓦の瓦類が大量に含まれており、土器類は少量であった。以下、これらの遺物について詳述する。

(174・175) はいずれも土師器の皿で口縁部に強いヨコナデを施し端部が肥厚するタイプの皿で、再三述べてきたように根来山内においては 16 世紀後半の天正の兵火時に盛行するものである。(176) は備前焼の鉢である。復元口径 16.4cm、器高 6.2cmを測るもので、内湾気味に立ち上がった体部は内側に折れ曲がって口縁に至る。体部中位に窯印と思われるヘラ描きによる記号が入り、体部下半から底部にかけては粗い削り調整の痕跡が認められる。(177) は中国製の染付皿である。復元口径 14.2cm、器高 3.5cmを測る。断面三角形の高台を有し、体部から口縁部にかけて丸く立ち上がるもので外面口縁部下と底部付近に圏線が巡らされており、それ以外の装飾は見られない。

(178～181) はいずれも軒丸瓦瓦当である。文様はすべて左巻きの巴文で、巴頭部は肥大しておらずわずかに丸みを帯びる程度で、尾部は細くお互いが接するほど長くなっている。大きさは (179) がわずかに小振りで瓦当部の径は 11.0cmであるが他のものは 17cm前後を測るものである。外区の珠文に着目すれば、小振りの (179) は比較的多く 24 個を数えるが (178) は 17 個と少ない。全長のわかるものでは (181) が 33.5cm、幅 14.8cmを測る。(182) は軒丸瓦で、内面に二条の縄目痕が残っている。内面は灰白色、外面は灰色を呈している。

(183) は隅棟の先端部に使用される鳥衾である。周縁部の幅が広く最大で 3.9cmを測る。中心飾りは左巻きの巴文を配している。巴頭部はやや発達し、わずかに肥大化する傾向が認められるが尾部は細く長く伸びている。

(184) は鬼瓦の一部で、正面右側の下部あたりの部位と考えられるものである。胎土には砂粒が目立ち内外面とも灰色ないし灰白色を呈している。小破片のため全体像は不明であるが、他の共伴する遺物から推して 16 世紀代の製品である可能性が高い。

(185) は鞍瓦と称されているもので、瓦の両サイドがやや内傾気味に立ち上がる。瓦当部の文様は単純化された均整唐草文である。15 世紀中ごろから使われはじめるものであるが、近世

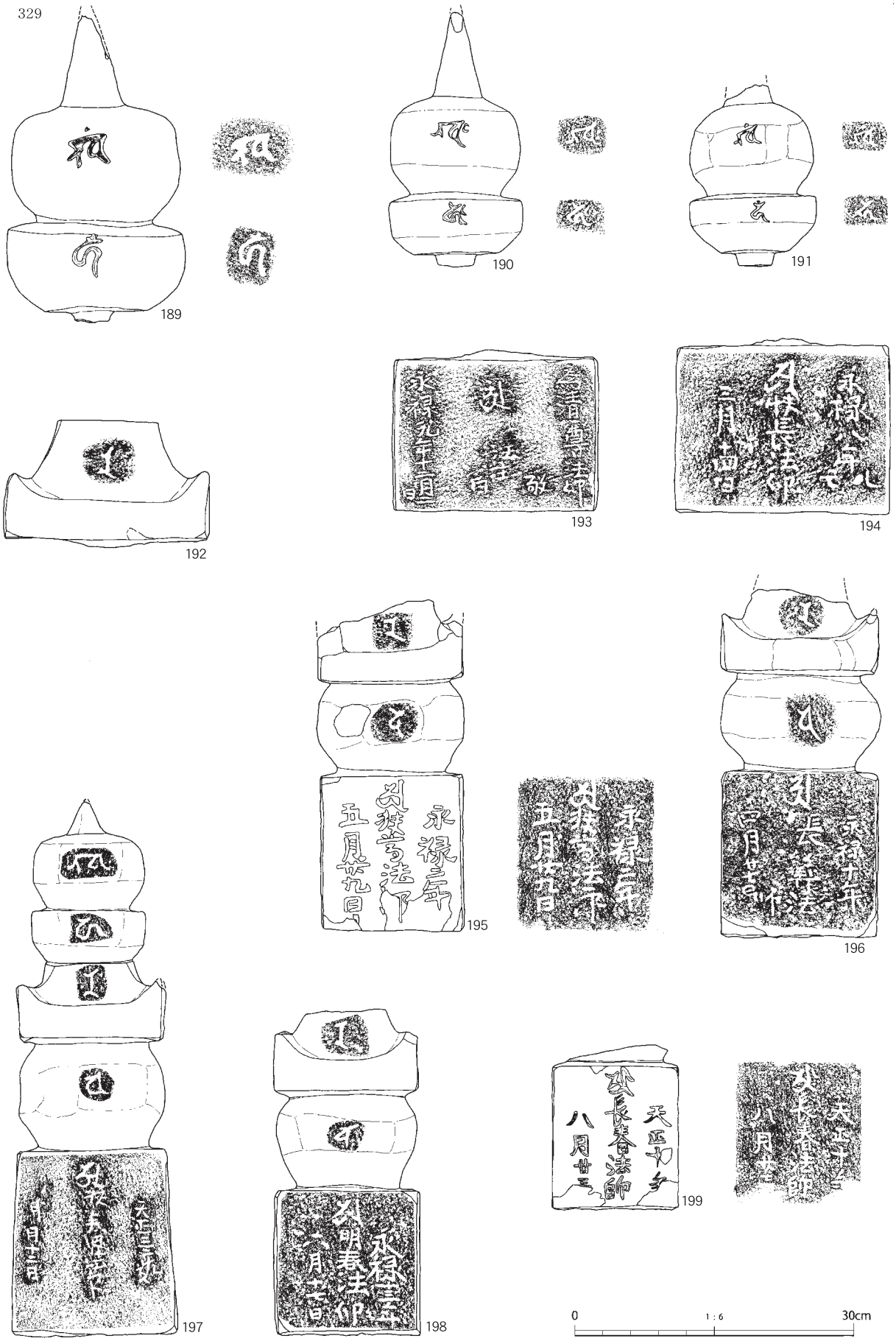


図 43　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（12）

には見なくなる瓦と言ってよく、本例についても16世紀代のものと判断している。

（186）は平瓦で長辺25.5㎝、短辺19.5㎝を測る。全体に灰色を呈する。（187）は切隅に用いられる平瓦と考えられるもので、全体に灰色を呈している。

（188）は棟瓦の端部に付けられた鬼面の鬼瓦である。角も有しており、目・口・鼻など顔の造作はリアルで立体感に富んだものと言える。長さは48.0㎝、最大幅で32.5㎝を測り、焼成は堅密で全体にやや濃い灰色を呈するものである。

石造遺物には五輪塔、宝篋印塔、板碑などがある。このうちもっとも点数が多いのが（189～206）の五輪塔である。このうち（189～191）は五輪塔の空・風輪部が遺存しているもので、このうち宝珠の頂部大半が欠損していない（189・190）の2点でみると、宝珠頂部は長く尖っている。残存部の大きさから推して、全長は（189）で70㎝前後、他の2個体については65㎝程のものになるものと思われる。正面には梵字の種子が刻まれている。いずれも材質は和泉砂岩である。なお、このうち（189）の種子部には朱・金泥が遺存していた。また他の2個体にはわずかではあるが金泥を確認している。

（193・194）は地輪部で、前者は幅21.6㎝、高さ16.3㎝を測るもので正面右側に永禄元年（1558）銘が刻まれている。後者は幅23.6㎝、高さ19.1㎝を測るもので正面右側に永禄八年（1566）銘が刻まれている。両者とも地輪は幅に比べて高さは低いものと言えよう。いずれも和泉砂岩製である。（195・196・198）の3個体はいずれも火・水・地輪部が遺存しているものである。このうち（195）の地輪は幅15.0㎝、高さ17.2㎝を測るもので正面左側に永禄二年（1559）銘が刻まれており、種子の一部に朱の痕跡が認められた。（196）の地輪は幅17.0㎝、高さ18.2㎝を測るもので正面右側に永禄十年（1568）銘が刻まれている。（198）の地輪は幅15.2㎝、高さ15.8㎝を測るもので正面右側に永禄十三年（1571）銘が刻まれている。この五輪塔にも朱が遺存していた。

（197）はほぼ完形の五輪塔で、総高58.5㎝を測る。各輪に種子を刻むほか地輪正面右側に天正三年（1575）銘が刻まれている。地輪の幅は15.2㎝、高さ15.8㎝を測るものである。（200～201）は宝珠頂部がわずかに欠損しているが、ほぼ総高がわかる資料と言える。このうち（200）は総高48㎝ほどで、地輪の幅は13.7㎝、高さ14.5㎝を測るものである。十月十五日と月日は刻まれているが年号については不明である。（201）の五輪塔も総高は48㎝ほどである。地輪の幅は13.5㎝、高さ14.7㎝を測る。地輪正面右側に天正五年（1577）銘が刻まれている。（202）はわずかに小振りで欠いている頂部を補っても総高は45㎝ほどと思われる。地輪の幅は11.9㎝、高さ14.0㎝を測る。地輪正面右側に天文十七年（1549）銘が刻まれている。

（203～205）は火・水・地輪部が遺存しているものである。このうち（203）の地輪は幅12.0㎝、高さ14.0㎝を測るもので正面右側に「天正十」まで刻まれているのを確認できたが、その下は剥離しており不明である。仮に天正十年としたら1582年ということになろう。（204）地輪の幅は11.6㎝、高さ13.1㎝を測る。地輪中央部に「長泉法師」と名のみ刻まれ年号などは記されていない。（205）の地輪は幅12.8㎝、高さ14.7㎝を測るもので正面右側に永禄元年（1558）と刻まれているのを確認できた。（206）はやや小振りの五輪塔で遺存部から推して総高は35㎝未満

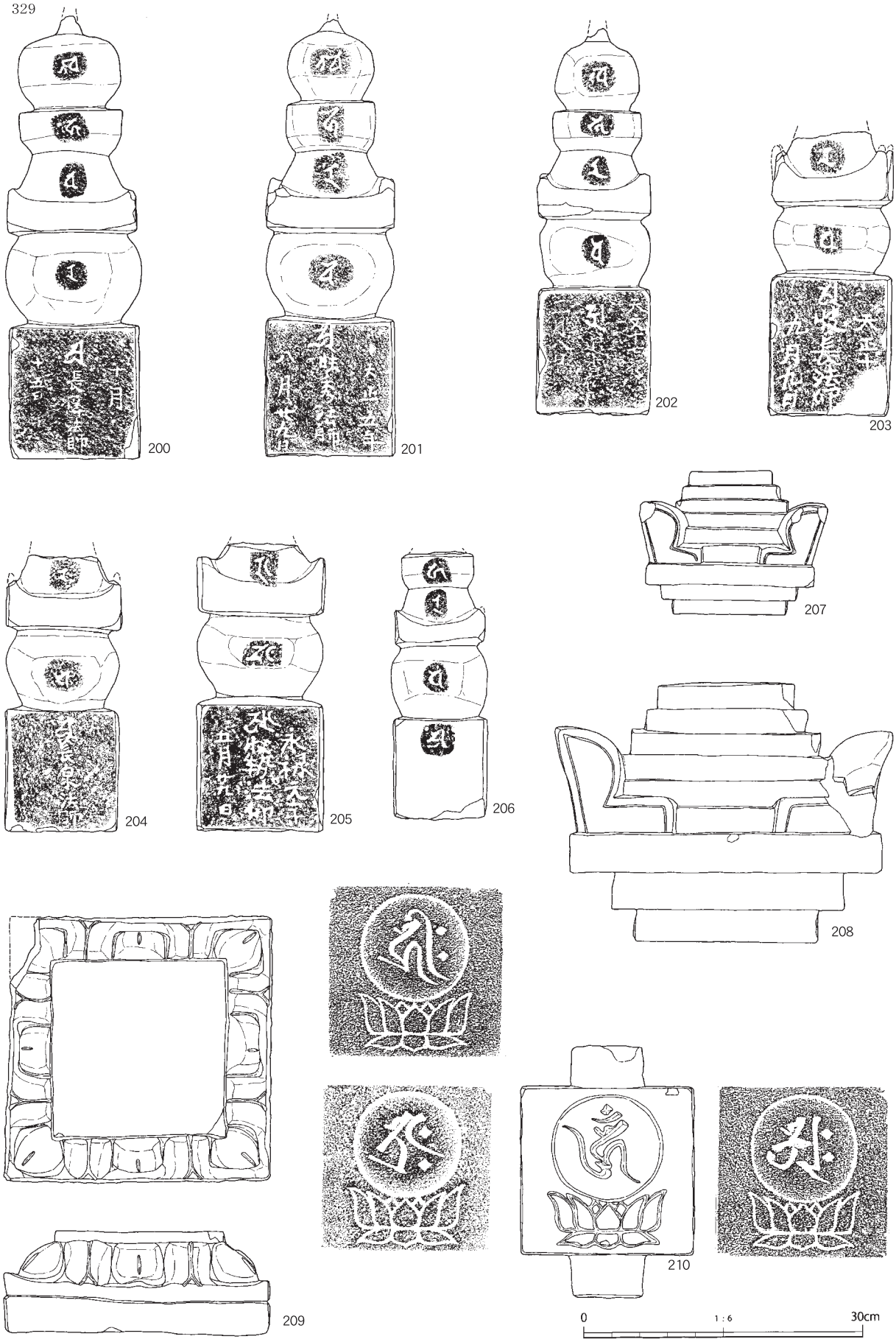


図 44　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（13）

と思われる。地輪の幅は 9.5㎝、高さ 10.7㎝を測るものである。各輪に種子は刻まれているが、地輪には名前及び年号を欠いている。その部分が剥離した様子も認められないことから、本来刻まれておらず製作途中の五輪塔である可能性が考えられよう。

(207・208) はともに宝篋印塔の笠部である。このうち (207) はやや小型で、総高 15.7㎝、隅飾りの両端からの幅は 20.5㎝を測るものである。隅飾り部はやや外傾しているが、反りは見られず真っ直ぐ立ち上がっている。(208) は大型で、総高 28.1㎝、隅飾りの両端からの幅は 36.8㎝を測るものである。この隅飾り部についても前者同様にやや外傾しているが、反りは見られず真っ直ぐ立ち上がっている。

(209) は宝篋印塔の台座で、一辺 28.5㎝、高さは 11.4㎝を測るもので、四周には蓮弁の文様が施されている。材質は和泉砂岩である。(210) は宝篋印塔の塔身部で、両端に枘が設けられ

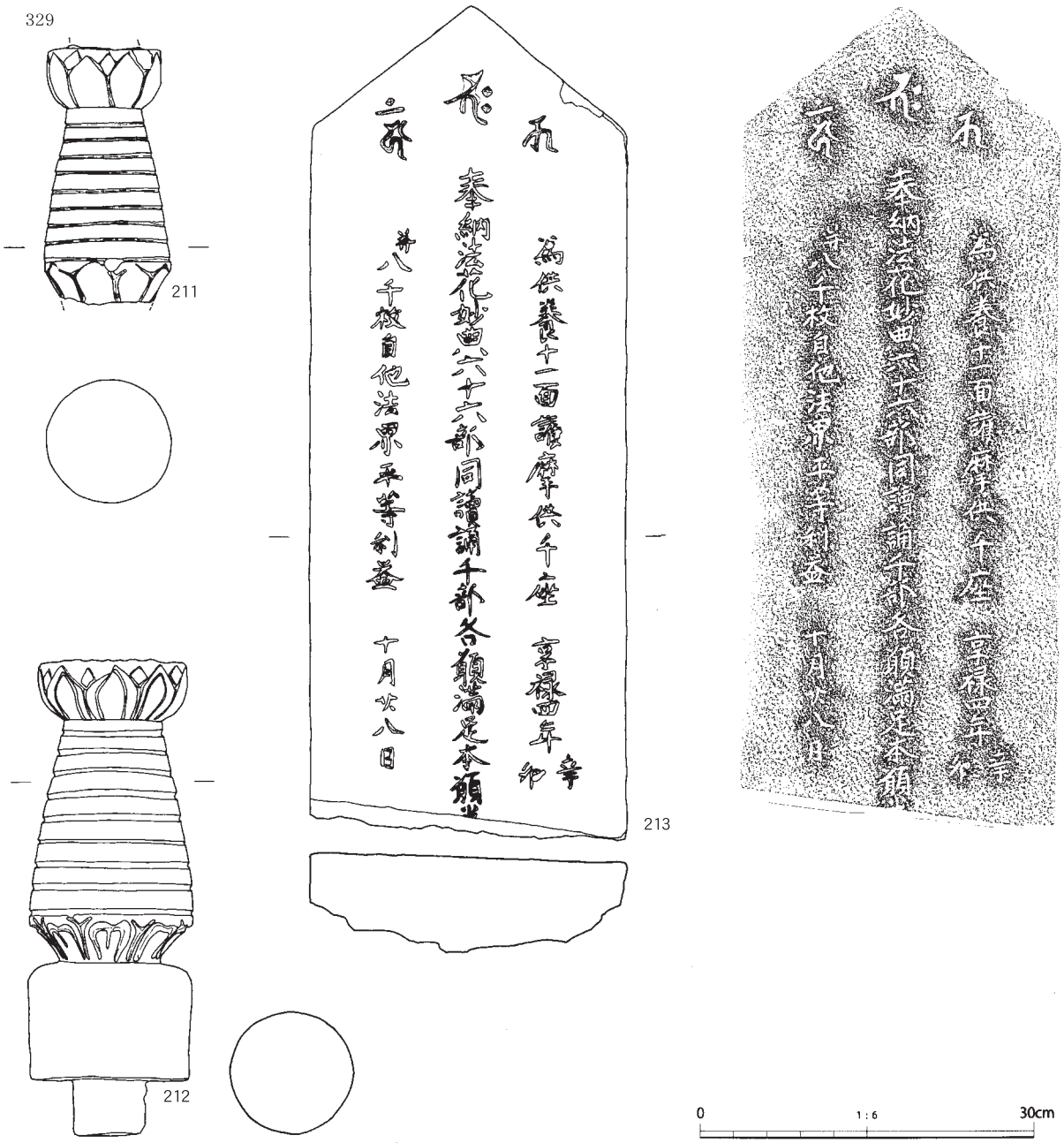


図 45　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図 (14)

ておりこの柄も含めた総高は 27.7㎝、幅は 18.8㎝を測る。蓮弁模様の上に月輪を配し種子を刻んでいる。

(211・212) は宝篋印塔の相輪部で、ともに最上部の宝珠を欠いている。このうち (211) は残存高で 23.4㎝を測る。請花は単弁の蓮華文を刻む。(212) は枘部分も残っており残存高で 43.0㎝を測るもので、請花には複弁の蓮華文が刻まれている。いずれも和泉砂岩製である。

(213) は残存長 73.6㎝、幅 28.7㎝、厚さ 9 ㎝を測る板碑である。碑面上部に種子 3 字を刻し、その下に六十六部経の読誦法要満願を記念して奉納した旨の意を刻んでおり、享禄四年の銘がある。全体に白っぽい色調を呈しており材質は粘板岩系の石と考えている。

330 暗渠出土の遺物（図 46　図版 57）

(214) は、 2-1 区のほぼ中央部で検出した土管を繋ぎ合わせた暗渠排水溝の土管本体である。基本的には丸瓦の製作にあたって半裁するのをやめ、円筒形のまま焼成したもので技法的には瓦とまったく同じものといってよいものである。全長 29.0㎝、最大径 12.5㎝を測る。類例は少ないが根来山内では数か所で検出されており、今回の場合共伴する土器には恵まれなかったが他の例を考えるとこの土管についても 16 世紀中頃を前後する時期のものと考えて大過ないであろう。

332 土坑出土の遺物（図 46　図版 57）

(215・216) はいずれも土師器皿で (215) は復元口径 7.6㎝、(216) はやや歪になっているが口径 9.5㎝前後を測るものである。両者とも口縁部に強いヨコナデを施し端部が肥厚するタイプと言えよう。前者は橙色を呈し後者はにぶい黄橙色を呈する。

(217) は中国製の染付皿である。斜め上方に立ち上がった体部は、口縁部にかけて大きく外反する。復元口径で 10.0㎝、器高 2.5㎝を測る。体部外面に簡略化された草花文を描き、高台部に二条の圏線が巡らされている。また、内面は見込み部に文様を描いているようだが小破片のためその文様については不明である。その見込み部を囲むように二条の圏線が巡らされている。

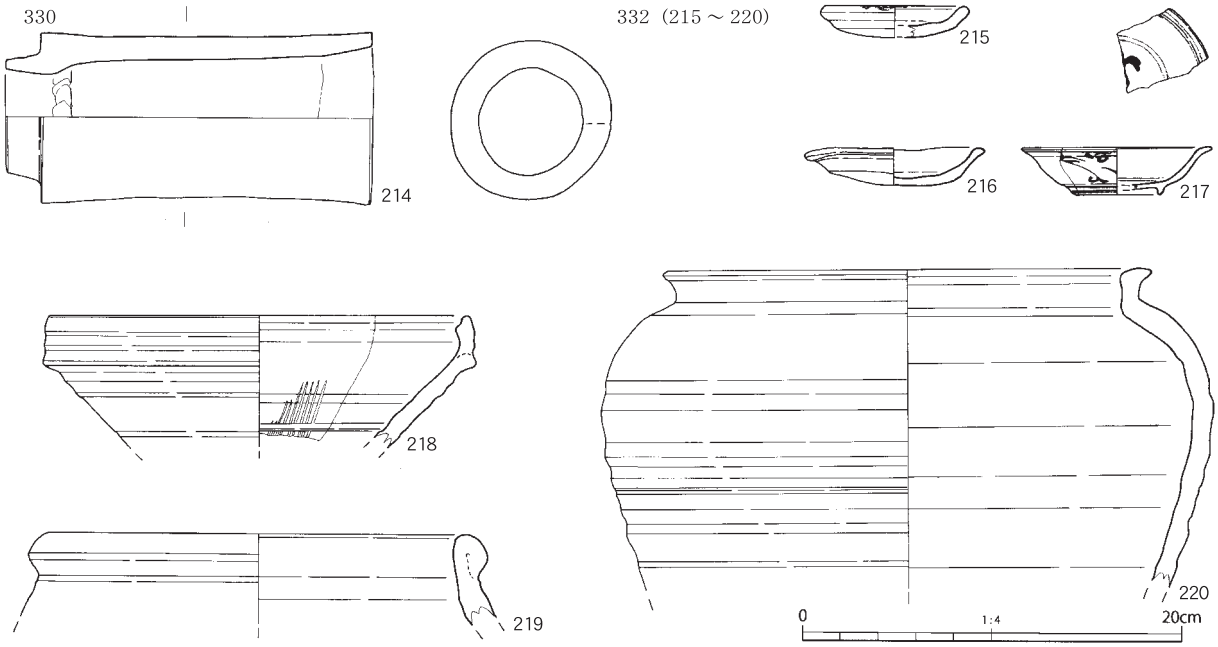


図 46　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図 (15)

16世紀後半段階の製品と言えよう。(218) は備前焼の擂鉢で、復元口径 21.8cmを測る。内面の摺り目は、５本一単位斜め下方にひかれている。内面は灰赤色、外面は暗褐色を呈している。口縁部に外面に二本の凹線が入っており 16 世紀中頃前後の製品と言えよう。

(219) は備前焼の壺と思われる製品で、復元口径 22.0cmを測る。小破片であるため全体の形については不明と言わざるを得ないが、頸部はわずかに内傾し、口縁部はやや丸味を帯びて折返されている。内外面とも赤褐色を呈する。頸部の傾き及び口縁部の形態から推してやや古く 15 世紀後半段階の製品かと考えている。

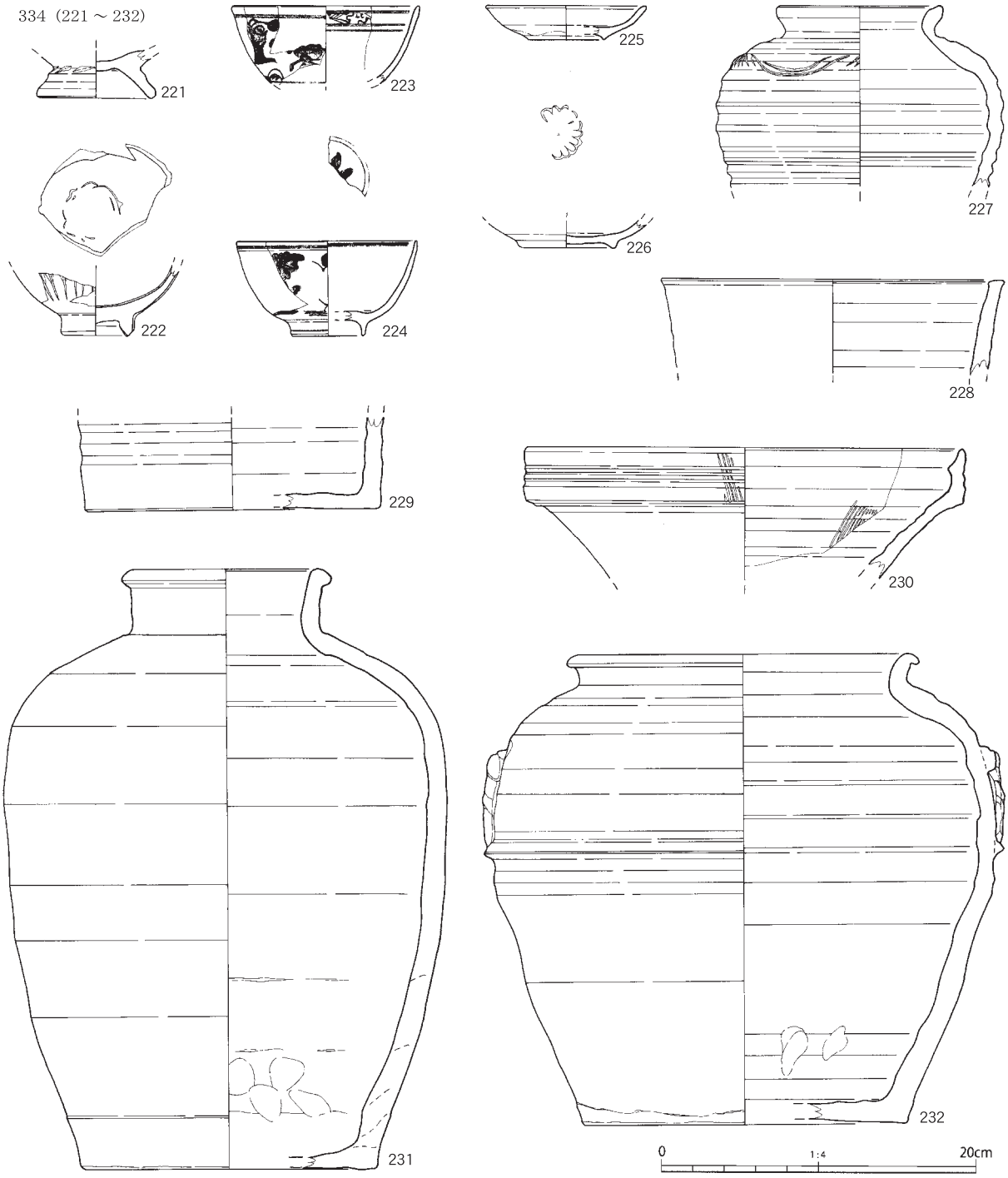


図 47　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（16）

(220) は備前焼の壺である。口径は大きく、復元径で 25.0㎝を測る。頸部は短く立ち上がり、口縁部はほぼ水平に外側に引き出されている。内面は赤黒色、外面は灰色を呈している。口縁部の形態からみて 16 世紀でも初め近くに位置づけられる製品と思われる。

334 石組遺構出土の遺物（図 47　図版 57）

(221～232) は、 2-1 区の北側で検出された長方形を呈する石組の遺構から出土した一群である。

このうち (231) は高台の付く土師器皿である。底部のみの出土であるため口径については不明だがおそらく 14㎝前後の大きさになるものと思われる。高台は「ハ」の字状に広がり器壁も厚く安定した作りとなっている。全体に橙色を呈する。根来山内においては数は極めてすくないもののこれまでの調査において確認されているタイプの皿で、時期的には 15 世紀中頃から後半にかけての短い期間に限って出現するものと考えられている。(222) は中国製の青磁碗で、体部外面に粗略な線描の蓮弁文を施す。見込み部にはスタンプによる印刻文様が描かれている。全体に釉は厚く、外底面のみ削り取っている。(223・224) は中国製の染付碗である。このうち (223) は体部から口縁にかけて内湾気味に丸く立ち上がる。外面の口縁下と高台近くに圏線が巡り、その間に吉祥文と思われる図案が描かれている。(224) も同じような形態を有するが、高台は細く内底面がやや盛り上がった形状を呈している。

(225) 瀬戸焼の褐釉の皿と考えているもので、復元口径で 10.2㎝、器高 2.0㎝を測る。高台は断面三角形を呈し、体部から口縁部かけて丸く内湾するように立ち上がっている。(226) は瀬戸の灰釉の皿である。内面底部に菊花文のスタンプによる印刻が押されている。全体に草緑色の淡い釉が掛り内面は釉溜りのガラス質になっている。(227) は備前焼の壺で、復元口径 10.1㎝を測る。口縁部は「く」の字状に外反し端部をわずかに上方に摘み上げている。肩部に櫛描きによる粗い波状文が施され、全体に灰色を呈している。(228)は備前焼の胴長の形状になると思われる鉢である。復元口径 21.8㎝を測る。胴部はかすかに外開きに広がり、口縁端部はわずかに水平に拡張させている。内面は褐灰色、外面は赤灰色を呈する。(229) も備前の鉢で、接合関係は確認できなかったが、形状から前掲の (229) の底部となる可能性が高い。全体に灰褐色を呈する。

(230) は備前焼の擂鉢である。復元口径 27.8㎝を測る。口縁部外面には二条の凹線が入り、端部の内側はわずかに窪む。全体ににぶい赤褐色を呈するもので、形状から 16 世紀中頃と判断される製品である。(231) は備前焼の壺で、口径 12.5㎝前後、底部径は 18.4㎝を測り、全長 38.0㎝とやや胴長の形状である。頸部はわずかに外傾し口縁端部を外側に引き出すようにして丸めている。全体に暗赤褐色を呈する。16 世紀中頃から後半にかけてのものである。(232) は備前焼の水屋甕である。復元口径 21.45㎝前後、底部径は 20.5、全長 29.8㎝を測る。短い頸部は外反気味に丸く立ち上がり口縁端部を外側に折り返すように引き出している。肩部下位に縄目状にした粘土紐を貼り付け装飾している。全体に暗赤色を呈する。

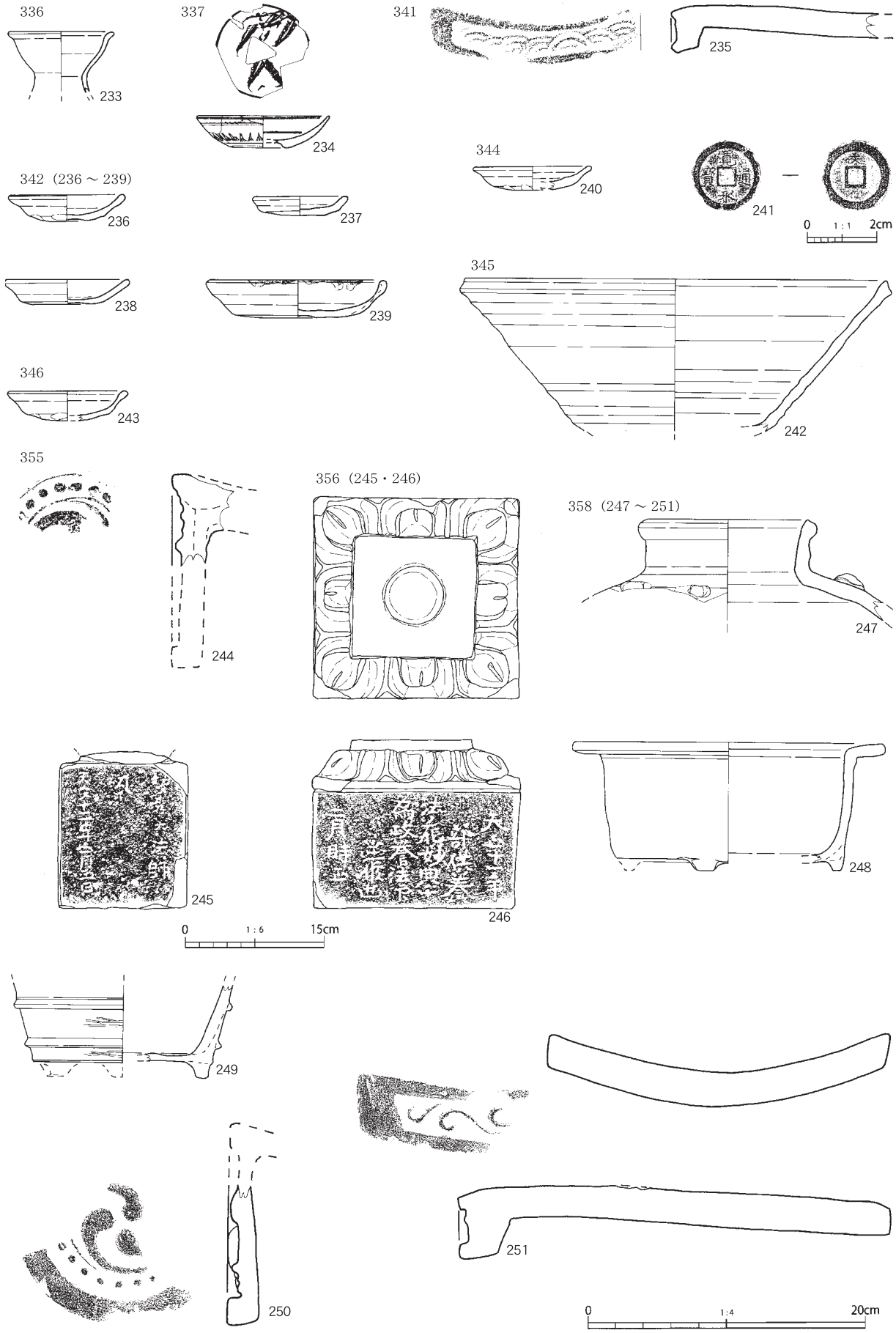


図 48　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（17）

336 石組遺構出土の遺物（図 48）

（233）は備前焼の小壷の上部と考えているものであるが、あまり見かけない形状と言える。器壁は 3 ㎜ほどと薄く、口縁部は丸く立ち上がったのち端部は外反する。口径 7.4㎝を測る。

337 土坑出土の遺物（図 48）

（234）は中国製の染付皿で体部下半には蕉葉文を描く。外底部を削り出して体部との境を高台とするもので、いわゆる碁笥底の皿と称される 16 世紀後半段階の製品である。

341 土坑出土の遺物（図 48）

（235）は軒平瓦当で内区に波頭文を配する。根来山内においては 16 世紀中頃に見受けられるが、量的には少ないタイプである。

342 土坑出土の遺物（図 48）

（236～239）はいずれも土師器皿である。このうち（239）は口縁部に煤の付着が顕著に認められ燈明皿として使用されたことが窺われる。

344 土坑出土の遺物（図 48）

（240）は土師器皿で復元口径 8.4㎝を測る。全体に橙色を呈する。（241）は銭貨、寛永通寶で外径 2.4㎝を測る。

345 土坑出土の遺物（図 48）

（242）は東播系の須恵質こね鉢である。復元口径で 30.4㎝を測る。口縁端部下は垂下しておらず端面はかすかに窪む。13 世紀中頃を前後する時期のものであろう。

346 土坑出土の遺物（図 48）

（243）は土師器の皿で、復元口径 8.4㎝を測る。口縁部に強いヨコナデを施し端部が肥厚する。

355 土坑出土の遺物（図 48）

（244）は巴文を配する軒丸瓦瓦当である。小破片のため詳細は不明であるが、巴の尾部は細く長く伸びている。

356 石組井戸出土の遺物（図 48　図版 58）

（245）は五輪塔の地輪部で、正面左側に天文十二年（1544）銘が刻まれる。（246）は宝篋印塔の台座で、返花には複弁の模様が施されている。正面左側に天正十一年（1583）銘が刻まれている。

358 土坑出土の遺物（図 48　図版 58）

（247）は備前焼の三耳壷である。復元口径 11.5㎝を測る。頸部はわずかに外反気味に立ち上がり口縁端部は外側に引出しながら丸く収めている。（248）は三足の付く瓦質の火舎で、復元口径 22.2㎝、器高 9.3㎝を測る。口縁端部を水平に大きく外側へと折り曲げている。（249）も瓦質の火舎と考えられるもので三足が付く。体部下半に箍状の凸帯が巡り、体部には横方向のミガキの痕跡が認められる。（250）は巴文の軒丸瓦で瓦当部の径は復元で 15㎝前後になるものと推定している。（251）の軒平瓦で瓦当部には均整唐草文を配する。

359 土坑出土の遺物（図 49）

（252）は中国製の青磁で、器形としては香炉となるものと思われる。（253）は備前焼の壷で

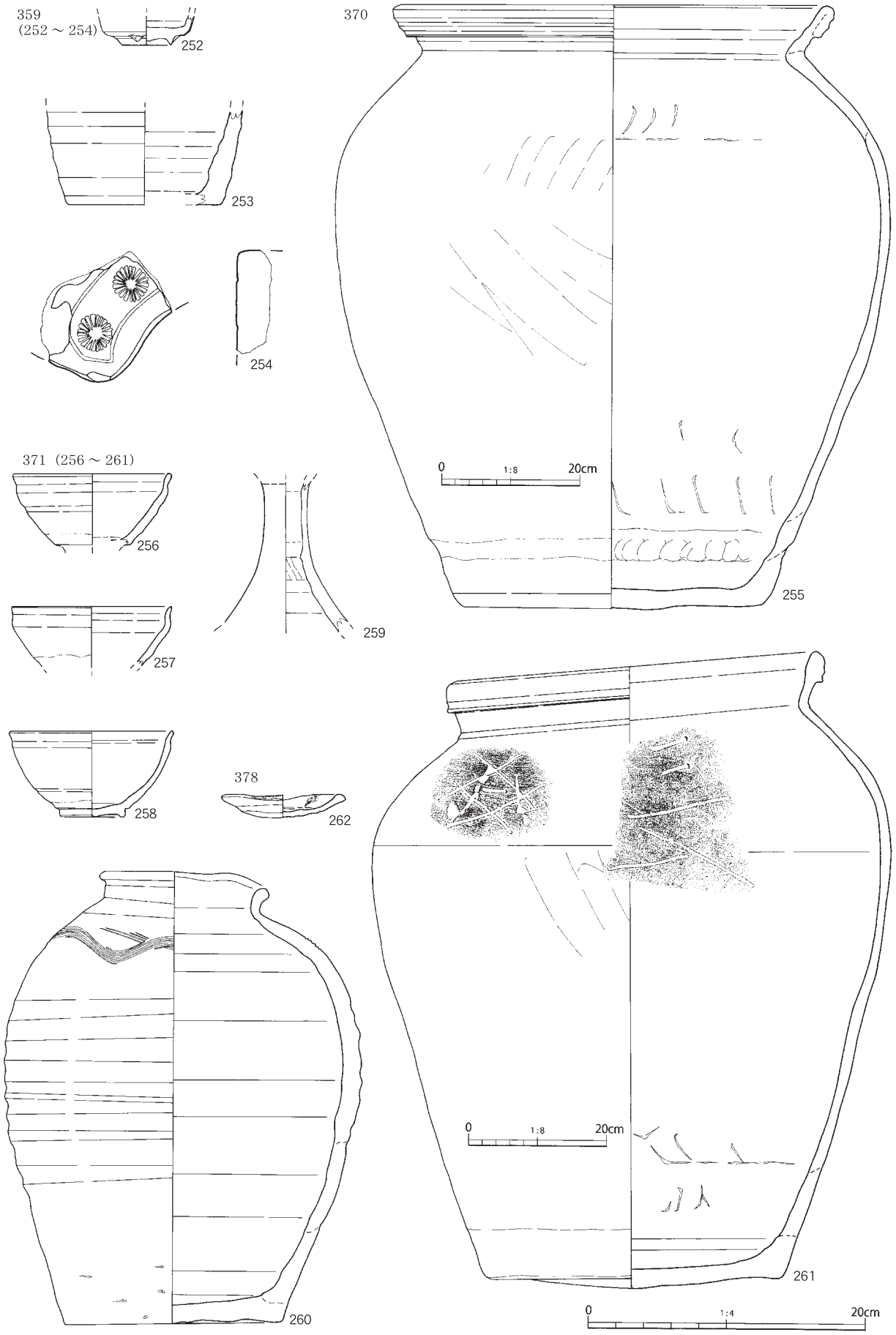


図 49　1 次 2 区　遺構出土遺物実測図（18）

体部下半のみの出土であるため詳細は不明だが、おそらく底部径は 11㎝前後になるものと思われる。(254) は鬼瓦で、左側下部あたりの破片と判断される。

370 埋甕遺構出土の遺物（図 49）

(255) は備前焼の大甕である。復元口径で 63.6㎝、底部径 43.2㎝、全長 87.4㎝を測る。頸部は「く」の字状に外反し口縁端部はやや扁平となり二本の凹線が巡る。16 世紀でも後半近い時期の製品と考えられる。

371 埋甕遺構出土の遺物（図 49　図版 58）

(256～258) はいずれも天目茶碗である。このうちもっとも残りの良い (258) は瀬戸の製品と思われるもので、にぶい褐色の釉が高台付近まで掛る。(259) は備前焼の鶴首徳利。(260) はやや胴長の備前焼壷で肩部に櫛描きによる波状文が施されている。(261) は備前焼の大甕で「三入」と窯印と思われる記号が刻されている。

378 土坑出土の遺物（図 49）

(262) は土師器の小皿で口径 8.4㎝を測る。灯明皿として使用されていた痕跡が認められる。

c．２区のまとめ

２区ついては、再三述べてきたように山内でも奥深い谷筋の奥まったところに当たっており、なおかつ古道の存在が知られていた箇所に相当する。

今回の調査においてもこの古道を確認するとともに、その両側に展開する坊院の存在を明らかにすることができ、併せてこれらに伴う多量の遺物が出土した。これらを踏まえて、以下この調査区の成果を簡単にまとめておきたい。

出土遺物の総体を見ると、16 世紀中頃から天正の兵火時 (1585) までの遺物が圧倒的に多く、おそらく全体量の 90％を数えるものと思われる。次いで 15 世紀代中頃から 16 世紀中頃までの遺物群で、これらについて限りなく 10％近くなるものと思われる。したがって、それ以外の遺物はパーセンテージを構成しえないほど少ない量と言える。

その数少ない遺物を述べておくと瓦器碗並びに東播系のこね鉢といった 13 世紀前半から中頃にかけての遺物群である。この時期は、宗祖覚鑁が没したのち中興の祖と言われる頼愉が高野山から再度根来の地に降りてくるまでの時期に相当しており、もともと根来寺にあっては空白期とも言える時期ではあるが、この谷筋の入口付近ではこれまでの調査において 13 世紀代の遺物は少なからず出土している状況から見ると極めて少ない。

これとは逆に天正の兵火以降、近世の復興後に当たる 18 世紀代の遺物も極めて少ない状況であった。近世の遺物については、やはりこの谷筋の入口のみならず谷の中ほどでも少なからず出土している。こうした状況から、この古道の延伸する桃坂谷を一筋の直線と観た場合、遺物の時期差から当然のことながら山内中心部に近い、原点に近いほど新興時期も復興期も早く、谷の奥ほど遅れていることが看取される。また、この今回の調査区域に坊院が建ち並ぶのは 15 世紀中ごろ以降であり、16 世紀中頃にはほぼこの谷の奥深くまで坊院が展開していたことが証されたと言える。

第５節　２次調査

２次調査は京奈和自動車道の根来インターチェンジ（仮称）建設予定地に相当する箇所であった。根来山内の中心部からみると西約 800mのところに当たっている。

調査区名は前年度に実施された１次調査において１区・２区を使用しているため、その関連から２次調査においては３～５区の名称を用いている。このうち洞尾川左岸の平坦面の調査区を調査区３、さらに南側の丘陵中腹部に設定した調査区を調査区４及び調査区５と呼称している。このうち調査区４については、４-１と４-２に細分している。なお各々の調査面積は調査区３が 2,013.52㎡、４区 226.48㎡、５区 105.89㎡、合計約 2,345㎡である。

A．３区の調査

調査区３は、先にも述べたように洞尾川の左岸部で、東側の丘陵裾部との間にあたる箇所である。大きくは２段の平坦面となっており、両者の比高差は約 2.8mを測る。いずれも昭和 40 年頃までは水田として、そのあと果樹栽培地として利用されていたと聞くが、平成に入る頃には耕作放棄地となっていたようで、現況は竹や雑木の生い茂る荒蕪地となっていた。

上段部の基本層序としては、第１層が表土、第２層が耕作土、第３層が旧耕作土ないし盛土・崩落土で第４層が地山に大別できる。盛土等については、土色・土壌等により細分している。

上段部については、表土及び耕作土を除去した後、旧耕作土上面と思われる面で遺構検出を試みたが、遺構は確認されず、地山面及びこれと同じレベルにある整地土（盛土）の上面でいくつかの石組みの溝を検出した。下段部は西側を流れる洞尾川に沿うかたちで現況の水田区画が北西から南東に向かってそれぞれ 50～60㎝ほどの高低差で３段の段差をもってつくられていた。ここでは、石組みの暗渠排水溝は検出されなかったが、水田区画に伴う石垣が検出されている。なお下段部の基本層序は、第１層が表土、第２層が耕作土、第３層が盛土・崩落土で第４層が旧耕作土、第５層が地山に大別できる。

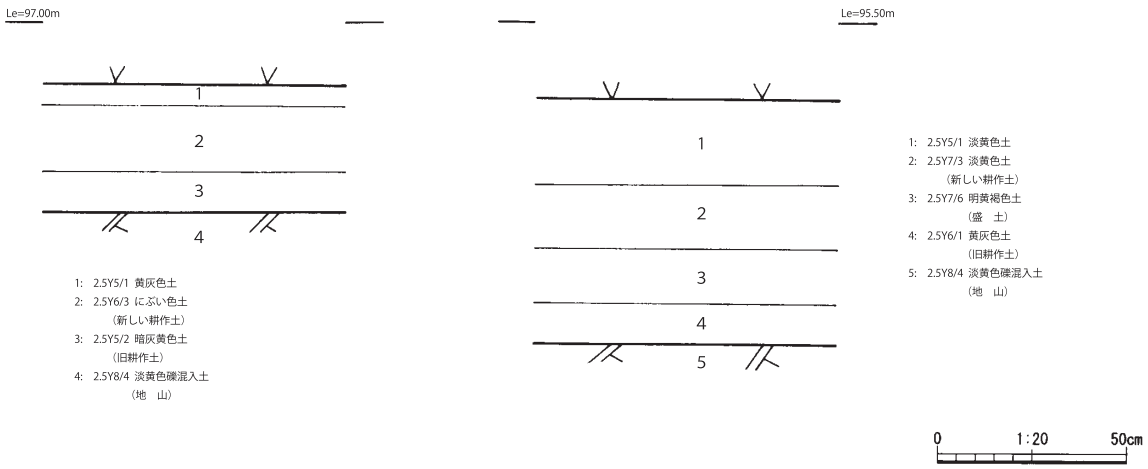


図 50　２次　基本層序模式図

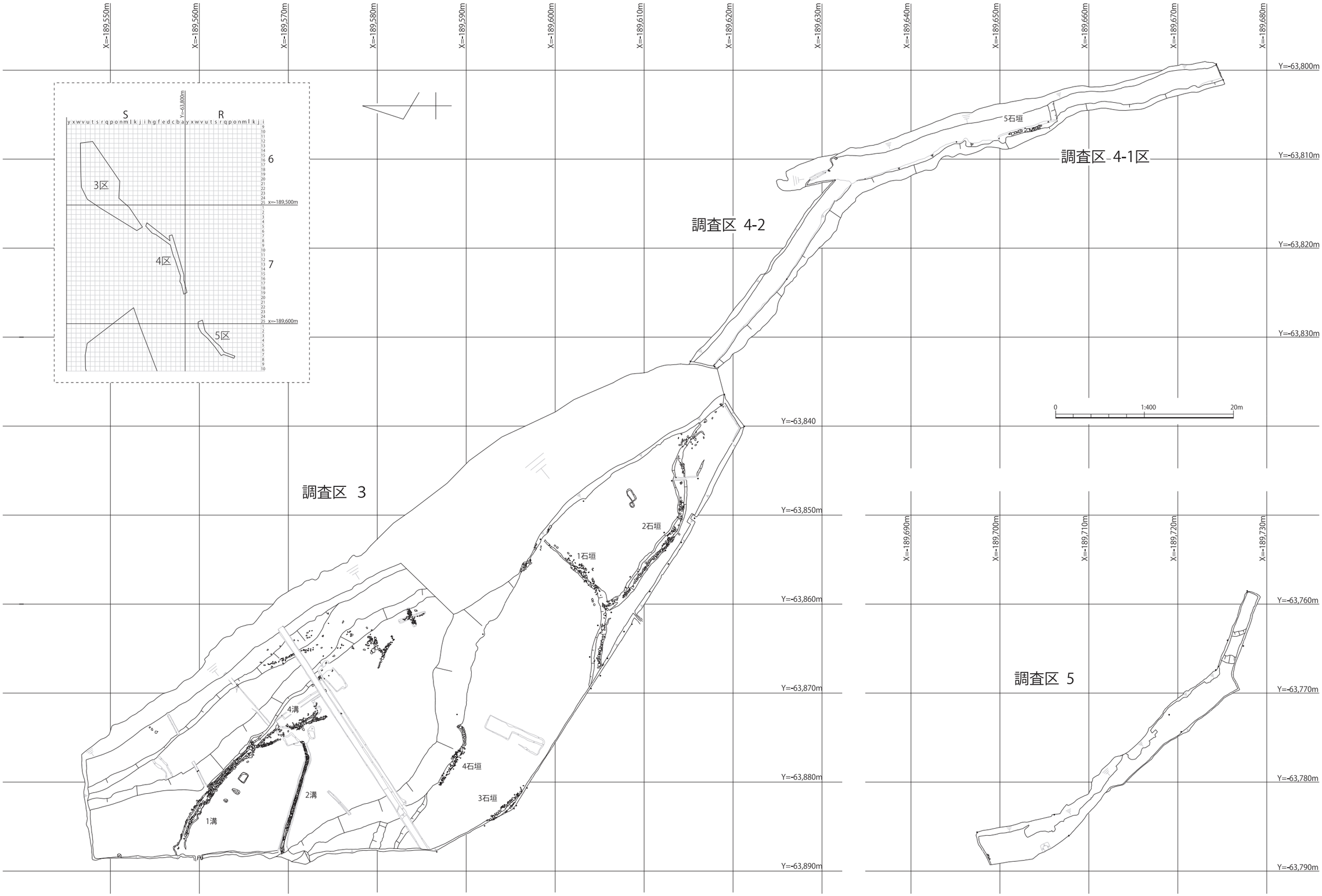


図 51　２次３～５区　遺構全体図

とくにこの上段部分では、現代の水田を造成するにあたって大規模な盛土を行っていた。その土については山側の山裾部を削り取り、その土を下段に落とし込む形で造成した様子が窺われた。

以下、３区で検出された遺構について詳述する。

１石垣　３区のほぼ中央で検出されたもので、N-45°-Eという方向をとる石垣である。この方向は、現況の段差の方向と同じもので実際に段差部分で検出されたものである。

西側の山裾部分から途中一部欠損している部分はあるものの延長 14mを確認した。

もっとも残りのよい部分で石積みにして４ないし５段で、高さは 0.6mを測る。用いられている石材は和泉砂岩であるが、大きさにばらつきがあり、大きいものでは 40～50㎝大、小さなものでは 10㎝ほどのものも認められる。また、積みの方向も横、斜めとかなり乱れており、全体として雑な感はまぬがれない状況であった。一般に中世の根来山内における石垣は堅固かつ精緻な積み方がされている。もとよりこれらの石垣は、山内の場合は坊院（屋敷地）に係る石垣であって、近世以降、水田となった場合にはかなり雑な積み方が確認されている。こうした積み具合からも、この石垣遺構についても中世まで遡るものではなく、また屋敷地に係るものではなく、近世ないしそれ以降の水田に伴う石垣と判断されよう。

なお、この石垣は調査区の西外側、現況の川に沿ってつくられている西側畦畔の下まで続いていることを確認している。このことから現在の水田区画の西辺部がつくられるよりは一時期古いものと言えよう。

２石垣　調査区の南西側で検出された石垣である。旧耕土を除去した面で遺構精査をおこなったところ、南西側に押し出すようにして整地が成されていることが判明した。このためこの整地土を掘り下げていった

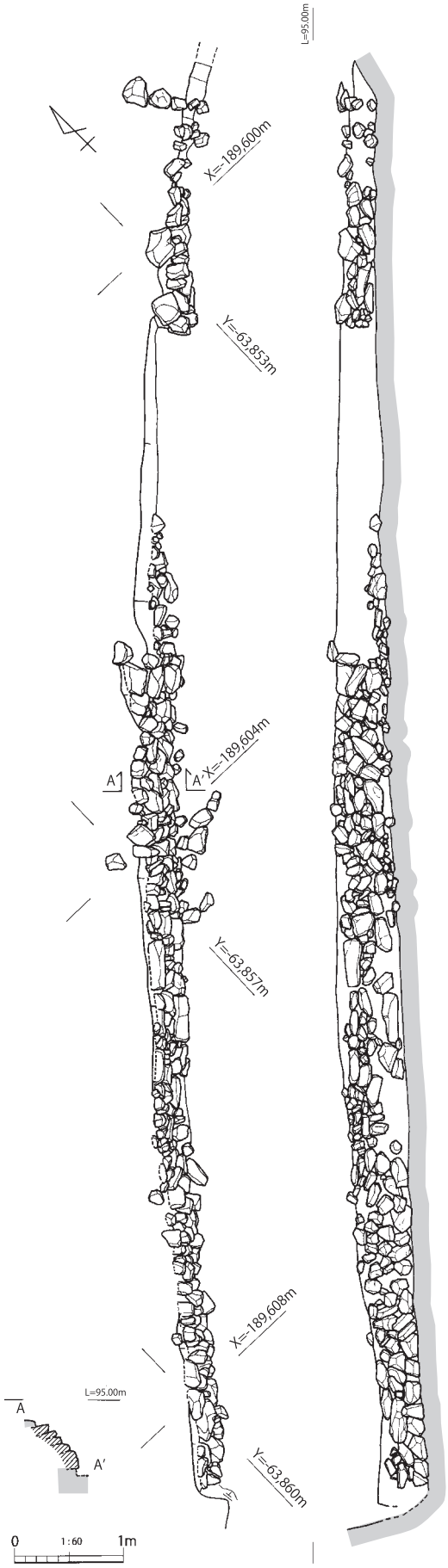


図 52　１石垣　平面図・立面図・断面図

ところ、落ち込み部分の際に沿って石垣が遺存していることが確認された。確認された石垣の延長は 14mほどである。石垣は西から東へと４ｍほど延び、その後南側に張り出すようにして弧を描くように延び、さらに北東方向に屈曲するもので、直線ではなく地形に沿って造られている様子がよくわかる。全体に見ると石垣は北東側で遺存状況がよく、南側に行くにつれて遺存状況は悪くなっている。これらの部分については、再利用のために後世に石が抜き取られた可能性が高い。もっとも残りの良い部分で、高さ 0.4mを測るもので、石積みは３ないし４段が遺存していた。整地土の土層断面観察の結果、本来的にはあと 0.2～0.3mは高かったものと判断される状況であった。使われている石はいずれも和泉砂岩で、15～40㎝大の石が用いられている。基本的に石の長辺を横置きにしており、斜めに据え置くような用い方は見られなかった。こうした石積みの状況や法面の傾斜などから、掘方から遺物が確認されていないが、この石垣については中世に遡る可能性が高いものと判断している。

３石垣　調査区中央部の西壁際ぎりぎりで検出された石垣である。この石垣を覆うように灰黄色の土が被っており、さらにこの土の上には押し出されるようにして黄褐色のシルト質の土の堆積が認められた。これらの土は北側の山土と類似しており、おそらく新しい時期に水田部を拡張するに当たって造成された時のものと判断される。検出された石垣は、最も残りの良い部分で高さ 0.4mを測る。基底部に 50㎝前後の比較的大きな石を用いている様子は看取できるものの、その大きな石と石の間に 20㎝前後の小振りの石も用いられており、その造りに屋敷地を画するような石垣に見られる堅固さや精緻さは認められない状況であった。ただ、基本的には石を横置きにしていることなど古い傾向も看取でき、近世以前の石垣であると考えている。前掲の２石垣との位置関係を見ると、ともに調査区の南東側に拡がっていくものでかなり近接した位置にあるところから、この両者は調査区外の南東側でつながり一体のものとなる可能性がきわめて高いものと考えられよう。この２石垣と３石垣については、中世段階の水田の西側を画するものであったと考えている。

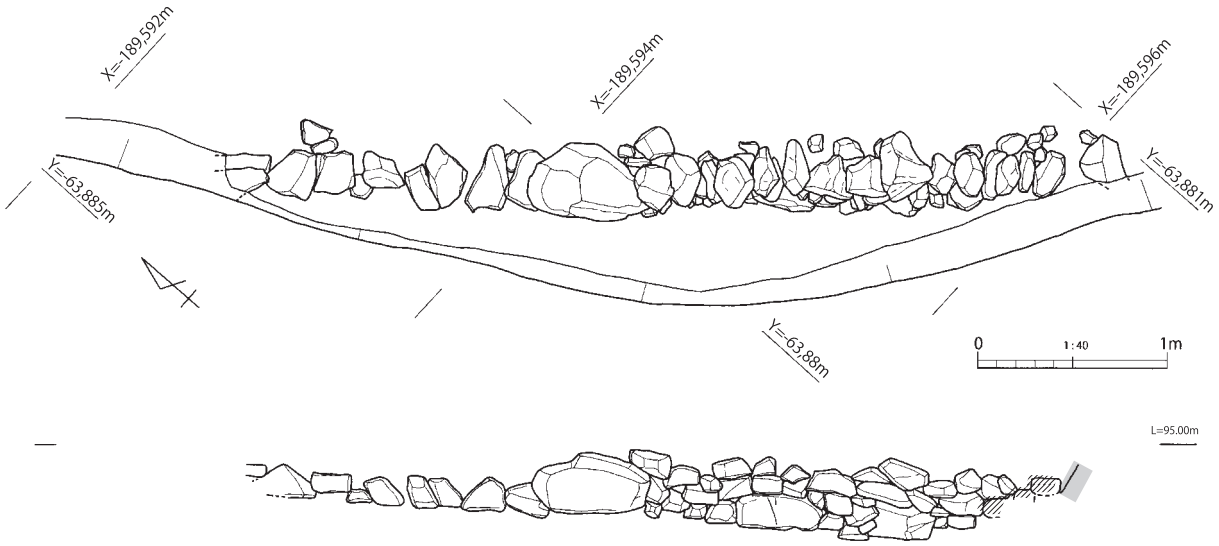


図 53　３石垣　平面図・立面図

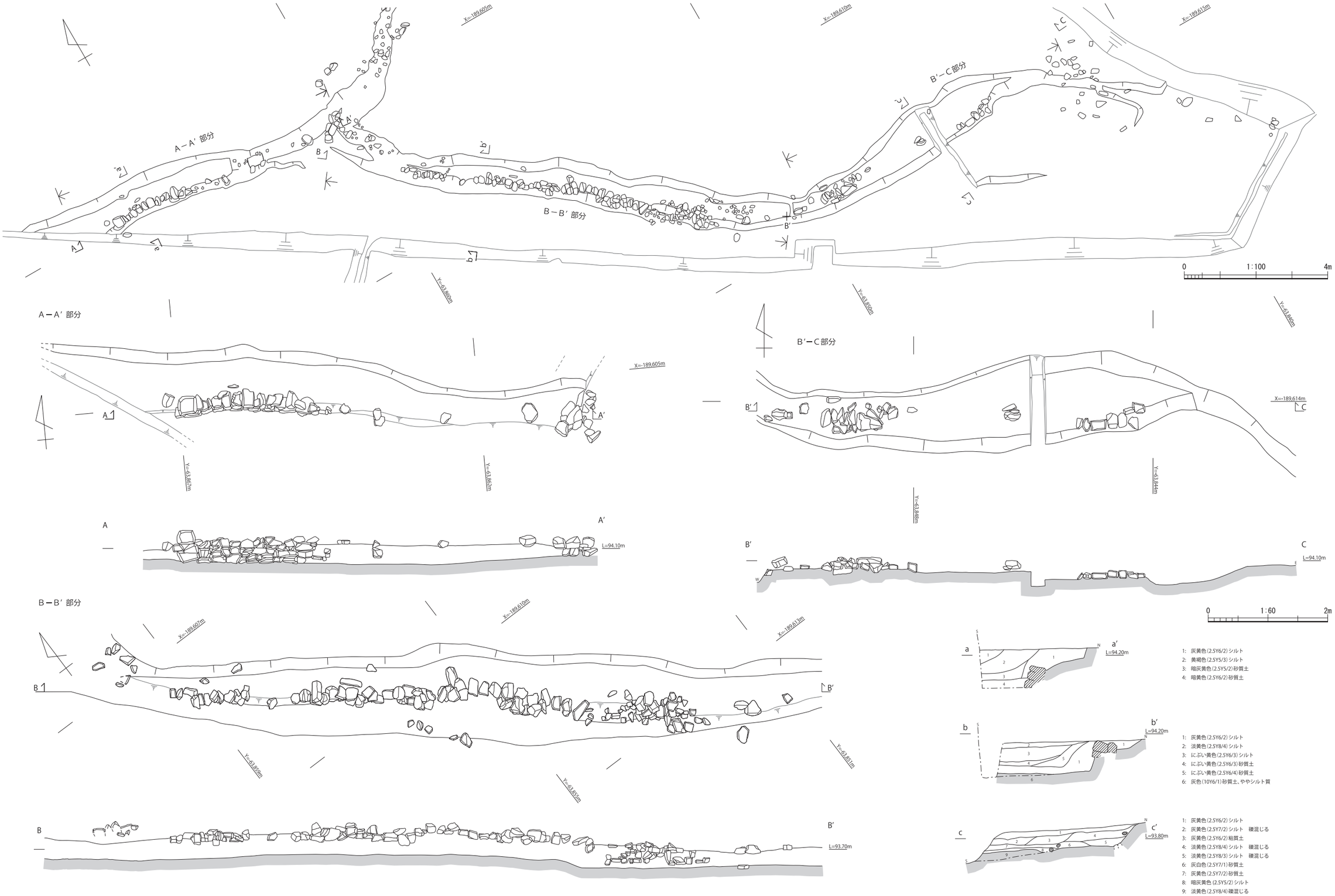


図 54　２石垣　平面図・立面図・断面図

４石垣　調査区北西側の上段部と南東側の下段面の境を成す斜面部の裾で検出した石垣である。この上段部と下壇部の比高差は北西側から南東側に向かって徐々に深くなっており、北西側では約１ｍほどであるが南東側では２ｍを優に超える高さを有している。この段差部分の崩落防止のために設けられた石垣と考えられる。段差部の延長は 40mほどであるが、石垣を検出したのは、この中央付近のわずか延長３ｍほどであった。検出された石垣の高さは、もっとも残りの良い部分で 0.6mを測り西側にいくにつれて上部の石が取り除かれている状況であった。残りの良い部分で見ると石積みは４ないし５段分が遺存していた。用いられている石はいずれも和泉砂岩で、大きいものでは 40㎝近いものも認められるが、全体には小振りで間置石は別にしても 20㎝前後のものが多い。この石垣については、上段と下段の境界部に設けられたもので斜面部の崩落防止などを目的として造られたものと言えるが、先に述べたようにかなりの比高差のある段差であることを思えば、石垣の基底部を成す石は小さいと言える。ただ、この石垣を覆っていた土との関係からこの石垣については中世段階の水田の北東側を画する石垣として造られたもの判断されよう。

１溝　調査区の北東側で検出された石組の暗渠排水溝である。西側の山裾部に沿って流れた後かすかに湾曲しながら北西方向に延びる。延長 20ｍほどを検出した。中央部付近の６ｍほどで蓋石が遺存していた。その両側では蓋石は認められなかったが本来は蓋石を伴う暗渠排水であったと思われる。山側の側石は小さく一段のものであるが、それと対応する側の石はやや大きく場所によっては２ないし３段に積まれていたのを確認している。掘形幅は 30～50㎝、内幅 20～30㎝、深さ 10～20㎝で、石材はいずれ

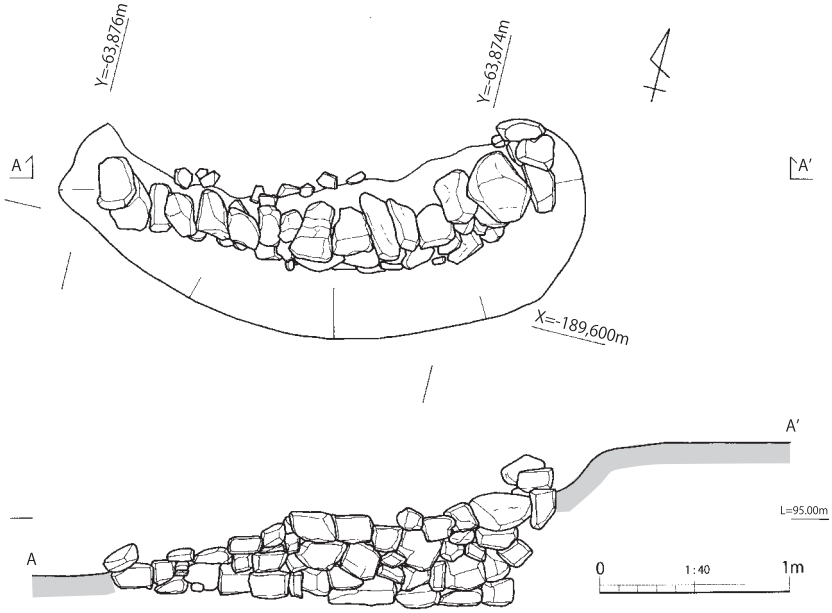


図 55　４石垣　平面図・立面図

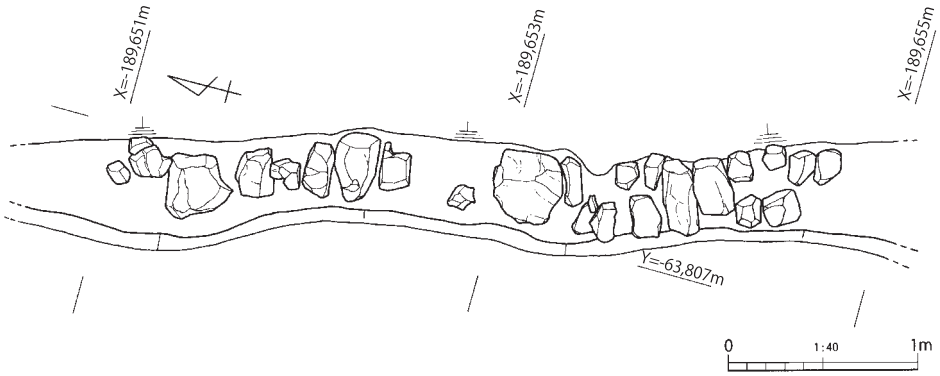


図 56　５石垣　平面図

も和泉砂岩で、側石には15～30㎝前後の石を蓋石にはそれよりやや大きい20～30㎝大の石を横置きにして使用している。溝内の埋土は暗灰黄色の砂質土で、この中からの遺物は皆無であった。

２溝　調査区の西側で検出された石組みの暗渠排水溝である。西側の山裾部付近から南西方向に２ｍほど延び、そのあと西方向へと延びて行き、上段末端部に至る。延長13ｍほどを検出した。このうち上段末端部近くの４ｍほどについては蓋石が遺存していなかった。溝１に比べると使われている石もやや小ぶりで、側石についても一段の積みであった。掘形幅は30㎝前後、内幅10～20㎝、深さ10㎝ほどを測る。石材は10～20㎝前後の砂岩を使用している。

３溝　溝１から分岐するように南側に延びるもので、撹乱をはさんで延長９ｍほどを確認している。掘形幅は30㎝前後、内幅10㎝前後、深さ10㎝ほどを測るやや小ぶりな暗渠排水溝である。山側の1ｍほどは蓋石を欠損した状態で検出された。

４溝　先述した１溝の南東側延長部付近で検出した素掘りの溝である。幅30㎝、深さ10㎝程を測る。灰色の砂質土により埋まっていたもので、この中からの出土遺物は皆無の状況であった。位置関係から推して、１溝と同じものであり、蓋石だけでなく側石についても抜き取られたものと理解するのが合理的と考えている。

以上、詳述してきたこれら３条の溝については、その規模や造り方などからいずれも水田耕作に伴うものであると判断している。これらの溝が集約している山際部分は、今回の調査においてももっとも湧水が激しく、常に水中ポンプを設置して調査に当たらねばならないような状況であった。このことからこの山際からの湧水に対応して設けられたものと考えている。

これらの暗渠排水を伴う水田の時期については、出土遺物がほとんどなく明瞭にし難いが、数少ない遺物から判断すれば中世後期、15ないし16世紀に遡る可能性があるものと考えている。ただ、この時期の水田区画については、上段の南東部付近では耕作土が途切れて存在していなかったことから、近世のものより小さかったものと判断している。

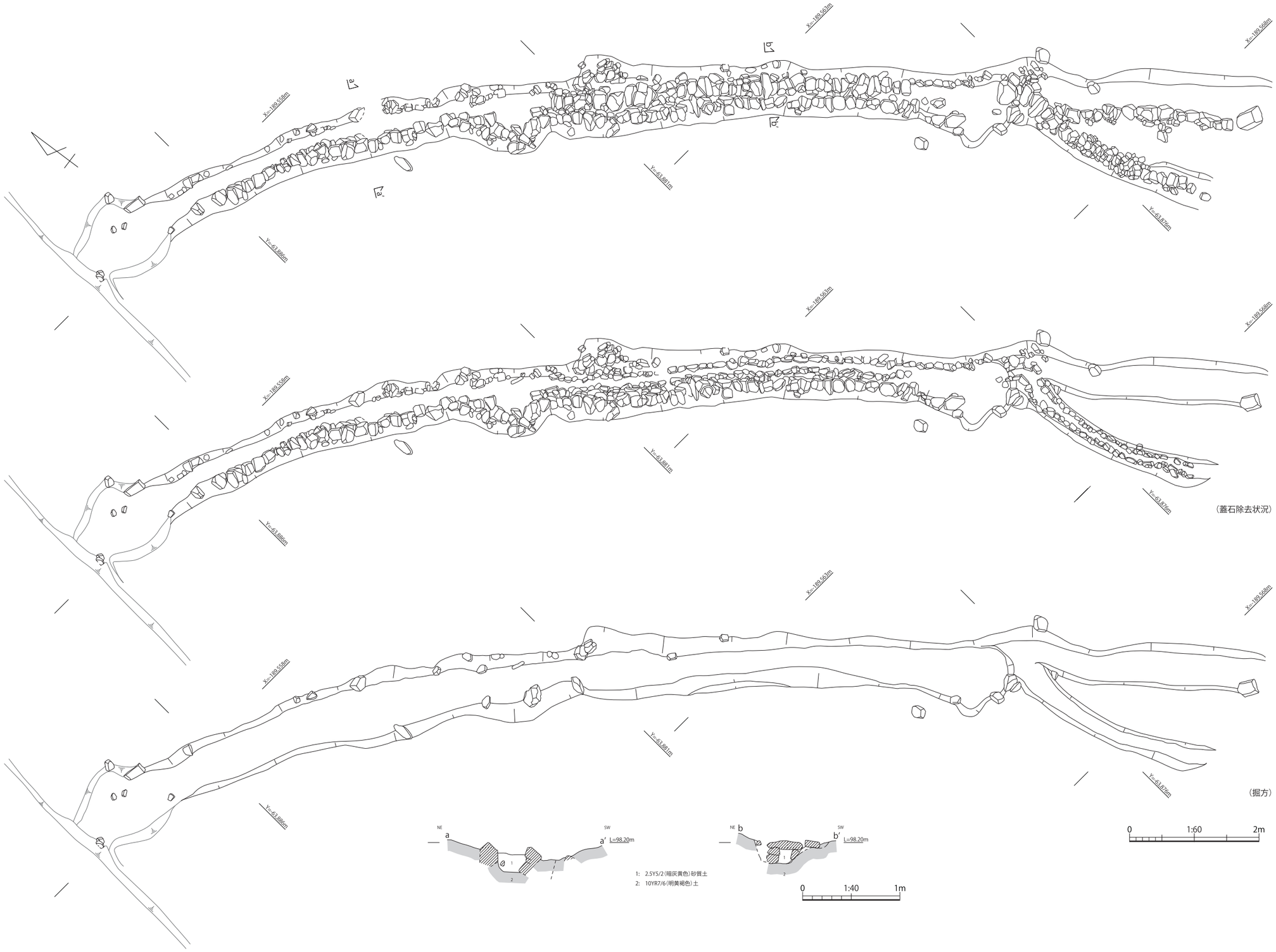


図 57　1 溝　平面図・断面図

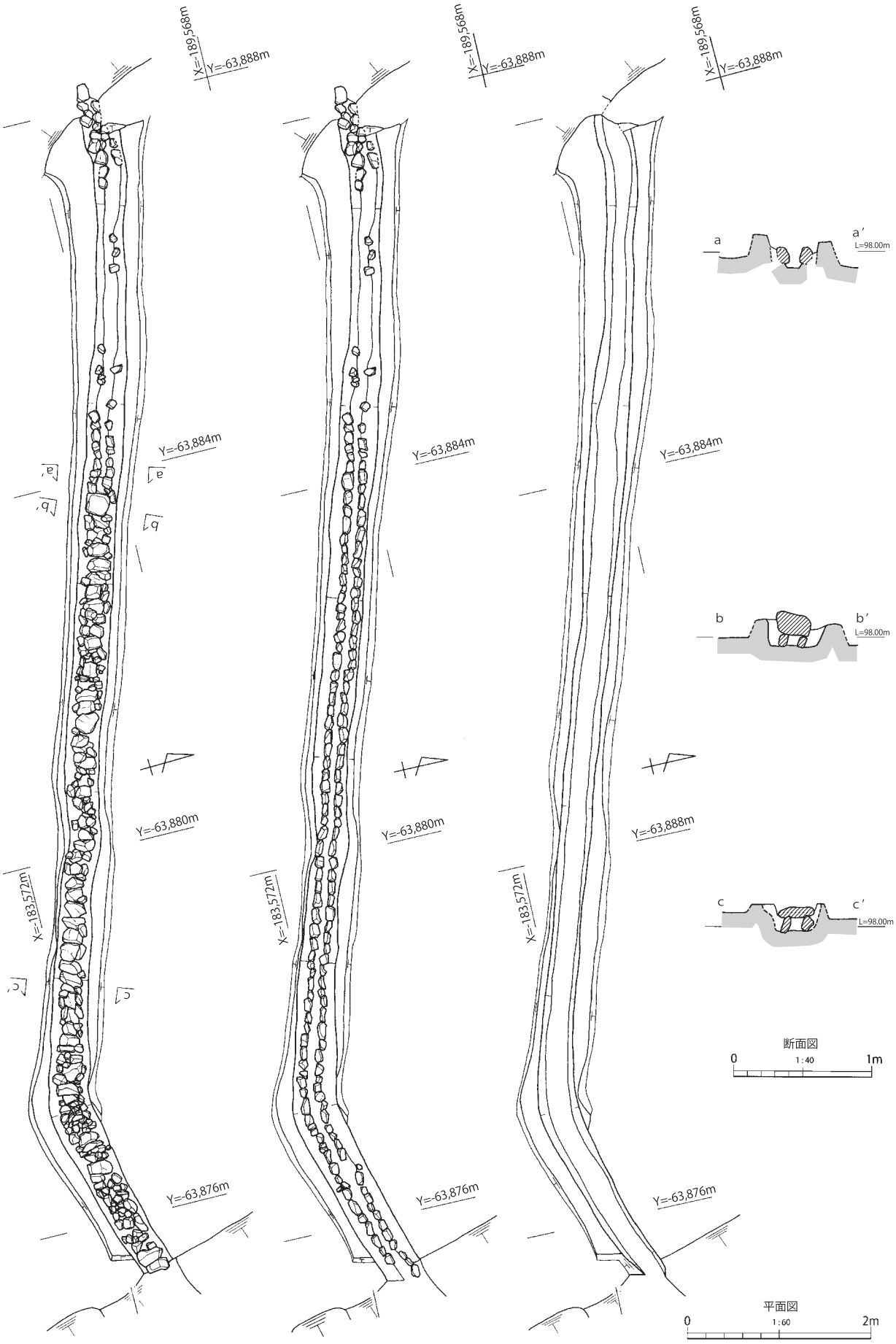


図 58　2 溝　平面図・断面図

B．調査区４・５

本調査区は、前述したように風吹峠からつづく丘陵の中腹部に当たる。わずかに平坦面が認められ、古道の可能性が考えられた場所に設けた調査区である。

このうち４区については、北端部分で平坦面がなくなり、道がさらに続いていく可能性が考え難い状況で、むしろ途中から北西方向に下っていく可能性が考えられた。このため調査途中に教育委員会との現地協議を経てこの部分にも調査区を設定した。当初から予定していた部分を４-１区、新たに加えた南西方向に下っていく部分を４-２区としている。

４-１区では、試掘調査で確認されていた石列の続きを確認した。位置的には、たしかに平坦部の西際に沿って並んでいるが、延長はわずかに７ｍほどで、積まれたものではなく据え置いたといった感じの設置具合であった。また、据え置く基盤となる土も新しい時期に崩落したと思われる山土であった。このことからこの５石垣として平面図に図示している石列については、古道の側石となるものではないと判断している。

また、岩盤についても自然地形のままで、人為的に削平し、平坦面をつくりだしているような痕跡はまったく認められなかった。

さらに路面と思われる硬化した面や砂利の入った土層についてはいずれの箇所においても確認できていない状況である。

４-２区については、平坦な面はかろうじて認められる状況ではあったが、人為的に岩盤を整形したような痕跡は認められなかった。また、その平坦面についても幅が均一ではなく路面を思わすような痕跡はまったく検出できない状況であった。このことは、南東側に設置して調査を行った５区についても同様であった。

以上のことから古道などではなく、新しい時期に山仕事などに利用されていた通路のようなものであったと判断されよう。

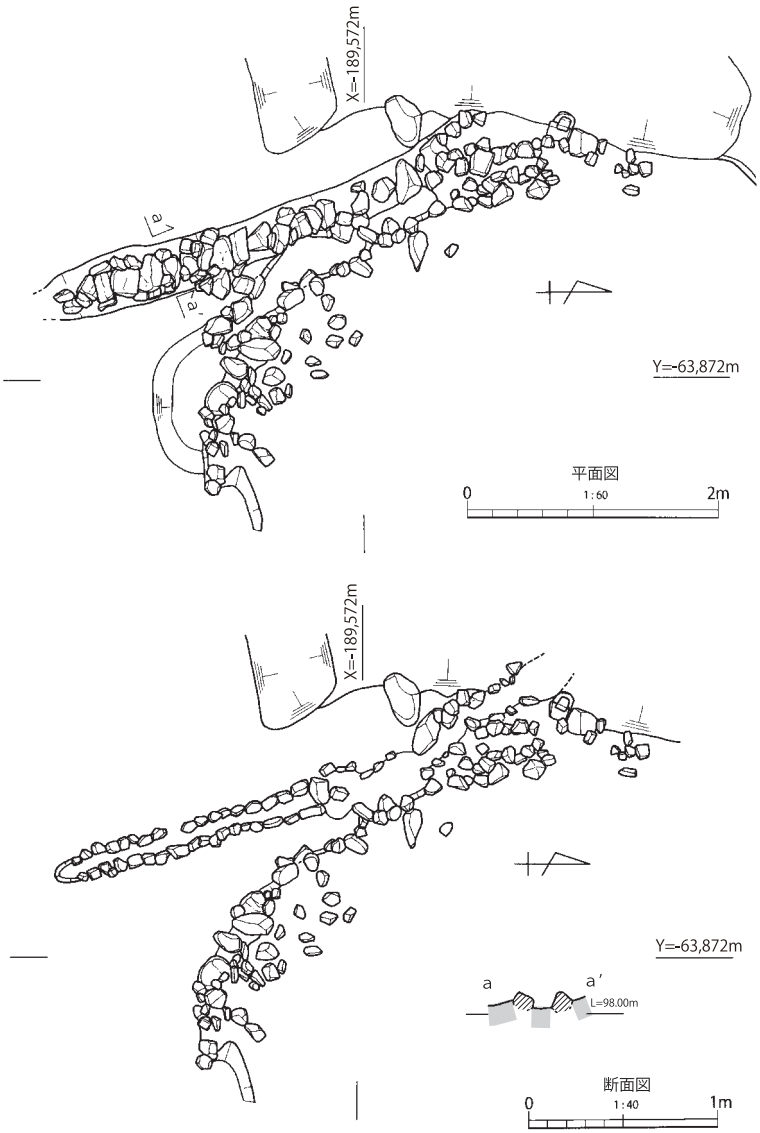


図 59　３溝　平面図・断面図

C．２次調査の出土遺物

２次調査は再三述べてきたように大きく３～５区に分けて調査を行った。このうち４・５区は丘陵上の古道と想定されていた箇所であり、本来遺物の期待できない地域であった。実際調査に当たった結果、古道でもなかったこともあり出土遺物は皆無の状況であった。また、３区についても坊院といった居住空間ではなく、水田という生産跡ということもあって出土した遺物は極めて少ない。わずかに旧耕土としている３層と水田に伴う暗渠排水溝から土師器皿などが数点出土した程度である。以下、これらの遺物について記す。

３層出土の遺物（図 60・図版 58）

(263～265) はいずれも土師器の皿である。このうち (263) の土師器皿は復元口径 7.2㎝を測るもので、口縁部に強いヨコナデが施されており端部はわずかに肥厚する。全体に橙色を呈する。(264) は復元口径 8.4㎝とさほど大きな皿ではないが、器高は口径に比べて高く 2.1㎝を測るものである。体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がり、口縁部にはヨコナデを施しており端部がわずかに肥厚している。内面は鈍い橙色、外面はにぶい黄褐色を呈している。(266) は中国製の白磁皿である。体部から口縁部にかけて内湾気味に丸く立ち上がる。底部を欠いているがおそらく高台は割高台となっているタイプの皿と考えられるもので、15 世紀代の製品である可能性が高い。(267) は瓦質の火鉢の口縁部と思われるものである。口縁外面に 2.5㎝ほどの間隔を空けて二条の凸帯が巡らされている。この火鉢についても 15 世紀代の製品と考えられよう。

４溝出土の遺物（図 60）

(268) は土師器の皿で、復元口径 8.2㎝を測る。口縁部にはヨコナデを施しており端部が肥厚するタイプの皿で 16 世紀代のものである。

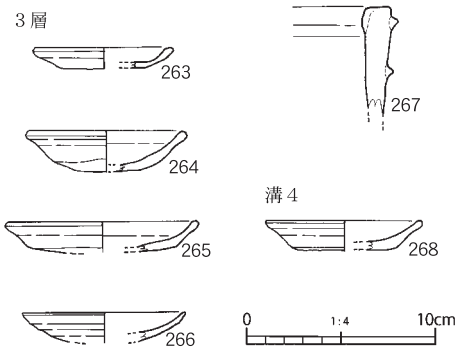


図 60　２次　出土遺物実測図

D.　２次調査のまとめ

今回の調査では、調査区３において前年度の調査と同様に中世にまで遡る可能性の高い水田の跡を確認することができた。このこと自体も意味ある成果であるが、それ以上に、子院の跡がまったく検出されなかったことにより大きな意味があると言える。つまり、中世、全盛期の根来寺においてもこの付近にまで子院は及んでいなかったことが判明したわけであり、中世根来寺の寺域を考える上で、貴重な成果を得たものと言える。

一方、「古道」の検出には至らなかった。この付近には泉南地域へとの通ずる道が想定でき、長く根来寺が交通の要衝であったことを言われながら具体的な「古道」については、その規模はもとよりルートも明らかになっていない。根来寺と泉南地域の結びつきを考える上で今後ともこの「古道」の考古学的解明に期待がもたれるところであり、さらなる精力的な調査が望まれると言えよう。

第６節　３次調査

３次調査地は蓮華谷川を挟んで先述した２次調査の２区の東側 50mほどのところに位置している。谷川への急峻な崖近くであり、現状では坊院の敷地とは考え難いような場所であった。調査面積は 225㎡である。この調査では石垣や蓋石を伴う排水路を検出し、これらに伴って瓦、備前焼の壷・甕、土師質皿などの土器が出土している。基本土層は以下のとおりである。

第１層：10YR3/1　黒褐色砂質土

表土である。場所により含まれる礫の量に違いがみられるが、基本的には斜面からの崩落土に落ち葉などを主体とした腐植土が混在した土である。

第２a 層：2.5Y7/4　浅黄色砂質土

径５～10㎝の角礫を多量に含む。斜面からの崩落土である。

第２b 層：10YR4/64　浅黄色砂質土

径５～10㎝の角礫を少量含む。斜面からの崩落土であり、長期間にわたり崩落が継続したことによって堆積したものと考えられる。瓦、陶磁器等の遺物を含む。

第２b′層：2.5Y7/4　浅黄色礫層

径 5～10㎜程度の丸い礫から成る層である。

第２c 層：2.5Y7/4　浅黄色砂質土

径５㎜程度の白色砂粒を少量含み、硬くしまる。敷地内に搬入された整地土であると考えられる。第２b 層で出土している遺物の多くは当該土層の直上から出土している。

第２e 層：2.5Y7/4　浅黄色砂質土

径５㎜程度の白色砂粒及び径５～８㎝の角礫を少量含み、硬くしまる。当該土層は石垣の下にも認められ、石垣構築以前の整地土であると考えられる。

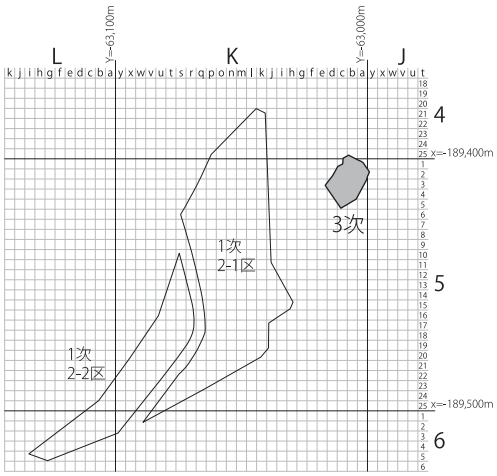


図 61　3次　調査区の設定と地区割図（S=1/3000）

第３a 層：2.5Y7/3　浅黄色砂質土

径５～15㎝程度の角礫を多量に含み、浅黄色砂質土を少量含む。石垣崩落後に第３b 層が流失したもので、混入する浅黄色砂質土は第２c 層の土であると考えられる。

第３b 層：2.5Y7/4　浅黄色礫層

径５～15㎝程度の角礫から成る層で、礫間には浅黄色砂質土が混入するが、隙間が目立つ。

写真４　３次　調査地遠景

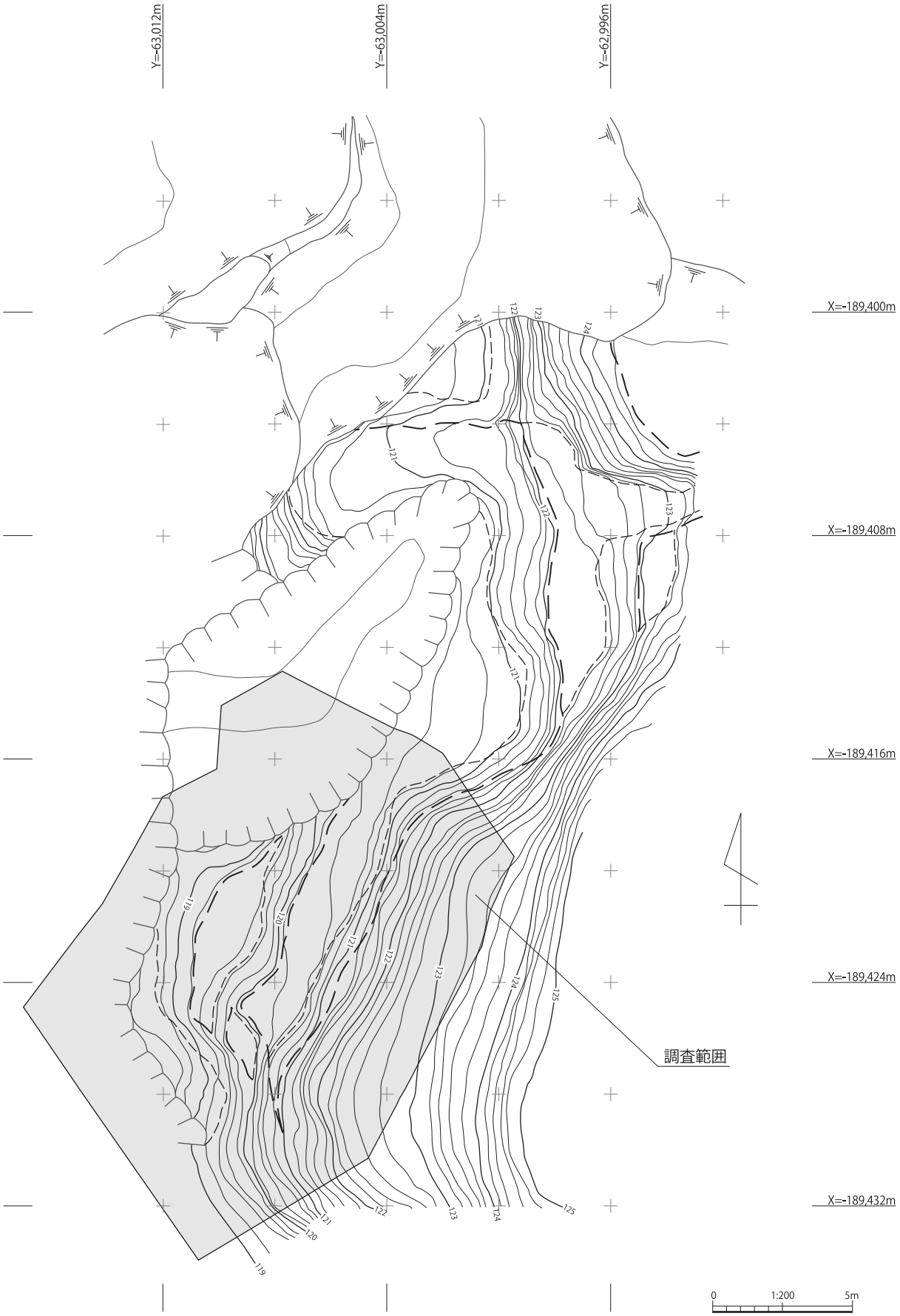


図 62　3 次　調査範囲と周辺の地形

当該層は第４層である岩盤上にあり、石垣裏込めと考えられる。

第３ｃ層：2.5Y7/4　浅黄色土層

第４層：5Y7/4　岩盤層

地山である。一定方向の層理が認められる岩盤で、堆積岩から成るが、一部変成作用を受けている可能性がある。

ａ．遺　構

１石垣　調査区の南端付近、崖に面して検出された石垣である。全体は「く」の字状に遺存しており、南面及び東面が残存する。南面の石垣は東面に比べ大きな石が使用されており、面取りとして粗割りの加工がなされているものもある。また、石材のひとつには矢穴痕が残る。南面する部分は、本来さらに北西へと延長していたものと考えられ、調査区外となる西側の急斜面上に石材と考えられる数個の石が表土上に散乱する。南面は確認規模で約３ｍを測り１～３段が遺存していた。基底部下端は西側から東側にかけて上り傾斜となっており、石垣各段の上辺はその基底部の傾斜に平行なラインを示している。推定ではあるが、基底部から天場までは 1.5m程度の高さとなり、もとは天場が水平になるよう石材が積まれていたものと思われる。

石垣裏込めは径 10～20㎝の角礫で、確認した限りほぼすべて第４層と同質の石であるが、わずかに砂岩の小片が混入する。直方体のものが多いのはこの礫の母体となっていた岩盤（第４層）の層理によるものであり、この敷地を掘削・造成した際に生じた岩石片を裏込めとして利用したものであると考えられる。あるいは排水性の確保とともに、軟弱な岩盤上に石垣を維持できる強度を求めたことも考えられる。裏込めの掘方幅は約２ｍで、通例の石垣の規模に比べてかなり大きなものとなっている。また、石垣は底部から崖の上端まで存在し犬走り状の空間に施された整地土層と考えられる第２ｅ層については、サブトレンチを設定して岩盤までの土層を確認したところ、岩盤は石垣面から崖方向に 30㎝ほど離れた位置から急激に下がっており、さらに第２ｅ

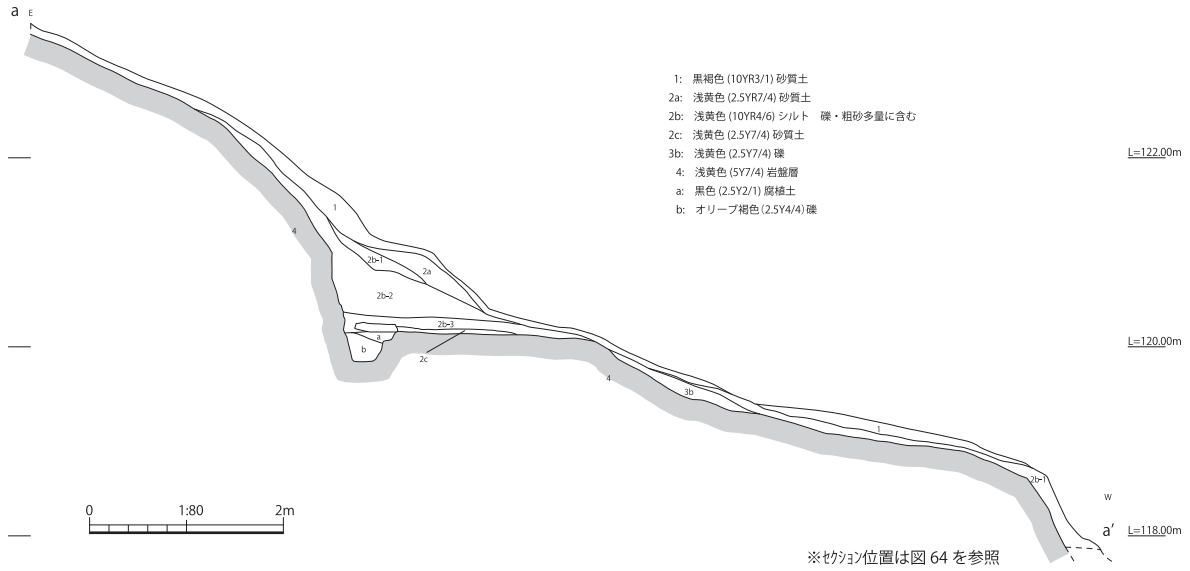


図 63 中央セクション断面図

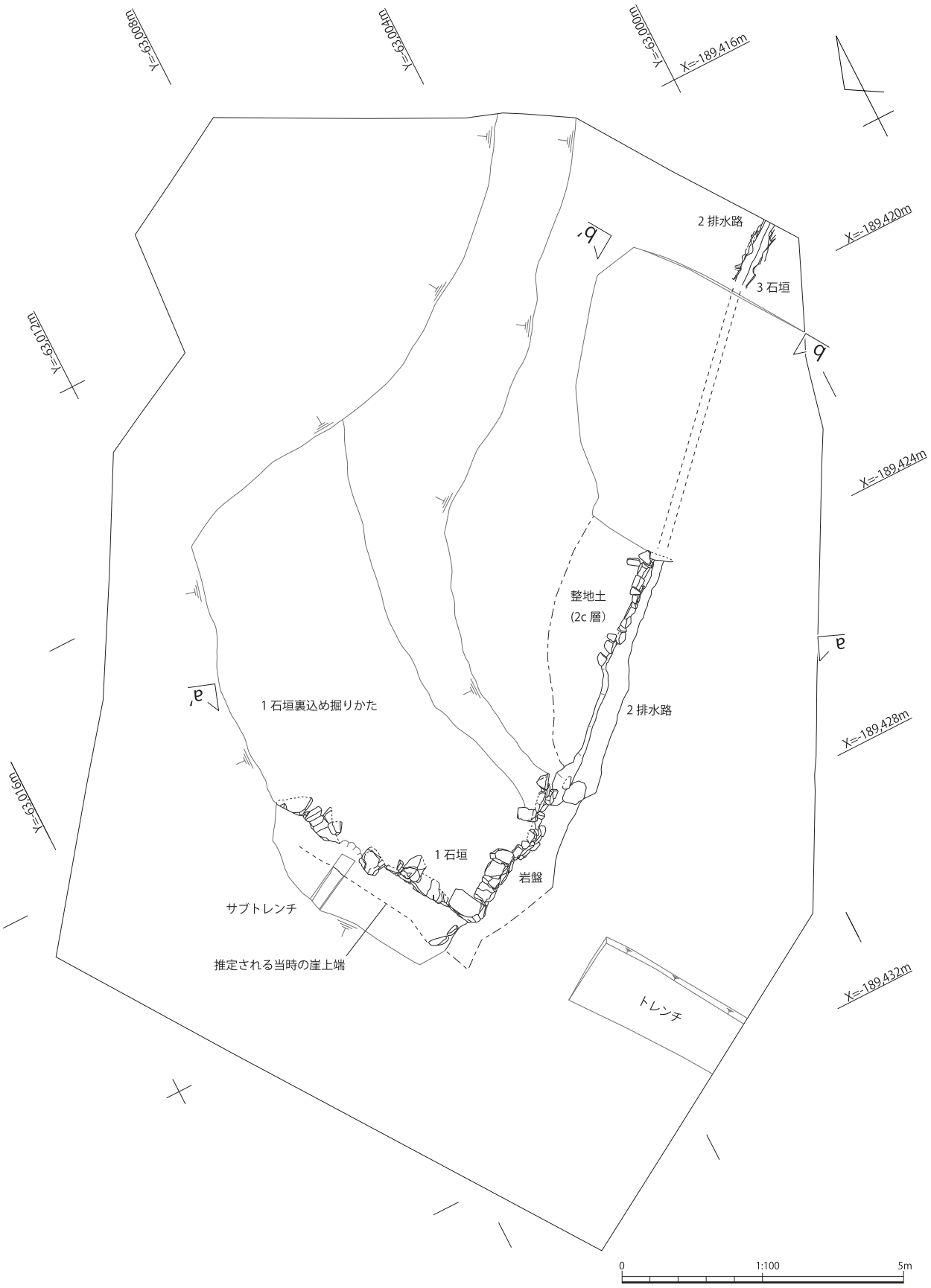

Y=-63,008m
Y=-63,004m
Y=-63,000m
X=-189,416m
X=-189,420m
X=-189,424m
X=-189,428m
X=-189,432m
Y=-63,012m
Y=-63,016m
2 排水路
3 石垣
b'
b
a
a'
整地土
(2c 層)
1 石垣裏込め掘りかた
2 排水路
1 石垣
岩盤
サブトレンチ
推定される当時の崖上端
トレンチ
0
1:100
5m

図 64　3 次　遺構全体図

層も石垣基底部から岩盤上端までの約 30㎝の幅にのみ認められる状況であった。これらのことから石垣に沿ったこの犬走り状の平坦面は、通行のための十分な広さを持たないもので、当該石垣は可能な限り崖面上端に接近させて構築されたものと考えられる。

東面は南面に比べ小振りな石材が使用されており、面の加工も施されていないものが多い。南面、東面に共通となる隅石は第 2e 層上に据えられているものの、それ以外は岩盤上に直接据えられている。1 石垣は岩盤・裏込め・石積みといった断面構造で、さらに東面石垣の基底部が曲線を描く。同様に裏込めが充填されている部分の岩盤はすべて上端(敷地平坦面)から曲線を描き

図 65　1 石垣　平面図・立面図

南面石垣の基底部まで続くものと推定され、これは敷地内に浸透した雨水等の排水を考慮したものであると考えられる。

２排水路　敷地北東側の岩盤斜面裾に沿って設けられた石組の排水路である。当該岩盤斜面は敷地造成に伴うものであるが、堆積岩層であり層理に沿って剥離しやすく、造成当初から岩盤斜面の崩落が顕著であったものと想像される。このことは第２ａ層に岩盤と同質の角礫が多量に含まれることからも裏付けられる。さらに第２ｂ層は、この平坦部分が敷地として利用されていた時期に堆積したものであると判断される。排水路の北側で顕著に堆積する第２ｂ′層は斜面の岩盤に由来する径５～10㎜の小礫から成る層で、この小礫は泥に包まれておりほぼ球状を呈している。人力掘削の際にもこの小礫は鋤簾からポロポロとこぼれ落ちるほどで、長期間にわたって小礫が斜面上から個々に転落した結果、層状に堆積したものとみられる状況を呈している。また、斜面裾には石垣が構築されておりこの石垣に沿って石蓋を持つ排水路が設けられているが、石垣の天場には微細な礫が混入するシルトを貼り、斜面の崩落を保護している。サブトレンチを設定して確認したところ、このシルト層は石垣天端から造成時の岩盤表面にまで達しており、貼るというよりは塗り固めているという状況であった。

岩盤に掘りぬいた溝の斜面側は石蓋を置く必要から断面を屈曲させて傾斜をやや緩やかにしており、この部分で石蓋石材を支える構造になっている。また、敷地側には割石を立て並べて側石としており、側石が石蓋を支えている。石垣東面基底部に沿って岩盤は非常に滑らかとなっているが、これは排水路の水流によるもの、または淀みのない水流を考慮した加工であると考えられる。排水路の堆積土は、３層に分層が可能であった。第１層は腐植土を含む黒褐色土で、表面に水流の痕跡が確認されたことから、最近まで石蓋までのわずかな空間が水路として機能していた

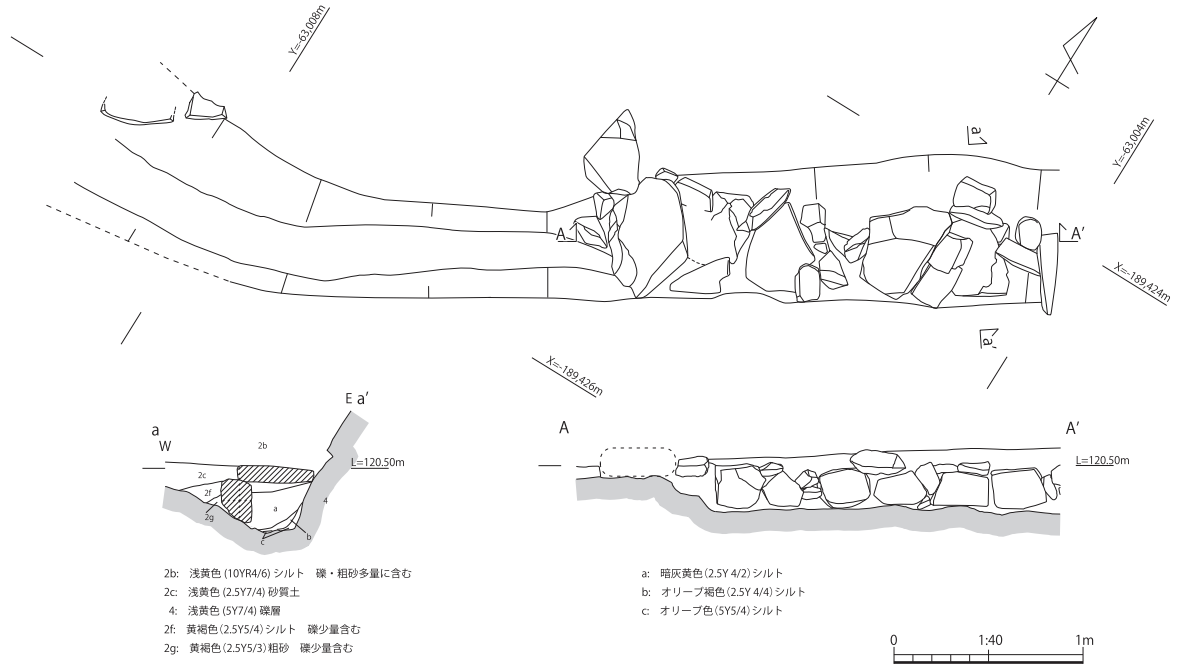


図 66　２排水路　平面図・立面図・断面図

ようである。第２層は黄色褐色シルトで、敷地上の建物等が廃絶した後、現代まで、水流によって少しずつ堆積したものである。さらに第３層は非常に粒度の小さいシルトで、排水路底に薄く堆積していた。

３石垣　斜面を保護するために積まれたもので、１石垣と同様に面は平面的に加工されているものの、天場石はなく、最上部にあたる個々の石材が断続的に突出する鋸歯状を呈している。また、最上部に安定性の乏しい 20㎝前後の礫が用いられていることから、当初この石垣の上部に堆積していたとみられた第２ｄ層は、岩盤の崩落防止のたる石垣天場に塗り込められた土である可能性も考えられよう。石垣周辺では落下したと思われる石材は見出し得なかった。また、裏込めは施されていない。

ｂ．３次調査の出土遺物

３次調査区は坊院の敷地と想定される場所ではあるが、面積が狭小なことと一部崩落により流失したためか出土遺物は少ない。以下、遺物について詳述しておく。

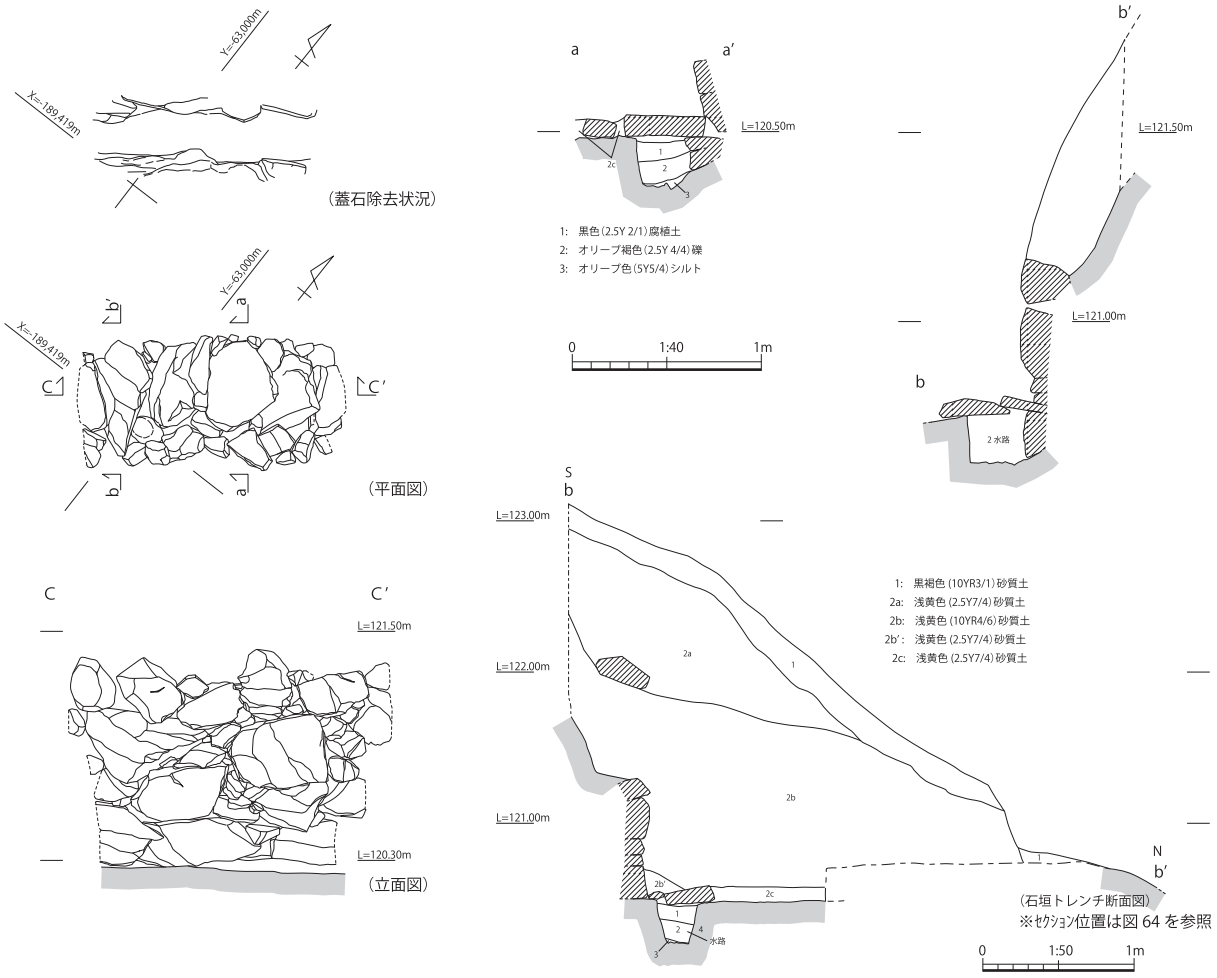


図 67　３石垣　平面図・断面図及び石垣トレンチ断面図

表土出土の遺物（図 68）

(269) は一石五輪塔で地輪部を欠く。和泉砂岩製である。(270) の平瓦は長さ 28.3㎝、幅 23.8㎝を測る。全体に灰白色を呈している。

2ｂ層出土の遺物（図 68）

(271) は備前焼の壷である。口縁部を欠いているが頸部が細く立ち上がり、口縁端部が外反する形状になるものと思われ、16 世紀中頃の可能性が高い壷である。(272) は備前焼の甕で短い頸部がやや外反気味に立ち上がり、端部はやや外へと引き出されている。16 世紀でも前半代の製品と考えている。

3層出土の遺物（図 68）

(274) は中国製の白磁皿で、復元口径 11.2㎝を測る。口縁部が大きく外反するタイプの皿で

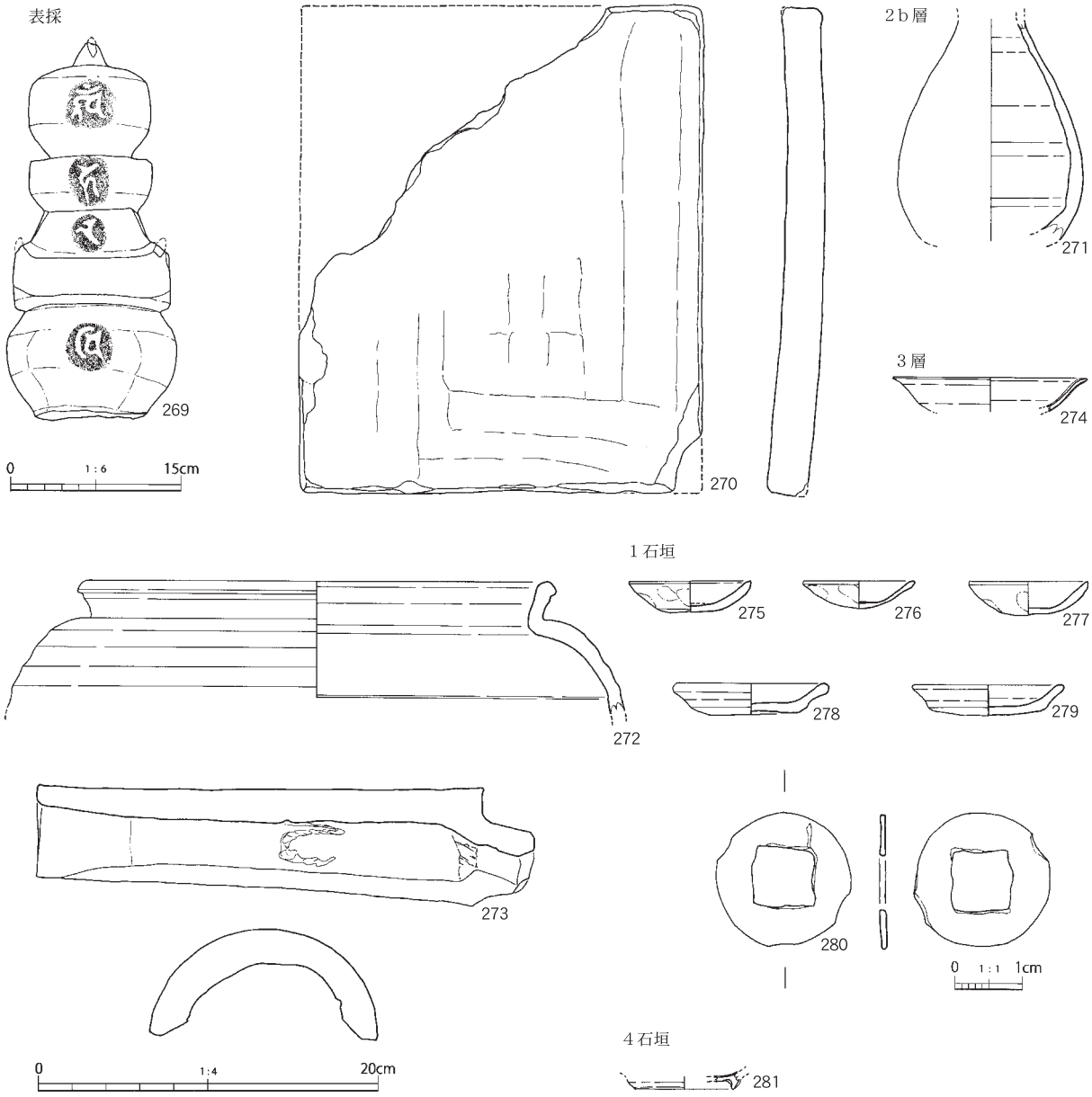


図 68　3 次　出土遺物実測図

あり、16 世紀中頃から末にかけてのものである。

１石垣出土の遺物（図 68）

（275～279）はいずれも土師質皿である。このうち（275～277）のタイプは 15 世紀代中頃から後半に、（278・279）の強いヨコナデを施すものは 16 世紀代に盛行するタイプである。（280）は無紋銭と考えられる金属製品である。

３石垣出土の遺物（図 68）

（281）は中国製の白磁皿底部で、前掲の（274）と同じタイプの皿である。

ｃ．３次調査のまとめ

今回の発掘調査の結果は、斜面の岩盤を切り拓きここに建物を建てるための敷地の造成がされたことを示すものであり、その時期については出土した遺物から 15 世紀後半ないし末の頃と推察される。検出された石垣は、わずかに崩壊を免れた一部分のみであったが、限られた範囲の岩盤上に建物を維持するための極めて有効的な手段として採用されたものであることが窺える。１石垣は斜面上の限られた範囲において可能な限りの平坦な敷地を確保するためのものであり、２排水路の排水機能は雨水等が地盤へ浸透することによって発生する斜面の崩壊を防ぐためのものであった。３石垣は斜面の崩落防止のために構築されたことは明らかであるが、１石垣とは異なり防護壁とでも言うべきものであり、斜面からの落石を防ぎ、かつ雨水等を基底部の排水溝へと導く構造となっている。

根来山内における石垣については、これまで多くの調査において検出され検討されているが、ともすれば大規模かつ堅固なもののみが俎上に挙げられ城郭などのイメージと相まって防御施設と認識されがちであるが、今回検出された１石垣や３石垣については、これらが戦時において防御性を発揮するようなものとは考え難く、敷地の確保・維持と斜面の補強を目的として採用されたものと理解できよう。そこには雨水等の処理を適切に行うことで限られた範囲内で効率的な土地利用を可能にした当時の人々の知恵が窺われる。

本調査区は川に面した斜面中腹にあるわずかな平坦部分の一部であるが、この平坦部分はさらに北東に 10 数m延長しており、さらに現在窪地となっている部分を含めると、ここに少なくとも 400㎡程の平坦面が復元できる。さらに調査地は奥の院に近く、調査区付近から細い谷状の地形が尾根の頂上付近まで延びることも併せて検討すると、ここから奥の院のある谷へ往来することも容易に可能となる。つまり、当該調査地は隔絶した存在ではなく、奥の院、さらには川を隔てているとはいえ桃坂谷を縦貫する古道へも最短でアクセス可能な場所とも言える。

今後山内の空間を考える上で、極めて重要な問題を孕んだものと思われ、検討に値する問題であることを提示しておきたい。

第７節　根来寺（１～３次調査）まとめ

これまで３次にわたる調査について詳述してきたが、ここではこれらの成果についてまとめておきたい。

１次調査の１区については、かなり広範囲の調査区であったが坊院などの敷地はまったく確認できず、生産域である水田跡を検出した。谷間地形の高低差のある場所であることから、これらの水田は高低差を伴うもので、その区画についても地形に則した弧を描く不正形な形状を示し、かつ小規模なものである。いわゆる棚田の形状を呈するものである。下図にも示すように調査区内では 13 に及ぶ水田区画を検出している。このうち棚田 13 および 14 については、東西の区画ラインが直線状となっており、これについては近世以降に改変された可能性が高いものと考えている。

水田が開発された時期については、出土遺物が少なく明瞭にし難いところであるが、旧耕作土からわずかに出土した土器をみると、根来寺が全盛期を迎える 16 世紀代、とりわけ天正の兵火時にかかる 16 世紀後半代の遺物はまったく含まれず、むしろそれより一時期古い鎌倉時代末から室町時代後半の時期に収まるものと思われる。

これらのことを考慮すれば、当該調査区の水田開発は 14 世紀代中頃には行われていたものと判断している。

一方、２次調査の３区においても中世まで遡る水田跡を確認した。この水田についても東側の山裾から小河川である洞尾川の間の狭小部であり、かつ山裾から川に向かって高低差を伴う地形で、その地形に合わせたような棚田状の水田区画を成していた。

前述の１次調査と異なっていたのは、段差部に石垣を伴っていた点である。ただし、その残りは悪く、後世に抜き取られたようで欠損部の多い状況であった。このことを考えると、１次調査で確認された水田域においても段差部分には本来石垣が設けられていた可能性も考えられよう。

いまひとつ両者の違いは、出土している土器の時期差がある。２次調査で出土している土器をみるとその土師器の皿はヨコナデが強く口縁部が肥厚するものであり、16 世紀に入って盛行するタイプと言える。したがって

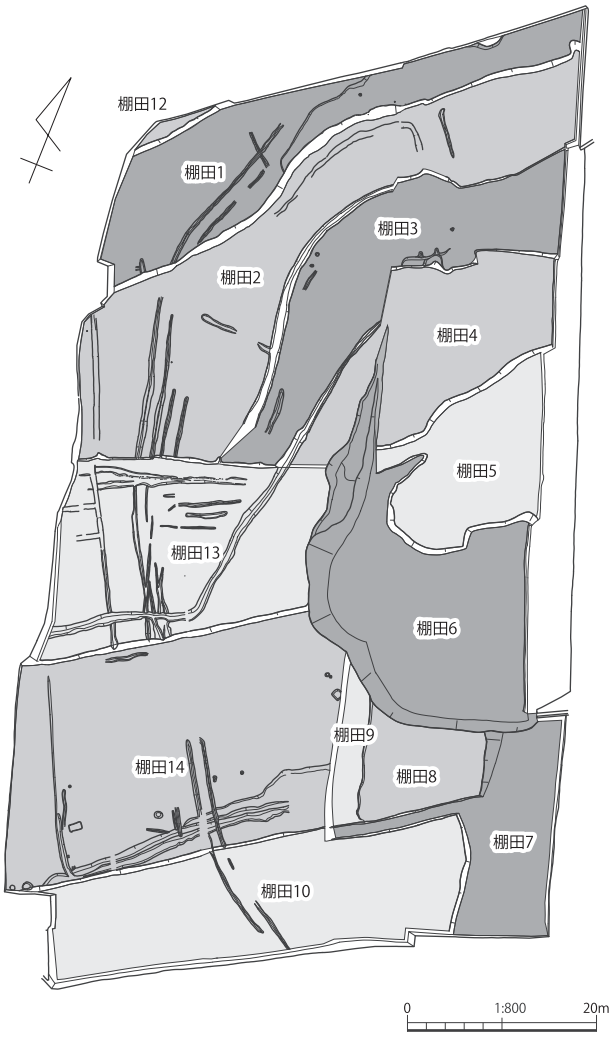


図 69　１次１区　棚田範囲

この土器を根拠にすれば当該地の水田については 16 世紀になって開発されたものと判断される。

以上のように、水田に開発時期に関しては両者に時間差は認められるもののともに生産域であり、この地に坊院の展開が見られないことは共通する。このことは中世の根来寺の範囲を考える上で極めて重要な事象と言える。

中世、それも天正の兵火（1585）直前の根来寺については隆盛を極め、広範囲に寺域が広がっていた。その西側については菩提院川を越え、現在の若者広場と呼ばれているグラント付近まで及んでいたことがこれまでの調査によって確認されているが、これ以西については調査事例がなく不明であった。今回の調査でこの域までは広がっていないことを確認し得たことは西限域を確定していくうえで貴重な資料を得たものと言える。

１次調査の２区では、従来途中から不明となっていた古道のルートを確認できたことが大きな成果と言える。再三述べたように、２区の中央部を縦貫している農道部については 30 年前に調査が実施されており、このときに農道下で 16 世紀まで遡る古道が検出された。道は幅 2.5mほどを測り側溝を伴うものであった。農道が途中から大きく北東に向きを変え山へと登っていくルートを取るところでこの古道が途絶えていた。当然のことながら、古道についてはそのまま直進していくことが想定されたが調査範囲外であったためこのことを確認するには至らなかった。今回の調査において、図 70 にも示したように想定通り古道は直進して延びていることが確認されたわけである。

この古道は、遺構の中で詳しく触れたように削平を受けており硬化面などは確認できなかったが、両側に建てられた坊院の敷地からやはり幅 2.5mほどを有するものであった。古道は北東方向に 50mほど直進した後、北向きに方向を変え 331 石垣や 323 石垣に沿うようにして直進していくことが判明した。この直進方向は、両側から山裾の迫る谷地形となっており、現在ではこの狭隘部を大きな堤で堰き止めた農業用の溜池が造られている。おそらく往古の道については、この溜池の底部を通って泉南地域と結ばれていたものと思われる。

２区出土遺物のうち土器類については時期ごとの消長を既述したが、ここでは紀年銘のある石造遺物について時代別の消長を記しておきたい。石造遺物については、329 石組溝から数多く出土しており、そのうちのいくつかには造立の年号を記したものが確認できた。また、それ以外の遺構、表土などからも数点出土しており、この調査においては 20 基を数える。これらの個々を一覧表にしたのが表２で、もっとも古いものが永正十五年（1519）銘を刻んだ宝篋印塔で、逆に最も新しいものは寛政四年（1793）の板碑状の墓石であった。このことからこれらの石造遺物は 16 世紀前半から 18 世紀末の幅に収まるものであることがわかる。

次に、これら 20 基を対象として 15 世紀末から 18 世紀末までを 10 年ピッチで区分し、各時期別の造立個体数をグラフで表したものが表３である。

もとより母体数が 20 基という極めて少ない数であり、さらに生前造立（逆修）なども想定で

図 70　1 次 2 区 344 道路　平面図

	造立年号	西　　暦	種　　類	出土遺構（層）	備　　考
1	永正15年	1519 年	宝篋印塔	１次2区表土	
2	大永３年	1523 年	一石五輪塔	遺構258	報告書未掲載
3	享禄４年	1531 年	板碑	遺構329	
4	天文12年	1544 年	一石五輪塔		
5	天文17年	1548 年	一石五輪塔		
6	永禄元年	1558 年	一石五輪塔		
7	永禄元年	1558 年	一石五輪塔		
8	永禄２年	1559 年	一石五輪塔		
9	永禄８年	1565 年	一石五輪塔		
10	永禄10年	1567 年	一石五輪塔		
11	永禄11年	1568 年	宝篋印塔		報告書未掲載
12	永禄12年	1569 年	一石五輪塔	１次2区表土	
13	永禄13年	1570 年	一石五輪塔	遺構329	
14	天正３年	1575 年	一石五輪塔		
15	天正５年	1577 年	一石五輪塔		
16	天正10年	1582 年	一石五輪塔		
17	天正10年	1582 年	一石五輪塔		
18	天正11年	1583 年	宝篋印塔		
19	宝暦９年	1760 年	五輪塔	遺構355	報告書未掲載
20	寛政４年	1793 年	墓石	１次2区表土	

表２　紀年銘石造物一覧表

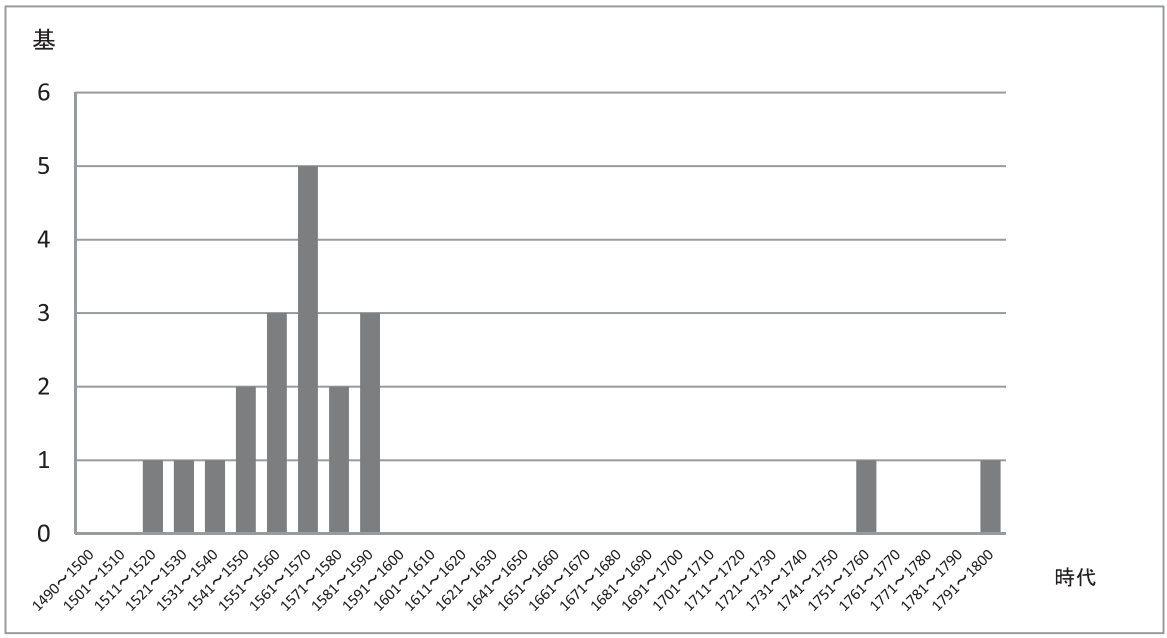


表３　時代別分布表

きるわけで、活動時期との間には多少のタイムラグが生じる可能性があるが、大まかな傾向として有効なものと考えた。

その結果をみると、造立が始まるのは 16 世紀の第一四半期に入ってからで、漸次増加傾向を示し、ピークは 16 世紀の第三四半期である。その後第四四半期に入っても造立が続くが、その途中でぴたっと途絶える。これはもちろん 1585 年の羽柴秀吉による根来攻めにより壊滅的打撃を受けたことに起因する事象であろう。その後 200 年近くの間、造立はまったく見られず、再び認められるのは江戸時代後期になってからで、その数もきわめて少ない。

以上のような傾向は、出土している土器の時代別傾向とほとんど合致しており、この 2 区界隈に坊院が展開を見せ、その数を増やしはじめるのはやはり 16 世紀になってからで、江戸期の復興期に入ってもかなり後のことであり、それも往時のような盛況には程遠い状況であったことがこの石造物の資料からも首肯できるものと言えよう。

第３章　山口古墳群

第１節　位置と地理的環境

山口古墳群は、和歌山県と大阪府との境をなす、東西に横たわる和泉山脈の南裾部分にあたる箇所に所在しており、現在の行政区画で言えば、和歌山市の北東部、岩出市との境近くにあたる。今回の調査地点である 10 号墳と考えられていた丘陵頂部で標高約 175mを測る。現在、この山裾を縫って近畿自動車道が走っており、東側の山峡を抜けて大阪へと通じている。また、この山峡部には JR 阪和線も通っている。

第２節　歴史的環境

山口古墳群は、前方後円墳１基と円墳 10 基からなるとされている古墳群であるが、今回の調査によって従来古墳とされていた 10 号墳については、自然地形の高まりであって古墳ではないことが判明したことでもわかるように、これまで調査事例がなくその詳細についてはよくわかっていないのが現状である。今後この地域の調査が進めば、その数が減ずることも充分に考えられるが、逆に新たな古墳の発見の可能性もあるものと思われる。

この山口古墳群のほか、すぐ西側の丘陵部には前方後円墳１基と円墳７基からなる上野古墳群が所在しており、この付近一帯は県内でも古墳の多いことで知られている地域と言える。こうした古墳の築造にあたったのは、丘陵の南側の河岸段丘上に生産基盤をもつ勢

写真５　山口古墳群調査地遠景

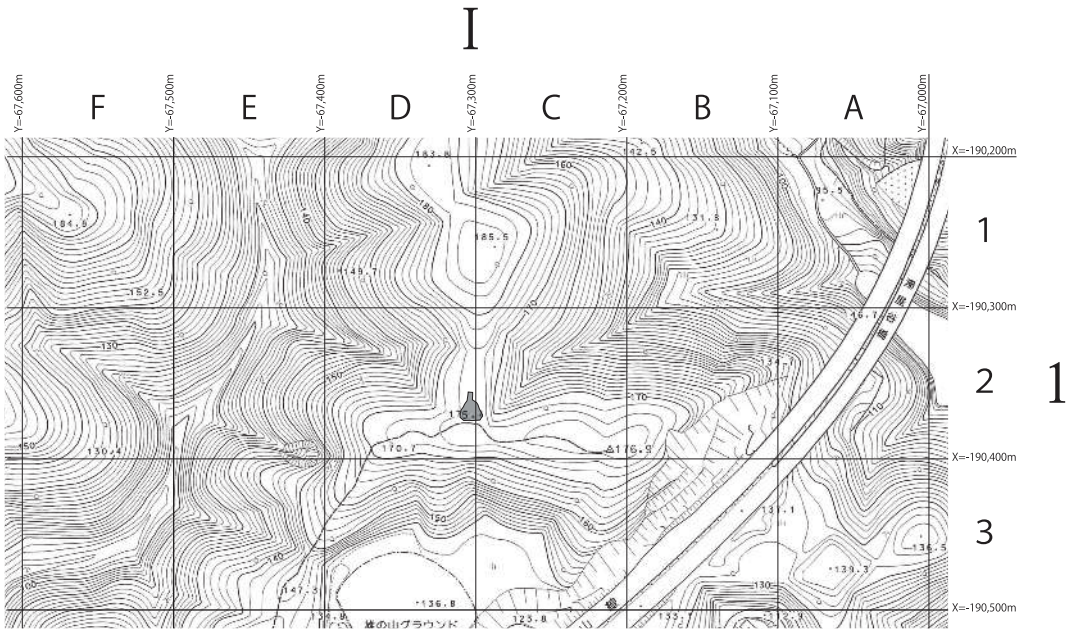


図 71 調査位置と周辺の地形

力であったと推定できるが、実際に当地周辺は、県下でも遺跡の多い地域として知られており、宇田森遺跡・藤田遺跡・山口遺跡・中筋日延遺跡など弥生時代から奈良時代の集落跡が密度濃く分布している。このうち山口遺跡は、南約１kmに位置しており、これまでの調査で弥生時代末から古墳時代はじめにかけての遺構・遺物が確認されたほか飛鳥時代の掘立柱建物群が検出されており、遺跡のすぐ北側に位置する山口廃寺との関係性が着目されている。

宇田森遺跡は今回の調査地点から南西約３kmに位置しており、昭和40年代前半に発掘調査が実施され弥生時代中期の竪穴式住居が数多く見つかっている。また、この時期の良好な遺物も多く出土しており、県下の弥生土器編年の基準資料となっている遺跡である。

藤田古墳は、前述の山口遺跡のすぐ西側に所在する直径15mほどの円墳で、主体部は竪穴式石室であり、土器とともに鉄刀が出土したと伝えられている。丘陵上に古墳が築造されることの多い紀ノ川流域にあって、本古墳は平地に近い立地を示し、かつ５世紀代の古墳として注目されよう。

そのほかこの地域は、古代に入ると南海道が西走し、とりわけ都が奈良から平安京に変るに伴って前述の山峡、雄ノ山峠を越えこの南海道へとはいるルートとなることから、この地域は紀の国の玄関口、交通の要衝でもあったとも言えよう。

第３節　発掘調査の方法

発掘調査は原則的に当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006）に準拠し行った。発掘調査で使用した調査コードは、13-01・138（2013年度－和歌山市・山口古墳群）である。出土遺物、記録資料はこの調査コードを用いて管理している。実測図作成や遺物取り上げの際に用いた調査区の地区割は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）の座標軸を使用し、

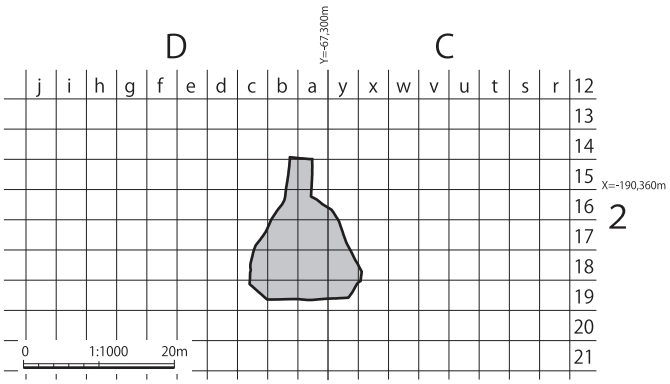


図 72 地区割り図

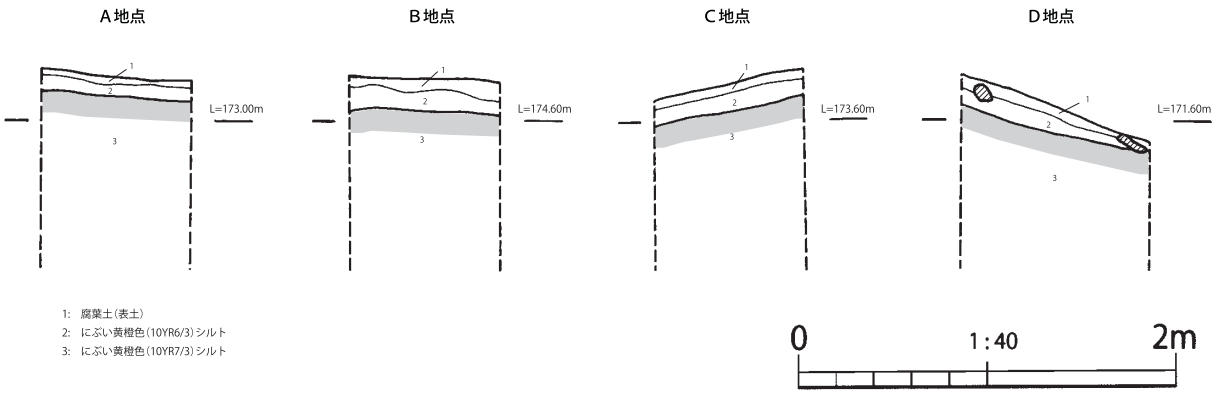


図 73 基本層序

数値はｍ単位で表示している。地区割りの基点は今回の調査地のみならず今後のこの周辺での調査を考慮し、この付近一帯を網羅する基点（Ｘ＝-190.20km、Ｙ＝-67.00km）を設け、この基点から西方向と南方向にそれぞれ１km 四方の区画を１単位とする大区画を設定し、北東端を基点に西方向へローマ数字Ｉ～Ｘ、南方向へアラビア数字で１～６と表記している。次に大区画内をそれぞれ 100m四方の区画を１単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へ大文字アルファベットでＡ～Ｊと、南方向へアラビア数字で１～10 と表記した。今回の調査区は大区画で言えばＩ１相当し、中区画ではＣ２・Ｄ２の２区画に及ぶ。

調査ではさらに４m四方の区画を１単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でａ～ｙと、南方向へアラビア数字で１～25 と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として４m四方の小区画で行い、中区画－小区画を組み合わせて表記することにしている。方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）からのプラス値を使用した。

写真撮影については６×７判モノクロフィルム・35mm のカラーリバーサル・モノクロフィルムを使用した他、適宜デジタルカメラによる撮影を行った。記録図面については、Ｓ＝1/100 の平板地形測量図のほかＳ＝1/50 の調査区平面図、Ｓ＝1/10・1/20 の個別遺構実測図（土層断面図・遺構図を含む）を作成した。

第４節　調査の成果

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である山口古墳群の範囲に入るもので、このうちの山口 10 号墳に相当すると考えられていた箇所である。この山口 10 号墳と考えられていた箇所は、東西に伸びる丘陵尾根筋と南北に伸びる丘陵尾根筋が交わる高所に位置しており、直径 12m、高さ２mほどの円形の高まりとなっていた。この高まり部を中心に調査区を設定したもので、調査面積は 660㎡である。

この調査と並行して調査区及びその周囲の地形を把握するため平板測量を実施した。その結果、図 74 として掲載したように北側では円弧を描かず、細く伸びることが判明した。一見、前方後円墳の形状を呈しているが、埋葬施設はもちろん人為的な改変はまったく見当たらないことから自然地形であるとの判断に至った。調査は、基本的には第１層の腐葉土である表土、第２層としているにぶい黄橙色のしまりの悪い土を人力掘削により掘り下げ、基盤層である第３層上面で遺構検出を行った。その結果、調査区頂部の試掘調査において一字一石経が集中して見つかっていた箇所で礫石経塚を検出した。

ａ．遺　構

礫石経塚　２層としているにぶい黄橙色のしまりの悪い土を若干掘り下げ、遺構精査を行った結果、直径 60㎝、高さ 15㎝ほどの土饅頭状に礫石経が積み上げられ置かれている遺構を検出した。用いられている石は 2～4㎝大の扁平な川原石で、現地で確認した段階では大部分に経文の一字と思われる漢字が墨書されているのを確認した。設置されていた箇所はわずかに窪んではい

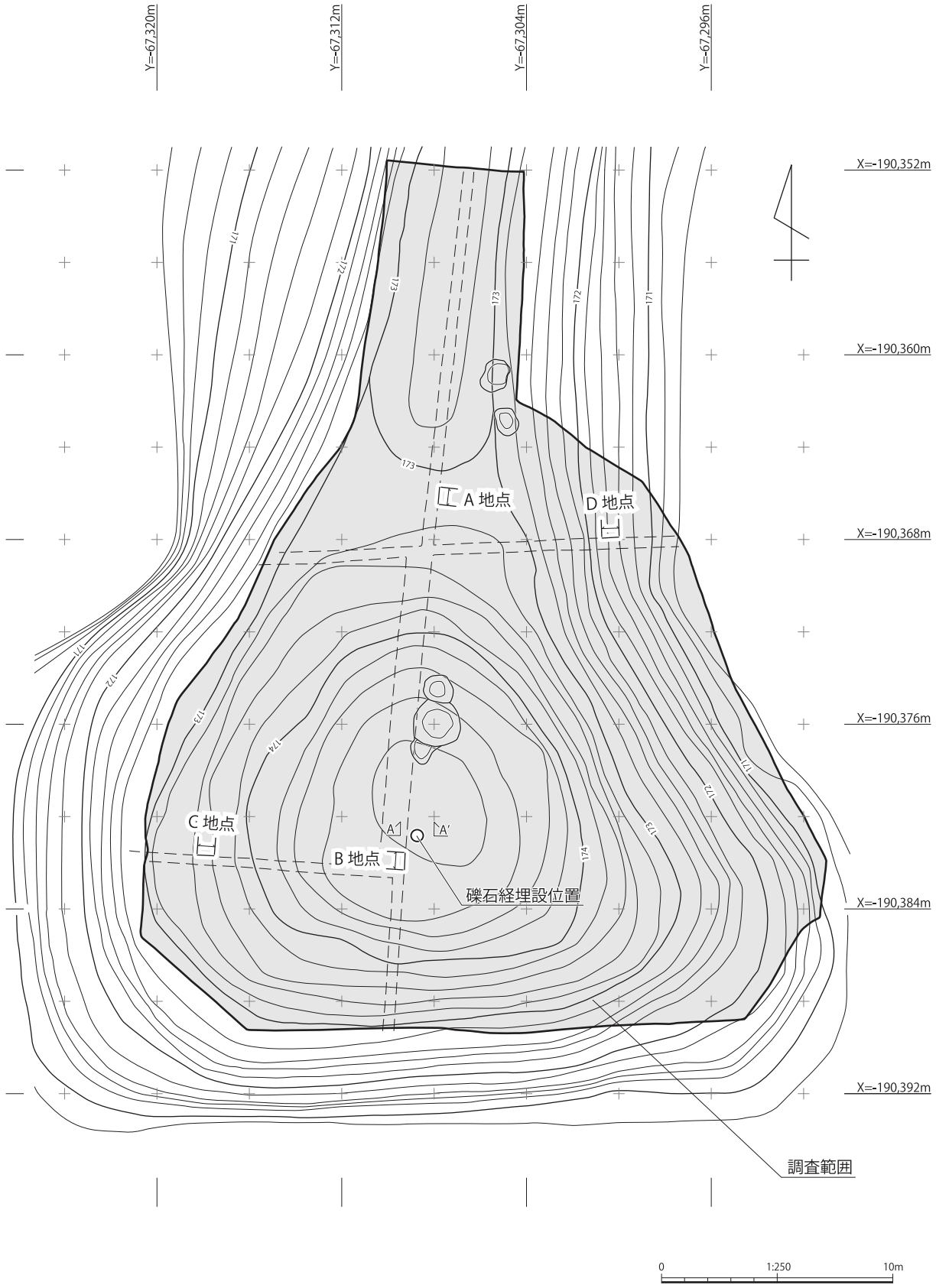


図 74 調査区平面図と地形

るものの、これを設置するためにわざわざ掘り込んだという状況ではなく、表土を取り除いた上に据え置いたものと考えられる。また、据え置かれた地盤は軟質の岩盤で、この岩盤を掘り抜き賢瓶など他のものを埋納している痕跡はまったく検出されなかった。

検出された状況が土饅頭状に盛り上がっており、比較的埋納時の現況を保っている考えられることから、露出していたものではなく、土饅頭状に築いた後、土を被せていたものと思われ、お

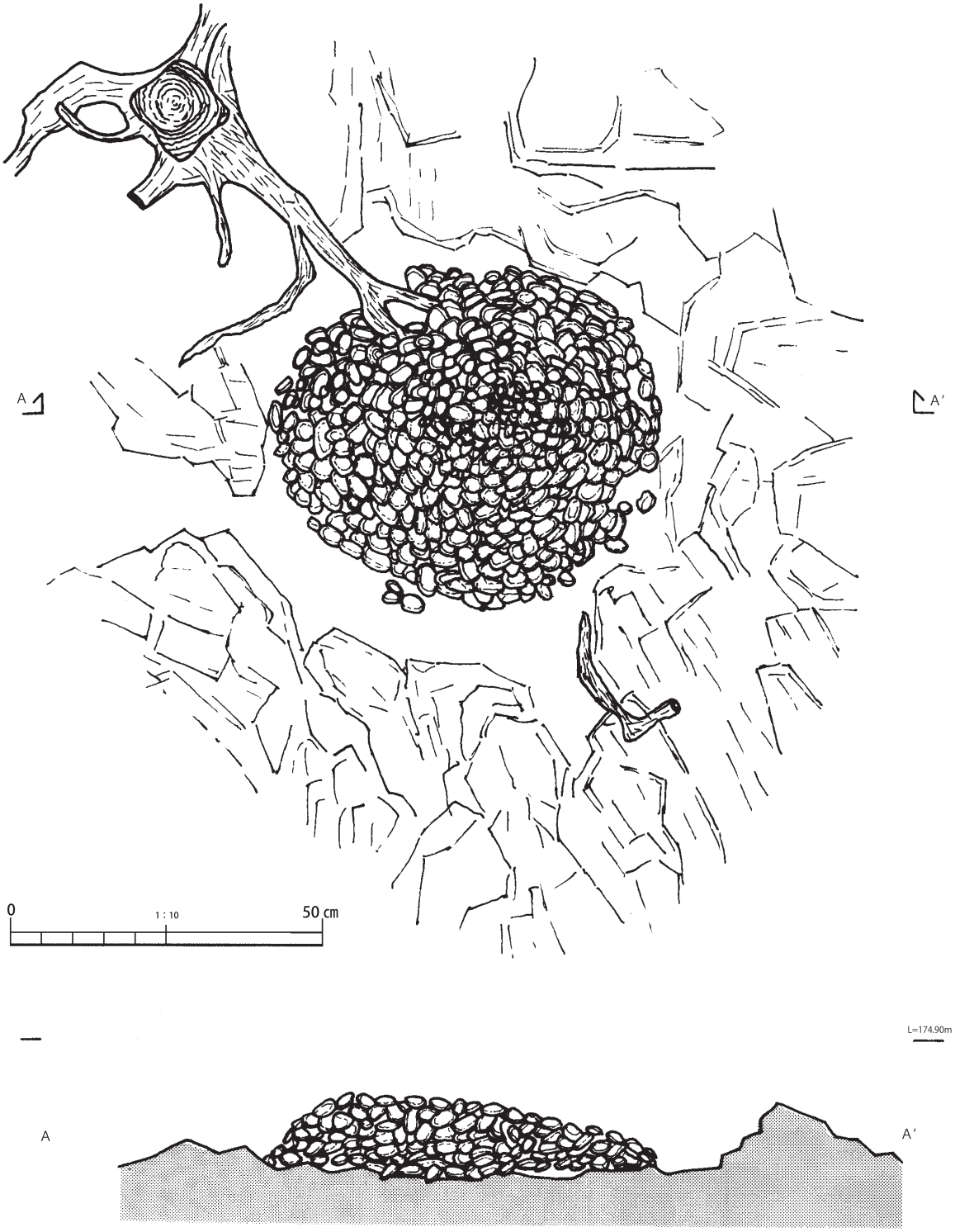


図 75 礫石経理納遺構　平面図・立面図

そらく当初にはその傍らに木標や石碑などの地上標識が設置されていたものと推定される。

なお、調査区全域においてこうした遺構がさらにある可能性を求めて精査を加えたが、結果的にはこの一基のみにとどまった。検出された場所が頂部の南側で、平野部を眺望するのに適した箇所で遭ったことを考えると、あえてこの場所を選定し埋納したことが窺えると言えよう。

b．遺　物

出土した遺物は、すべて礫石経のみであり土器類などは全く出土していない。礫石経の石の大きさは小さいものでは１㎝未満、大きいものでは５㎝を越えるものもあるが、平均すれば３㎝前後であった。

総数は 4,421 個で、このうち明らかに書かれた文字が判読できるものが 336 個、字が書かれてはいるもののその字の判別ができなかったものが 1,066 個、消えてしまったか、最初から書かれていなかったと思われるものが 2,989 個を数えた。

確認できた漢字の中で頻出するものは、「佛」が 16、「薩」9、「大」が 7、「種」と「人」がそれぞれ６、「為」「衆」「萬」がそれぞれ５個を数えた。

また字体を検討した結果、図 78 で示した菩薩の「薩」の字でみると明らかに字体の違うものが認められることから一人で行ったものではなく複数の人によって書写されていることが判明した。さらに、どの経を書写したかを探るために可能性の高い法華経の経典いくつかについて合致率を試みた。そのうちもっとも合致率が高かったのが、「無量義経」の序文ともいえる「徳行品第一」で経文字 1,017 に対して合致した漢字は 251、合致率 24.68％という数値を得た。

しかし経典に用いられる字は共通するものも多く、基となった経典を特定するには至っていない。

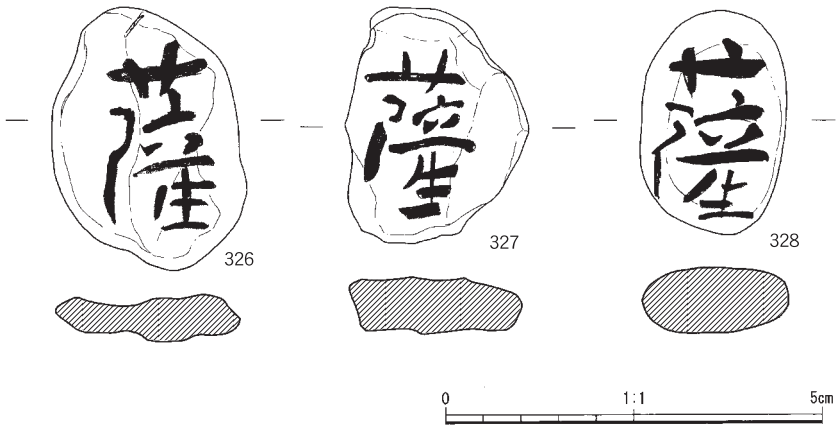


図 76 筆跡の異なる経石例

図 77 出土経石実測図（1）

図 78 出土経石実測図（2）

c．ま と め

礫石経塚については、これまで全国で数多く見つかっており、とりたてて地域的な偏在を見せることなくほぼ全国的な分布をもつものと言える。時代的には、礫石経自体の紀年銘から最も古い例として知られている福島県会津坂下町中目経塚の天文 13 年（1544）が知られているほか鎌倉市多宝律寺新善光寺やぐら出土の礫石経などはやぐら（中世の上流階級の墳墓）の年代や共伴遺物から 14 世紀中葉として捉えられており、こうした事例から礫石経の埋納は 14 世紀前葉、室町時代にはすでに行われていたとされる。ただ、中世にまで遡ることのできるこの種の遺構・遺物は少なく、近世に入ってその数を増し、盛期は江戸時代後期のことで、近代に入るとこの種の信仰遺構は姿を消す。

礫石経が埋納される場所については、前代の経塚が主に社寺境内の中もしくはその近辺に埋納されるのに対して、社寺以外にも古墳の墳丘やその近傍、交通の要衝である街道筋や辻、岬のほか今回のような田畑・村落などを一望できる丘陵あるいは微高地上などさまざまである。

和歌山県内においては、これまで新宮市の阿須賀神社経塚・神倉山経塚・速玉大社経塚、那智勝浦町の那智経塚など紀南地方での確認例が多いが、そのほかにも海南市の長保寺経塚、広川町の男山経塚が知られており、近年では和歌山市の和歌浦に所在する海禅院の多宝塔に納められた 15 万体以上といわれる礫石経について調査が進められている。また、やはり京奈和自動車道建設に伴う発掘調査でかつらぎ町の加陀寺前経塚が調査されているが、この調査地には、文政五年（1822）の銘をもつ「法華塚」と記された石碑が現存しており、その釈文によれば当地出身の高野山の僧侶が埋経を行ったことが読み取れる。調査では後世の削平により遺構自体は確認することはできなかったが、時期及び場所から今回のように礫石経が埋納されていた可能性がきわめて高いものと思われる。以上、県内では 20 を越える確認例が知られているが、江戸時代のものとされている。

今回の調査で確認することができた礫石経塚については、土器などの共伴遺物がまったくなく、時期については明確にし難い状況であるが、前述した全国の類例や県内の傾向から推して江戸時代のものと考えるのが妥当と思われる。

その埋納目的や主体者についても現段階では不明と言わざるを得ないが、当地が修験道のルートのひとつに当たっていることからその関連の可能性も考えられよう。それとともに近世にはいるとこうした仏教的作善業の勧進として六十六部、いわゆる廻国聖が深く介在した例が知られており、その可能性も視野に入れておく必要があるものと思われる。

いずれにせよ今回の調査で見つかった礫石経塚は、これまで県内で見つかっている礫石経が散逸した形で発見されているのとは異なり、発掘調査により埋納状況を保って検出されたものである。このことの意義は大きく、当時の人々の祈りの形態を知る上で貴重な資料と言える。

遺　物　観　察　表

遺物観察表：土器類

（　）内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区			遺構層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
	遺跡名	区画	グリット										
1	根来1次	1-1	S7 m,24	棚田1 2d層	土師器	小皿	(7.9)	2.0	(4.0)	10%	密(1mm以下の石英、白色粒砂を少量含む)	内)10YR8/3(浅黄橙)、10YR7/3(にぶい黄橙) 外)10YR8/4((浅黄橙)、2.5Y7/2(灰黄) 断)10YR8/3(浅黄橙)	
2	根来1次	1-1	S7 m,24	棚田1 2d層	土師器	皿	(9.5)	1.0	(7.8)	40%	密(1mm大の石英、灰色粒石少量含む)	10YR8/2(灰白)	
3	根来1次	1-1	S8 m,1	棚田2 2a層	土師器	小皿	7.1	2.2	3.9	70%	密(赤・黒粒砂微量含む)	10YR8/4(浅黄橙)	
4	根来1次	1-1	S8 m,1	棚田2 2a層	土師器	小皿	7.5	1.7	4.8	90%	密(赤粒微量含む)	10YR8/4(浅黄橙)	
5	根来1次	1-1	-	棚田2 西壁側溝 灰色シルト	東播系 須恵器	擂鉢	(17.5)	2.7	不明	口縁部5%	ち密(1mm大の石英微量含む)	釉)N4/(灰) 外)N7/(灰白) 断)N7/(灰白)	
7	根来1次	1-1	S8 g,21	棚田10 2層	土師器	小皿	8.0	1.3	7.2	90%	密(1mm大の石英、白・赤色粒少量含む)	内)7.5YR8/4(浅黄橙) 外)7.5YR7/4(にぶい橙)、7.5YR5/4(にぶい褐) 断)5YR6/6(橙)	
9	根来1次	2-1N 区画4	中央部	機械堀削	土師器	皿	8.6	2.1	-	98%	密(1～2mm大の石英粒、雲母、赤色斑粒含む)	5YR5/6(明赤褐)	
15	根来1次	2-2S 区画1	-	1b層(床土)	東播系	片口	不明	(4.0)	不明	不明	密(1mm以下の石英・長石粒含む)	内・外)N6/(灰),N3/(暗灰)	
16	根来1次	2-2S	L6 c,3	225 1・2層 黄灰色土	灰釉陶器	碗	不明	(2.2)	(5.4)	10%以下	密	釉)5Y7/3(浅黄) 露胎)7.5Y8/1(灰白)	
17	根来1次	2-2S	K5 w・x,24・25	2層	青磁	碗	(11.6)	(3.4)	不明	10%以下	密	釉)10Y5/2(オリーブ灰)	
18	根来1次	2-1N	K5 l・m,2	褐灰色土	土師器	皿	(9.0)	1.9	-	40%	密(1mm大のチャート・石英粒、赤色斑粒含む)	10YR7/4(にぶい黄橙)	
19	根来1次	2-1N	K5 l・m,2	褐灰色土	土師器	皿	(8.8)	2.1	-	50%	密(1mm大の石英粒、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
20	根来1次	2-1N	K5 l・m,2	褐灰色土	瓦質土器	擂鉢	(30.2)	(8.1)	不明	10%	密	内・外・断)5Y8/1(灰白)	
21	根来1次	2-1S	K5 l,18・19	東壁側溝	備前	壺	(26.2)	(17.0)	不明	10%	やや粗(5mm大の砂粒含む)	内)10YR4/2(灰黄褐),10YR5/4(にぶい黄褐) 外)5Y8/1(灰白),N4/(灰) 断)N6/(灰)	
22	根来1次	2-2S	L6 c,2	201 石組掘方	土師器	皿	8.4	1.8	3.1	80%	密(1～2mm大の片岩・石英・長石粒含む)	5YR7/8(橙)	
23	根来1次	2-2S	L6 c・d,1	201 埋土	土師器	皿	(16.4)	(2.9)	(9.4)	20%	密	内)10YR7/1(灰白)～2.5Y7/3(浅黄) 外)5YR6/4(にぶい橙)～10YR8/2(灰白)	
24	根来1次	2-2S	L6 c,2	201 埋土(石組)	青磁	碗	不明	(4.0)	(5.6)	15%	密	釉)10Y6/2(オリーブ灰) 断)7.5Y8/1(灰白)	
25	根来1次	2-2S	L6 d,2	201	備前	壷	(8.8)	(2.6)	不明	不明	密	N6/(灰)	
26	根来1次	2-2S	L6 b～e,1～3	201 石組掘方	土師器	皿	(8.4)	2.0	(3.8)	30%	やや粗(1～2mm大の長石・石英・片岩粒、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
27	根来1次	2-2S	L6 d,2	211	土師器	皿	(10.6)	1.7	(4.0)	90%	密(1～2mm大の石英・長石・雲母・赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
28	根来1次	2-2S	L6 d,2	211	土師器	皿	8.7	1.9	6.0	80%	密(1mm大の石英・長石・雲母・赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
29	根来1次	2-2S	L6 b～e,1～3	201 石組掘方	瓦器	碗	不明	(1.1)	(4.8)	10%	密	内・外)N8/(灰白),N5/(灰)	
30	根来1次	2-2S	L6 b～e,1～3	201 石組掘方	青磁	碗	(26.2)	(4.9)	不明	15%	密	内・外)緑灰 断)N8/(灰白)	
31	根来1次	2-2S	L6 b～e,1～3	201 石組掘方	青磁	天目碗	(10.6)	(3.2)	不明	10%	密	褐釉)7.5YR4/4(褐) 天目釉)10YR2/1(黒) 断)2.5Y7/3(浅黄)	朝鮮製か？
32	根来1次	2-2S	L6 b～e,1～3	201 石組掘方	施釉陶器	碗	(12.0)	(3.4)	不明	15%	やや粗	釉)2.5GY6/1(オリーブ灰) 断)N8/(灰白)	
33	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	土師器	皿	(8.0)	(1.7)	3.6	48%	密	2.5Y7/3(浅黄),2.5Y3/1(黒褐)	
34	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	土師器	皿	(9.0～10.0)	(2.1)	(4.6)	35%	密(1mm以下の石英・長石・雲母粒・赤色斑粒含む)	2.5Y4/1(黄灰),2.5Y7/2(黄灰),5YR6/4(にぶい橙)	
35	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	土師器	皿	(4.2)	1.6	(5.3)	45%	密	5YR6/6(橙),10YR6/1(褐灰)	
36	根来1次	2-2S	L6 e・f,4	202 埋土	土師器	皿	8.4	2.0	-	60%	密(1～3mm大の石英・長石・雲母・赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
37	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	土師器	皿	(4.4)	2.0	-	45%	密(1～5mm大の片岩・長石・赤色斑粒含む)	7.5YR7/4(にぶい橙),10YR5/1(褐灰),5YR6/6(橙)	
38	根来1次	2-2S	L6 e,4/f,3・4	202 埋土	土師器	皿	8.8	1.9	-	90%	密(1mm大の片岩・石英・長石含む)	7.5YR6/6(橙)	
39	根来1次	2-2S	L6 f,4	202	土師器	皿	(18.8)	(3.3)	(14.4)	10%以下	密(1～2mm大の石英・長石・チャート粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
40	根来1次	2-2S	L6 f,4	202	土師器	皿	(18.8)	(3.2)	(16.0)	20%	密(1～4mm大の長石・石英・片岩少量含む、赤色斑粒含む)	5YR5/6(明赤褐),7.5YR7/8(黄橙)	
41	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	瓦質土器	-	(12.4)	(3.0)	(19.4)	10%	密	内・外)N3/(灰) 断)5Y8/1(灰白)	
42	根来1次	2-2S	L6 f,4	202	灰釉	皿	不明	(0.6)	(5.6)	10%	密	内・外)7.5Y5/3(灰オリーブ) 断)2.5Y7/2(灰黄)	
43	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	青磁	碗	(22.4)	5.5	(6.0)	15%	密	釉)7.5Y7/2(灰白) 露胎)2.5Y5/1(黄灰) 断)2.5Y7/1(灰白)	
44	根来1次	2-2S	L6 e,4/f,3・4	202 埋土	白磁	碗	(11.2)	3.3	(4.0)	15%	密	内・外)10Y6/1(灰)	
45	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	中国染付	皿	(18.0)	(4.5)	(9.4)	45%	密	内・外)7.5Y7/1(灰白) 呉須)5BG4/1(暗青灰)	
46	根来1次	2-2S	L6 e,4/f,3・4	202 埋土	染付	碗	不明	(2.3)	4.5	25%	密	内・外)7.5GY8/1(明緑灰) 呉須)紺	
47	根来1次	2-2S	L6 e,4/f,3・4	202 埋土	染付	碗	(11.6)	(4.4)	不明	15%	密	内・外)7.5GY8/1(明緑灰) 呉須)5B6/1(青灰)	

（　）内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区			遺構層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
	遺跡名	区画	グリット										
48	根来1次	2-2S	L6 f,4	202	備前	甕	不明	(7.9)	不明	不明	密(1～5mm大のチャート、長石粒含む)	2.5YR3/3(暗赤褐)	
49	根来1次	2-2S	L6 f,4	202 埋土	常滑	甕	(43.0)	(11.2)	不明	10%以下	密(1～5mm大の長石・石英粒やや多く含む含む)	内)N4/(灰) 外)7.5YR5/3(にぶい褐)	
50	根来1次	2-2S	L6 e・f,4	202 埋土	焼締陶器	擂鉢	不明	(8.5)	(14.0)	10%	密(1～3mm大の砂粒少量含む)	内・外)2.5YR6/6(橙)	
56	根来1次	2-2S	L6 e,3	203	染付	碗	(11.0)	(3.2)	不明	10%	密	釉)10Y8/1(灰白) 呉須)灰青	
57	根来1次	2-2S	L6 d・e,1	206 南半部 埋土	施釉陶器	皿	(10.6)	(2.0)	不明	20%	密	釉)7.5Y7/2(灰白) 断)2.5Y8/1(灰白)	
58	根来1次	2-2S	L6 d・e,1	206 南半部 埋土	土師器	皿	(14.0)	(1.4)	(11.6)	20%	密(1mm大の石英・赤色斑粒含む)	10YR6/4(にぶい黄橙),2.5YR6/6(橙)	
59	根来1次	2-2S	L6 e,1	207 埋土	土師器	皿	(8.0)	1.9	－	30%	密(1mm大の石英・長石粒含む)	10YR7/3(にぶい黄橙)	
60	根来1次	2-2S	L6 e,1	207 埋土	土師器	皿	8.5	1.7	－	98%	密(1mm大の片岩・チャート・石英・長石・少量の赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
61	根来1次	2-2S	L6 e,2	209	土師器	皿	(3.6)	(1.7)	(3.2)	40%	密	2.5Y7/3(浅黄)	
62	根来1次	2-2S	L6 e,2	209	土師器	皿	8.5	2.1	－	100%	密(1～3mm大のチャート・石英・赤色斑粒含む)	7.5YR7/8(黄橙)	
63	根来1次	2-2S	L6 e,2	209	土師器	皿	(7.0)	(1.4)	(2.6)	80%	密(雲母・赤色斑粒含む)	10YR7/4(にぶい黄橙)	
64	根来1次	2-2S	L6 e,2	209	土師器	皿	8.5	2.3	2.9	100%	密(1mm以下の長石・石英・雲母・赤色斑粒含む)	内)5YR6/6(橙) 外)7.5YR6/6(橙)	
65	根来1次	2-2S	L6 e,2	209	土師器	灯明皿	6.2	1.6	3.1	100%	密	10YR8/2(灰白)	
66	根来1次	2-2S	L6 d,2	210 埋土	土師器	皿	(9.3)	(1.5)	(5.6)	30%	密(1mm大の石英・長石・チャート粒・赤色斑粒含む)	5YR7/6(橙),10YR8/3(浅黄橙)	
69	根来1次	2-2S	L6 d,2	211	土師器	皿	8.5	2.0	4.3	100%	密(1～3mm大の片岩・石英・長石・雲母粒・赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
70	根来1次	2-2S	L6 d,2	211	土師器	皿	9.0	2.0	5.7	60%	密(1mm以下の石英・長石・雲母粒・赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
71	根来1次	2-2S	L6 f,4	217 埋土	土師器	皿	不明	(3.3)	不明	10%以下	密(1mm以下の石英・長石・雲母粒・赤色斑粒含む)	2.5Y7/3(浅黄),2.5Y5/1(黄灰),7.5YR7/6(橙)	
72	根来1次	2-2S	L6 d,2	219 西半部 埋土	土師器	皿	8.3	1.9	3.5	100%	密(赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
73	根来1次	2-2S	L6 e,2	223 埋土	土師器	皿	(12.4)	2.5	(5.0)	35%	密(1mm大の石英・長石・雲母含む)	5YR6/6(橙)	
74	根来1次	2-2S	L6 b,2	225 2層 黒褐色土	土師器	不明	不明	(10.6)	不明	不明	やや粗(1mm以下の石英・チャート・赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
75	根来1次	2-2S	L6 d,1	228 埋土	土師器	皿	(11.0)	2.6	(5.4)	45%	密(赤色斑粒含む)	10YR8/3(浅黄橙)	
76	根来1次	2-2S	L9 d,1	228 埋土	土師器	皿	(8.4)	(1.6)	－	48%	密(1mm以下の長石・石英粒・赤色斑粒含む)	7.5YR7/6～6/6(橙)	
77	根来1次	2-2S	L6 e,2	230 埋土	土師器	灯明皿	6.6	1.4	－	100%	密(1～2mm大の石英・長石・赤色斑粒含む)	5YR7/6(橙)	
78	根来1次	2-2S	K5 x,24	236 埋土	土師器	皿	8.2	1.9	－	100%	密(1mm以下の石英・長石・雲母・赤色斑粒含む)	10YR6/6(明黄褐)	
79	根来1次	2-2S	K5 x,24	236 埋土	染付	碗	(11.6)	5.7	(4.2)	20%	密	釉)5B7/1(明青灰) 呉須)藍色	
80	根来1次	2-2S	K5 y,23	237 (28) 埋土	土師器	皿	9.0	1.9	3.3	100%	密(1mm以下の石英・長石・赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
81	根来1次	2-2S	K5 y,23	237 (27) 埋土	土師器	皿	9.6	2.0	5.6	98%	密(1mm大の石英・長石・赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙),5YR8/1(灰白)	
82	根来1次	2-2S	K5 y,23	237 (26) 埋土	土師器	皿	9.2	2.2	4.2	98%	密(1mm大の石英・長石・微量の雲母、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙),5YR8/1(灰白)	
83	根来1次	2-2S	K5 w,23	240 整地層	瓦質土器	香炉	(11.4)	4.9	(7.8)	45%	密	内・外)N4/(灰) 断)N8/(灰白)	
84	根来1次	2-1S	K5 n,21	248 埋土	土師器	皿	8.4	1.7	6.1	75%	密(1～5mm大の片岩、長石粒、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
85	根来1次	2-1S	K5 o,21	248 埋土	土師器	皿	8.7～9.4	2.4	3.0	98%	密(1mm大の石英、長石、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
86	根来1次	2-1S	K5 o,21	248 埋土	土師器	灯明皿	(8.4)	(1.7)	(4.6)	40%	密(3mm大の片岩、1mm大の長石、石英、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
87	根来1次	2-1S	K5 p,20	248 埋土	土師器	皿	9.8	2.0	－	98%	やや粗(1～5mm大の石英、長石、チャート粒、雲母、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
88	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 北部 埋土	土師器	皿	(9.1)	1.8	(6.8)	30%	やや粗(2mm大の石英、1mm大の長石、片岩、チャート粒、雲母、赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
89	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	土師器	皿	(7.6)	1.4	(5.7)	25%	やや粗(1～2mm大の石英、長石粒、赤色斑粒含む)	5YR7/6(橙)	
90	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 北部 埋土	土師器	甕	(7.6)	1.5	(5.9)	20%	密(1mm大の片岩、石英、長石、赤色斑粒含む)	5YR7/8(橙)	
91	根来1次	2-1S	K5 o,17・18	252 埋土	土師器	皿	4.2	1.9	－	98%	密(1～2mm大の石英、長石、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
92	根来1次	2-1S	K5 o,18	252 北東部 埋土	東播系	鉢	(25.8)	(3.6)	不明	10%以下	密	内)10Y6/1(灰) 外)10Y6/1(灰),N4/(灰)	
93	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 北西部 埋土	青磁	碗	(11.4)	(5.5)	不明	25%	密	5GY6/1(オリーブ灰)	
94	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 南側部 埋土	白磁	皿	(11.8)	3.1	(6.0)	40%	密	灰白	

（　）内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区			遺構層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
	遺跡名	区画	グリット										
95	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	白磁	皿	不明	2.7	不明	10%以下	密	白,5Y7/1(灰白)	
96	根来1次	2-1S	K5 o,18	252 北東部 埋土	染付	小坏	不明	(3.4)	2.4	30%	密	内・外)灰白 呉須)5B6/1(青灰)	
97	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 北西部 埋土	青磁染付	皿	不明	(3.5)	(9.8)	10%以下	密	釉)10G7/1(明緑灰) 呉須)紺	
98	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 南側部 埋土	施釉陶器	天目碗	(11.6)	(4.1)	不明	10%	密	内)7.5YR4/3(褐),7.5YR2/1(黒) 外)7.5YR3/1(黒褐),7.5YR2/3(極暗褐) 断)10YR8/1(灰白)	
99	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	施釉陶器	天目碗	不明	(1.5)	(4.6)	10%以下	密	釉)2.5Y4/3(オリーブ褐),2.5Y2/1(黒) 露胎)2.5Y8/3(淡黄)	
100	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	施釉陶器	天目碗	不明	(3.2)	2.9	10%	密	釉)7.5YR2/1(黒),7.5YR4/3(褐) 下地)N4/(灰) 断)2.5Y8/3(淡黄)	
101	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 南側部 埋土	備前	擂鉢	(32.0)	(13.6)	(12.8)	30%	密(2mm大の石英粒少量含む)	2.5YR4/2(灰赤)	
102	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 北部 埋土	備前	擂鉢	不明	(8.7)	不明	15%	密(1mm大の長石粒含む)	2.5YR4/3(にぶい赤褐)	
103	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	備前	壷	12.0	(18.3)	不明	30%	密(1～2mm大の長石粒少量含む)	内)N6/(灰) 外)N6/(灰)～7.5YR7/3(にぶい橙)	
104	根来1次	2-1S	K5 o,17	252 埋土	備前？	壷	(11.2)	(3.3)	不明	10%以下	密(1mm以下の長石粒含む)	N7/(灰白)	
105	根来1次	2-1S	K5 p,18	252 埋土	備前	甕	(22.8)	(3.8)	不明	口縁部10%	密(1mm大の長石少量含む)	内)10YR5/2(灰黄褐) 外)5Y4/1(灰),N6/(灰) 断)5YR4/2(灰褐)	
106	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 北部 埋土	備前	壷	(9.8)	(3.0)	不明	口縁部25%	密(1mm大の石英、長石粒少量含む)	内)5YR4/1(褐灰) 外)5Y6/3(オリーブ黄)	
107	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	備前	舟徳利		(24.8)	(14.0)	30%	密	2.5YR3/1(暗赤灰),2.5YR3/3(暗赤褐),5Y6/4(オリーブ黄)	
108	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 南側部 埋土	備前	壷	不明	(13.4)	11.6	40%	密(1mm大の長石粒少量含む)	7.5YR4/1(褐灰)	
109	根来1次	2-1S	K5 o,17	252 北東部 埋土	土師器	甕	(15.8)	21.3	15.0～14.3	75%	密(1mm大の長石、石英、チャート粒、赤色斑粒含む)	内)2.5YR6/8(橙) 外)7.5YR8/4(浅黄橙),2.5Y7/2(灰黄),N5/(灰)	
110	根来1次	2-1S	K5 o・p,17	252 埋土	備前	甕	(76.4)	(53.0)	不明	20%	密(2～3mm大の砂粒やや多く含む)	内)2.5YR4/2(灰赤) 外)2.5YR3/3(暗赤褐) 断)2.5YR4/4(にぶい赤褐)	
114	根来1次	2-1S	K5 k・l,16～18	254 埋土	染付	碁笥底杯	不明	(2.6)	2.4	30%	密	内・外)灰白 呉須)淡青灰	
119	根来1次	2-1S	K5 n,17	257 埋土	土師器	皿	(9.4)	(2.2)	4.0	30%	密(1mm以下の長石、石英粒、雲母含む)	10YR7/4(にぶい黄橙),10YR2/1(黒)	
120	根来1次	2-1S	K5 n,17	257 北西半部 埋土	土師器	皿	(8.8)	(2.0)	－	40%	密(1mm大の石英、赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
121	根来1次	2-1S	K5 n,17	257 埋土	瓦質土器	擂鉢	不明	(1.8)	不明	10%以下	密	口縁)N5/(灰) 体部)2.5Y7/1(灰白)	
122	根来1次	2-1S	K5 n,17	257 埋土	瓦質土器	火舎	26.7	8.6	20.0	80%	密	10YR8/2(灰白),N5/(灰)	
123	根来1次	2-1S	K5 n,17	257 9 埋土	瓦質土器	火鉢	(24.2)	(17.7)	(22.0)	50%	密	内・外)N7/(灰白),N3/(暗灰) 断)N8/(灰白)	
125	根来1次	2-1S	K5 r・s,22・23	258 埋土	青磁	碗	不明	(2.4)	(4.6)	20%	密	釉)緑灰 断)7.5Y7/1(灰白)	
126	根来1次	2-1S	K5 r・s,22・23	258 埋土	青磁	碗	(12.0)	(2.6)	不明	10%以下	密	釉)緑灰	
127	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 A 埋土	青磁	皿	不明	(2.7)	(7.8)	10%	密	釉)暗緑灰 露胎)10R5/2(灰赤)	
128	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 A 埋土	染付	碗	不明	(1.9)	(5.8)	20%	密	釉)緑青 呉須)淡青	
129	根来1次	2-1S	K5 r・s,22・23	258 埋土	施釉陶器	天目碗	(9.0)	(3.9)	不明	10%	密	内・外)7.5YR4/3(褐)	
130	根来1次	2-1S	K5 r・s,22・23	258 埋土	陶器	皿	(10.6)	(2.3)	不明	10%以下	密	内・外)5YR4/3(にぶい赤褐) 断)10YR8/1(灰白)	
131	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 B 埋土	陶器	瓶子	不明	(5.0)	不明	10%以下	密	内)5Y6/1(灰) 外)5Y3/2(オリーブ黒)	
132	根来1次	2-1S	K5 r・s,22・23	258 埋土	陶器	壷	不明	(7.7)	(8.8)	不明	密	内)5Y7/1(灰白),5Y5/1(灰) 外)7.5YR5/4(にぶい褐) 釉：10Y3/2(オリーブ黒)	
133	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 A 埋土	備前	壷	(13.2)	(8.3)	不明	15%	やや粗(1～3mm大の長石、石英粒やや多く含む)	内・外)10YR4/1(褐灰),7.5YR3/2(黒褐),7.5YR2/1(黒)	
134	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 A 埋土	備前	壷	(11.4)	(4.7)	不明	10%以下	密(1mm大の長石粒含む)	内・外)2.5YR4/2(灰赤) 断)2.5Y5/1(黄灰)	
137	根来1次	2-1S	K5 v,25	259 埋土	土師器	皿	8.8	1.7	6.0	60%	密(多量の赤色斑粒含む)	5YR7/8(橙)	
138	根来1次	2-1S	K5 q,21	260 埋土	土師器	皿	8.6	1.8	－	80%	密(1.4cm大の石英一点、1mm大の長石・石英粒、赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
139	根来1次	2-1S	K5 q,21	260 埋土	土師器	皿	9.1～9.3	1.9	－	100%	密(2～3mm大の石英チャート粒、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
140	根来1次	2-1S	K5 o,21	261 埋土	土師器	皿	(8.6)	(1.5)	(6.2)	20%	密(1mm以下の石英、チャート粒含む)	7.5YR6/6(橙)	
141	根来1次	2-1S	K5 o,21	261 埋土	土師器	皿	(9.8)	(1.7)	5.6	20%	密(1mm大の長石、チャート、雲母、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	

（ ）内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区			遺構層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
	遺跡名	区画	グリット										
142	根来1次	2-1S	K5 o,21	261 埋土	備前	舟徳利	不明	(17.3)	不明	30%	密	内）2.5Y5/1(黄灰),7.5YR5/1(褐灰) 外）10YR5/1(褐灰),N4/(灰)	
143	根来1次	2-1S	K5 o,21	262 埋土	土師器	灯明皿	(11.0)	(2.1)	－	25%	密(1mm以下の石英、チャート、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
144	根来1次	2-1S	K5 q,19	266 井戸埋土	染付	皿	(11.0)	(2.3)	不明	10%以下	密	内・外）淡青白 呉須）淡青	蓋の可能性あり
145	根来1次	2-1S	K5 q,19	266 埋土	備前	甕	不明	(3.8)	不明	10%以下	やや粗(3～5mm大の長石、石英粒多く含む)	内・外）10YR4/3(にぶい黄褐)	
146	根来1次	2-1S	K5 q,20・21	267 西半部埋土	土師器	皿	(8.0)	(1.9)	(2.8)	45%	密(1mm以下の長石、石英、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
147	根来1次	2-1S	K5 q,20	270 埋土	土師器	皿	(8.4)	(2.0)	(4.2)	50%	密(1mm大の長石、石英粒少量、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
148	根来1次	2-1S	K5 q,20	270	土師器	鍋	不明	(5.6)	不明	不明	密(0.5×1.5cm大の砂粒含む)	内）10YR4/2(灰黄褐) 外）10YR7/4(にぶい黄橙)	
149	根来1次	2-1S	K5 n,18	272	土師器	皿	(8.5～10.0	(2.1)	(4.3)	25%	密(1mm以下の長石、石英、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
150	根来1次	2-1S	K5 n,18	272 西半部埋土	施釉陶器	壷	不明	(2.9)	(2.8)	20%	密(1mm以下の石英粒含む)	内）N5/(灰) 釉）10YR3/2(黒褐) 断）10R4/2(灰赤)	
151	根来1次	2-1S	K5 j,15	291 埋土	土師器	皿	(8.6)	(1.8)	(3.0)	25%	密(1mm大の長石、赤色斑粒含む)	5YR6/8(橙)	
152	根来1次	2-1S	K5 k,16	298 埋土	土師器	皿	(7.6)	(1.6)	(2.5)	25%	密(赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙),7.5YR3/1(黒褐)	
153	根来1次	2-1S	K5 k,16	298 埋土	土師器	皿	9.5	1.9	－	85%	密(2mm大の石英、1mm大の長石、赤色斑粒含む)	10YR8/4(浅黄橙)	
154	根来1次	2-1S	K5 k,16	298 埋土	施釉陶器	皿	(8.7)	2.0	4.6	40%	密	7.5Y8/1(灰白),2.5GY8/1(灰白)	
155	根来1次	2-1S	K5 k,16	298 埋土	青磁	皿	不明	(3.0)	不明	不明	密	釉）10Y6/2(オリーブ灰)	
156	根来1次	2-1S	K5 k,16	298 埋土	瓦質土器	擂鉢	不明	(5.0)	不明	不明	密	N7/(灰白)	
157	根来1次	2-1S	K5 k,16	298 埋土	備前	壷	(8.4)	(7.5)	不明	15%	密	N7/(灰白)	
158	根来1次	2-1S	K5 n,17	299 埋土	土師器	皿	(10.0)	1.8	(4.0)	45%	密(1mm以下の石英、長石、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
159	根来1次	2-1S	K5 n,17	299 埋土	土師器	皿	12.0	2.6	5.4	90%	密(1～3mm大の砂粒、赤色斑粒含む)	10YR4/1(褐灰),10YR7/4(にぶい黄橙)	
160	根来1次	2-1S	K5 n,17	299 埋土	瓦質土器	灯火具	7.0	(2.5)	不明	不明	密(赤色斑粒含む)	内・外）10Y5/1(灰) 断）2.5Y7/3(浅黄)	
161	根来1次	2-1S	K5 q,21	300 北半部埋土	陶器	転用筋砥石	－	－	－	－	密(1mm大の石英、長石、チャート粒やや多く含む)	5YR5/4(にぶい赤褐)	
162	根来1次	2-1S	K5 n,21	313 石垣犬行整地土	青磁	碗	不明	(3.5)	不明	10%以下	密	釉）5GY7/1(明オリーブ灰)	
163	根来1次	2-1S	K5 n,21	313 石垣犬行整地土	備前	壷	14.5	32.5	17.0	95%	密(1～5mm大の砂粒少量含む)	内）5YR4/2(灰褐) 外）2.5YR4/2(灰赤),N7/(灰白) 断）10R4/2(灰赤)	
164	根来1次	2-2N 区画4	K5 s～u,15・16	314 覆土	染付	蓋	(10.0)	2.6	(5.7)	30%	密	内・外）灰白 呉須）淡青灰	
165	根来1次	2-2N 区画4	K5 s～u,15・16	314 覆土	染付	碗	(9.8)	(5.1)	不明	45%	密	釉）7.5GY8/1(明緑灰) 呉須）紺	
166	根来1次	2-2N	K5 v・w,17・18	319 埋土	備前	甕	(59.2)	(8.0)	不明	10%以下	密(2mm大の長石、1mm大のチャート含む)	内・外・断）10R4/2(灰赤),10R3/2(暗赤褐)	
168	根来1次	2-1N 区画6	東肩部 K4 l,23	323 南北石垣覆土	土師器	皿	(8.6)	(2.1)	(4.8)	40%	密(1～2mm大の長石・石英、赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
169	根来1次	2-1N 区画6	K5 l,25	323 覆土	備前	壷	(13.2)	(4.0)	不明	10%以下	密	内）2.5YR4/2(灰赤) 外）2.5YR4/3(にぶい赤褐) 断)5Y7/1(灰白)	
170	根来1次	2-2N 区画3	南肩部 K5 x,20	324 埋土	土師器	皿	(9.0)	1.5	(5.0)	25%	やや粗(1mm以下の長石・石英粒含む)	内）2.5Y7/3(浅黄) 外）2.5Y5/1(黄灰)	
171	根来1次	2-2N 区画3	南肩部 K5 x,20	324 埋土	土師器	皿	(14.2)	(2.3)	不明	10%	密(1mm以下の長石含む)	2.5Y7/2(灰黄)	
172	根来1次	2-1N	K4 m,23	326 埋土	焼締陶器	鉢	(24.6)	(33.8)	(20.0)	30%	密	内）2.5YR6/6(橙) 外）2.5YR5/3(にぶい赤褐)	
173	根来1次	2-1N 区画4	K5 n,6	328 埋土	焼締陶器	壷	不明	(5.1)	(10.0)	不明	密	内）2.5Y5/2(暗灰黄) 外）5Y5/1(灰) 断)N6/(灰)	底部にヘラ記号有り
174	根来1次	2-1N	K5 n,6・7	329 Ⅵ (セクションベルト1)	土師器	皿	8.0	2.0	－	95%	密	5YR6/6(橙)	
175	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅶ	土師器	皿	8.0	1.9	3.5	95%	密(1mm大の石英粒、雲母・赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
176	根来1次	2-1N	K5 o・n,6	329 Ⅱ	備前	鉢	(16.4)	(6.2)	不明	30%	密(1mm大の長石粒含む)	内）2.5Y7/3(浅黄),2.5YR5/3(にぶい赤褐) 外）上5YR4/3(にぶい赤褐),下2.5YR4/2(灰赤) 断)5Y5/1(灰)	
177	根来1次	2-1N 区画4	K5 n,6	329 埋土	染付	皿	(14.2)	3.5	(8.1)	45%	密	呉須）淡青 釉）灰白	
214	根来1次	2-1N	K5 o,7	330 7	瓦質土器	土管	－	29.3	－	100%	密	内・外・断)N7/(灰白)	継手　小(9.2) 大(13.9)
215	根来1次	2-1N 区画6	K4 n,24・25	332 埋土	土師器	皿	(7.4)	(1.7)	－	40%	密(1mm以下の長石・石英、雲母、赤色斑粒含む)	7.5YR6/6(橙)	
216	根来1次	2-1N 区画6	K4 n,24・25	332 埋土	土師器	皿	9.5～9.7	2.1	－	75%	密(1mm以下の長石・石英、赤色斑粒含む)	内）5Y3/1(オリーブ黒),10YR7/4(にぶい黄橙) 外）7.5YR7/6(橙),10YR7/4(にぶい黄橙)	

（ ）内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区			遺構層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
	遺跡名	区画	グリット										
217	根来 1次	2-1N 区画6	K4 n,24・25	332 埋土	染付	皿	(10.0)	2.5	(4.4)	15%	密	釉）淡青白 呉須）淡青	
218	根来 1次	2-1N 区画6	K4 m・n,24	332 埋土	備前	擂鉢	(21.8)	(7.0)	不明	10%	密	内）10R4/2(灰赤) 外）2.5YR3/3(暗赤褐)	
219	根来 1次	2-1N 区画6	K4 m・n,24	332 埋土	焼締陶器	甕	(22.0)	(4.8)	不明	5% 以下	やや粗(1～5mm大の長石粒含む)	内・外）5YR5/4(にぶい赤褐),10YR4/1(褐灰) 断)5Y7/1(灰白)	
220	根来 1次	2-1N 区画6	K4 n,24・25	332 埋土	備前	甕	(25.0)	(16.9)	不明	10%	密	内）10R4/2(灰赤),10R2/1(赤黒) 外）N6/(灰),N4/(灰)	
221	根来 1次	2-1N 区画4	K5 n,2	334 埋土	土師器	器種不明	(7.1)	(3.0)	不明	不明	密(1mm大の長石・石英、赤色斑粒含む)	5YR7/8(橙)	
222	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m・n,2・3	334 埋土	青磁	碗	不明	(4.5)	4.2	30%	密	釉）2.5GY5/1(オリーブ灰) 露胎）N5/(灰)	
223	根来 1次	2-1N 区画4	K5 n,2	334 埋土	染付	碗	(11.8)	(4.9)	不明	10%	密	釉）淡青白 呉須）紺	
224	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m・n,2・3	334 埋土	染付	碗	(11.4)	6.1	(4.4)	20%	密	釉）淡青白 呉須）紺	
225	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m・n,2・3	334 埋土	施釉陶器	皿	(10.2)	2.1	(4.8)	30%	密	内・外）10Y2/1(黒) 露胎）10YR3/1(黒褐)	
226	根来 1次	2-1N 区画4	K5 n,2・3	334 埋土	灰釉陶器	皿	不明	(1.7)	6.1	30%	密	釉）7.5Y6/3(オリーブ黄) 断)7.5Y8/1(灰白)	
227	根来 1次	2-1N	K5 m,2・3	334 （セクションベルトE）	焼締陶器	壷	(10.1)	(11.5)	不明	15%	密	内）5Y4/1(灰) 外）N6/(灰)	
228	根来 1次	2-1N 区画4	K5 o,1・2/n,2	334 埋土	備前	鉢	(21.8)	(6.0)	不明	10% 以下	密(1～2mm大の長石粒含む)	内）5YR4/1(褐灰) 外）2.5YR4/1(赤灰)	
229	根来 1次	2-1N 区画4	K5 n,2	334 埋土	焼締陶器	器種不明	不明	(5.8)	(18.5)	10%	密	内・外・断)5YR4/2(灰褐)	
230	根来 1次	2-1N 区画4	K5 n,2	334 埋土	備前	擂鉢	(27.8)	(8.3)	不明	10% 以下	密	内・外・断)5YR5/3(にぶい赤褐)	
231	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m・n,2・3	334 埋土	備前	壷	12.1～ 12.6	38.0	18.4	45%	密(1～2mm大の長石粒やや多く含む)	内・外・断)7.5R3/3(暗赤褐)	
232	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m・n,2・3	334 埋土	備前	甕	(21.4)	29.8	(20.5)	40%	密	内・外・断)10R3/4(暗赤)	
233	根来 1次	2-1N 区画4	K5 k・l,6・7	336 埋土	備前	小壷	(7.4)	(4.3)	不明	不明	密	内・外）5Y7/4(浅黄) 断)5YR5/3(にぶい赤褐)	
234	根来 1次	2-1N	K5 m,9	337	染付	皿	(9.6)	2.3	(3.0)	40%	密	呉須）紺 釉）淡青白	
236	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m,4	342 埋土	土師器	皿	8.1	1.9	2.1	60%	密(赤色斑粒含む)	5YR7/6(橙)	
237	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m,4	342 埋土	土師器	皿	6.6	1.4	3.2	100%	やや粗(2～3mm大の長石・石英・片岩チャート粒含む)	5YR7/8(橙)	
238	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m,4	342 埋土	土師器	皿	8.8	1.9	4.4	99%	密(1mm大の石英粒、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
239	根来 1次	2-1N 区画4	K5 m,4	342 埋土	土師器	灯明皿	(12.4)	2.8	(9.0)	60%	密(1～2mm大の長石・石英、雲母粒、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
240	根来 1次	2-1N 区画4	K5 n,11	344 1層	土師器	皿	(8.4)	1.7	(2.8)	25%	密(1mm大の石英・長石・チャート、雲母・赤色斑粒含む)	5YR7/6(橙)	
242	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p・q,14	345 北半部 埋土	東播系 須恵器	鉢	(30.4)	(11.0)	不明	40%	密(1～2mm大の石英・チャート粒含む)	内・外・断)N7/(灰白)	
243	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p・r,11	346 埋土	土師器	皿	(8.4)	(2.1)	－	30%	密(赤色斑粒含む)	5YR7/8(橙)	
247	根来 1次	2-1N 区画3	K5 k,13・14	358 埋土	備前	三耳壷	11.5	(7.3)	不明	20%	やや粗(1～5mm大の長石・石英粒含む)	内）N4/(灰) 外）2.5YR4/2(灰赤)	
248	根来 1次	2-1N 区画3	K5 k,13・14	358 埋土	瓦質土器	火舎	(22.2)	9.3	(16.1)	40%	密(微砂粒やや多く含む)	内）2.5Y8/2(灰白) 外）N4/(灰)	
249	根来 1次	2-1N 区画3	K5 k,13・14	358 埋土	瓦質土器	火舎	不明	(6.7)	(12.7)	30%	密(1～2mm大の長石・石英粒、赤色斑粒含む)	内）7.5YR7/4(にぶい橙) 外）10YR7/1(灰白)	
252	根来 1次	2-1N 区画3	K5 l,11	359 埋土	青磁	香炉	不明	(2.1)	(3.6)	不明	密	釉）緑灰 露胎）白	
253	根来 1次	2-1N	K5 l,10・11	359 埋土	備前	壷	不明	(6.9)	(11.0)	10% 以下	密	内）2.5YR5/3(にぶい赤褐) 外）7.5YR5/4(にぶい褐)	
255	根来 1次	2-1N	K5 p,1	370 据付甕	備前	甕	(63.6)	87.4	43.2	40%	密	内）2.5YR4/2(灰赤) 外）2.5YR3/3(暗赤褐),2.5Y7/3(浅黄)	
256	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p,1	371 埋土	施釉陶器	天目碗	(11.4)	(4.3)	不明	15%	密	釉）2.5Y5/4(黄褐),2.5Y3/1(黒褐) 露胎）N8/(灰白)	
257	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p,1	371 埋土	施釉陶器	天目碗	11.2	(5.2)	不明	45%	密	釉）5YR4/4(にぶい赤褐),5YR2/1(黒褐)	
258	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p,1	370 堀方	施釉陶器	天目碗	(11.6)	6.2	4.4	40%	密	下地釉）10R4/3(赤褐) 上釉）7.5YR5/4(にぶい褐) 断)7.5YR8/2(灰白)	
259	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p,1	371 埋土	備前	壷	不明	(10.9)	不明	不明	密	内）N4/(灰) 外）2.5YR4/2(灰赤)	
260	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p,1	371 埋土	備前	壷	11.7	32.8	15.6	70%	やや粗(2mm大の長石、5mm大の粘土粒含む)	内・外）10R3/2(暗赤褐),10R2/1(赤黒)	
261	根来 1次	2-1N 区画4	K5 p,1	371 据付甕	備前	甕	(52.0～ 58.0)	88.0～ 90.2	43.0	70%	密	内・外）5YR3/3(暗赤褐),10R3/3(暗赤褐)	
262	根来 1次	2-1N	K5 l,6	378 埋土	土師器	灯明皿	8.4	1.7	－	99%	密(1mm大の長石・石英粒、雲母・赤色斑粒含む)	7.5YR7/4(にぶい橙)	
263	根来 2次	3-1	S6 q,21	3層	土師器	皿	7.2	1.1	4.5	20%	密(赤色斑粒含む)	7.5YR7/6(橙)	
264	根来 2次	3-1	S6 u,20	3層	土師器	皿	8.2	2.15	－	30%	粗(2mm大の砂粒、赤色斑粒含む)	内）7.5YR6/4(にぶい橙) 外）10YR5/3(にぶい黄褐)	
265	根来 2次	3-1	S6 t,13	3層	土師器	皿	10.0	(1.6)	－	20%	密(1～2mm大の長石、石英粒、雲母粒、赤色斑粒含む)	5YR6/6(橙)	
266	根来 2次	3-1	S6 u,19	3層	白磁	皿	8.6	(1.6)	不明	10% 以下	密	白	
267	根来 2次	3-1	S6 q,21	3層	瓦質土器	火鉢	不明	(5.8)	不明	10% 以下	やや粗(3mm大の石英粒、長石・チャート粒含む)	内・外）2.5Y5/1(黄灰) 断）10YR7/4(にぶい黄橙)	
268	根来 2次	3-1	S6 s,19	溝4 掘方内	土師器	皿	8.2	1.5	4.6	25%	密	7.5YR7/6(橙)	

( )内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区 遺跡名	地区 区画	地区 グリット	遺構層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
271	根来3次	–	K5 b,4	2b	備前焼	徳利	胴部最大径 11.0	(12.9)	不明	10%	密	内)2.5YR4/2(灰赤) 外)7.5YR4/1(褐灰) 断)7.5YR5/1(褐灰)	
272	根来3次	–	K5 b,7	ｾｸｼｮﾝﾍﾞﾙﾄ中 2b	備前焼	甕	27.2	(7.5)	不明	10%以下	密	内)10R3/2(暗赤灰) 外)2.5YR3/3(暗赤褐)	
274	根来3次	–	K5 b,5	中央ｾｸｼｮﾝﾍﾞﾙﾄ北 3層下面 (4a上面)	白磁	小型碗	11.2	(2.0)	不明	15%	ち密	N8/(灰白)	
275	根来3次	–	K5 b,6	1石垣東側 3c	土師器	皿	7.2	1.9	3.0	100%	密	10YR7/3(にぶい黄橙)	
276	根来3次	–	K5 b,6	1石垣東側 3c	土師器	皿	6.5	1.6	–	25%	ち密(少量の赤色斑粒含む)	10YR7/3(にぶい黄橙)	
277	根来3次	–	K5 b,6	1石垣東側 3c	土師器	皿	7.0	2.0	–	60%	密(少量の赤色斑粒含む)	10YR7/3(にぶい黄橙)	
278	根来3次	–	K5 b,6	1石垣東側 3c	土師器	皿	9.2	1.9	5.2	100%	密(微細な雲母粒・赤色斑粒含む)	2.5YR5/8(明赤褐)	
279	根来3次	–	K5 b,6	1石垣東側 3c	土師器	皿	16.8	1.8	–	45%	密(赤色斑粒・片岩粒少量含む)	2.5YR5/8(明赤褐)	
281	根来3次	–	K5 c,5	4石垣南側 埋土 床面 3a	白磁	碗(底部)	不明	(0.6)	5.8	10%以下	ち密	N8/(灰白)	

遺物観察表:瓦類

( )内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区 遺跡名	地区 区画	地区 グリット	遺構層位	器種	長さ	高さ	厚さ(最大厚)	幅	残存率	胎土	色調	備考
8	根来1次	1-2	S8 s,4	12	丸瓦	40.2	7.5	2.2	15.2	100%	蜜(1mm大の石英、極微量含む)	内)7.5Y3/1(オリーブ黒) 外)N7/(灰白)	
10	根来1次	2-1N 区画4	中央部	機械堀削	軒平瓦	(15.5)	–	2.0	(24.0)	40%	密(2～3mm大の石粒含む)	内・外)N5/(灰) 断)7.5Y7/1(灰白)	
51	根来1次	2-2S	L6 f,4	202	軒平瓦	(10.3)	–	2.1	(16.9)	25%	密	内・外・断) 2.5Y8/1(灰白)	
52	根来1次	2-2S	L6 e,4/f,3・4	202 埋土	軒丸瓦	(3.3)	–	–	–	不明	密	内・外)N5/(灰)	
53	根来1次	2-2S	L6 e,4/f,3・4	202 埋土	軒丸瓦	(3.9)	–	–	–	不明	密	内・外・断)N5/(灰)	
54	根来1次	2-2S	L6 e・f,4	202 埋土	軒丸瓦	–	–	–	–	不明	やや粗(1～2mm大の砂粒やや多く含む)	内・外・断)10YR6/4(にぶい黄橙),10YR6/1(褐灰)	
55	根来1次	2-2S	L6 e・f,4	202 埋土	磚	23.7	–	2.2	(15.7)	40%	密	内・外)N6/(灰) 断)N8/(灰白)	
68	根来1次	2-2S	L6 d,2	210 埋土	軒丸瓦	–	–	–	–	不明	密	内・外・断)N7/(灰白),N4/(灰)	
111	根来1次	2-1S	K5 o,17	252 埋土	軒丸瓦	(6.6)	–	2.3	(13.5)	瓦当部40%	蜜(1～2mm大の砂粒少量含む)	内・外)N4/(灰)	
112	根来1次	2-1S	K5 o・p,17・18	252 埋土	丸瓦(玉縁)	(32.8)	7.9	4.1	15.7	95%	蜜	N5/(灰),7.5Y7/2(灰白)	
113	根来1次	2-1S	K5 p,17	252 南側部 埋土	衾瓦	31.6	11.3	2.6	24.5	90%	蜜(2～3mm大の黒色粒含む)	内・外)N4/(灰) 断)2.5Y8/1(灰白)	
116	根来1次	2-1S	K5 q,21	255 9	丸瓦	29.6	6.8	2.1	14.1	100%	蜜	N4/(灰)	
117	根来1次	2-1S	K5 q,21	255 6	丸瓦	26.7	6.3	1.8	13.4	98%	蜜	N4/(灰)	
118	根来1次	2-1S	K5 q,21	255 12	平瓦	26.5	–	2.3	–	100%	蜜	N4/(灰)	
124	根来1次	2-1S	K5 o,18	257 埋土	軒平瓦	(8.0)	–	1.8	(12.5)	20%	蜜(1～2mm以下の砂粒含む)	内・外)N2/(黒) 断)5Y7/2(灰白)	
135	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 A 埋土	軒丸瓦	(3.9)	–	2.4	–	不明	蜜	内)N7/(灰白) 外)N3/(暗灰) 断)N7/(灰白)	
136	根来1次	2-1S	K5 s,22	258 A 埋土	軒平瓦	(4.1)	–	2.1	12.1	不明	蜜(1mm大の砂粒含む)	内・外)N3/(暗灰) 断)N7/(灰白)	
167	根来1次	2-2N	K5 v・w,17・18	319 埋土	丸瓦	25.2	6.7	1.8	13.2	98%	密	内・外・断)N4/(灰)	
178	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅸ	軒丸瓦	(16.0)	–	2.6	–	不明	密	内・外・断)5Y8/1(灰白),N5/(灰) ,8/N(灰白)	
179	根来1次	2-1N 区画4	K5 n・o,6	329 埋土	軒丸瓦	25.4	–	2.4	11.3	–	密	内・外)N3/(暗灰) 断)N8/(灰白)	
180	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅸ	軒丸瓦	(31.7)	–	2.8	15.2	80%	密	内・外)N3/(暗灰) 断)10Y8/1(灰白)	
181	根来1次	2-1N 区画4	n,6	329 埋土	軒丸瓦	33.5	–	2.8	14.8	90%	密	内・外)N4/(灰) 断)10Y8/1(灰白)	
182	根来1次	2-1N	K5 o,6	329 Ⅰ	丸瓦	(25.0)	(5.6)	2.3	(11.0)	–	粗(5mm大の粘土粒多く含む)	内・外) 7.5Y7/1(灰白),7.5Y6/1(灰)	
183	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅷ	鳥衾	(44.6)	–	2.9	(24.1)	70%	密(5mm大のチャート少量含む)	内・外)N4/(灰) 断)10Y6/1(灰)	
184	根来1次	2-1N 区画4	n,6	329 埋土	鬼瓦	–	–	–	–	20%	やや粗(砂粒目立つ)	内)5Y6/1(灰) 外)N5/(灰) 断)5Y8/1(灰白)	
185	根来1次	2-1N 区画4	K5 m,7	329 埋土	鴟瓦	18.8	–	1.8	(瓦当)23.8	80%	密	内・外・断) N4/(灰)	
186	根来1次	2-1N 区画4	m,7	329 埋土	平瓦	25.5	–	1.8	–	80%	密	内・外)N4/(灰) 断)5Y8/1(灰白)	
187	根来1次	2-1N 区画4	n,6	329 埋土	切隅平瓦	(18.6)	–	2.2	(14.6)	不明	密	内・外)N5/(灰) 断)5Y8/1(灰白)	
188	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅷ	鬼瓦	–	–	–	–	80%	密	内・外)N4/(灰) 断)7.5Y7/1(灰白)	
235	根来1次	2-1N 区画4	K5 o,11・12	341 埋土	軒平瓦	(14.8)	–	1.7	–	不明	密	内・外・断)N6/(灰),2.5Y7/1(灰白)	

（ ）内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。

報告書番号	地区 遺跡名	地区 区画	地区 グリット	遺構層位	器種	長さ	高さ	厚さ（最大厚）	幅	残存率	胎土	色調	備考
244	根来1次	2-1N	K5 l,10	355 埋土	軒丸瓦	(4.5)	－	(2.8)	－	不明	密(2mm大の石英粒少量含む)	内・外）N4/(灰) 断）5Y7/1(灰白)	
250	根来1次	2-1N 区画3	K5 k,13・14	358 埋土	軒丸瓦	－	－	－	－	－	密	内・外）N4/(灰),N7/(灰白) 断）N7/(灰白)	
251	根来1次	2-1N 区画3	K5 k,13・14	358 埋土	軒平瓦	30.5	－	2.6	(23.5～24.6)	－	密	内・外）N3/(暗灰) 断）N7/(灰白)	
254	根来1次	2-1N	K5 l,10・11	359 埋土	鬼瓦	－	－	－	－	不明	密	内・外）N6/(灰),N5/(灰) 断）2.5Y8/1(灰白)	
270	根来3次	－	K5	表採	平瓦	28.7	－	2.4	23.8	70%	密	2.5Y6/1(黄灰),N3/(暗灰),2.5Y5/2(暗灰黄)	
273	根来3次	－	K5 b,6	崩落土中 整地土直上 2b	丸瓦（玉縁）	29.3	6.8	2.1	13.6	95%	密	N4/(灰),N6/(灰)	

遺物観察表：石造物（五輪塔）

（ ）内は復元した大きさ。

報告書番号	地区 遺跡名	地区 区画	地区 グリッド	遺構層位	寸法（cm） 総高	空輪 幅	空輪 先端高	空輪 高	風輪 幅	風輪 高	火輪 軒上幅	火輪 下幅	火輪 軒高	火輪 高	水輪 幅	水輪 高	地輪	地輪 上幅	地輪 下幅	地輪 高	備考
195	根来1次	2-1N 区画4	K5 o,6	329 埋土	(41.2)	－	－	－	－	－	－	15.2	(5.0)	(9.2)	16.0	9.7	－	14.8	15.0	17.2	朱
196	根来1次	2-1N	K5 o,6	329 3	(38.1)	－	－	－	－	－	17.1	16.5	6.5	(9.4)	17.4	10.5	－	17.0	17.0	18.2	
189	根来1次	2-1N	K5 u,6	329 (10)	(33.3)	18.3	(10.0)	22.9	19.4	10.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	朱・金泥
190	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (33)	27.6	14.1	9.1	19.5	14.5	6.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	金泥 四方に梵字
191	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (29)	(19.6)	13.4	(2.0)	11.7	13.8	7.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	金泥
192	根来1次	2-1N 区画4	K5 o,6	329 埋土	－	－	－	－	－	－	21.0	21.5	4.5	13.9	－	－	－	－	－	－	
193	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (6)	(17.5)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	21.6	21.5	16.3	
194	根来1次	2-1N	K5 n,6・7	329 Ⅵ	(19.1)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	23.6	23.2	19.1	
197	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (17)	(58.5)	12.0	(3.5)	(11.8)	12.4	5.8	(15.5)	15.2	6.5	8.8	15.8	11.8	奥行 上15.2 下16.3	15.7	17.6	20.8	
198	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (32)	(35.8)	－	－	－	－	－	(15.5)	15.5	(6.2)	(9.4)	15.3	10.2	－	15.2	15.2	15.8	
199	根来1次	2-1N	K5 n,7	329 (19)	(18.0)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(11.2)	(2.0)	－	13.5	13.6	16.2	朱
200	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (27)	(48.2)	11.0	(1.9)	(9.8)	11.2	4.7	13.7	14.0	4.4	8.8	14.7	10・2	奥行 14.4	13.4	13.7	14.5	
201	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅶ	(47.7)	9.4	(1.3)	8.9	9.7	5.5	13.2	13.7	6.0	9.0	13.8	9.4	奥行 14.0	13・3	13.5	14.7	
202	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (26)	(42.0)	9.2	(1.4)	(8.8)	9.6	4.4	11.9	12.3	5.1	7.6	12.0	7.2	奥行 12.0	11.9	12.0	14	
203	根来1次	2-1N 区画4	K5 o,6	329 埋土	(31.0)	－	－	－	－	－	－	12.5	6.2	8.2	12.7	7.4	－	12.6	12.6	15.5	
204	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 Ⅶ	(29.9)	－	－	－	－	－	(12.2)	11.9	5.4	(8.0)	12.2	8.9	奥行 12.0	11.6	11.8	13・1	
205	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (5)	(31.4)	－	－	－	－	－	13.3	12.9	6.5	(7.9)	13.6	8.5	－	12.7	12.8	14.7	
206	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (35)	(29.1)	－	－	－	7.8	3.6	－	9.5	3.7	6.4	10.4	7.9	奥行 8.0	9.5	9.7	(10.9)	
245	根来1次	2-1N 区画3	K5 n・o,14	356 埋土	(17.0)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(1.0)	－	13.6	13.6	16.0	
269	根来3次	－	K5	表採	(33.5)	10.9	(2.0)	(9.9)	11.0	4.9	－	13.9	(5.9)	8.3	15.2	(9.5)	－	－	－	－	

遺物観察表：石造物（宝篋印塔）

報告書番号	地区 遺跡名	地区 区画	地区 グリッド	遺構層位	種類	寸法 総高	寸法 径	寸法 径(深さ)	寸法 幅	寸法 上幅	寸法 下幅	寸法 高さ	備考
207	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (20)	塔笠	15.7	上枘 3.4 下枘 3.0	上枘 6.0 下枘 6.7	隅 20.5	枘 8.9	枘 12.5	軒上 10.5 軒下 18.3 隅 (6.8)	軒 隅飾 枘穴 上端枘穴 下端枘穴
208	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (13)	塔笠	28.1	上枘 7.0 下枘 6.9	上枘 7.9 下枘 9.1	隅 36.8	枘 14.8	枘 19.8	軒上 14.5 軒下 34.0 隅 28.2	軒 隅飾 枘穴 上端枘穴 下端枘穴
209	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 Ⅲ (セクションベルト2)	基礎	11.4			反 18.8	台 28.5	台 28.3	反 7.7 台 3.6	反花座 台座
210	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (15)	塔身	27.7	上枘 7.9 下枘 8.4			台 18.8	台 18.7	上枘 4.6 下枘 4.7 台座 18.4	上枘 下枘 台座
211	根来1次	2-1N	K5 m,7	329 (31)	相輪	(23.4)	九 6.8	九 13.5			11.5	九 13.5 下請 4.2	九輪 下請花
212	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 (16)	相輪	43.0	九 8.9 14.9 伏 15.6 14.5 枘 6.9 6.5					九 17.6 伏 10.6 枘 5.1 請 5.2 下請 4.3	九輪 下請花 伏鉢 枘
246	根来1次	2-1N 区画3	K5 n・o,14	356 埋土	基礎	18.5	枘 6.4		反 13.0	台 22.4	台 21.3	反 5.8 台 12.7	枘穴 反花座 台座

遺物観察表：石製品及び石造物

報告書番号	地区			遺構層位	種類	寸法			重量（g）	残存率	石材	備考
	遺跡名	区画	グリッド			幅	長	厚さ				
6	根来1次	1-1	S8 k,7	2層	石鏃	3.25		0.45	2.0	100%	サヌカイト	
11	根来1次	2-1N	−	表採	−	−	−	−	−	−	−	拓本、写真のみ掲載
12	根来1次	2-1N	−	表採	−	−	−	−	−	−	−	拓本、写真のみ掲載
13	根来1次	2-1N 5区	K5 r,3〜5	精査	−	−	−	−	−	−	−	拓本、写真のみ掲載
14	根来1次	2-1N	−	表採	−	−	−	−	−	−	−	拓本、写真のみ掲載
115	根来1次	2-1S	K5 k,l,16〜18	254 埋土	砥石	2.5	8.0	1.9	68.6	−	粘板岩系	色調：白
213	根来1次	2-1N	K5 n,6	329 （12）	板碑	28.7	73.6	9.0	−	−	−	

遺物観察表：金属製品

報告書番号	地区			遺構層位	種類	器種	口径	残存率	胎土	備考
	遺跡名	区画	グリット							
67	根来1次	2-2S	d,2	210 埋土	銅製品	鉄砲玉	1.3×1.3	100%	二匁弾よりやや小さい	11.0g
241	根来1次	2-1N	K5 l,8	344 1層	金属製品	銭貨	外径 2.4×2.4	98%	−	2.1g 「寛永通寶」「文」
280	根来3次	−	K5 c,8	1石垣裏込 3b	金属製品	無紋銭	外径 2.0×2.0 内径 0.9×0.9	98%	−	1.23g

遺物観察表：経石

報告書番号	地区		遺構層位	種類	寸法			重量（g）	備考
	遺跡名	グリッド			幅	長	厚さ		
282	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	1.8	2.7	0.7	4.8	常
283	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.1	3.0	0.6	5.3	身
284	山口	C20	SK-01 a	経石	1.9	3.0	1.0	8.6	願
285	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.0	3.2	0.9	7.1	是
286	山口	C20	SK-01 d	経石	1.2	1.2	0.5	0.8	未
287	山口	C20	SK-01 a	経石	1.8	3.4	1.0	8.3	生
288	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	1.9	2.9	1.0	7.8	此
289	山口	C20	SK-01 a	経石	2.3	2.7	0.7	6.5	為
290	山口	C20	SK-01 a	経石	1.8	2.4	0.6	3.7	名
291	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	1.6	3.5	0.8	4.8	見
292	山口	C20	SK-01 a	経石	2.1	3.5	0.8	7.4	有
293	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.4	3.7	1.0	12.2	為
294	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	3.0	3.6	0.9	15.8	縦
295	山口	C20	SK-01 d	経石	2.7	4.6	0.7	15.0	起
296	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.1	4.6	0.7	12.5	復
297	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.3	4.5	0.9	14.8	舎
298	山口	C20	SK-01 d	経石	2.5	3.4	1.0	13.0	散
299	山口	−	1 岩盤上面	経石	2.8	3.2	0.4	4.6	県教委試掘　養
300	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.0	2.8	0.6	4.8	貪
301	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	1.7	2.1	0.5	3.0	所
302	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.0	2.4	0.6	4.7	楽
303	山口	C20	SK-01 a	経石	2.1	2.0	1.0	5.6	無

報告書番号	地区		遺構層位	種類	寸法			重量（g）	備考
	遺跡名	グリッド			幅	長	厚さ		
304	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.0	3.3	1.0	8.4	壇
305	山口	C20	SK-01	経石	2.5	2.1	0.7	5.1	華
306	山口	－	1 岩盤上面	経石	2.2	2.5	0.8	5.7	県教委試掘　等
307	山口	－	1 岩盤上面	経石	2.8	2.1	0.8	6.8	県教委試掘　人
308	山口	－	1 岩盤上面	経石	2.5	2.8	0.6	5.1	県教委試掘　衆
309	山口	－	1 岩盤上面	経石	2.3	3.5	0.9	7.2	県教委試掘　量
310	山口	－	1 岩盤上面	経石	1.8	2.0	1.1	4.8	県教委試掘　中
311	山口	C20	SK-01 最上層	経石	1.4	2.6	0.6	2.6	日
312	山口	C20	SK-01 最上層	経石	1.5	2.0	0.3	1.9	菩
313	山口	C20	SK-01 最上層	経石	2.1	3.0	0.9	8.2	佛
314	山口	C20	SK-01 最上層	経石	2.2	3.6	1.0	9.4	種
315	山口	C20	SK-01 最上層	経石	3.4	5.0	0.6	15.1	聴
316	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.6	4.0	0.8	13.5	行
317	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	1.7	2.4	1.2	6.6	定
318	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.6	2.8	0.9	10.3	説
319	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.7	2.1	0.7	4.8	利
320	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.5	4.1	1.2	14.6	萬
321	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.0	2.1	0.8	4.6	大
322	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	3.6	4.2	0.7	13.8	我
323	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	3.8	5.1	0.7	19.8	敷
324	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.9	4.2	0.5	6.5	燈
325	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.4	2.4	0.4	3.4	羅
326	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.4	3.5	0.6	7.3	薩
327	山口	C20	SK-01 c 上層	経石	2.3	3.1	0.6	8.3	薩
328	山口	C20	SK-01 b 上層	経石	2.0	3.0	0.8	7.1	薩

1．１次１区調査前風景(北から)

2．１次１区調査地遠景(南西から)

3．１次１区全景(上空から)

1．１次1-1区全景(北から)

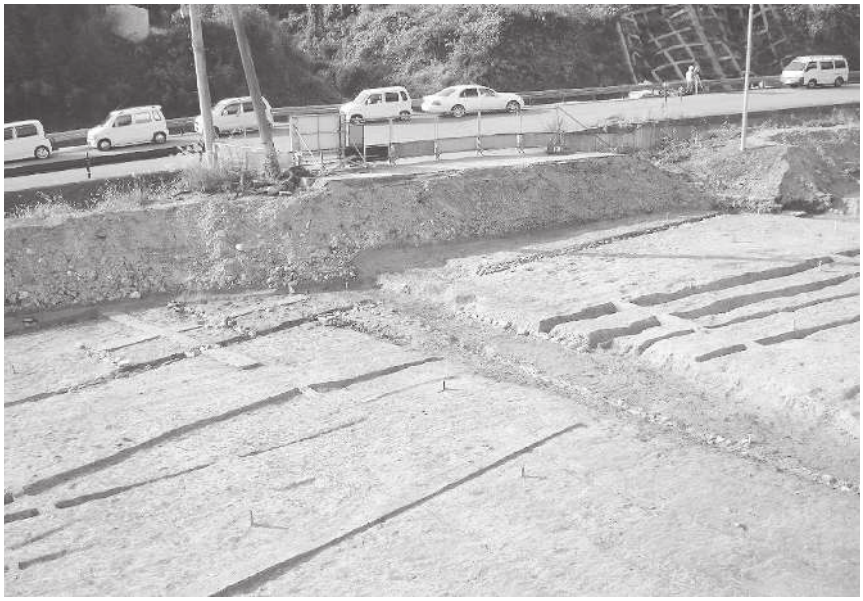
2．１次1-1区全景(南から)

3．１次1-1区11溝(南から)

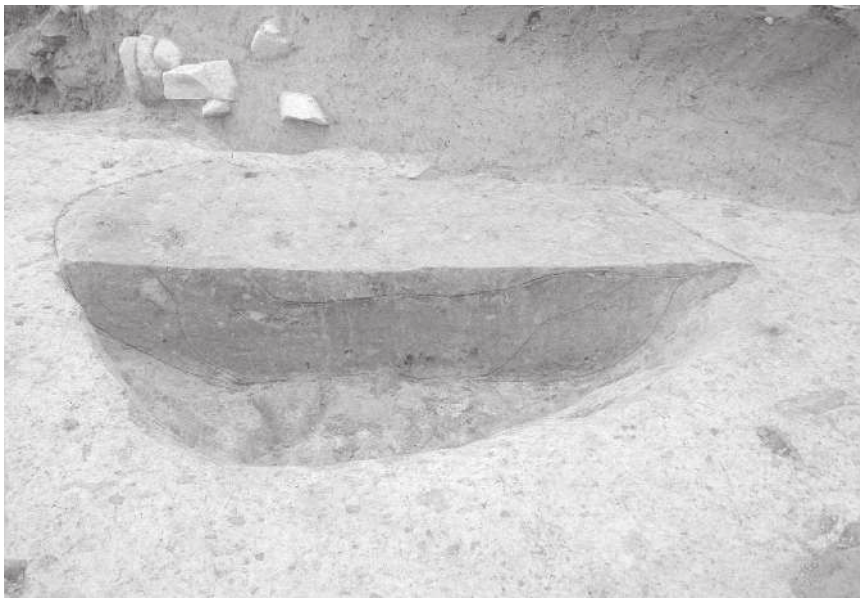
1．１次1-1区11溝
暗渠構造(北から)

2．１次1-1区11溝
蓋石除去後(北から)

3．１次1-2区全景(北西から)



1．１次1-2区34～37暗渠・28石垣
（東から）



2．１次1-2区19土坑断面土層
（北西から）

3．１次1-2区20溝
断面土層（南東から）

1次1-1区・1-2区合成写真(上空から)

1．１次２区調査地遠景
（北上空から）

2．１次2-1区南半部全景
（上空から）

3．１次2-1区南半部全景
（北上空から）

1．１次２-１区全景
（南から）

2．１次２-１区 323 石垣
（北東から）

3．１次２-１区 328・329石組溝
（南西から）

1次2-1区 328・329 石組溝
（北西から）

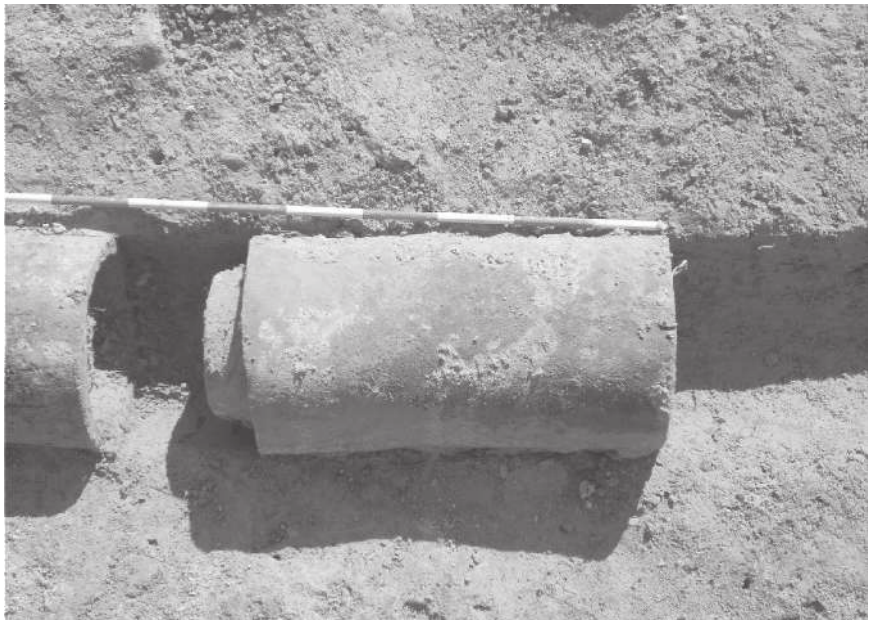
1．１次２-１区 329 石組溝（南東から）

2．１次２-１区 329 石組溝細部（北東から）

1次2-1区 328・329 石組溝完掘状況
（北西から）

1．１次２-１区 329 石組溝南側状況
（北西から）

2．１次２-１区 329 石組溝北側状況
（西から）



3．１次２-１区 330 溝土管細部
（西から）

1．１次２-１区 323 石垣
（北東から）

2．１次２-１区 323 石垣石積細部
（東から）

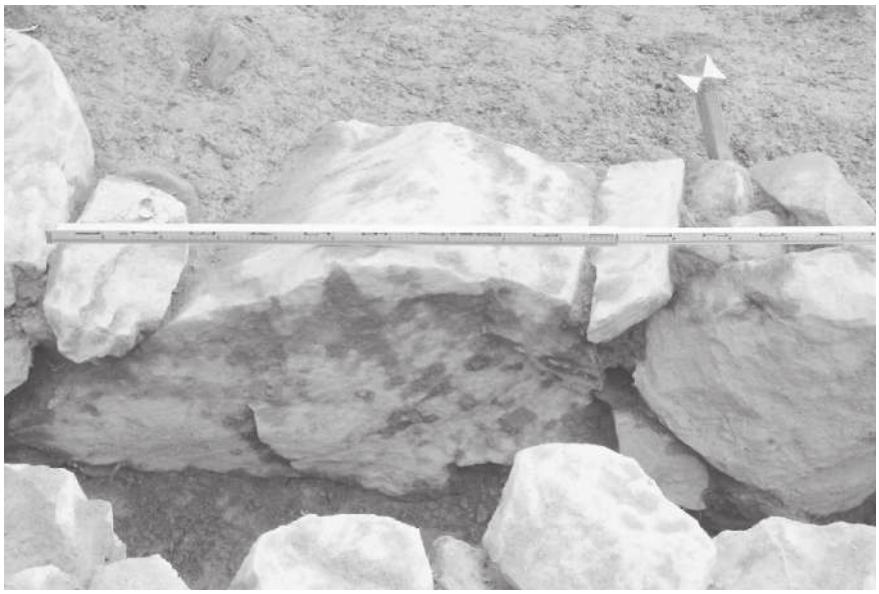
3．１次２-１区 331 石垣・336 石組溝
（南から）

1．１次２-１区 331 石垣石積状況（南東から）

2．１次２-１区 331 石垣石積細部（南東から）

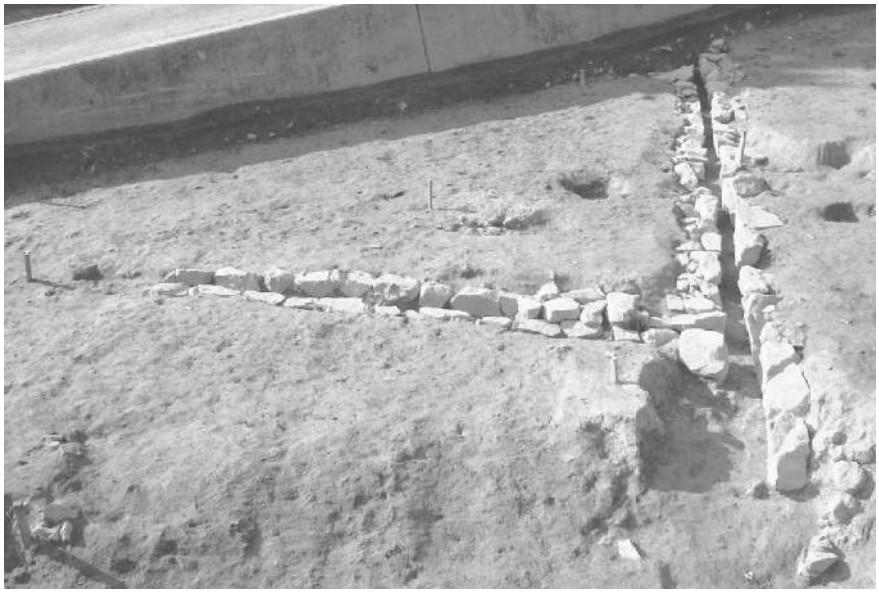
1次2-1区 334石組遺構
（北西から）

1．１次２-１区 342 大型土坑断面土層
（北から）



2．１次２-１区 336 石組溝南東側石積細部
（北西から）

3．１次２-１区 370・371 埋甕
（南西から）



1．１次２-１区 338・339 溝
（南東から）

2．１次２-１区 343・378 石組遺構
（南西から）

3．１次２-１区 356
（北東から）

1．１次２-１区 252 石組遺構
（南東から）

2．１次２-１区 258 石敷遺構
（北西から）

3．１次２-１区 262 井戸
（南東から）

1．１次２-１区 262 井戸断割状況
（北西から）

2．１次２-１区 266 井戸
（北東から）

3．１次２-１区 266 井戸断割状況
（南東から）

1．１次２-１区 291 井戸
（南東から）

2．１次２-１区 291 井戸断割状況
（北西から）

3．１次２-１区 253 石組遺構
（北東から）

1．１次２-２区南半部全景
（北上空から）

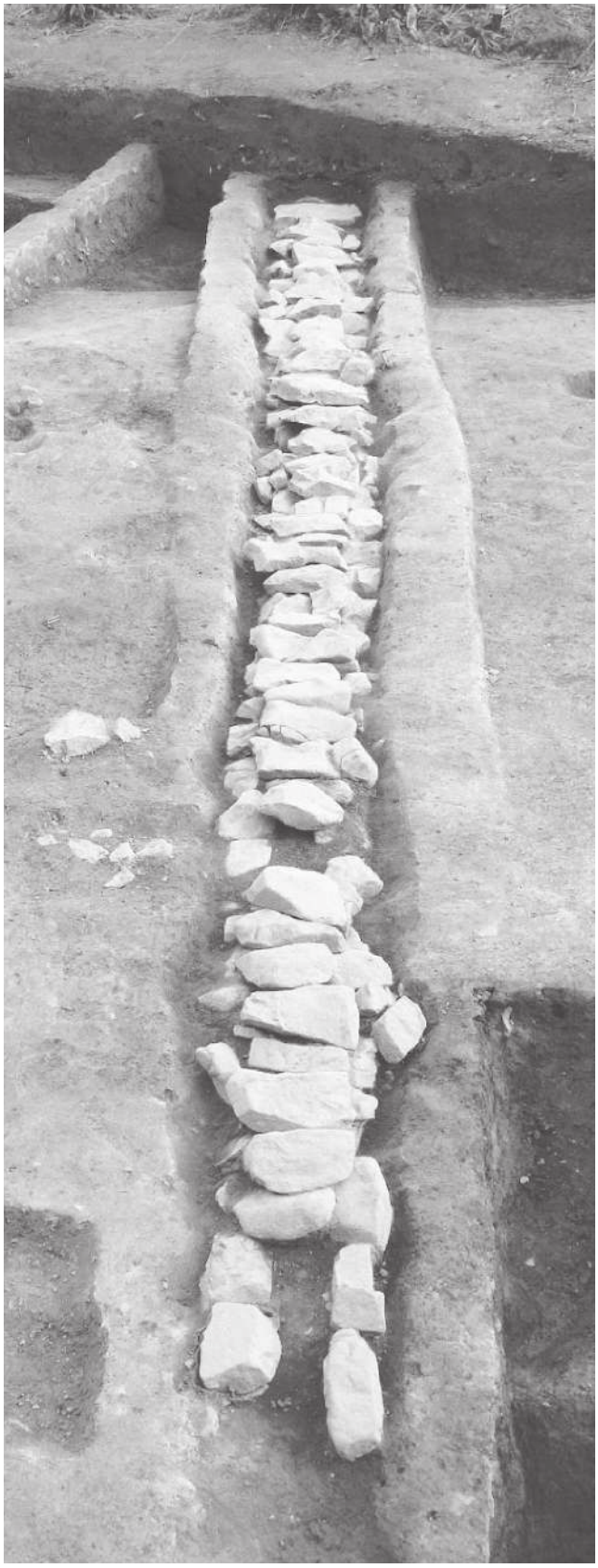
2．１次２-２区北半部全景
（東上空から）

3．１次２-２区北半部全景
（南西から）

1．１次２-２区南半部全景
（北東から）

2．１次２-２区 314 石垣
（南東から）

3．１次２-２区 315・317・369 暗渠接合部
（南西から）



1．１次２-２区 203 暗渠
（北西から）

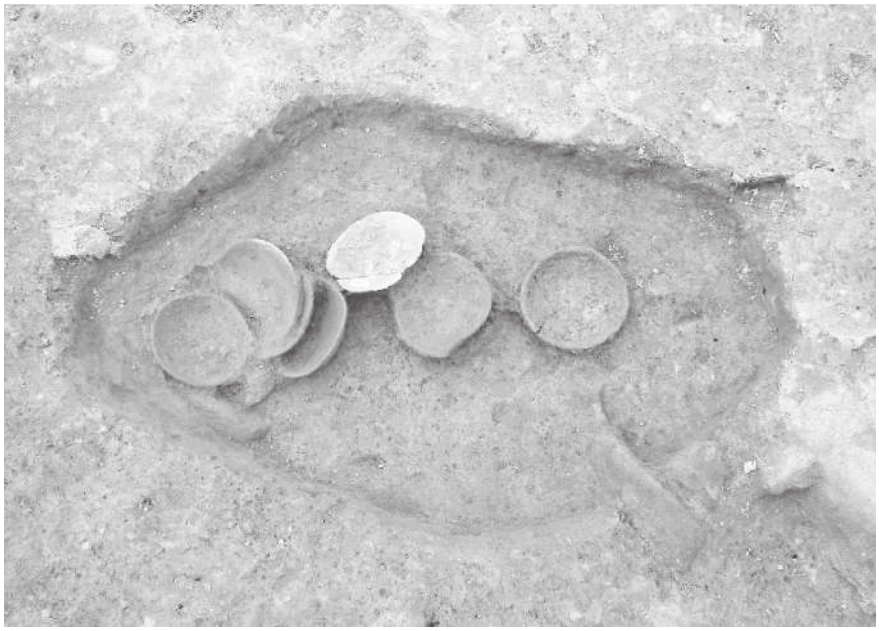
2．１次２-２区 203 暗渠蓋石除去後
（北西から）

1．１次２-２区 317 暗渠
（北東から）

2．１次２-２区 317 暗渠蓋石除去後
（北東から）

1．１次２-２区 202 地下式倉庫
（北東から）

2．１次２-２区 202 地下式倉庫階段部
（南東から）



3．１次２-２区 237 地鎮遺構土器出土状況
（北西から）

1次2-1区・2-2区合成写真（上空から）

1．２次調査地遠景（北西上空から）

2．２次３区調査前風景（南西から）

3．２次３区草刈後の状況（北から）

1．２次３区全景（上空から）

2．２次３区平坦部全景（北から）

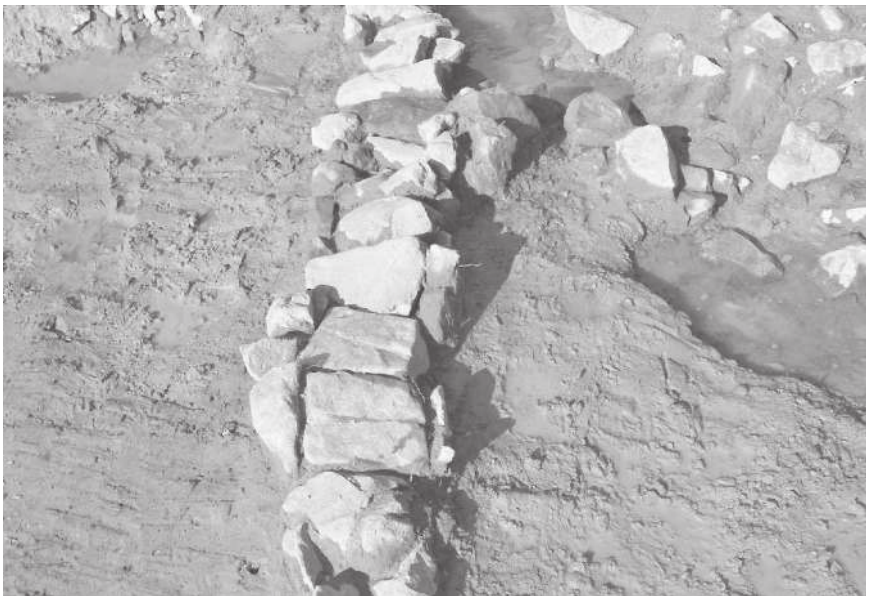
3．２次３区溝１～３（北から）

1．２次３区１溝（北から）

2．２次３区１溝蓋石除去後（北から）

3．２次３区２溝（南東から）

1．２次３区２溝蓋石除去後（南東から）



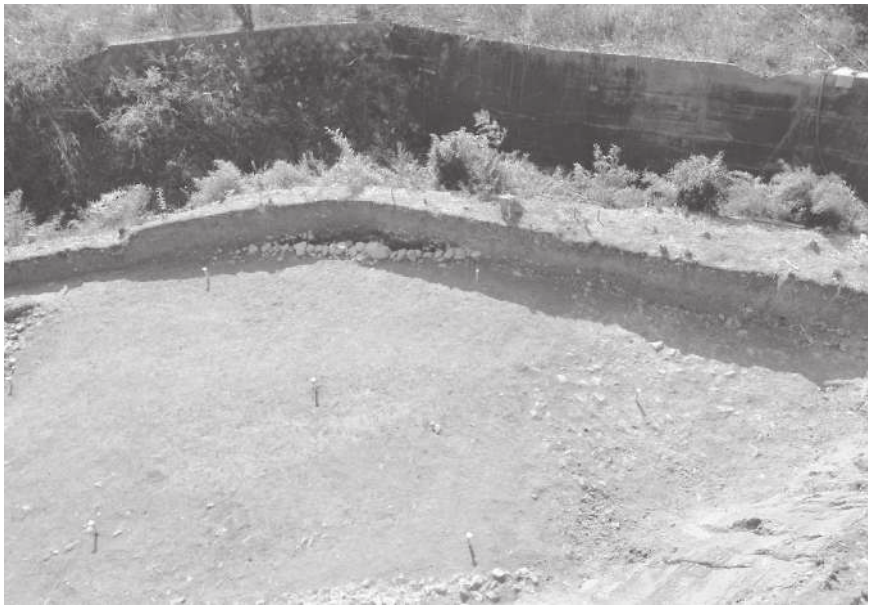
2．２次３区３溝（南東から）

3．２次３区３溝蓋石除去後(南東から)

1．２次３区全景（上空から）

2．２次３区南半部全景（北から）

3．２次３区全景（南東から）



1．２次３区３石垣（北東から）

2．２次３区１石垣（南東から）

3．２次３区１石垣石積状況
（南東から）

1．２次３区南半部遺構検出状況（北から）

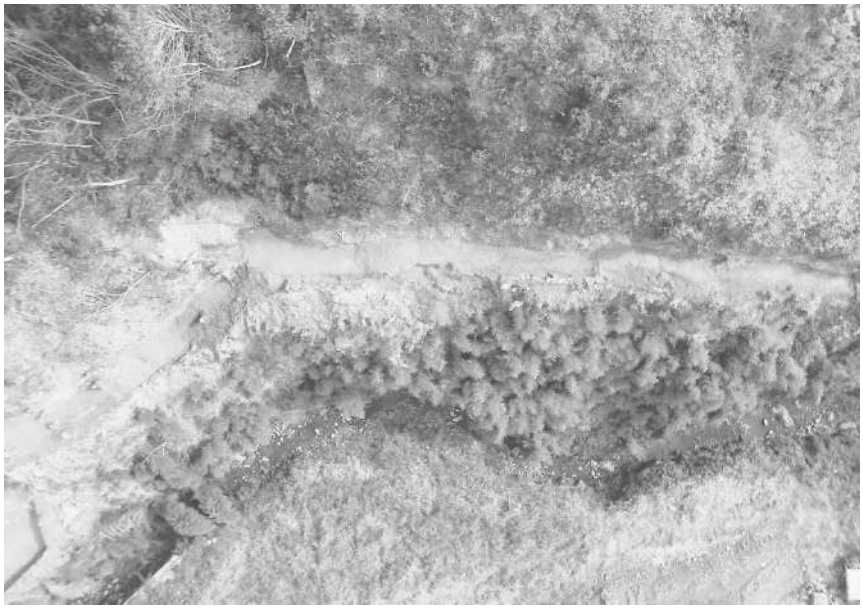
2．２次３区２石垣中央部付近（南東から）

3．２次３区２石垣中央部付近（南東から）

1．２次３区２石垣北側付近（南東から）

2．２次３区３石垣（南東から）

3．２次３区４石垣（北から）



1．２次４-１・４-２区 全景（上空から）

2．２次４-１区中央部掘削完了状況（南から）

3．２次４-１区南側掘削完了状況（北から）

1．２次５区全景（上空から）

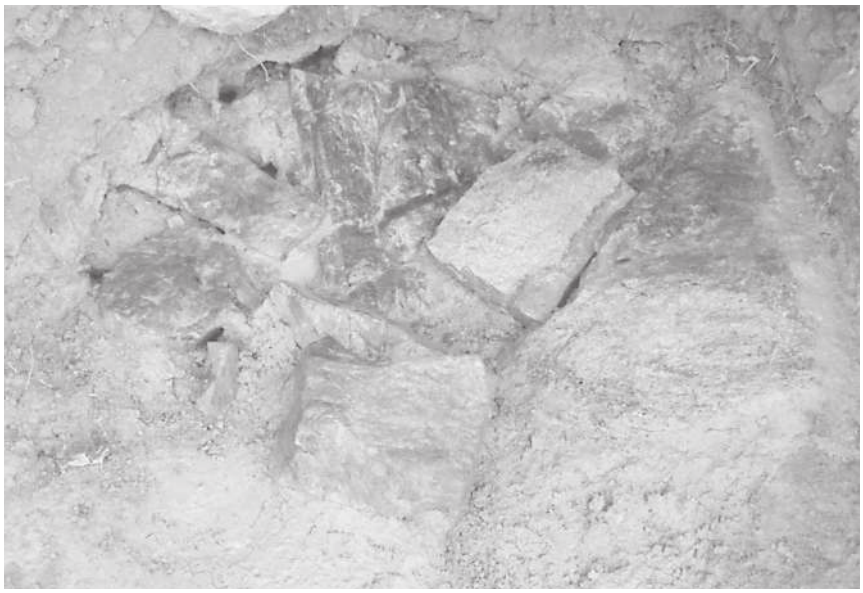
2．２次５区中央部掘削完了後
（北西から）

3．２次５区南半部掘削完了後（南東から）

1．３次１石垣 東面（東から）

2．３次１石垣コーナー部（南東から）

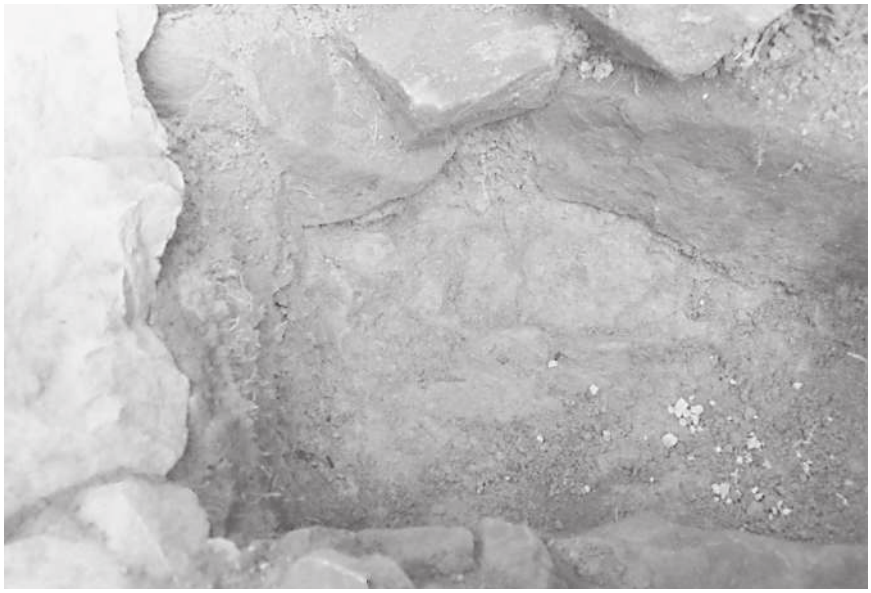
3．遺物（瓦）出土状況



1．３次２水路検出状況（北西から）

2．３次２水路断面(南から)

3．３次３石垣・２水路（北西から）



1．３次２水路蓋石除去後
（北西から）

2．３次１石垣東側（南東から）

1．山口古墳群
北側調査前状況（南から）

2．山口古墳群
頂部付近セクション断面（南西から）

3．山口古墳群
東側斜面掘削後（南東から）

1．山口古墳群
礫石経塚検出状況（南西から）

2．山口古墳群
礫石経塚半裁状況（上から）

3．山口古墳群
礫石経塚半裁断面（南から）

2

3

5

6

4

7

8

9

10

11

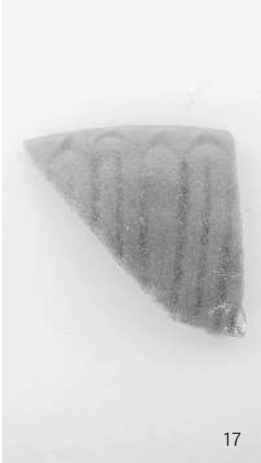
12

13

14

15

16


17

18

20

19

21

22

23

24

25

28

29

30

31

32

33

34

35

36

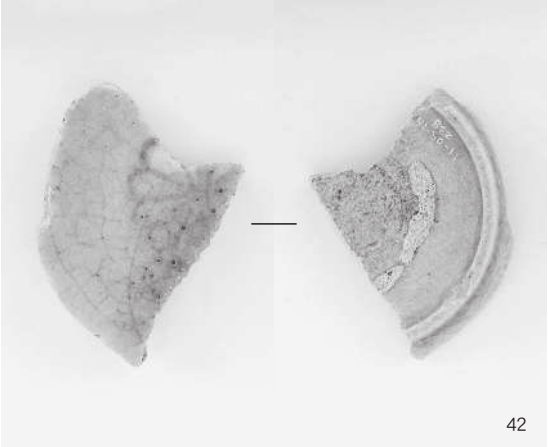
37

38

39

40

41

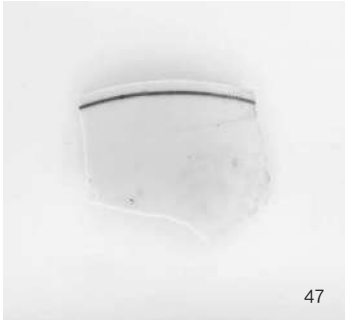

42

43

44

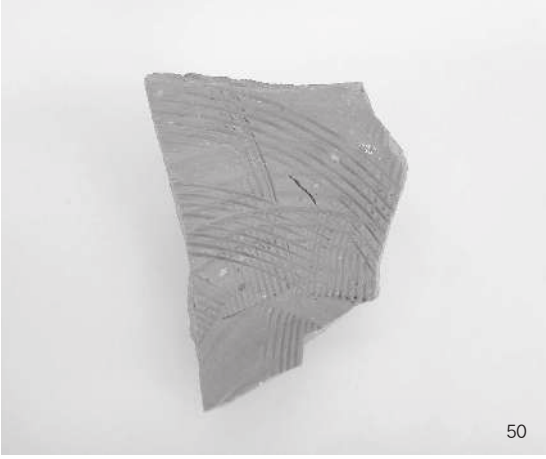
45

46


47

48

49


50

51

56

52

57

60

61

62

53

63

65

54

67

68

71

72

74

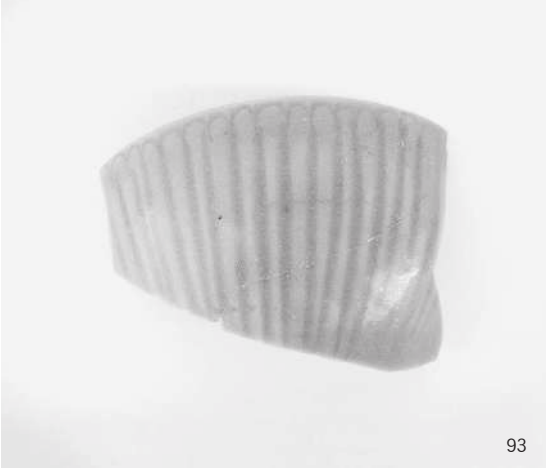
75

79

78

地鎮遺構出土 土師皿

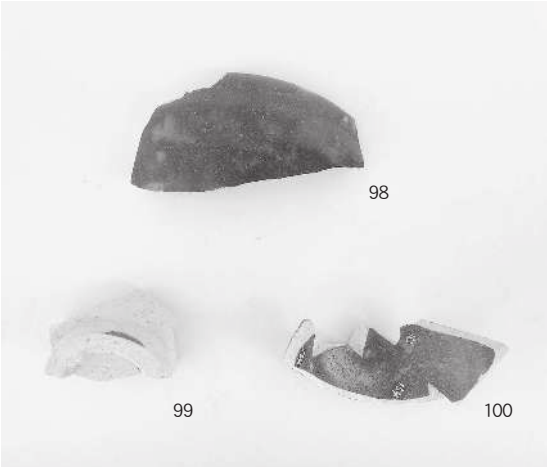
83


93

94

96

97


98

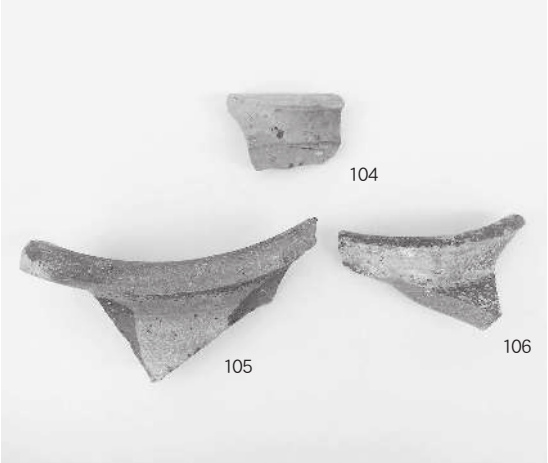
99

100

102

101

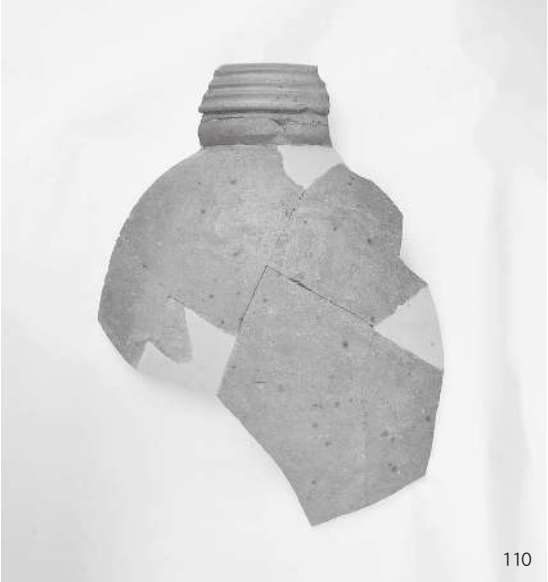
103

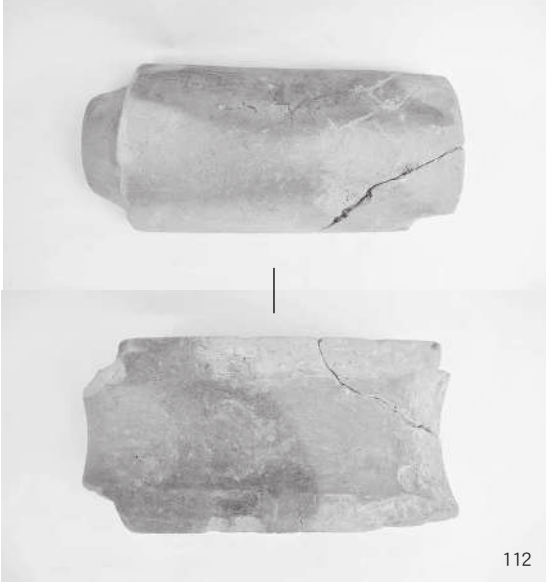

104
105
106

107

108

109

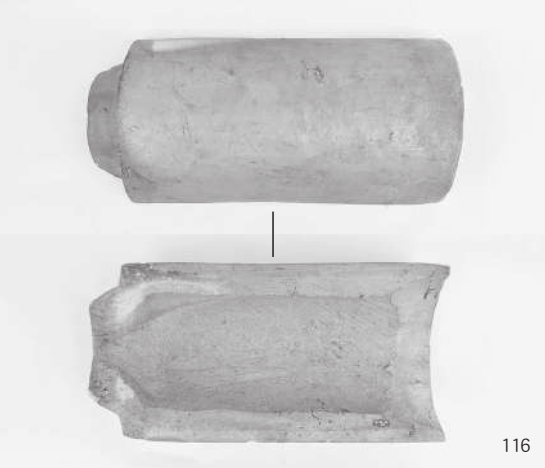

110


112

113

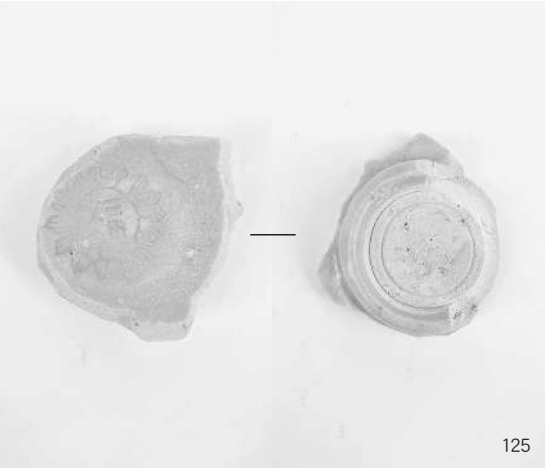
114

115

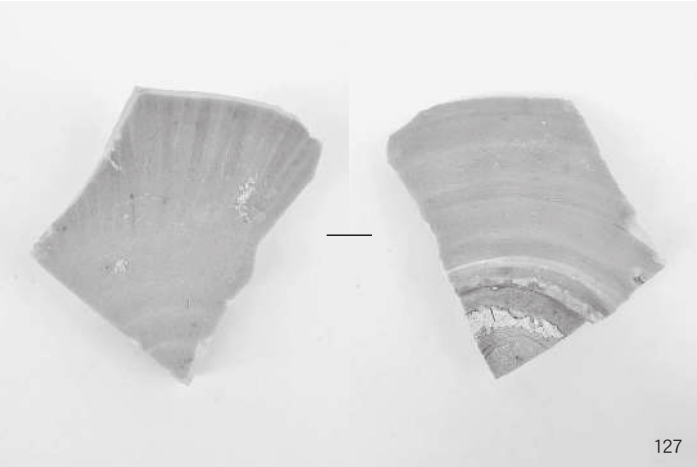

116

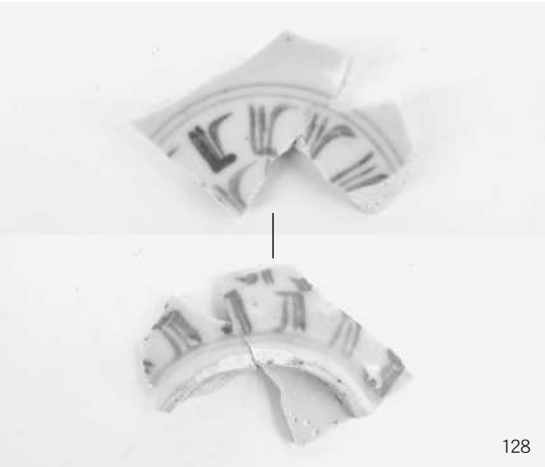
117

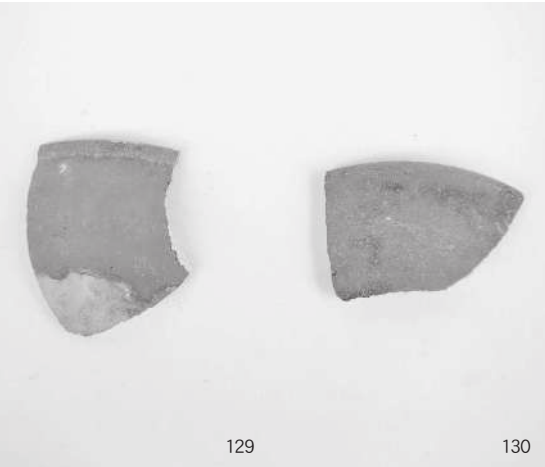
123


125

126


127


128


129 130

131

132

133

134

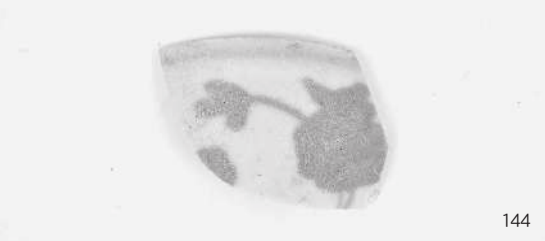
135

138

136

139

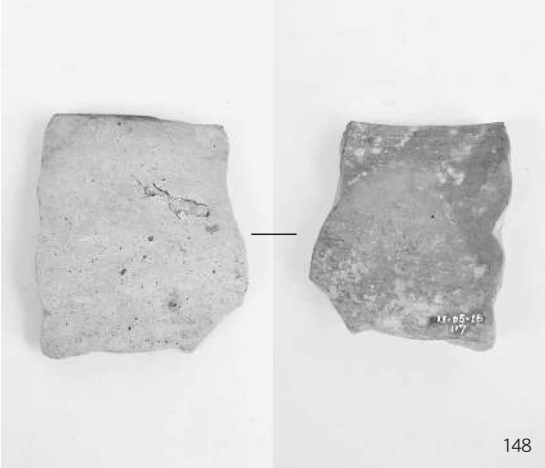
142


144

145

146

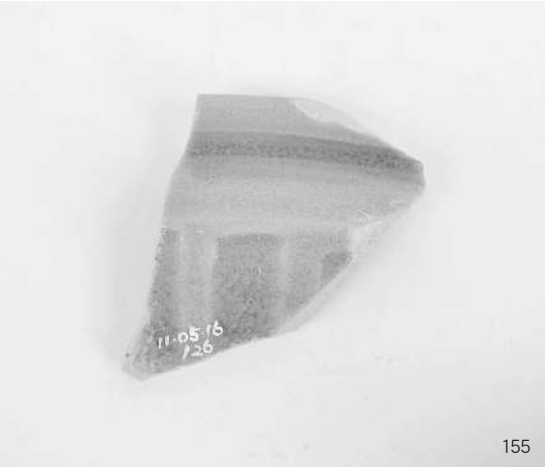
147


148

150

153

154

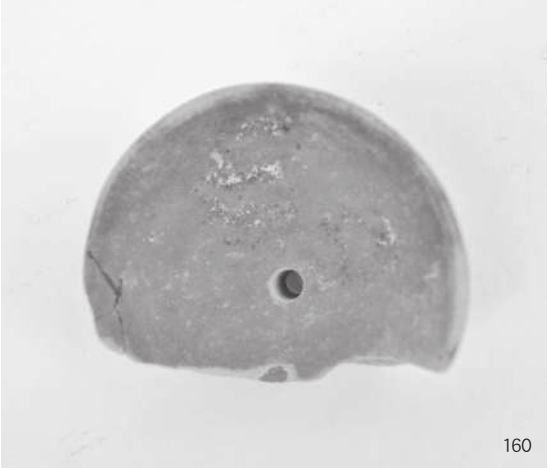

155

156

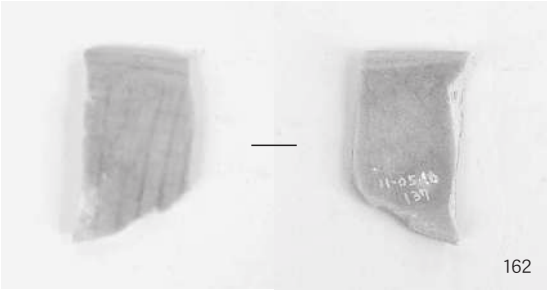
157

158

159


160

161


162

164

163

165

172

169

173

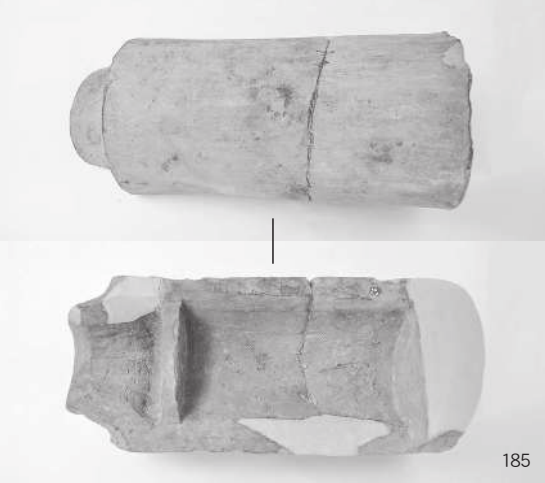
174

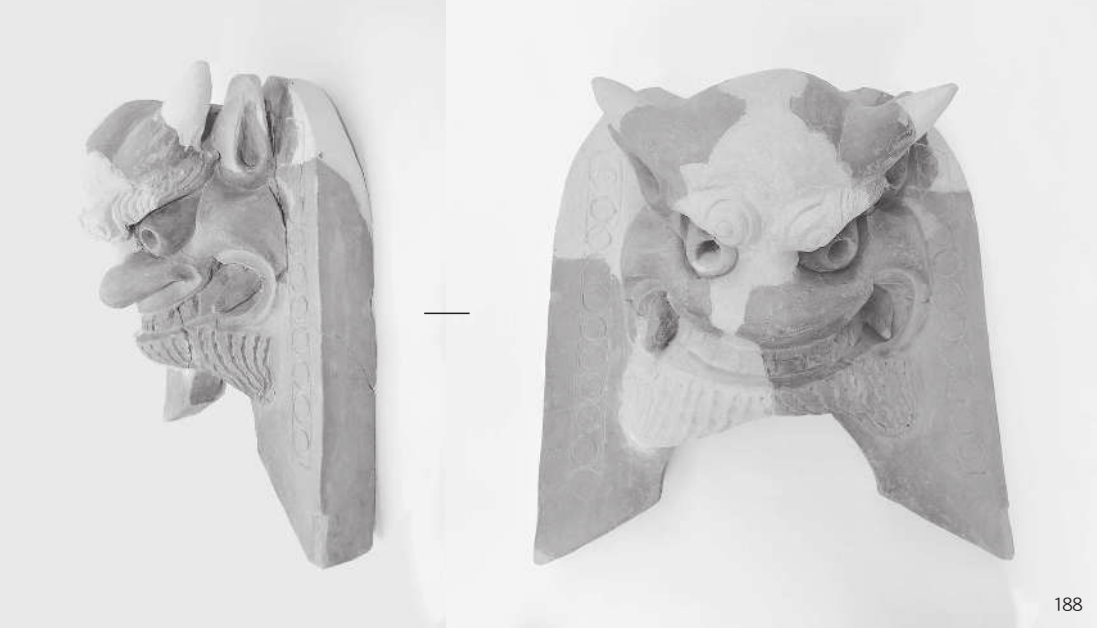
175

176

177

184


185


188

189

190

191

192

193

196

197

199

200

201

202

203

204

205

207

208

209

210

211

212

213

214

218

220

221

222

226

227

231

246

247

258

260

261

263
264
265

267

282

283

284

285

287

288

293

294

295

296

304

305 306

307 308

312 313

315

320

322

324

325

報 告 書 抄 録

ふりがな	ねごろじいせき　　やまぐちこふんぐん
書名	根来寺遺跡、山口古墳群
副書名	一般国道24号京奈和自動車道建設に伴う発掘調査報告書
編著者名	村　田　　弘
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8301　和歌山県和歌山市岩橋1263番の1　　℡073-471-3710
発行年月日	西暦2017年 3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ねごろじいせき 根来寺遺跡	和歌山県 岩出市 ねごろ 根来	32670	16	34° 17′ 24″	135° 18′ 36″	1次調査 2011.04.28～2012.03.03 2次調査 2012.10.01～2013.02. 3次調査 2013.06.18～2013.07.19	8,964㎡ 2,345㎡ 203㎡	京奈和自動車道建設に伴う事前調査
やまぐちこふんぐん 山口古墳群	和歌山県 和歌山市 山口	30201	138	34° 16′ 53″	135° 16′ 04″	2014.11.13～ 2014.12.20	660㎡	京奈和自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根来寺遺跡	寺院跡	室町時代	溝・建物跡 地下式倉庫	国産陶磁器 (備前・常滑・瀬戸) 輸入陶磁器 土師器 五輪塔	溝内から多量の五輪塔などの石造遺物が出土
山口古墳群	経塚	江戸時代	礫石経塚	一字一石経	一字一石経の納められた遺構をほぼ完全な形で検出

要約	根来寺遺跡では、天正の兵火時にかかる時期の坊院跡や古道などが検出された。また、これらの遺構に伴って数多くの遺物が出土。 山口古墳群では、一字一石経の納められた遺構をほぼ完全な形で検出した。

根来寺遺跡、山口古墳群
－一般国道24号京奈和自動車道建設に伴う発掘調査報告書－

2017年3月

編集・発行　公益財団法人 和歌山県文化財センター
印刷・製本　初田印刷株式会社